

一般国道180号（南部バイパス）道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

鳥取県西伯郡南部町

し みず がわ み さき まえ  
**清水川御崎前遺跡**

ふく なり おお つぼ かみ  
**福成大坪上遺跡**

2014

一般財団法人 米子市文化財団



福成大坪上遺跡2区SD3・4、畦畔1（南西から）

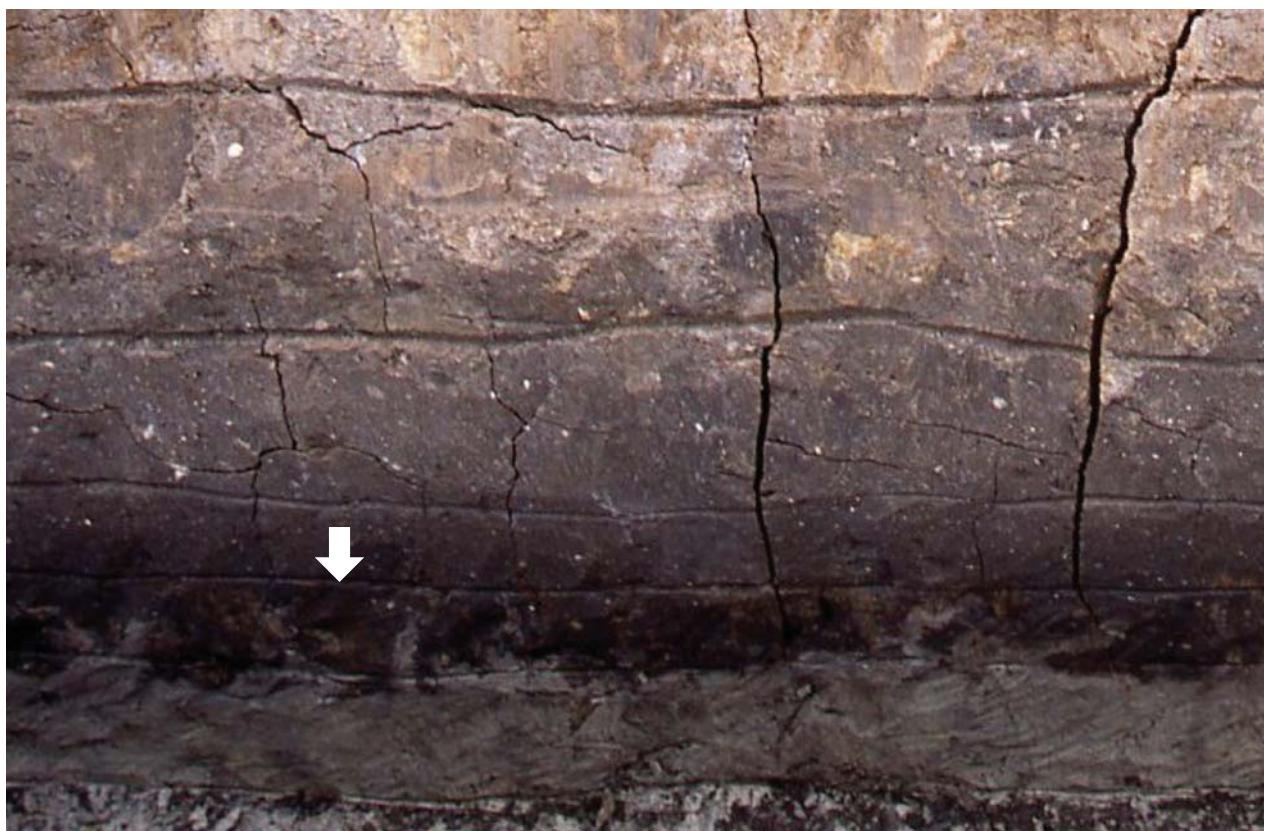


福成大坪上遺跡3区全景（南西から）

巻頭図版 2



福成大坪上遺跡 3 区 S D34 に見られる地震痕跡（南西から）



福成大坪上遺跡 3 区北西壁 (A-A') 断面に見られる地震痕跡

# 序

鳥取県西部、秀峰大山の西に位置する南部町は豊かな自然に恵まれた美しい町であります。さらに、古代からの遺跡の宝庫として知られており、山陰屈指の規模を誇る三崎殿山古墳、三角縁神獣鏡の出土した普段寺古墳群など古代人の生活や当時の活発な交流を物語る貴重な遺跡・遺物が数多く存在しています。

当財団では、平成23年度と平成24年度に鳥取県の委託を受け、一般国道180号（南部バイパス）の改良工事に伴い清水川御崎前遺跡と福成大坪上遺跡の発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、弥生時代前期から近世にかけての遺構・遺物が確認されました。これらは、この地域の歴史を解明するための貴重な資料になると思われます。

この度、この調査成果をまとめ、発掘調査報告書として刊行することができました。本報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解、関心がより深まることを期待しております。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ、ご指導・ご助言をいただきました鳥取県西部総合事務所県土整備局ならびに関係各位に対し、心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成26年3月

一般財団法人 米子市文化財団  
理 事 長 杉 原 弘 一 郎

## 例　　言

1. 本報告書は一般国道180号（南部バイパス）道路改良工事に伴い実施した清水川御崎前遺跡と福成大坪上遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、鳥取県の委託を受けて財団法人 米子市教育文化事業団（現 一般財団法人 米子市文化財団）が実施した。
3. 本報告書における方位は公共座標北を示し、X、Y、Zの数値は世界測地系に準拠した公共座標第V系の座標値である。また、レベルは海拔標高を示す。
4. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1／50,000地形図「米子」、及び南部町作成の1／5,000「南部町全図」を加筆して使用した。
5. 本報告にあたり、剥片石器の鑑定を公益財団法人 鳥取県教育文化財団 北浩明氏に、石器の石材鑑定を鳥取県埋蔵文化財センター 高橋章司氏にお願いした。記して感謝いたします。
6. 発掘調査にあたり、プラント・オパール分析、花粉分析、放射性炭素年代測定を（株）古環境研究所に委託した。
7. 本報告書に掲載した遺物の実測、浄書は、一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財調査室で行った。
8. 本報告書で使用した遺構・遺物写真は調査担当職員が撮影した。
9. 本報告書の執筆及び編集は平木と高橋が行った。なお、文責は目次に記載した。
10. 発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類は米子市教育委員会、出土遺物は南部町教育委員会で保管している。
11. 発掘調査にあたっては、南部町教育委員会にご指導、ご協力いただいた。明記して深謝いたします。

# 凡　例

1. 遺跡の略称は以下のとおりである。

清水川御崎前遺跡：S M S M

福成大坪上遺跡1区：F N O K

福成大坪上遺跡2・3区：F N O K 2

2. 本報告書で用いた遺構の略称は以下のとおりである。

S D：溝状遺構 S K：土坑

3. 本報告書における遺物の掲載記号、縮尺は以下のとおりである。

番号のみ：土器、土製品 1／4、1／3 木製品 1／4、2／3

金属製品 1／3、2／3、1／2、1／1 ガラス製品 1／4

S：石器 1／4、1／2、1／1

4. 本文中、挿図中、遺物観察表中及び写真図版中の遺物番号は一致する。

5. 遺構図、遺物実測図に用いた網掛け及び記号は、特に説明がない限り以下のとおりである。

■：地山範囲 □：石器研磨痕 ▨：炭化範囲

●：土器出土ポイント ▲：石器出土ポイント ■：木製品出土ポイント

6. 遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗りとし、それ以外は断面白抜きで示した。また、遺物実測図中における記号は以下のとおりである。

→：ケズリの方向 ⇄：研磨範囲

7. 遺物観察表の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。

8. 本報告書における遺構、遺物の時期決定には下記参考文献を参照した。

## 参考文献

清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社

森田 勉 1995「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『大宰府陶磁器研究』

玉木秀幸 2006「伯耆の土器様相」『山陰における中世前期の諸様相』山陰中世土器検討会

第5回山陰中世土器検討会 資料集

# 目 次

序

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査の経緯	(高橋)
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡名と調査区の名称	1
第3節 調査体制	3
第2章 位置と環境	(高橋)
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 清水川御崎前遺跡の調査	(平木)
第1節 調査の経過と方法	10
第2節 調査区内の層序	11
第3節 1区の検出した遺構と遺物	11
第4節 1区遺構外出土遺物	13
第5節 2区の検出した遺構と遺物	13
1. 溝状遺構	13
2. 土 坑	17
第6節 2区遺構外出土遺物	20
第7節 清水川御崎前遺跡のまとめ	20
第4章 福成大坪上遺跡1区の調査	(平木)
第1節 調査の経過と方法	22
第2節 調査区内の層序	22
第3節 検出した遺構と遺物	25
1. 溝状遺構	25
2. 土 坑	32
3. その他の遺構	32
第4節 遺構外出土遺物	35
第5節 福成大坪上遺跡1区のまとめ	35

第5章 福成大坪上遺跡2・3区の調査	(高橋)
第1節 調査の経過と方法	38
1. 調査の経過	38
2. 調査の方法	38
第2節 調査区内の層序	39
第3節 検出した遺構と遺物	45
1. 第3遺構面の調査	45
(1) 概要	45
(2) 溝状遺構	47
(3) 土坑	56
2. 第2遺構面の調査	58
(1) 概要	58
(2) 溝状遺構	59
(3) 畦畔	67
(4) 石列	67
3. 第1遺構面の調査	73
(1) 概要	73
(2) 溝状遺構	73
第4節 遺構外出土遺物	76
第5節 福成大坪上遺跡2・3区のまとめ	84
第6章 理化学的分析	
第1節 福成大坪上遺跡1区における自然科学分析	(株式会社 古環境研究所) 87
第2節 福成大坪上遺跡2区における自然科学分析	(株式会社 古環境研究所) 96
第3節 福成大坪上遺跡における放射性炭素年代測定	(株式会社 古環境研究所) 104
写真図版	図版1～48

## 報告書抄録

## 挿図目次

第1図 調査地位置図	2	第32図 S D 3 出土遺物 (3)	30
第2図 調査区配置図	3	第33図 S 区遺構配置図	31
第3図 遺跡位置図	5	第34図 S K 2 平面図および断面図	31
第4図 周辺遺跡分布図	9	第35図 N 区遺構外出土遺物	33
		第36図 S 区遺構外出土遺物	34

### 清水川御崎前遺跡

第5図 グリッド設定図	10
第6図 1区遺構配置図	11
第7図 S D 1・2 平面図および断面図	12
第8図 S D 1 出土遺物	12
第9図 1区遺構外出土遺物	12
第10図 2区遺構配置図	14
第11図 2区土層断面図	14
第12図 S D 3～7 平面図および断面図	15
第13図 S D 3 貯水場拡大図	16
第14図 S D 3 出土遺物	16
第15図 S D 8 平面図および断面図	18
第16図 S K 4 平面図および断面図	18
第17図 S K 5 平面図および断面図	18
第18図 S K 6 平面図および断面図	18
第19図 2区遺構外出土遺物 (1)	19
第20図 2区遺構外出土遺物 (2)	20

### 福成大坪上遺跡 1区

第21図 調査区画図	22
第22図 N 区土層断面図	23
第23図 S 区土層断面図	23
第24図 N 区遺構配置図	24
第25図 S K 1 平面図および断面図	24
第26図 S D 2 平面図および断面図	26
第27図 S D 4～7 平面図および断面図	26
第28図 S D 5 出土遺物	26
第29図 S D 3 出土遺物 (1)	26
第30図 S D 3 平面図および断面図	27・28
第31図 S D 3 出土遺物 (2)	29

### 福成大坪上遺跡 2・3区

第37図 福成大坪上遺跡 2・3区グリッド設定図	39
第38図 2区土層図	41
第39図 3区土層図	43
第40図 3区南西側IX層出土遺物分布図	44
第41図 第2・第3遺構面検出遺構配置図	46
第42図 S D 6・7・8	47
第43図 S D 19～23	49
第44図 S D 19・20・21・23出土遺物	50
第45図 S D 24・25	52
第46図 S D 26	53
第47図 S D 27	53
第48図 S D 27出土遺物	53
第49図 S D 28	53
第50図 S D 28出土遺物	53
第51図 S D 29～32	54
第52図 S D 33	55
第53図 S D 34	55
第54図 S K 1	56
第55図 S K 2	56
第56図 S K 3	57
第57図 S K 4	57
第58図 S K 6 出土遺物	57
第59図 S K 6	58
第60図 S K 7	58
第61図 S D 3	60
第62図 S D 3 出土遺物	60

第63図	S D 4	61	第81図	S D 1 出土遺物	75
第64図	S D 4 拡大図	62	第82図	S D 2	75
第65図	S D 4 出土遺物	63	第83図	遺構外出土遺物（1）	77
第66図	S D 5 及び出土遺物	64	第84図	遺構外出土遺物（2）	78
第67図	S D 9・10・11	65	第85図	遺構外出土遺物（3）	79
第68図	S D 11出土遺物	65	第86図	遺構外出土遺物（4）	80
第69図	S D 12・13・14	65	第87図	遺構外出土遺物（5）	81
第70図	S D 15	66	第88図	遺構外出土遺物（6）	82
第71図	S D 16	66	第89図	遺構外出土遺物（7）	83
第72図	S D 17	66	第90図	福成大坪上遺跡1区における 花粉ダイアグラム	90
第73図	S D 18	67	第91図	福成大坪上遺跡1区のプラント・ オパール分析結果	93
第74図	畦畔1	68	第92図	福成大坪上遺跡2区における 花粉ダイアグラム	99
第75図	畦畔1 拡大図（A部分）	69	第93図	福成大坪上遺跡2区のプラント・ オパール分析結果	101
第76図	畦畔1 拡大図（B部分）	70			
第77図	畦畔2	71			
第78図	石列3・4	72			
第79図	第1 遺構面検出遺構配置図	73			
第80図	S D 1	74			

## 挿表目次

第1表	遺物観察表（S D 1・2）	21
第2表	遺物観察表（1区遺構外）	21
第3表	遺物観察表（S D 3）	21
第4表	遺物観察表（2区遺構外）	21
第5表	石器観察表	21
第6表	遺物観察表（S D 3・5）	36
第7表	遺物観察表（N区遺構外）	36
第8表	遺物観察表（S区遺構外）	37
第9表	石器観察表	37
第10表	木製品観察表	37
第11表	福成大坪上遺跡1区における花粉分析結果	89
第12表	福成大坪上遺跡1区のプラント・オパール分析結果	92
第13表	福成大坪上遺跡2区における花粉分析結果	100
第14表	福成大坪上遺跡2区のプラント・オパール分析結果	101

第15表	測定試料及び処理	104
第16表	測定結果	105
第17表	福成大坪上遺跡2・3区出土土器・土製品・陶磁器観察表	107
第18表	福成大坪上遺跡2・3区出土石器観察表	112
第19表	福成大坪上遺跡2・3区出土木製品観察表	113
第20表	福成大坪上遺跡2・3区出土金属製品観察表	113

## 図版目次

- 巻頭図版1 福成大坪上遺跡2区S D 3・4、畦畔1  
　　福成大坪上遺跡3区全景
- 巻頭図版2 福成大坪上遺跡3区S D 34に見られる地震痕跡  
　　福成大坪上遺跡3区北西壁（A-A'）断面に見られる地震痕跡

### 清水川御崎前遺跡

- 図版1 調査前全景  
　　調査前全景  
　　調査前全景  
　　調査前全景  
　　S D 1・2 遺物出土状況  
　　S D 1 完掘状況
- 図版2 S D 1・2 完掘状況  
　　1区調査後全景  
　　作業風景  
　　S D 3～6 完掘状況  
　　貯水場検出状況  
　　貯水場完掘状況  
　　石組検出状況  
　　S D 7 完掘状況
- 図版3 2区調査後全景  
　　2区調査後全景  
　　S D 8 完掘状況  
　　S K 4  
　　S K 5  
　　S K 6

### J区完掘状況

- 図版4 清水川御崎前遺跡出土遺物（1）  
図版5 清水川御崎前遺跡出土遺物（2）

### 福成大坪上遺跡1区

- 図版6 1区調査前全景  
　　1区遺物出土状況  
　　1区偶蹄目足跡  
　　1区偶蹄目足跡  
　　1区S D 2 完掘状況  
　　1区作業風景
- 図版7 1区S D 4～7 完掘状況  
　　1区旧S D 3 完掘状況  
　　1区旧S D 3 完掘状況  
　　1区旧S D 3 完掘状況  
　　1区拡張区S D 3 完掘状況  
　　1区拡張区S D 3 完掘状況
- 図版8 1区拡張区S D 3 完掘状況  
　　1区拡張区S D 3 石除去後  
　　1区拡張区S D 3 石除去後  
　　1区N区調査後全景

	1区SK1	3区SK7木検出状況
図版9	1区植栽痕	3区SK7完掘
	1区植栽痕	図版24 2区第2遺構面全景
	1区遺物出土状況	2区第2遺構面全景
	1区SK2	図版25 3区第2遺構面全景
	1区S区調査後全景	3区第2遺構面全景
	1区S区調査後全景	図版26 2区SD3・4、畦畔1
図版10	福成大坪上遺跡1区出土遺物(1)	2区SD3・4、畦畔1
図版11	福成大坪上遺跡1区出土遺物(2)	図版27 2区SD3
図版12	福成大坪上遺跡1区出土遺物(3)	3区SD3
図版13	福成大坪上遺跡1区出土遺物(4)	3区畦畔1
図版14	福成大坪上遺跡1区出土遺物(5)	図版28 2区SD4
		2区SD4
		2区SD4石鋤(S2)出土状況
図版15	3区第3遺構面全景	図版29 2区SD5
	3区第3遺構面全景	2区SD5
図版16	2区SD6・7・8	2区SD5遺物出土状況
	2区SD6・7・8	2区SD5石検出状況
	2区SD7	図版30 3区SD9・10・11
図版17	3区SD19~23	3区SD9・10・11
	3区SD19~22	3区SD12・13
図版18	3区SD19~22・24・25	図版31 3区SD13・14
	3区SD22	3区SD14
	3区SD22	3区SD15
図版19	3区SD24	図版32 3区SD16
	3区SD25	3区SD17
	3区SD26	3区SD18
図版20	3区SD27	図版33 2区畦畔2
	3区SD28	2区畦畔2
	3区SD29~32遺物出土状況	3区石列3・4
図版21	3区SD29~32	図版34 3区石列3・4
	3区SD34	3区石列3
	3区SD34	3区石列4
図版22	2区SK1	図版35 2区SD1・2
	2区SK2	2区SD1・2
	3区SK3	2区SD1
図版23	3区SK4	2区SD1
	3区SK6	図版36 2区SD1石検出状況

2区 S D 1 遺物出土状況	図版42 3区遺構外出土弥生土器底部（1）
2区 S D 2	3区遺構外出土弥生土器底部（2）
2区 S D 2	3区遺構外出土棒状土製品
図版37 3区南西側IX層遺物出土状況	3区遺構外出土弥生土器蓋
3区南西側IX層遺物出土状況	3区遺構外出土弥生土器（中期～後期）
図版38 3区南西側IX層遺物出土状況	3区遺構外出土土師器低脚壺
3区南西側IX層遺物出土状況	3区遺構外出土須恵器壺蓋
3区南西側IX層遺物出土状況	図版43 2・3区遺構外出土遺物（中世）
図版39 3区S D19出土土器	2・3区遺構外出土遺物（近世）
3区S D19出土石鏸	2・3区遺構外出土石鏸
3区S D20出土遺物	3区遺構外出土剥片
3区S D21出土遺物（1）	図版44 2・3区遺構外出土石鏸
3区S D21出土遺物（2）	2・3区遺構外出土磨製石斧
3区S D23出土遺物	3区遺構外出土砥石
図版40 3区S D27出土遺物	2区遺構外出土銅錢
3区S D28出土遺物	2区遺構外出土煙管
3区S K 6 出土遺物	図版45 福成大坪上遺跡1区の花粉 顕微鏡写真
2区S D 3 出土遺物	図版46 福成大坪上遺跡1区のプラント・ オパール顕微鏡写真
2区S D 4 出土遺物	図版47 福成大坪上遺跡2区の花粉 顕微鏡写真
2区S D 5 出土遺物	図版48 福成大坪上遺跡2区のプラント・ オパール顕微鏡写真
3区S D11出土遺物	
2区S D 1 出土遺物	
図版41 3区遺構外出土縄文土器・突帯文土器	
3区遺構外出土弥生土器（前期）	

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、平成22年度から24年度にかけて一般国道180号（南部バイパス）道路改良工事を原因とし、鳥取県西伯郡南部町清水川地内及び福成地内の工事予定地内に存在する埋蔵文化財について実施したものである。

工事予定地内は周知の遺跡として認識されてはいなかったため、工事に先立って工事予定地内の遺跡の有無及びその範囲を確認する必要が生じた。そのため平成20・21年度に南部町教育委員会が試掘調査を実施したところ、溝状遺構と土坑が確認され、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器などが出土し、遺跡の存在が確認された。

この結果を受け、鳥取県西部総合事務所と南部町教育委員会は遺跡の取り扱いについて協議を行い、発掘調査が必要との判断に至った。このことに基づき、鳥取県西部総合事務所は文化財保護法第94条に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会に提出し、事前発掘の指示を受けた。そのため、鳥取県西部総合事務所は発掘調査を南部町教育委員会に依頼したが、南部町教育委員会は、体制上、発掘調査は困難であるという回答を行った。そのため、協議の結果、鳥取県西部総合事務所は、財団法人米子市教育文化事業団（平成25年4月1日に一般財団法人米子市文化財団に改称）に調査を委託することとなり、当財団は鳥取県教育委員会に文化財保護法第92条に基づく発掘届を提出し、当財団埋蔵文化財調査室が調査を実施した。

## 第2節 遺跡名と調査区の名称

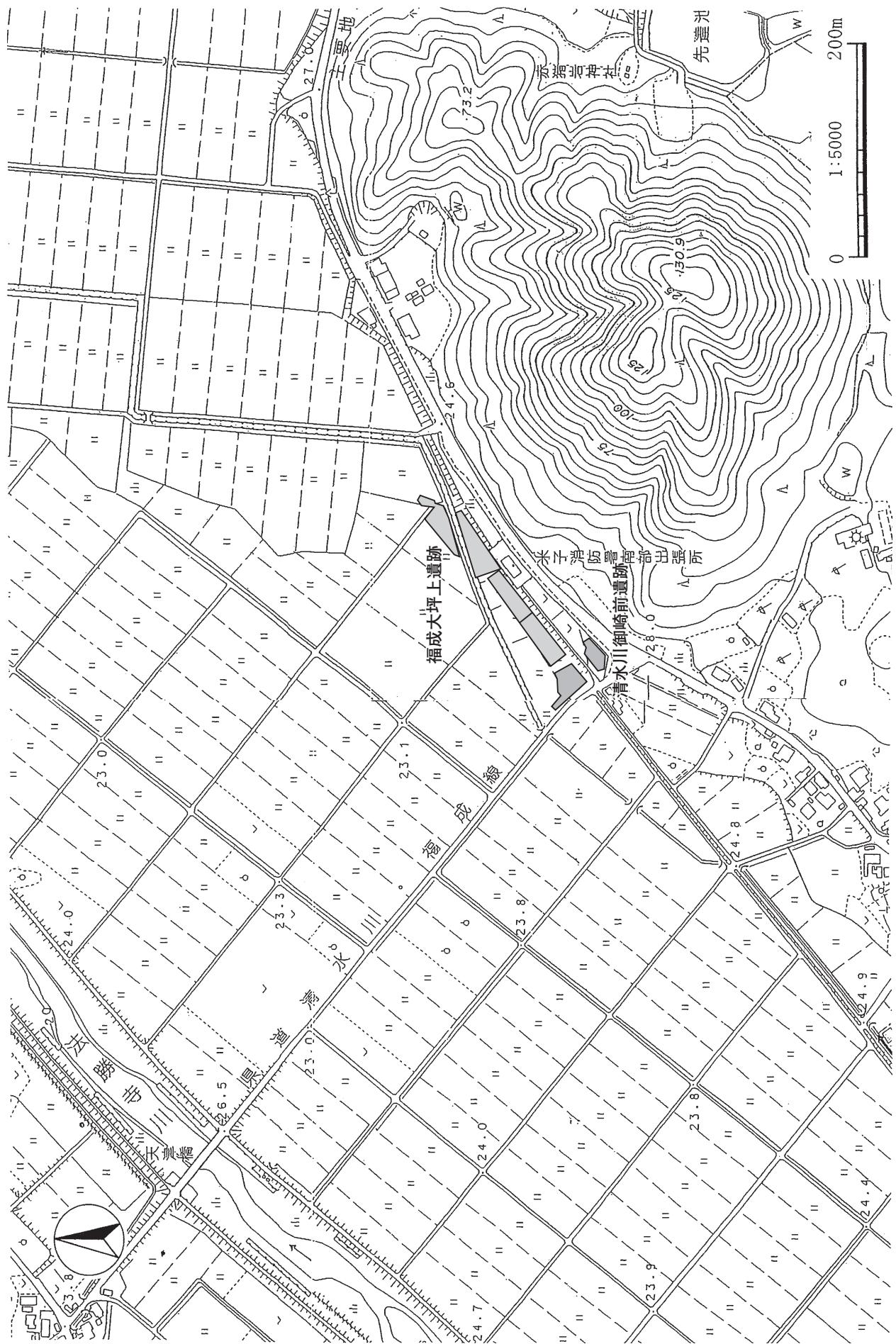
調査対象地は、手間要害山（標高329m）の支丘である善棚山（標高131m）から北西へ派生する丘陵の裾部に位置し、遺跡の立地地形や発掘調査の結果から、本来は同一の遺跡として認識できるものであるが、調査年度が分かれることや、調査地の大字が異なることから、平成22年度調査地を清水川御崎前遺跡、平成23・24年度調査地を福成大坪上遺跡とした（第2図）。

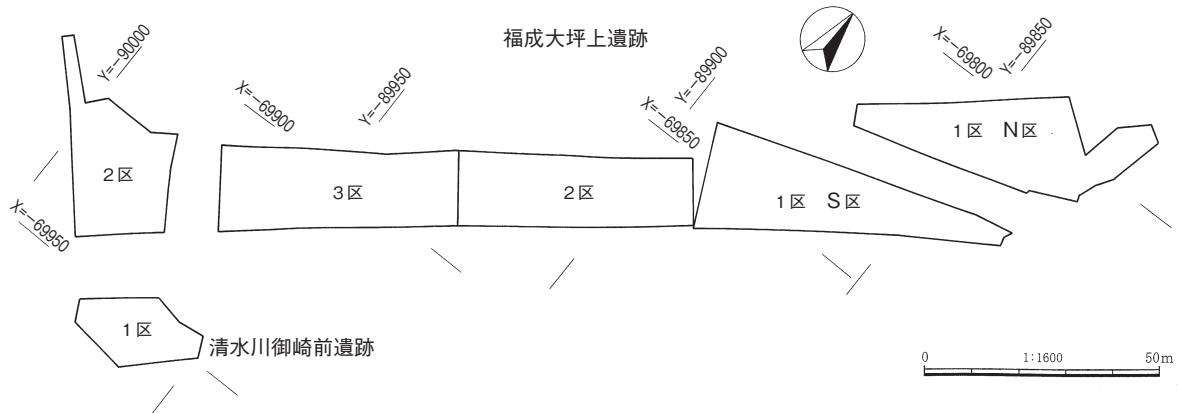
清水川御崎前遺跡では、調査区内を農道が横断しているため、調査区を2分し、南東側を1区、北西側を2区とした（第2図）。

福成大坪上遺跡は、調査が平成23・24年度の2年度にわたることから、平成23年度調査地を1区、平成24年度調査地を2区・3区とした（第2図）。

また、1区では調査区内を水路が横断しているため、さらに調査区を2分し、北東側をN区、南西側をS区とした（第2図）。

第1図 調査地位置図





第2図 調査区配置図

### 第3節 調査体制

平成22年度

調査主体 財團法人 米子市教育文化事業団

理 事 長 杉原弘一郎

常務理事 中村智至（財團法人米子市教育文化事業団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室 長 角 昌之（米子市教育委員会文化課長）

事 務 長 小原貴樹

非常勤職員 田中昌子（事務員）

調査担当 埋蔵文化財調査室

統括調査員 平木裕子

臨時職員 佐々木志保

平成23年度

調査主体 財團法人 米子市教育文化事業団

理 事 長 杉原弘一郎

常務理事 中村智至（財團法人米子市教育文化事業団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室 長 角 昌之（米子市教育委員会文化課長）

事 務 長 小原貴樹

非常勤職員 田中昌子（事務員）

調査担当 埋蔵文化財調査室

統括調査員 平木裕子

嘱 托 佐々木志保

平成24年度

調査主体 財団法人 米子市教育文化事業団

理 事 長 杉原弘一郎

常務理事 中村智至（財団法人米子市教育文化事業団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室 長 岡 雄一（米子市教育委員会文化課長）

事 務 長 小原貴樹

非常勤職員 田中昌子（事務員）

調査担当 埋蔵文化財調査室

主任調査員 高橋浩樹

調査員 小原貴樹（事務長兼務）

嘱 託 佐々木志保

平成25年度

調査主体 一般財団法人 米子市文化財団（平成25年4月1日に改称）

理 事 長 杉原弘一郎

常務理事 中村智至（一般財団法人米子市文化財団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室 長 岡 雄一（米子市教育委員会文化課長）

事 務 長 小原貴樹

非常勤職員 田中昌子（事務員）

調査担当 埋蔵文化財調査室

次長兼統括調査員 平木裕子

主任調査員 高橋浩樹

嘱 託 秦 美香

佐々木志保

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

平成16年10月1日に西伯町と会見町が合併して誕生した南部町は、鳥取県の西部に位置し、北は米子市、東は伯耆町、南は日野町、日南町、西は島根県安来市に接している。面積は114.03km<sup>2</sup>、人口は約11,600人である。

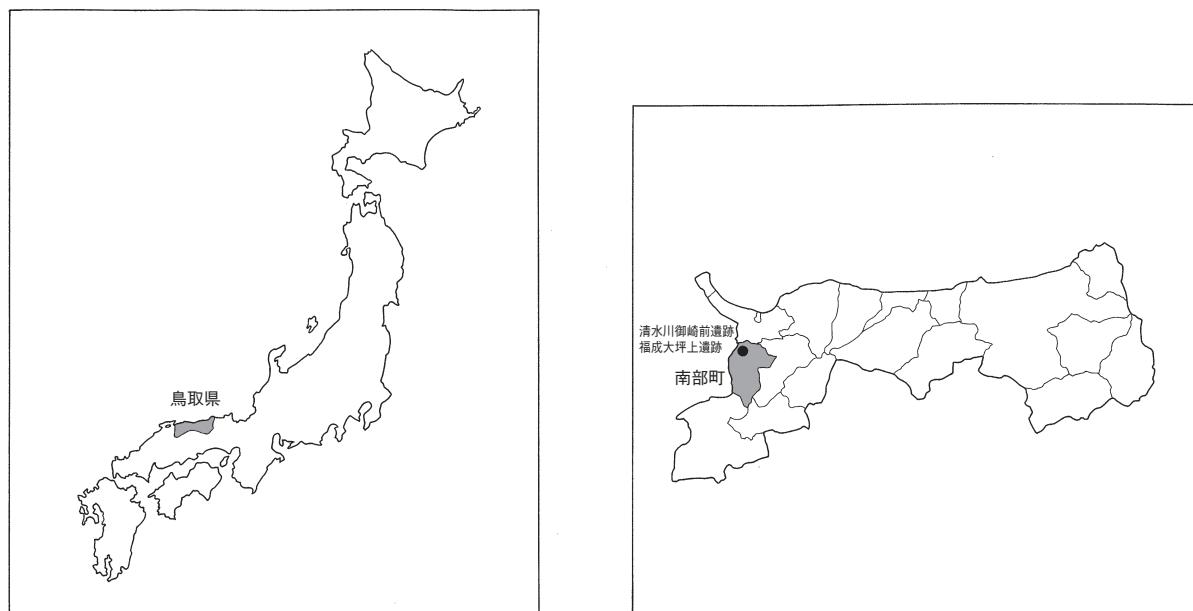
地形的には東、南、西側にある山稜が、法勝寺川及び小松谷川水系をY字型に囲み、米子市に接する北側が平野となって開ける南高北低の地形をしており、町域の大部分が山岳地域で、法勝寺川ならびに小松谷川によってもたらされた肥沃な沖積地に集落の大半が形成されている。

法勝寺川は粗粒花崗岩山地に発源し、上流部は急流で浸蝕が進み、中流部の南部町鴨部、能竹の辺りからは、急に緩流となり花崗岩の風化、崩落した砂礫、表土を流送・堆積して中下流部に幅広い河谷低地（法勝寺低地）を発達させている。

法勝寺低地は上流山地から運ばれた花崗岩質粗粒堆積物からなり、水はけがよく、現法勝寺川流路に沿って自然堤防が発達し、耕作地が多い。なお、低地の周縁に青灰色粘土からなる海拔20～30mの低い台地があるが、これは大山火山噴出物による堰止湖に由来する湖成段丘である。

低地周縁の支谷では、両側の山腹からなる小河川の扇状地や崖錐などの流下物が両側の丘陵裾部に並んで陸上堆積物の様相を呈している。

清水川御崎前遺跡は、鳥取県西伯郡南部町清水川、福成大坪上遺跡は同町福成に所在する。いずれも法勝寺川中流域の右岸に位置し、要害山（標高329m）から北へ派生する支丘陵の善棚山（標高131m）の北西側の裾部に位置する。調査地の現況は水田で、南西から北東へ緩やかに傾斜し、現地表面の標高は23～25mを測る。



第3図 遺跡位置図

## 第2節 歴史的環境

### 旧石器時代

南部町域ではこれまでに旧石器時代の遺構は確認されていない。米子平野南縁に位置する長者原台地の諫訪西山ノ後遺跡（73）では、ローム層中から頁岩製のナイフ形石器が1点出土し、古墳の周溝からもナイフ形石器が1点出土している。また、坂長村上遺跡（72）では、ローム漸移層からであるが、黒曜石製のナイフ形石器が1点出土している。

### 縄文時代

草創期には、これまで大山北、西麓を中心に尖頭器が発見されていたが、法勝寺川左岸の福成石佛前遺跡（20）や境矢石遺跡（17）、境北井塔遺跡（16）、吉谷龜尾ノ上遺跡（3）、奈喜良遺跡（1）、法勝寺川右岸の諸木遺跡（69）などでも発見され、さらに近年、長者原台地や越敷山山麓からも出土しており、その分布範囲は広がりつつある。

早期は、大山西麓の台地上の小河川流域に押型文土器を出土する遺跡が多く分布するが、近年の調査で法勝寺川左岸の清水谷遺跡（24）や新山山田遺跡（7）、東長田川流域の今長龍徳遺跡や八金小ブケ遺跡、八金清水田遺跡などでも押型文土器が出土しており、八金小ブケ遺跡では竪穴建物も確認されている。

前期には、大山西麓では早期から継続する遺跡が多く、その一方、中海沿岸では早期末～前期初頭になると集落が形成され始め、大山西麓から中海沿岸の低湿地への進出が窺える。南部町域では、法勝寺川最上流域の河岸段丘上に営まれた早田第1遺跡で竪穴建物が確認され、条痕文土器と爪形文土器が出土している。

中期の様相は明確ではないが、後期になると米子平野周辺の丘陵上に遺跡が形成されるようになる。この時期の遺跡には、早田第2遺跡と口朝金遺跡（61）があり、早田第2遺跡では石器製作段階で生じる多量の安山岩剥片や石臼炉、漆塗土器が出土している。口朝金遺跡では後期と晩期の土器とともに石斧や石鎌が多量に出土している。また、後期から晩期にかけて丘陵や山岳地域では陥穴が多数確認され、青木遺跡（74）では228基、越敷山遺跡群（67）では341基が確認されている。

晩期になると口朝金遺跡や才ノ木遺跡（38）、枇杷谷遺跡（37）、金田堂ノ脇遺跡（57）、三崎遺跡、高姫五反田遺跡、浅井遺跡、絹屋遺跡、馬場遺跡、落合遺跡、福成早里遺跡（19）、福成石佛前遺跡など、丘陵裾部の平野部でも遺跡が確認されるようになる。枇杷谷遺跡ではドングリ貯蔵穴が確認され、口朝金遺跡からは、ほぼ完全な注口土器が出土している。また、田住枕田遺跡からは人面土器が出土している。人面土器は、外面に高い鼻と丸く空いた口を表現し、眉には刻みを入れた粘土紐が貼り付けられている。

### 弥生時代

前期の遺跡としては、諸木遺跡、天王原遺跡（53）、清水谷遺跡が知られており、これらは低丘陵上に立地する集落跡でV字状の環濠が巡る。V字状の環濠は続く中期の宮尾遺跡（43）でも確認されており、当地は県下でも有数の環濠が集中する地域といえる。

中期の遺跡としては宮前遺跡（46）、天万遺跡（44）、浅井土居敷遺跡（48）、清水谷遺跡、境矢石遺跡、

天王原遺跡、越敷山遺跡群、鶴田合清水遺跡などがあり、その立地範囲も拡大し、丘陵や台地上、高原地域にまで見られるようになる。浅井土居敷遺跡では、中期中葉の竪穴建物内で検出された方形土坑から丹塗りの台付注口土器をはじめ黒漆塗りの甕、ガラス玉等、玉類約50個体分や焼けただれた土器片が多数出土している。また、柱穴からは銅鉈も出土している。清水谷遺跡では3基の土壙墓が確認され、このうちの1基は標石を伴い、15点の石鏃が出土している。宮前遺跡では36基の木棺墓や貯蔵穴が検出され、境矢石遺跡では前期後葉～中期の木棺墓と土壙墓が確認されている。鶴田合清水遺跡からは、中期後葉の土器と石器が竪穴建物から一括して出土している。

後期の遺跡は中期から継続して営まれるものが多く、青木遺跡や福市遺跡（75）、越敷山遺跡群では竪穴建物が多数確認されており、拠点的な集落として展開している。また、この時期には遺跡は低地から低丘陵上に移動するようになり、このような遺跡には、前葉の福成石佛前遺跡や中葉以降の清水谷遺跡、北福王寺遺跡（28）、倭孫谷山遺跡（32）、竹山遺跡（29）、北方廣畑遺跡（26）、諸木遺跡、荻名第5遺跡、八金小ブケ遺跡、八金清水田遺跡などがあるが、これらはごく短期間で廃絶する。天萬土井前遺跡（42）では終末期から古墳時代初頭にかけての土器溜りが検出されており、良好な一括資料が出土している。朝金小チヤ遺跡では末葉に比定される墳丘墓が確認され、田住松尾平遺跡（64）からは小型の仿製鏡が出土している。

## 古墳時代

前期の古墳には普段寺古墳群（41）がある。1号墳は全長23mの前方後方墳で、その規模はこの時期としては西伯耆最大を誇る。1号墳からは三角縁唐草文帯二神二獸鏡が出土しており、これは島根県安来市大成古墳、大阪府伝鎌足塚古墳出土の鏡と同范である。2号墳は径22～23mの円墳と考えられ、三角縁四神四獸鏡が出土している。

中期になると三崎殿山古墳（39）や浅井11号墳（47）、後塔山古墳（68）、福成春日山古墳（21）など、全長40mを越える前方後円墳が築造されている。三崎殿山古墳は全長108m、後円部径58mを測り、山陰地方でも最大級の規模を誇る。浅井11号墳は30基近い円墳で構成される浅井古墳群の盟主的な古墳で、全長45mを測り、後円部からは画文帯神獸鏡が出土している。後塔山古墳は中期後半の築造で、全長55mを測り、三角帽子状の冠を付けた垂髪の人物埴輪が出土している。福成春日山古墳は全長40mを測り、後円部に2基の箱式石棺が並び、東側の石棺からはV字状石枕と朱塗りの頭蓋骨が出土している。

後期になると、丘陵上に多くの古墳群が形成されるようになり、法勝寺川及び小松谷川流域の平野を取り囲むように境古墳群（6）、福成古墳群（23）、鴨部古墳群、落合古墳群、田住古墳群（66）、朝金古墳群（62）、井上古墳群（52）、御内谷古墳群、高姫古墳群（49）、金田古墳群などの古墳群が築かれている。寺内8号墳（40）からは当地唯一の陶棺が出土している。

6世紀後半になると、横穴墓の造営が開始される。マケン堀横穴墓群（27）では、35基の横穴墓と7基の後背墳丘が確認されている。玄室形態は断面三角形に限定されており、当地域の特殊性を示している。この他に県内で唯一の二室が連結した横穴墓をもつ小堤山横穴墓群（30）や谷川横穴墓群（22）、西横穴墓群（31）、今長龍徳横穴墓群、福成早里横穴墓（19）などがある。

古墳時代の集落は、清水谷遺跡や北方廣畑遺跡、宮尾遺跡、宮前遺跡、高姫根小松遺跡（50）、高姫近藤遺跡（51）などがあり、北方廣畑遺跡、高姫近藤遺跡では前期、宮前遺跡、高姫根小松遺跡

では中期、宮尾遺跡、八金小ブケ遺跡、八金清水田遺跡、福成早里遺跡では後期の竪穴建物が確認されている。また、清水谷遺跡では前期から後期の竪穴建物が確認されている。

## 古 代

律令制下の町域は『和名類聚抄』によると伯耆国会見郡鴨部郷、天万郷、星川郷に相当する。郡衙は近年の調査により伯耆町坂長に所在する可能性が高まってきた。鴨部郷は古墳群の分布状況などから南部町鴨部の周辺にその中心地が推定されている。鴨部は「賀茂部」とも記されており、神護景雲4年（770）の東大寺文書には賀茂郷住民の賀茂部秋麻呂という青年が僧になったことを記している。天万郷は、南部町天万周辺がその中心地であると考えられ、天平勝宝9年（756）の正倉院文書が初見である。星川郷は、小松谷川の流域が郷域と推定され、他国の同名郷との関連から紀氏の流れをくむ星川臣の一族の居住地と推定されている。金田瓦窯跡（54）は白鳳期の大寺廃寺に葺かれた瓦の生産地とされ、その南東には両部太郎窯跡（56）があり、内面に車輪文を施す須恵器が確認されている。また、朝金天田遺跡（59）からは奈良時代のものと思われる瓦塔（瓦製塔婆）が出土している。瓦塔は須恵質で、丸軒、垂木を粘土紐で写実的に表現している。

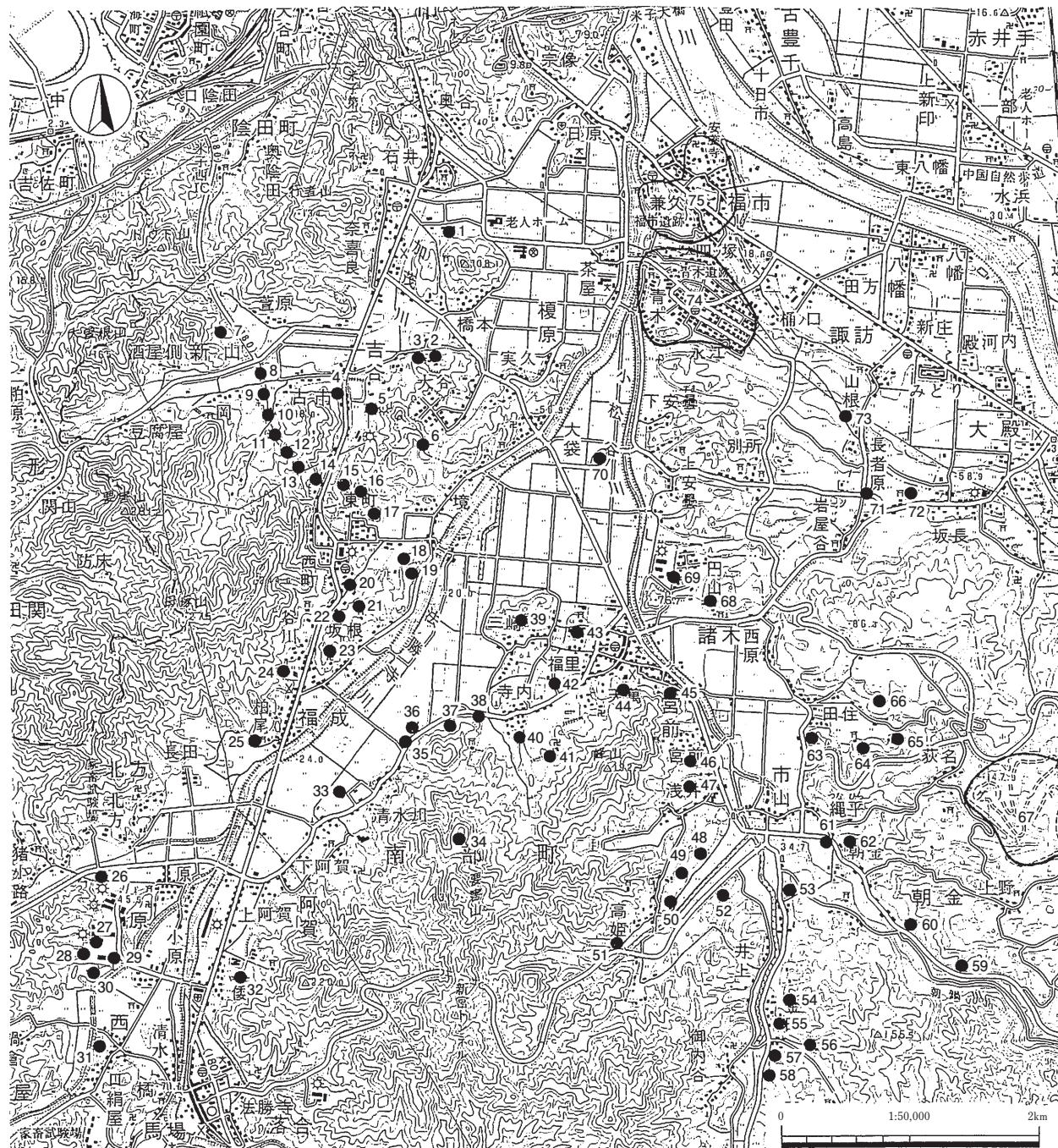
この時期の遺跡は、丘陵上に形成され、奈良時代の北福王寺遺跡や福成早里遺跡、平安時代の倭孫谷山遺跡、福成石佛前遺跡、清水谷遺跡、福成早里遺跡、八金清水田遺跡がある。福成早里遺跡からは、製塙土器や赤色塗彩を施した土師器が出土しており、官衙的な性格が窺える。八金清水田遺跡では9世紀前半の土器溜りが確認されており、「厨」と記された墨書き土器とともに良好な一括資料が出土している。また、清水谷遺跡のピットには平安時代後期の和鏡が埋納され、金華山からは平安時代後期のものと考えられる経筒が出土している。

## 中 世

中世の遺跡としては、南北朝時代に塙治高貞によって攻略されたと伝えられる小松城跡（55）や戦国時代後期の尼子、毛利の対立を背景にして要害山の山頂に築かれた手間要害（34）があり、手間要害は近年の調査で郭配置などが確認されている。また、手間要害の周辺には数多くの郭や堀切が確認され、砦や居館の存在が想定されている。この他、法勝寺城跡、柏尾城跡（小鷹城跡ともいう）（25）、鎌倉城跡、原城山遺跡などの城郭がある。

## 近 世

西伯耆は吉川広家、中村一忠、加藤貞泰と領主が交代し、元和3年（1617）に因幡・伯耆32万石を領する池田光政が鳥取藩主となる。町域の南部は良質な砂鉄を含む風化花崗岩が広く分布しており、日野郡と同様に古くからたら製鉄の行われた所で、現在のところ15ヶ所のたら関係の遺跡が確認されている。鎌倉山の山麓に位置する奥山鉄山所たたらは江戸後期（文化年間）に操業された高殿たらで、近世の代表的なたら跡である。また、田住桶川遺跡（63）では土葬墓21基が確認されている。



第4図 周辺遺跡分布図

1 奈喜良遺跡	2 橋本徳道西遺跡	3 吉谷龜尾ノ上遺跡	4 吉谷上ノ原山遺跡	5 吉谷トコ遺跡
6 境古墳群	7 新山山田遺跡	8 古市流田遺跡	9 古市カワラケ田遺跡	10 古市河原田遺跡
11 古市コガノ木遺跡	12 古市宮ノ谷山遺跡	13 吉谷屋奈ヶ塔遺跡	14 吉谷銭神遺跡	15 吉谷中馬場山遺跡
16 境北井塚遺跡	17 境矢石遺跡	18 境内海道西遺跡	19 福成早里遺跡	20 福成石佛前遺跡
21 福成春日山古墳	22 谷川横穴墓群	23 福成古墳群	24 清水谷遺跡	25 柏尾城跡(小鷹城跡)
26 北方廣畠遺跡	27 マケン堀古墳群	28 北福王寺遺跡	29 竹山遺跡	30 小堤山横穴墓群
31 西横穴墓群	32 倭孫谷山遺跡	33 清水川六反田遺跡	34 手間要害	35 清水川御崎前遺跡
36 福成大坪上遺跡	37 桑杷谷遺跡	38 才ノ木遺跡	39 三崎殿山古墳	40 寺内8号墳
41 普段寺古墳群	42 天萬土井前遺跡	43 宮尾遺跡	44 天万遺跡	45 宮前古墳群
46 宮前遺跡	47 浅井11号墳	48 浅井土居敷遺跡	49 高姫古墳群	50 高姫根小松遺跡
51 高姫近藤遺跡	52 井上古墳群	53 天王原遺跡	54 金田瓦窯跡	55 小松城跡
56 兩部太郎塚跡	57 金田堂ノ脇遺跡	58 御内向田遺跡	59 朝金天田遺跡	60 朝金小チヤ遺跡
61 口朝金遺跡	62 朝金古墳群	63 田住桶川遺跡	64 田住松尾平遺跡	65 田住滝山遺跡
66 田住古墳群	67 越敷山遺跡群	68 後塔山古墳	69 諏木遺跡	70 大袋丸山遺跡
71 長者屋敷遺跡	72 坂長村上遺跡	73 諏訪西山ノ後遺跡	74 青木遺跡	75 福市遺跡

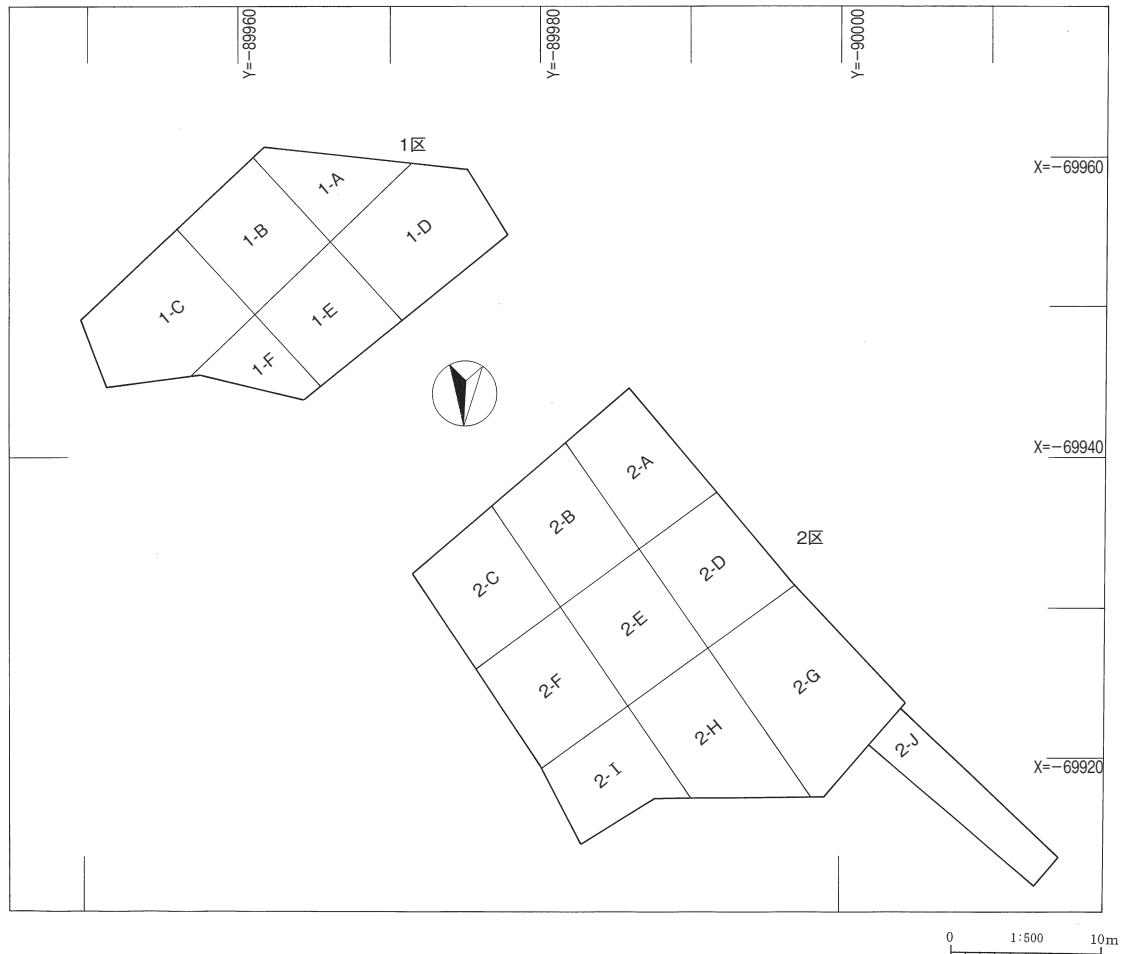
# 第3章 清水川御崎前遺跡の調査

## 第1節 調査の経過と方法

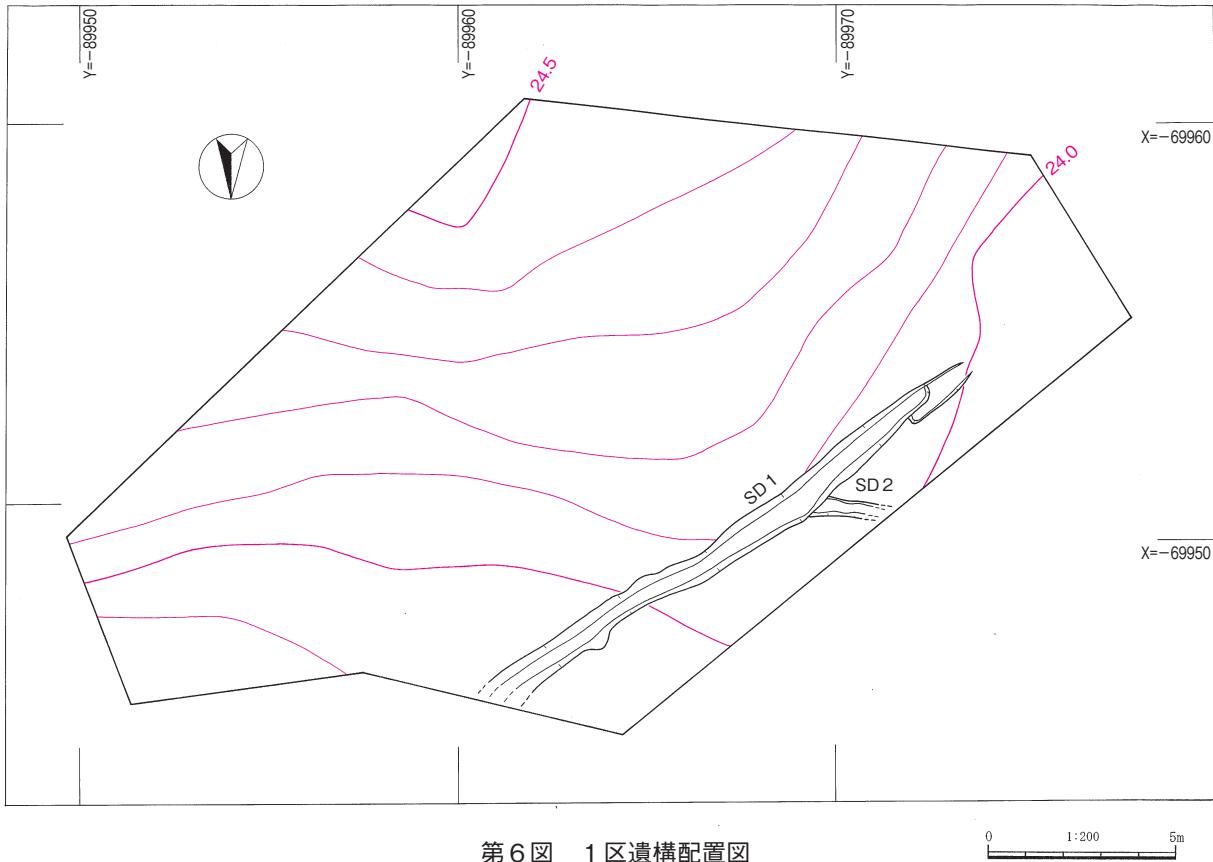
現地調査は、平成22（2010）年9月14日から開始し、平成22（2010）年11月12日まで行った。調査地は標高約22.6～24.9mで、調査開始時は荒地であったが以前は耕作地として利用されていた。調査面積は、1区約290.5m<sup>2</sup>、2区約563.6m<sup>2</sup>で、深いところで現地表面から約1.1m掘り下げた。調査地は要害山の裾野に当たるが、調査地の南東部で約40cm掘り下げたところで基盤層である白色粘土層を検出し、北西方向に向かって緩やかに傾斜し、北西部側の堆積土の厚いところでは約1.2m掘り下げたところで基盤層である白色粘土層を検出した。

地表面から10～20cmまでの現在の耕作土を重機で除去した後、1区はAからFの6区画、2区はAからIの9区画のグリッドを設定し、人力により掘り下げていった（第5図）。また、2区の北西隅調査地内に、詰所を設置したため、詰所撤去後、J区として調査をおこなった。

遺物の取上げ、遺構の実測については、トータルステーションを使用し、地区名は区の数字とグリッドのアルファベットにより標記した。調査の結果、遺構としては溝状遺構8条、土坑3基を検出した。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石鏃、石匙が出土した。



第5図 グリッド設定図



第6図 1区遺構配置図

## 第2節 調査区内の層序

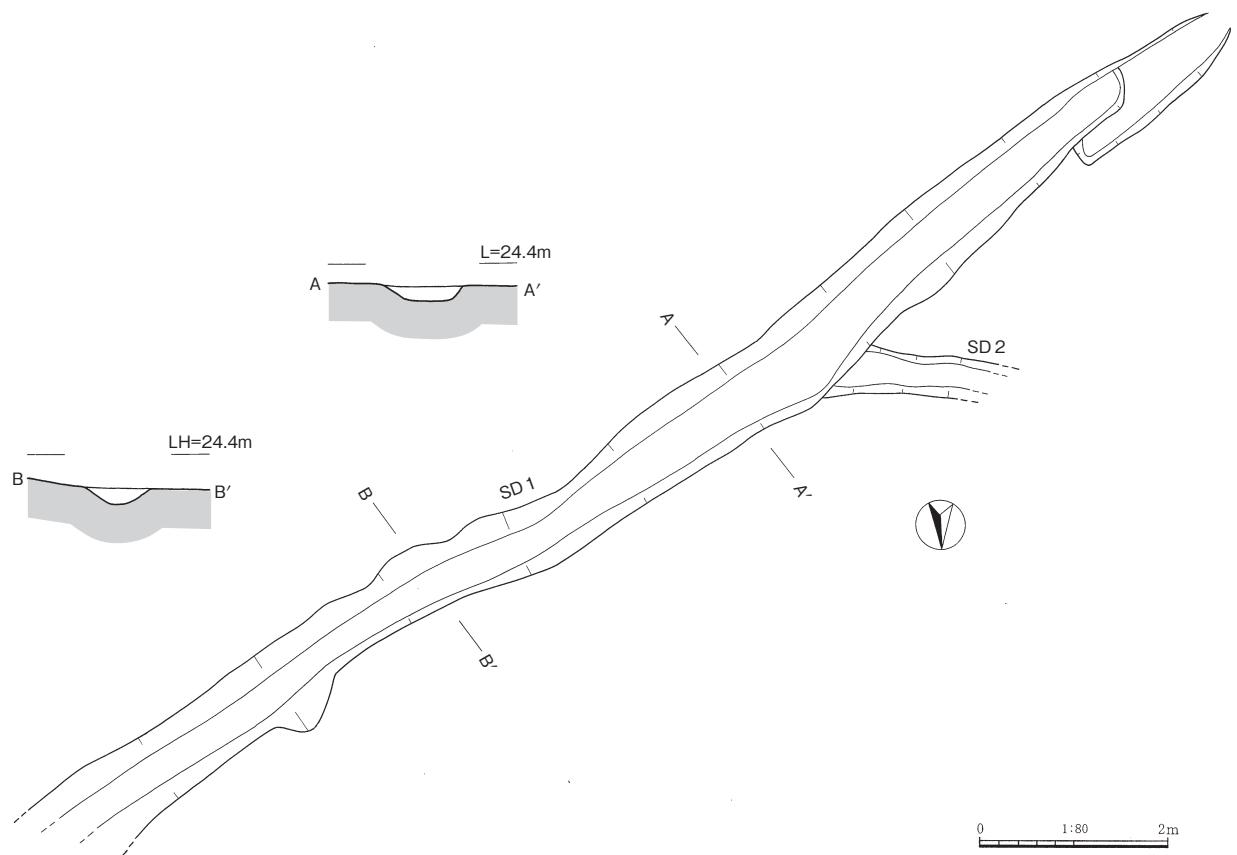
調査地は手間要害山から派生する善棚山の裾野にあたり、北西には法勝寺川が流れる。調査前の地形は標高22.6～24.9mのほぼ緩やかな傾斜地であった。大正13年には法勝寺電車が開通し昭和42年の廃止以降耕作地として利用され、昭和50年代の圃場整備によって現在のような整備された地区となる。調査後は1区の最頂部標高24.55m、最低部標高23.95m、2区の最頂部標高22.5m、最低部標高21.36mと、高低差約4m、傾斜角度9°と、調査地の南東側から北西側に向けて傾斜し、堆積も傾斜にあわせて下方に向かうにつれて厚くなる（第6図）。1区では表土下約20cmが旧表土で、その下は基盤層である白色粘土層となる。2区も、北西端部の深くなった部分でも旧表土が厚く堆積している以外は全体的に1区とほぼ同じ堆積である。ただJ区においては、おそらくは水路等の氾濫によるものと考えられるが、砂を比較的多く含んだ黒灰褐色の粘土層が厚さ10cm程度堆積していた。

## 第3節 1区の検出した遺構と遺物

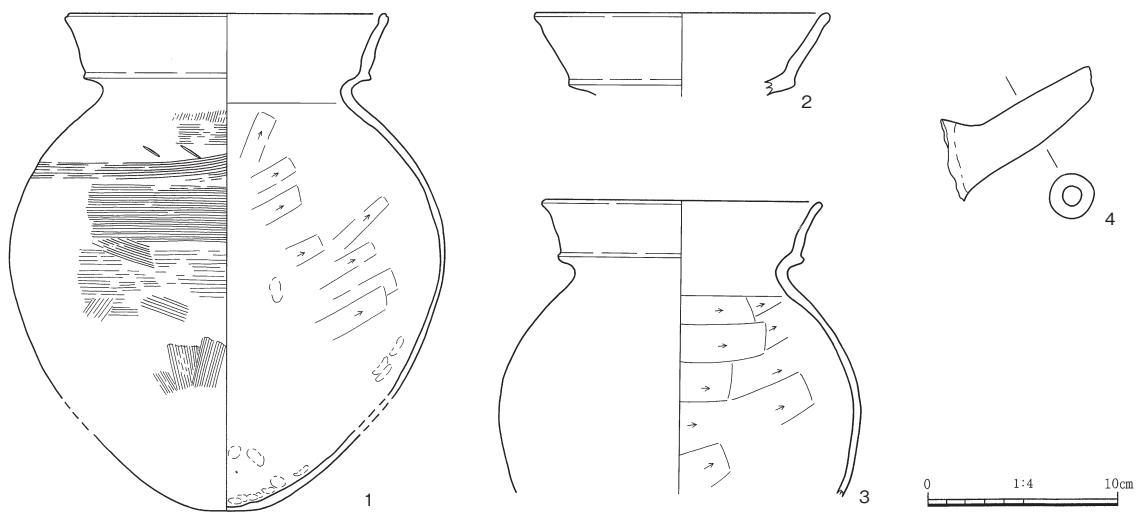
1区では、表土の下で溝状遺構2条を検出した。また土坑状の落込みを3基確認していたが、掘下げた結果、いずれも現代のものと判断し今回は報告を控えた。

### SD1・2（第7、8図）

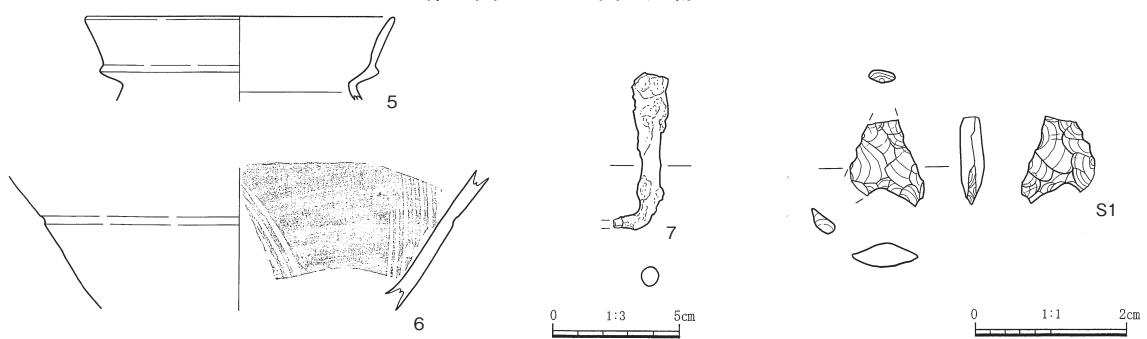
1区の北西隅において調査区をほぼ横断するように検出した。SD1の南西端は自然消滅し、北東端は調査区外へと延びる。幅は80cm、深さ18cmを測り、断面U字状を呈する。この溝から西方向



第7図 SD 1・2平面図および断面図



第8図 SD 1出土遺物



第9図 1区遺構外出土遺物

に枝状に延びる幅40cm、深さ約10cmを測り、断面U字状を呈する溝を検出し、これをSD 2とした。調査区外へと延びるため詳細は不明である。

遺物はSD 1から土師器の甕(1～3)、注口土器(4)が出土した。時期は古墳時代前期と思われる。

## 第4節 1区遺構外出土遺物 (第9図)

1区の遺構外の遺物は非常に少なく、図示出来たものは土師器の甕(5)、陶器製の擂鉢(6)、釣(7)、石鎌(S 1)であった。

## 第5節 2区の検出した遺構と遺物

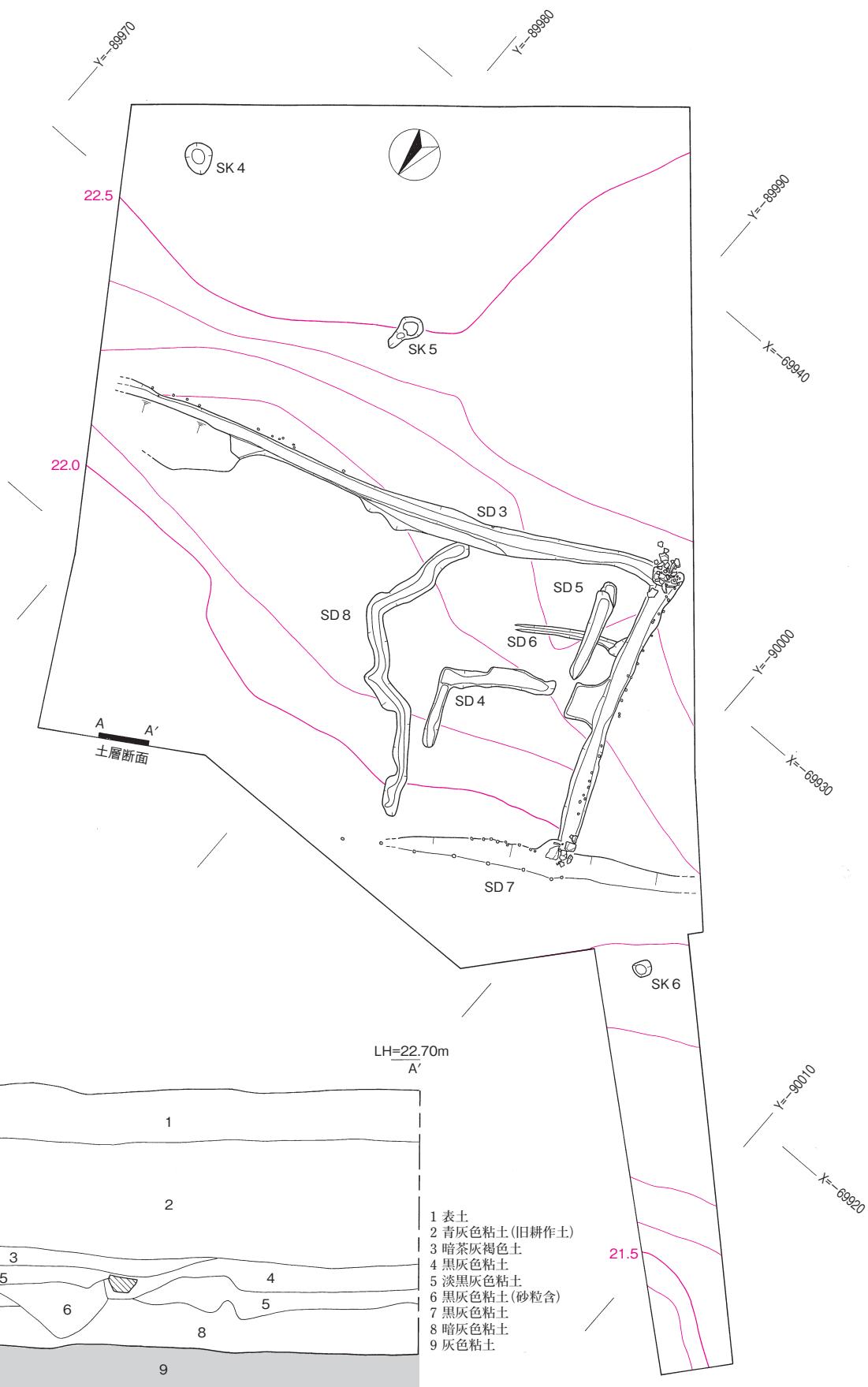
2区では溝状遺構6条、土坑3基を検出した。溝状遺構のうちSD 3～7は一連のものと考えられる。

### 1. 溝状遺構

#### SD 3 (第12～14図)

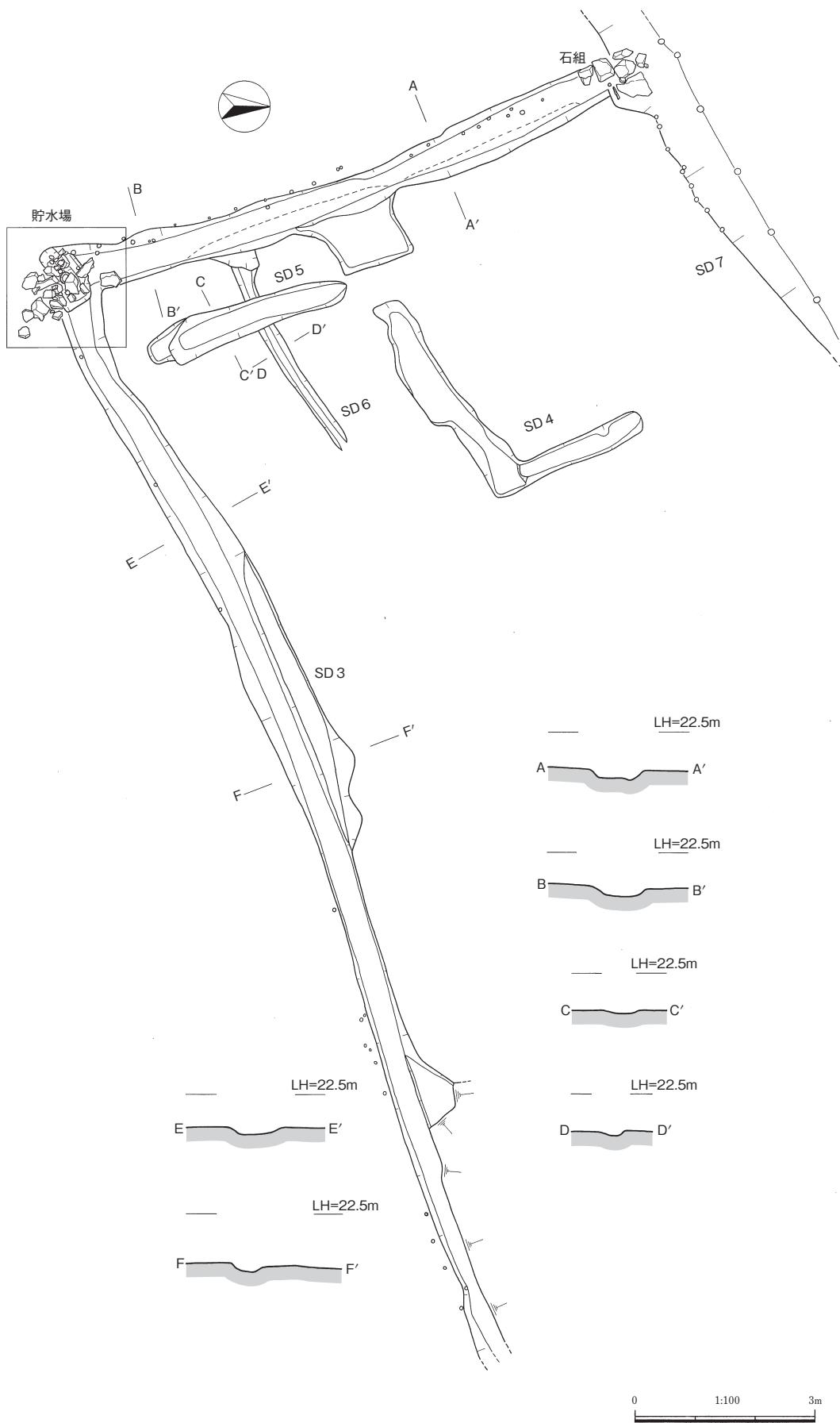
2区のほぼ中央を南東から北東方向に横断したのち、調査地西隅で直角に屈曲し北方向にあるSD 7に繋がる溝である。屈曲する部分には、人頭大の石を積上げた貯水場状の施設(第13図)が設けられていた。貯水場状施設は幅1.09m×0.55m、深さ30cmの隅丸方形を呈する。検出当初、中には人頭大の石が数個落ち込んでいたが、南東側に意図的に積まれた石組が残っていることから、本来はもっとしっかりした石組であった可能性を窺わせる。北側に位置する断面観察では顕著な溝跡は確認されず、調査区外に係るため詳細は不明であるが、上層がかなり削平されていることから、貯水場の西側にも延びていた可能性も考えられる。溝の肩部には径2cm～5cmの杭列が残り、貯水場から北に延びた溝側では特に顕著に残る。杭列は溝の西側肩部のみに見られる。東西方向の溝は幅40cm～60cm、深さ6cm～14cmを測り、断面はU字状を呈するが、東側端部では谷側が流失してしまい明確な形状を留めていなかった。なお、平成24年度の隣接地の調査では、この溝のつづきを確認することはできなかった。南北方向の溝は幅60cm～80cm、深さ3cm～14cmのU字型を呈し、二段に落ち込むことから、作り直して使用したようである。またこの溝の中ほどの東側肩部に迫出した状態の、1m×1.15mの方形のテラス状の区画があり、迫出した先にはSD 4が存在するが現状では繋がってはない。上部がかなり削平を受けていることを考慮すると繋がっていた可能性も十分考えられる。SD 7との境界に石組痕跡と思われる人頭大のものを中心に、大きいもので40cm×50cm大の石が数個残っていたが、後世の搅乱によって原形は留めていないと思われる。また、前述した貯水場のように顕著な痕跡も見られないが、SD 7との境界に位置することから、なんらかの意図があったものと考えられる。

遺物は磁器製筒型香炉(8)、陶器製擂鉢(9)、磁器製の徳利の口縁部(10)、スクレイパー(S 2)が出土した。また、貯水場の石を除去した底の部分に銅錢「寛永通宝」(11)が出土している。時期的には、江戸時代の終わりから明治時代にかけてのものであろう。

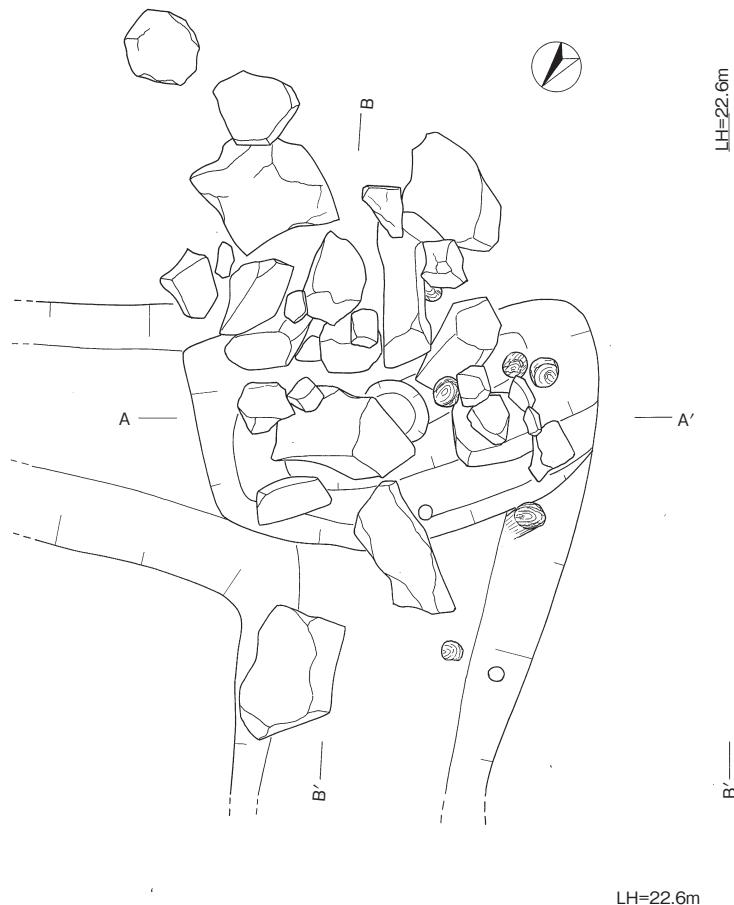


第11図 2区土層断面図

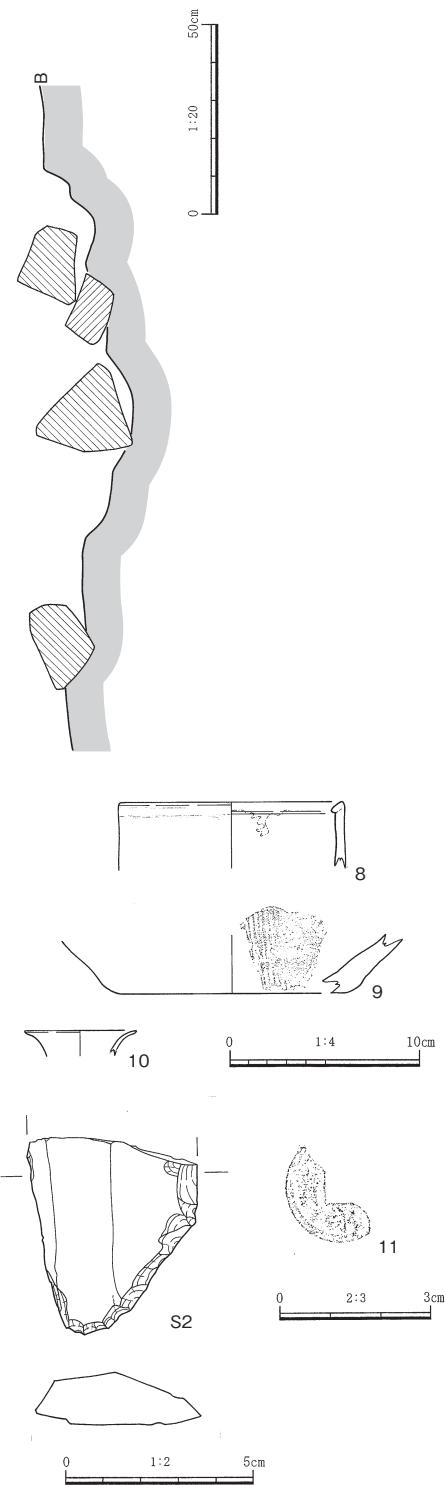
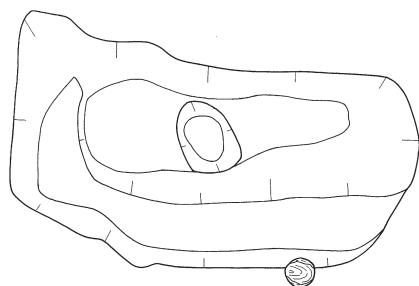
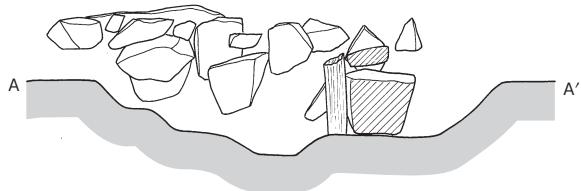
第10図 2区遺構配置図



第12図 SD 3～7 平面図および断面図



LH=22.6m



第13図 SD 3貯水場拡大図

第14図 SD 3出土遺物

#### S D 4 (第12図)

S D 3 の北側G H 区にL字状に検出した。幅40~60cm、深さ3cm程度を測り、断面は浅いU字状を呈する。溝の両端は途切れているが、方向から見て西側の端部はS D 3 の迫出し部分に繋がり、一方はS D 7 に繋がっていた可能性が考えられる。後述するS D 5 の北側端部とも繋がっていた可能性も考えられるが不明である。

#### S D 5 (第12図)

S D 3 の南北溝と並行する形で検出した。幅50~60cm、深さ3cm程度を測り、断面は浅いU字状を呈する。この溝の下方からS D 6 が確認されたことから、S D 3 よりはやや新しいものと考えられる。両端が途切れているため性格は不明であるが、北側端部は、S D 4 と繋がっていた可能性も考えられる。

#### S D 6 (第12図)

S D 5 の下で確認された。S D 3 から北東に延びる幅0.3m、深さ5cmの溝で、約3.5mで自然消滅する。

#### S D 7 (第12図)

2区調査区の北端に位置する。現在の用水路を作る際に削平されたようで、中にはバラスや現代のゴミ等が入っていた。深さは約18cmで溝の南側の肩部分の一部と杭列が残っていた。杭は、肩部ではS D 3 などで見られた5cmまでの細い杭であるが、底部に打たれた杭は比較的太い約10cm程度のものであった。S D 3 がこの溝と繋がっていることから、S D 3 と同時期の水路と考えられるが、S D 3 等と比較すると大きなもので、S D 3 等の各溝からの水を流すための川のようなものであったと考えられる。後に拡張区として2区の北側の一部を掘り下げたが、北西側の肩部を確認することは出来なかった。

#### S D 8 (第15図)

最下層部で確認された。2区調査区のほぼ中央から北に方向に蛇行しながら延びる幅約18cm、深さ10cmの溝である。底部がかなり不整形であることから、自然流路ではないかと考える。時期的には、周辺出土の遺物から、弥生時代前期頃と考えられる。

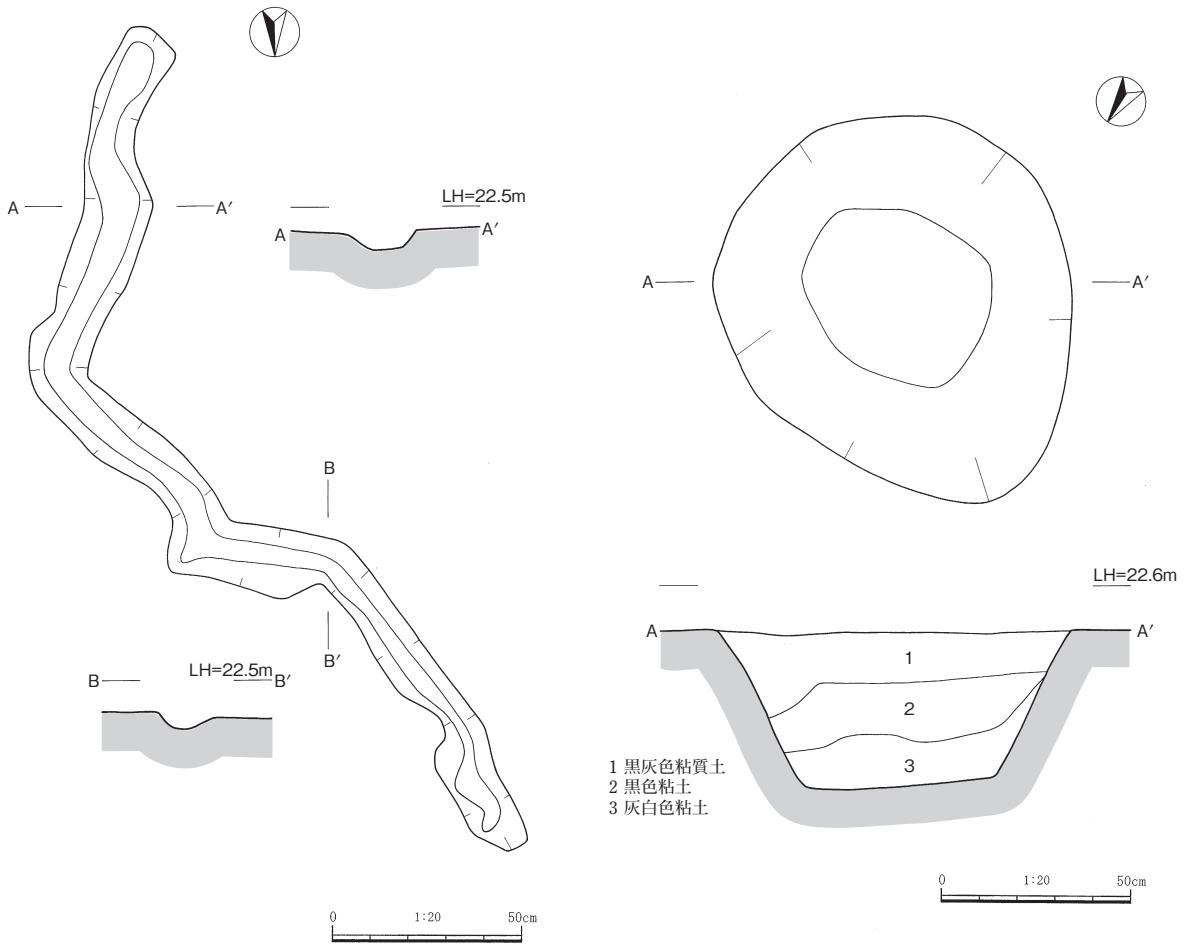
## 2. 土 坑

#### S K 4 (第16図)

2区南東隅C区で検出した、径約0.91m×1.07m、深さ0.4mの円形の土坑である。時期は不明である。

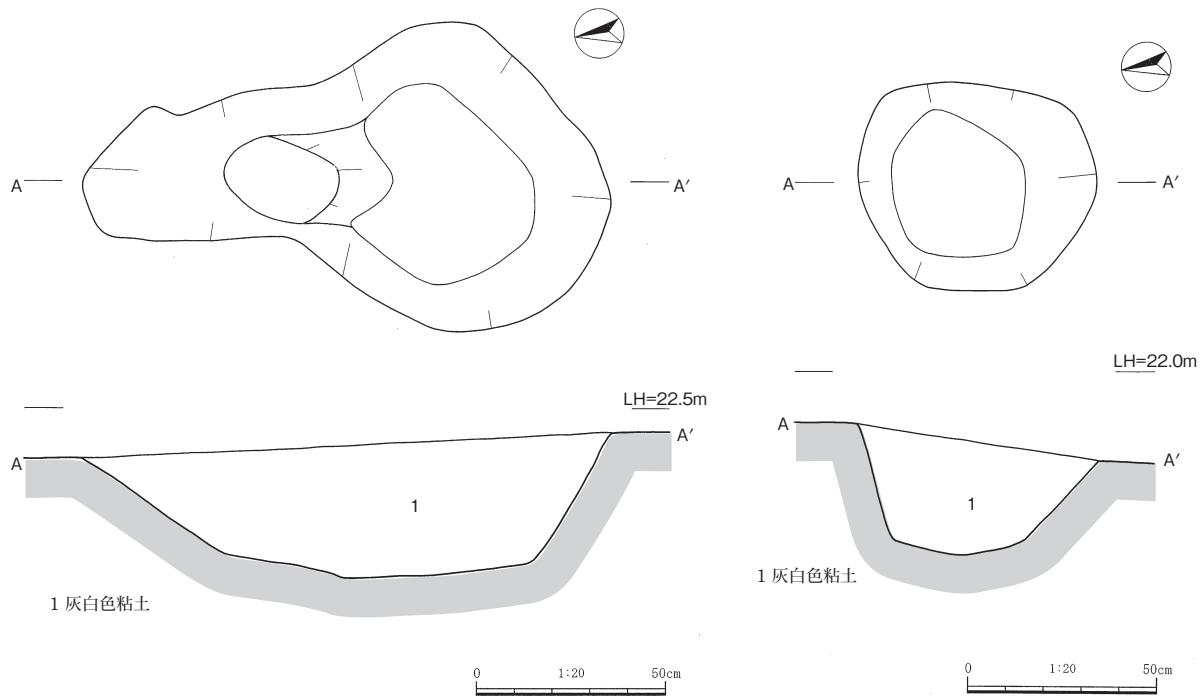
#### S K 5 (第17図)

2区調査区の中央のやや南東で検出した。長軸1.4m、短軸0.83m、深さ35cmの隅丸方形の土坑と柱穴が複合した土坑である。柱穴部分の底径は30×20cm、深さ30cmで、28cm×18cm大の石が据えてあった。時期は不明である。



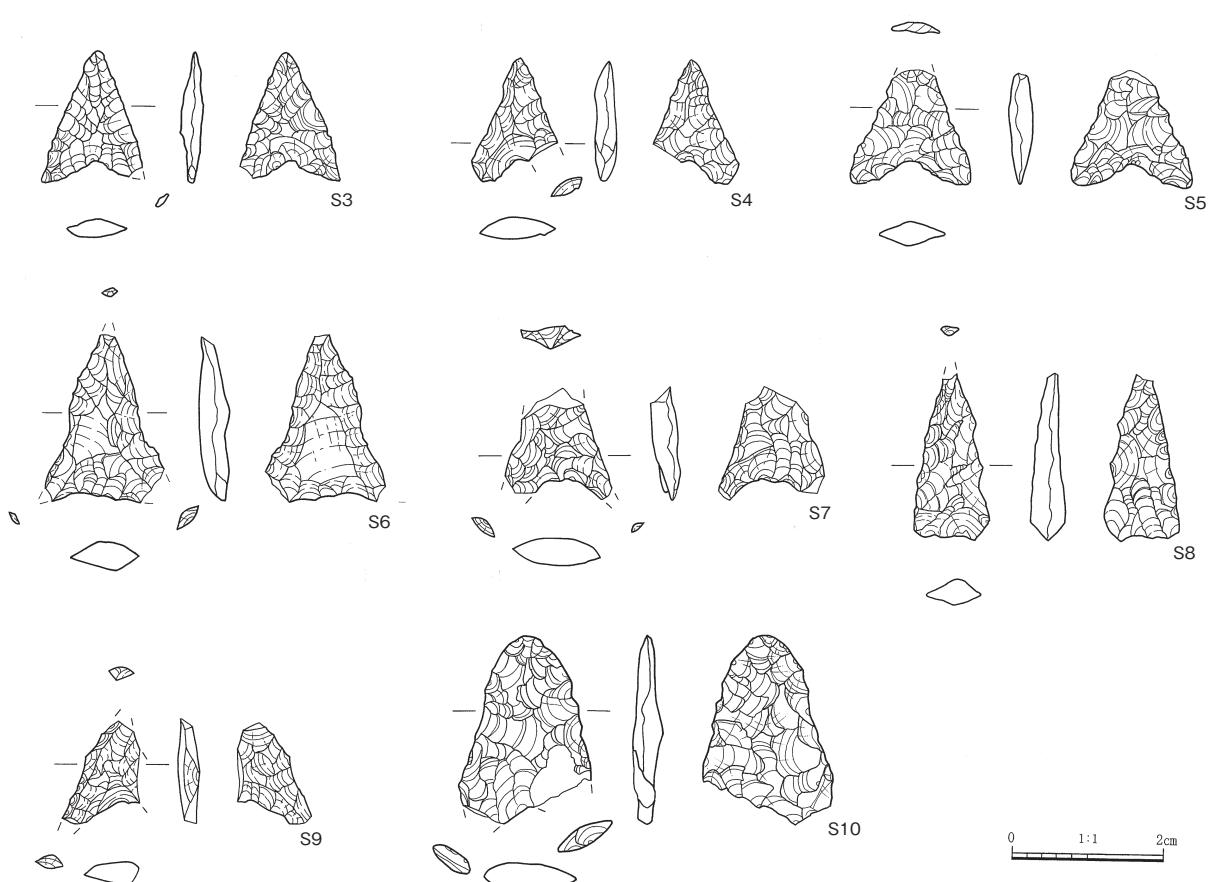
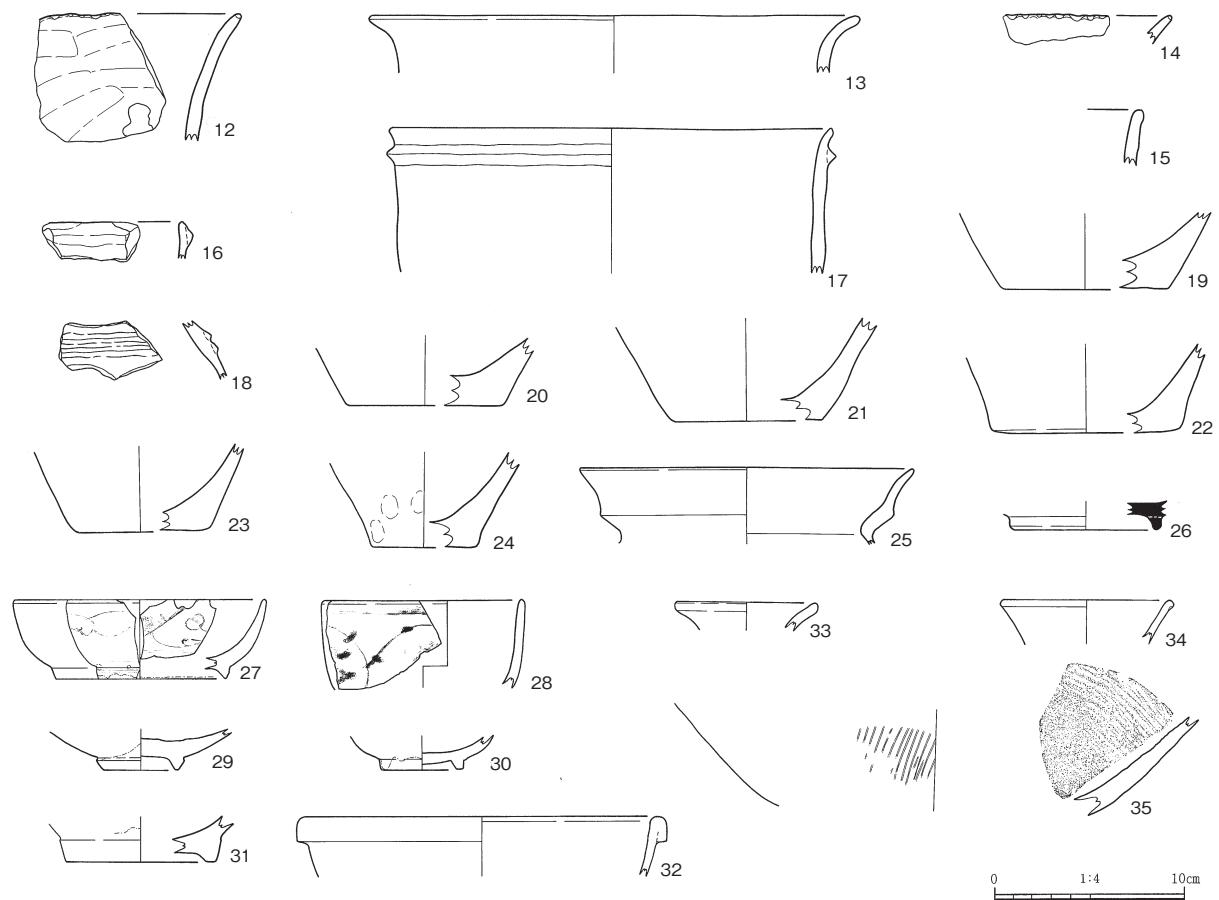
第15図 SD 8 平面図および断面図

第16図 SK 4 平面図および断面図

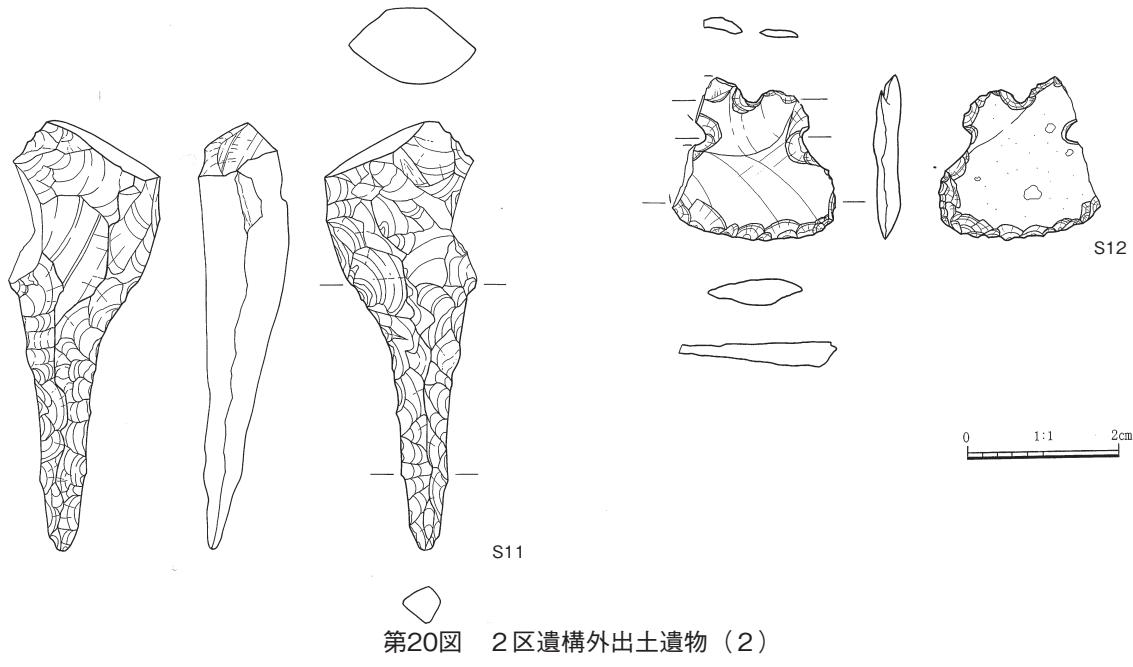


第17図 SK 5 平面図および断面図

第18図 SK 6 平面図および断面図



第19図 2区遺構外出土遺物（1）



第20図 2区遺構外出土遺物（2）

#### S K 6 (第18図)

2区調査区を拡張したJ区で検出した。径65×55cm、深さ30cmのやや楕円形の土坑である。時期は不明である。

### 第6節 2区遺構外出土遺物 (第19、20図)

2区では弥生土器、陶磁器、黒曜石が出土したが、その多くは摩耗あるいは小片だったため、図示出来たものは少なかった。12~24は弥生土器で、12~14は大きく外反する口縁部を呈する甕で、12・14は端部に刻目を施す。15は直立する口縁の甕である。16・17はいずれも貼付突帯を施した甕の口縁部である。18は壺の肩部と思われ、二段の貼付突帯を付す。19~24は、壺あるいは甕の底部である。25は、土師器の甕の口縁部である。26は須恵器の高台付坏の高台部である。外面底部には回転糸切痕が残る。27~35は陶磁器で、27・28は染付の碗、29~31は皿の底部、32は鉢の口縁部、33は徳利の口縁部、34は青磁の皿の口縁部、35は瓦質の擂鉢である。S 3~S 10は石鎚、S 11は石錐、S 12は石匙である。

### 第7節 清水川御崎前遺跡のまとめ

清水川御崎前遺跡は、全体的に埋土が少なく、後世の開墾によって遺構、遺物共に残りがあまり良くなかった。しかし石鎚が比較的多く出土しており、検出した土坑が陥穴と考え、背後には山があることを考慮すると、縄文時代はこの地が狩場だった可能性も考えられる。また、時代を特定できる遺構が古墳時代の溝状遺構と、江戸時代の終わりから明治時代の溝状遺構のみで、いずれの溝も調査区外に延びたり、消滅したりと全体の性格を窺うことができないが、溝以外に生活の痕跡がないことから、清水川御崎前遺跡は現在と同様古墳時代から耕作地だったと考えられる。

第1表 遺物観察表 (SD1・2)

遺物番号	捕団番号	器種	種別	地区	法量(cm)			焼成	色調	胎土	調整	備考
					口径	残存高	底径					
1	8	甕	土師器	SD 1	※16.6	26.2	-	やや良	灰褐色	密 砂粒・石英・雲母・角閃石含む	外面:ナデ、刷毛目、列点文 内面:ナデ、ケズリ、指頭圧痕	煤付着
2	8	壺	土師器	SD 1	※15.4	4.3	-	やや良	褐色	やや密 石英・雲母・角閃石含む	内外面共ナデ	
3	8	甕	土師器	SD 1	※14.4	15.5	19.1	良	褐色	密 石英・砂粒含む	外面:ナデ 内面:ナデ、ケズリ	
4	8	注口土器	土師器	SD 1	(穴径) 1.0	(注口径) 1.6	(注口長) 9.7	やや良	黄灰褐色	やや密 石英・白色砂粒含む	内外面共調整不明	

第2表 遺物観察表 (1区遺構外)

遺物番号	捕団番号	器種	種別	地区	法量(cm)			焼成	色調	胎土	調整	備考
					口径	残存高	底径					
5	9	甕	土師器	1-D	※16.2	4.5	-	やや良	灰褐色	密 石英・砂粒含む	外面:ナデ 内面:ナデ、ケズリ	
6	9	片口擂鉢	備前	1-B	-	7.5	-	良好	赤褐色	密	7条単位の描目	
7	0	釘	鉄	1-B	6.2 (長さ)	2.1 (幅)	0.8 (厚さ)					重さ12.3g

第3表 遺物観察表 (SD3)

遺物番号	捕団番号	器種	種別	地区	法量(cm)			焼成	色調	胎土	調整	備考
					口径	残存高	底径					
8	14	蕎麦猪口	陶磁器	SD 3	※11.7	3.6	-		灰色胎土 灰色袖			貢入
9	14	擂鉢	陶磁器	SD 3	-	3.1	12.0	良	灰色	密 白色粒・赤色粒含む		
10	14	壺	陶磁器	SD 3	※5.9	1.4	-		灰白色胎土 灰白色袖			
11	14	銅錢	銅	SD 3	-	-	-					寛永通宝

第4表 遺物観察表 (2区遺構外)

遺物番号	捕団番号	器種	種別	地区	法量(cm)			焼成	色調	胎土	調整	備考
					口径	残存高	底径					
12	19	甕	弥生土器	2-F	-	6.7	-	やや良	橙褐色	やや密 石英・砂粒含む	外面:ヘラケズリ後ナデ 内面:ナデ	
13	19	甕	弥生土器	2-I	※30.2	2.9	-	やや良	灰褐色	やや密 石英・砂粒含む	内外面共調整不明	
14	19	甕	弥生土器	2-F	-	1.5	-	やや良	灰褐色	やや密 石英・砂粒含む	内外面共ナデ	
15	19	甕	弥生土器	2-F	-	3.0	-	やや良	橙褐色	やや密 石英・砂粒含む	内外面共ナデ	
16	19	甕	弥生土器	2-I	-	2.0	-	やや良	灰褐色	やや密 石英・砂粒含む	内面調整不明	突帯文
17	19	甕	弥生土器	2-I	※23.2	7.6	-	やや良	灰褐色	やや密 石英含む	内外面共調整不明	突帯文
18	19	壺	弥生土器	2-I	-	3.1	-	やや良	灰褐色	やや密 砂粒含む	内面調整不明	
19	19	壺	弥生土器	2-I	-	4.0	8.8	やや良	灰褐色	やや密 砂粒含む	内外面共調整不明	
20	19	壺	弥生土器	2-I	-	3.6	8.4	やや良	灰褐色	やや密 砂粒含む	内外面共調整不明	
21	19	壺	弥生土器	2-F	-	5.3	8.0	やや良	灰褐色	やや密 石英・砂粒含む	内外面共調整不明	
22	19	甕	弥生土器	2-F	-	4.7	10.0	やや良	橙褐色	やや密 石英・砂粒含む	内外面共調整不明	
23	19	甕	弥生土器	2-F	-	4.5	7.0	やや良	橙褐色	やや密 石英・砂粒含む	内外面共調整不明	
24	19	壺	弥生土器	2-E	-	5.0	5.6	やや良	灰褐色	やや密 石英・砂粒含む	内面調整不明 外面:指頭圧痕	
25	19	甕	土師器	2-F	※17.5	4.1	-	やや良	灰褐色	やや密 石英・砂粒含む	外側:輪轍調整 内面:ナデ、輪轍調整 底部:回転系きり	
26	19	环	須恵器	2-H	-	1.5	7.4	良好	青灰色	密 白色砂粒含む		
27	19	皿	陶磁器	2-G	※13.2	4.2	9.0		灰白色胎土 灰白色袖			
28	19	碗	陶磁器	2-H	※10.4	4.2	-		赤褐色胎土 灰色袖			陶胎染付 貢入
29	19	皿	陶磁器	2-G	-	2.2	4.0		灰白色胎土 灰白色袖			
30	19	皿	陶磁器	2-G	-	1.8	4.2		灰色胎土 灰色がかった緑色袖			
31	19	皿	陶磁器	2-G	-	2.4	7.8		暗灰白色胎土 くすんだ緑色袖			
32	19	片口鉢	陶磁器	2-G	※18.6	3.1	-		灰色胎土 くすんだ緑色袖			貢入
33	19	壺	陶磁器	2-H	※7.4	1.5	-		灰褐色胎土 黒緑色袖	黑色粒含む		
34	19	皿	青磁	2-H	※8.8	2.4	-		灰褐色胎土 淡い緑色袖			
35	19	擂鉢	瓦質土器	2-G	-	5.4	-	良	灰色	密 石英・砂粒含む		

第5表 石器観察表

遺物番号	捕団番号	種別	地区	法量				石材
				長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	
S 1	9	石鑼	1-A	1.1	1.0	0.3	0.3	黒耀石
S 2	14	スクレイバー	SD 3	5.3	4.5	1.4	34.3	サスカ石
S 3	19	石鑼	2-H	1.7	1.3	0.3	0.4	サスカ石
S 4	19	石鑼	2-I	1.6	1.1	0.3	0.3	黒耀石
S 5	19	石鑼	2-G	1.5	1.6	0.3	0.5	黒耀石
S 6	19	石鑼	2-I	2.2	1.6	0.4	1.0	黒耀石
S 7	19	石鑼	2-H	1.5	1.4	0.4	0.6	黒耀石
S 8	19	石鑼	2-H	2.2	1.0	0.4	0.7	黒耀石
S 9	19	石鑼	2-H	1.4	1.0	0.3	0.3	黒耀石
S 10	19	石鑼	2-J	2.5	1.8	0.4	1.6	黒耀石
S 11	20	石鑼	2-F	5.65	2.0	1.0	9.4	黒耀石
S 12	20	石匙	2-E	4.3	4.3	0.7	12.3	サスカ石

# 第4章 福成大坪上遺跡1区の調査

## 第1節 調査の経過と方法 (第21図)

現地調査は、平成23（2011）年7月26日から開始し、平成23（2011）年11月29日まで行った。調査区の中央を水路が横断していたため、水路の北側をN区、南側をS区とし、N区から調査を行った。調査地は、面積2,000m<sup>2</sup>、現地表面の標高約22.0～22.2mで、調査開始時は荒地であったが以前は耕作地として利用されていた。調査は、N区は表土のみを、S区では旧表土までを重機にて掘削した後、人力で掘り下げる方法をとった。現地表面から約1.2m掘り下げたところで基盤層となる白色粘土を検出した。当初、調査地は要害山から派生する善棚山の裾野にあたり、前年度調査を行った清水川御崎前遺跡同様南側から北側に向けて緩やかに傾斜するものと考えていたが、N区では、北西から南東に検出した溝に向かって緩やかに傾斜していた。S区では、西隅から中央やや南西にかけてもっとも標高が高く、南西隅および中央やや東部分において落ち込みがみられ、さらに北東に向けて緩やかに傾斜する複雑な地形をしていた。

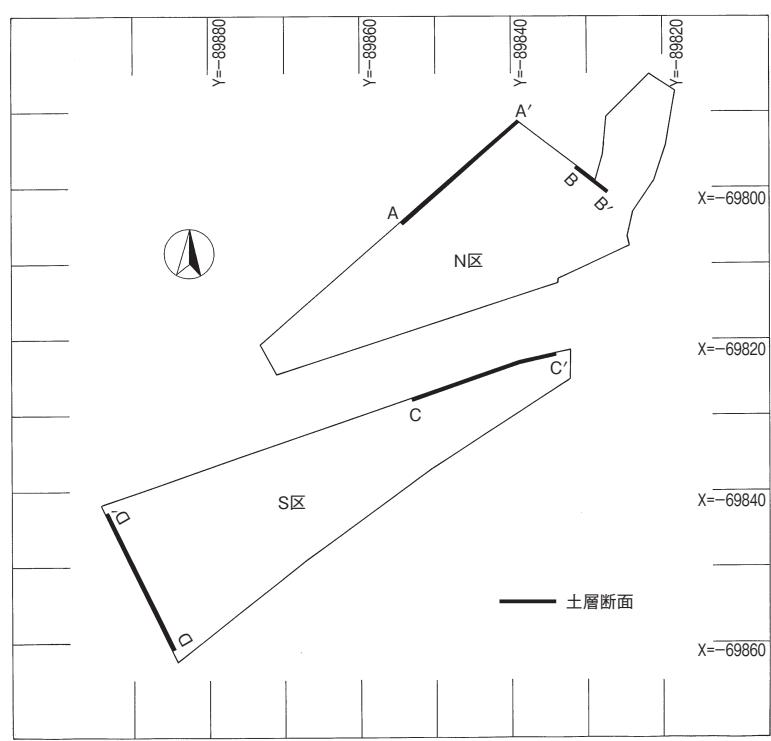
地表面から10～20cmまでの現在の耕作土を重機で除去した後、N区では当初10mのグリッドを設定していくいたが、遺構、遺物の量が少なく、S区ではグリッド設定を行わなかった。

遺物の取上げについてはトータルステーションを使用し、遺構の測量については水糸メッシュ測量とトータルステーションを併用しながら実測を行った。調査の結果、遺構としては溝状遺構7条、土坑2基を検出した。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、陶磁器、木製品、石器が出土した。

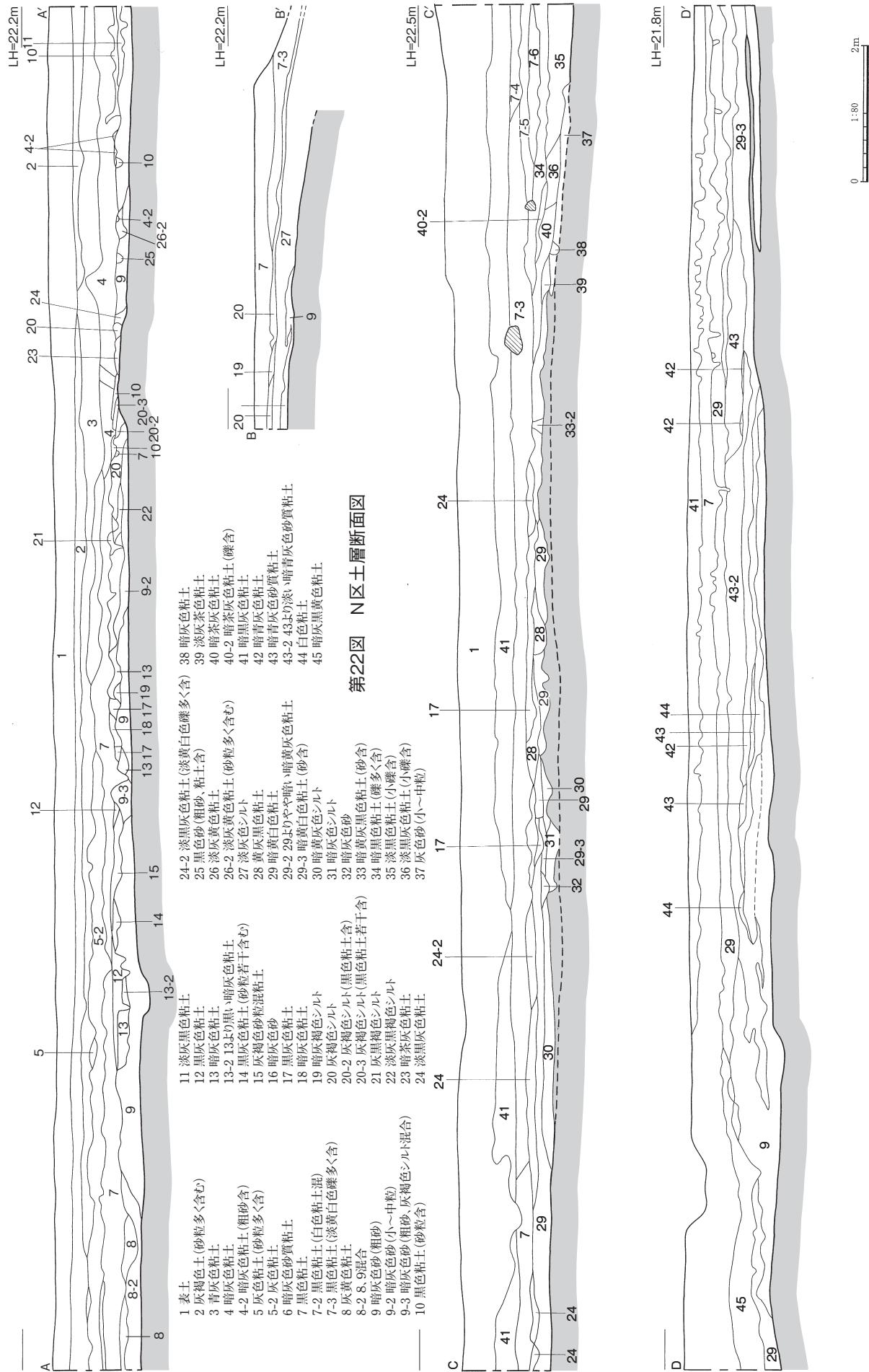
## 第2節 調査区内の層序 (第22・23図)

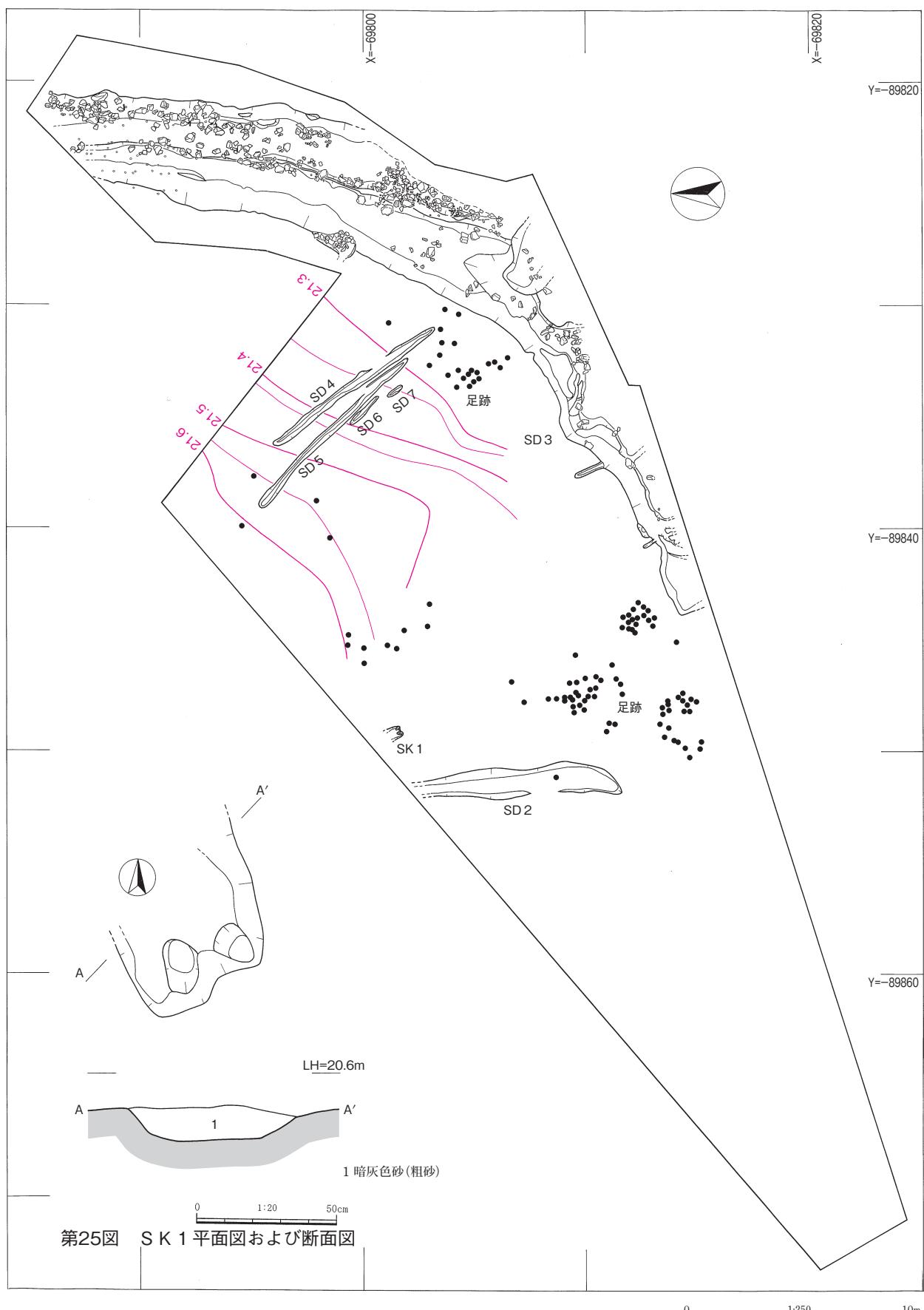
N・S区共に同じような堆積状況で、基本層序は4層からなる。

1層は表土・耕作土の灰褐色土および旧耕作土の青灰色粘土も含めた表土層で、N区では灰褐色土までを重機で掘下げたが、遺物・遺構が確認されなかつたため、S区では青灰色粘土層まで重機で掘下げた。2層はN区では灰色粘土、S区では暗黒灰色粘土で、いずれもこの層より遺物が出土している。層中から、N区では弥生時代から中世までの遺物が出土しているが、S区では、縄文時代から明治時代までの幅広い層の遺物が出



第21図 調査区画図





第24図 N区遺構配置図

土している。3層は黒色土单一の安定した層であるが、N区で本層上面で中世の溝を確認したのみで、遺物は出土しなかった。4層は粘土層及び砂層の入乱れる不安定な堆積状況で構成される。特にS区の北端部では礫の混じった層が何層にも堆積していた。5層は基盤層である白色粘土層である。最後に重機にてこの白色粘土層を深く掘下げ下層を確認した。N区では約1.7mの厚さで白色粘土の堆積がみられ、その下は粗砂層となり2.3m程掘ったところで水が湧きそれ以上の確認はできなかった。S区ではこの白色粘土層が10~20cmの厚さで堆積、その下約50~70cmの厚さの砂の氾濫堆積層があり、その下に再び白色粘土層が確認できた。

### 第3節 検出した遺構と遺物

N区で溝状遺構6条、土坑1基、S区で土坑1基のほか、植栽痕跡と思われる小穴を多数検出した。

#### 1. 溝状遺構

##### S D 2 (第26図)

N区のほぼ中央部において南北方向に検出した。南端は自然消滅し、北端は調査区外へと延びる。幅は1.4m、深さ5cmを測り、断面U字状を呈する。

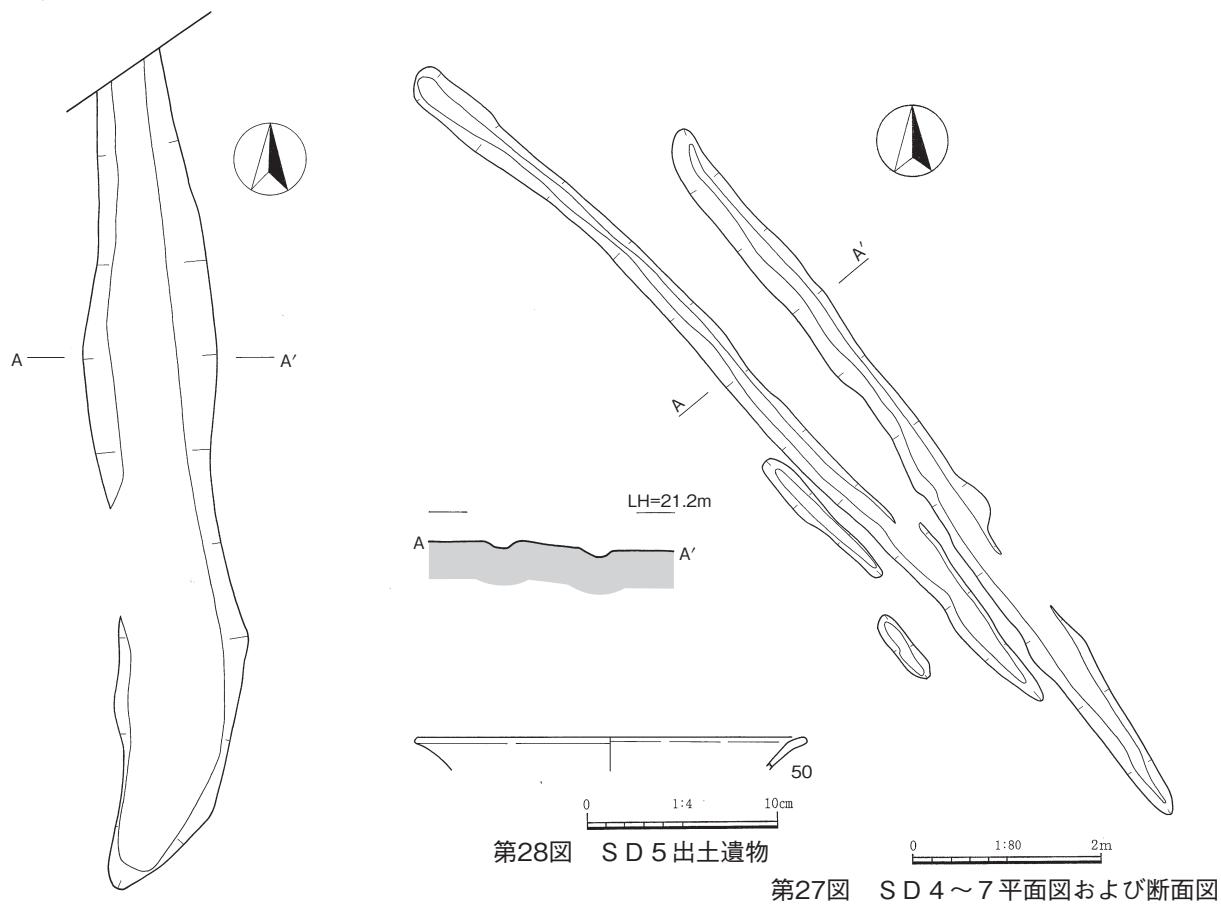
遺物は出土しなかったため時期は不明である。

##### S D 3 (第29~32図)

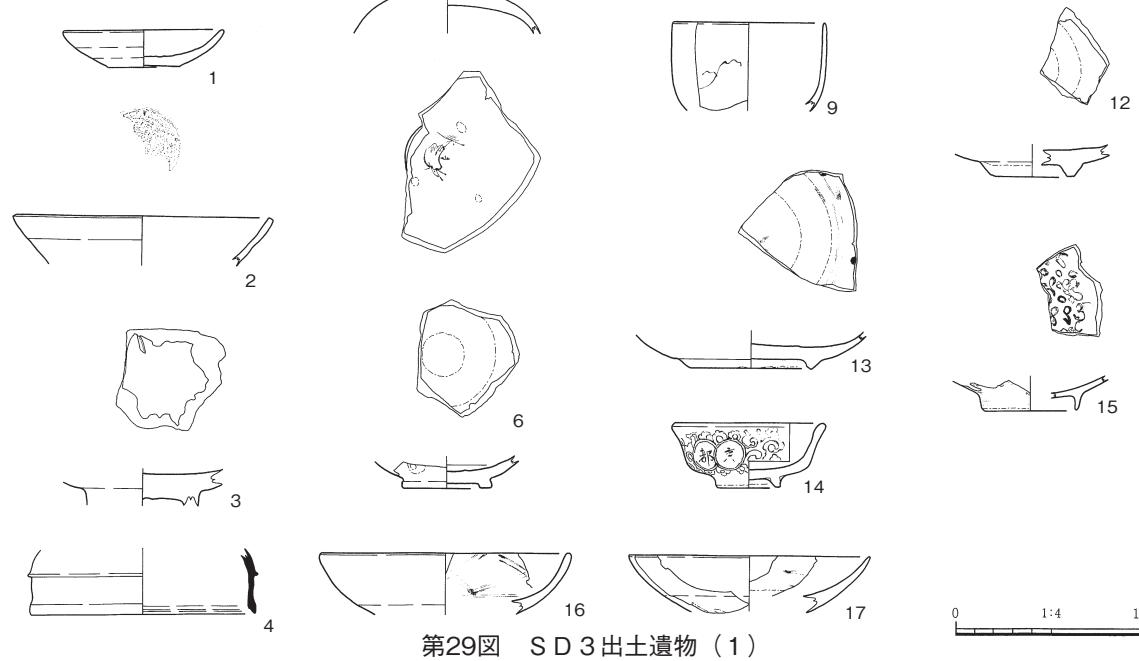
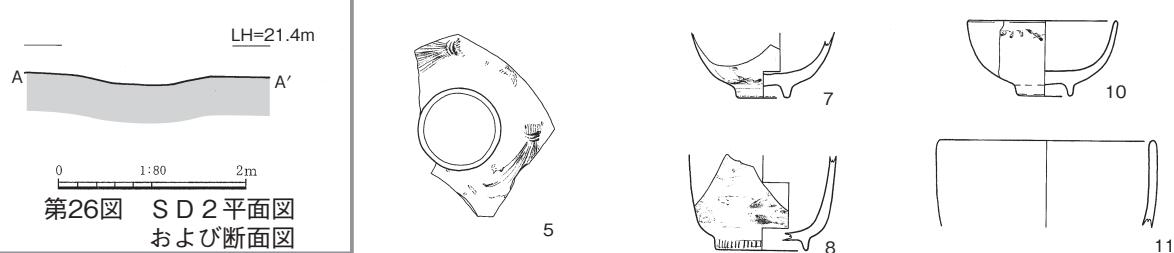
新旧2条からなる水路である。当初N区の南東隅で、推定幅3.6m、最大深さ0.7mの擂鉢状の断面を呈す水路を検出した(旧SD3)。水路は北東から南西方向に僅かに弧を描き、南西端は現在の水路によって切られていたが、北東端は調査区外に延びていたため、拡張し掘り進めた結果、水路は緩やかに屈曲した後、北方向工事対象区外に延びていった。拡張した部分の最大幅は約5.0m、最大深さ0.9mを測る。さらに拡張した部分では水路の底に中州状の高まりが認められ、この水路の東側部分に重なるように別の水路が作られていた(新SD3)。幅約2.4m、深さ0.55mで、30~50cm大の石が水路の両脇に列をなすように出土した。大きいもので90cm大の石もあり、おそらく水路の両脇に石積みをして補強していたと思われる。南側端は南方向に延び現在の水路方向に、北側端は当初の水路とほぼ重なるように工事対象区外北方向にそれぞれ延びている。後に行ったS区の調査ではこの水路につながるような水路が確認されていないことから、これらの水路は、現在の水路と重なるよう西南西に延びていたと考えられる。

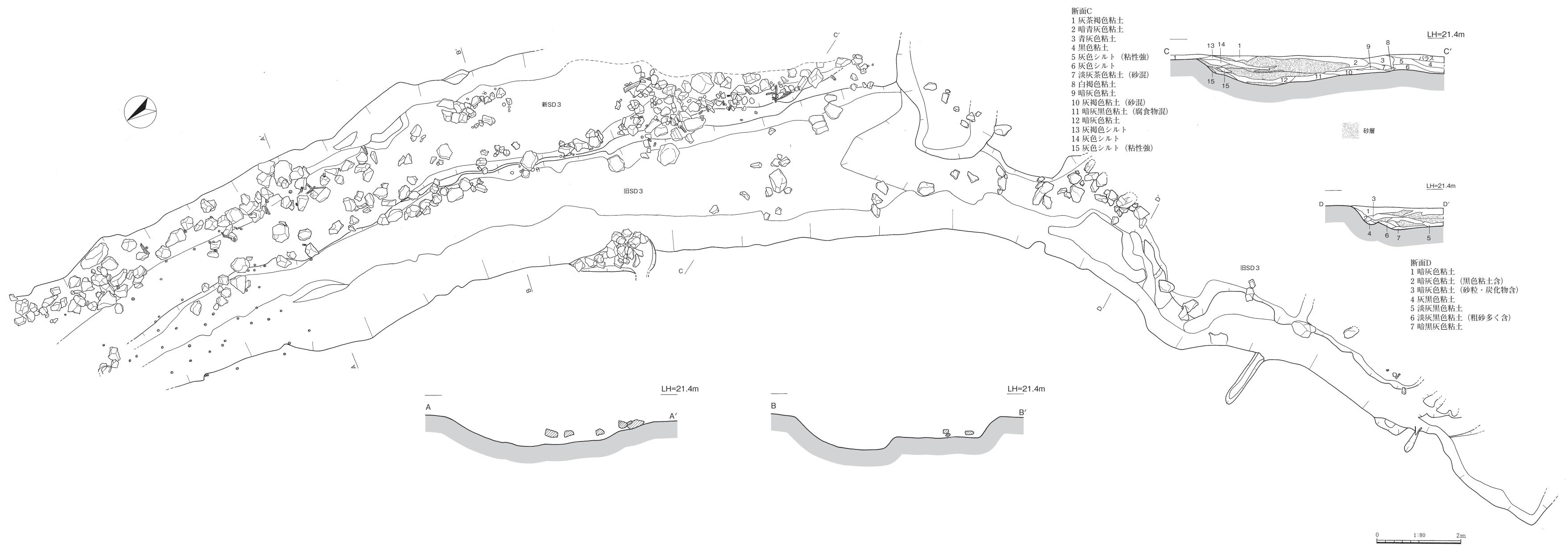
この水路の時期は、出土遺物から旧SD3が15~16世紀ごろに作られ、その後新SD3が作られた。新SD3の遺物出土状況をみると、流れ込んだというより破棄したような状態であったため、この水路が破棄されたのが江戸時代末から明治時代と考える。

遺物は土師器、須恵器、陶磁器、木製品、石器が出土した。1~3は、旧SD3から出土した遺物で、1・2は土師器の皿で、3は青磁の碗である。15~16世紀ごろのものと思われる。4~49およびS1は新SD3から出土した遺物で、4は須恵器の壺蓋であるが、流入遺物であろう。5は染付の蓋、6~10は染付碗、11~17は皿で、うち14は紅皿である。18~20は徳利、21は小碗、22・23は土師皿、24・25は燈明皿、26~30は擂鉢、31・32は焙烙鍋である。33~38は漆器で、38の皿以外は碗である。

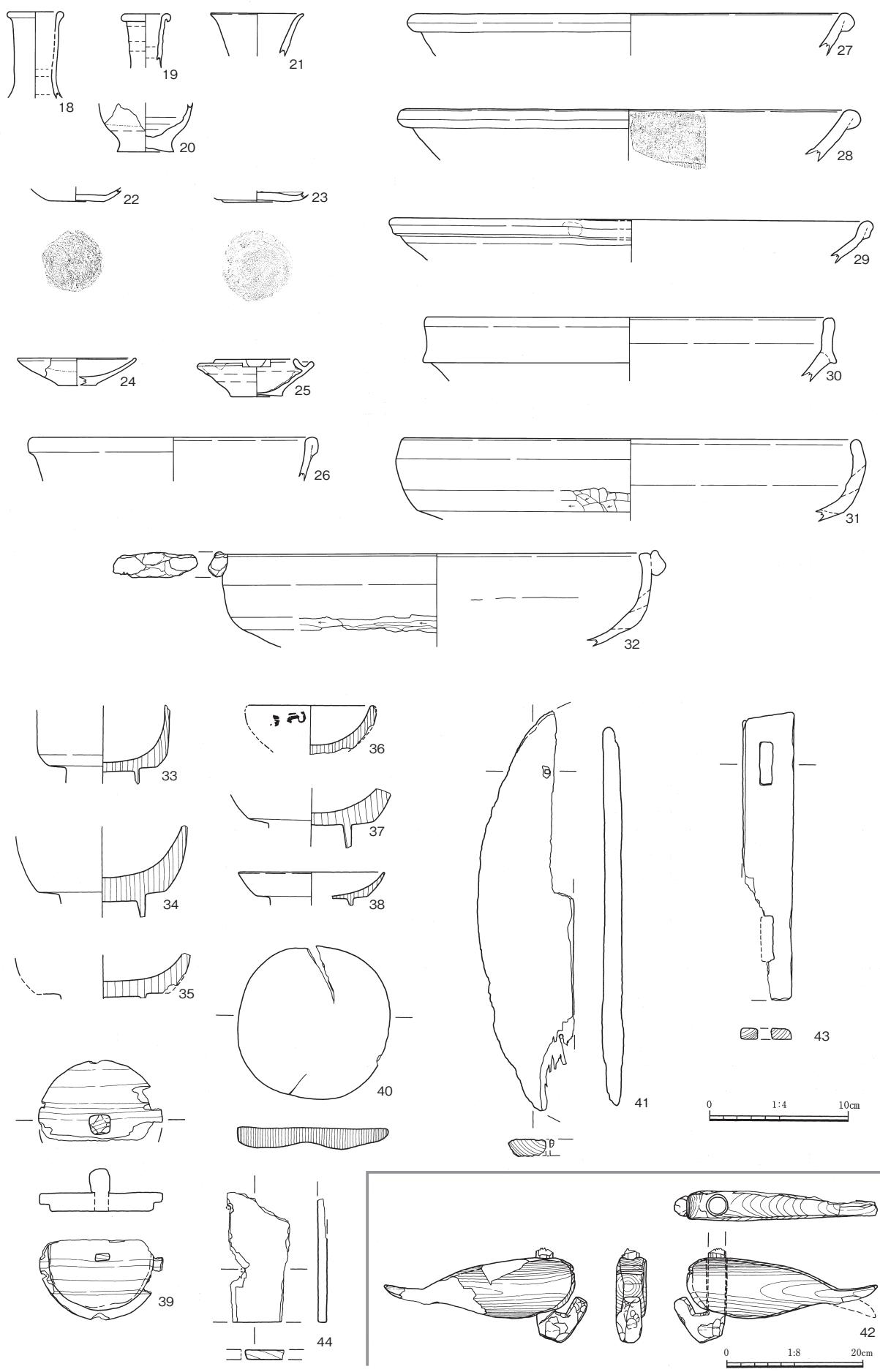


第27図 SD 4～7 平面図および断面図

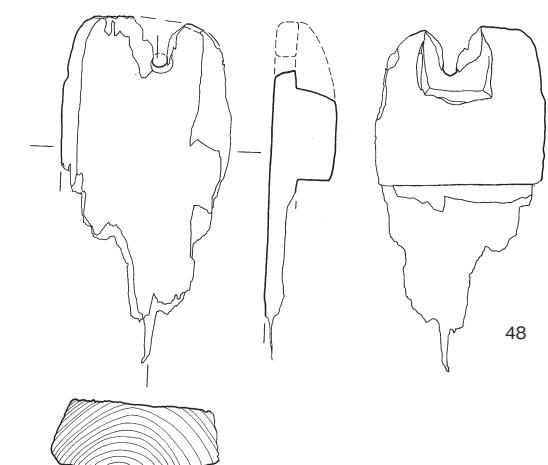
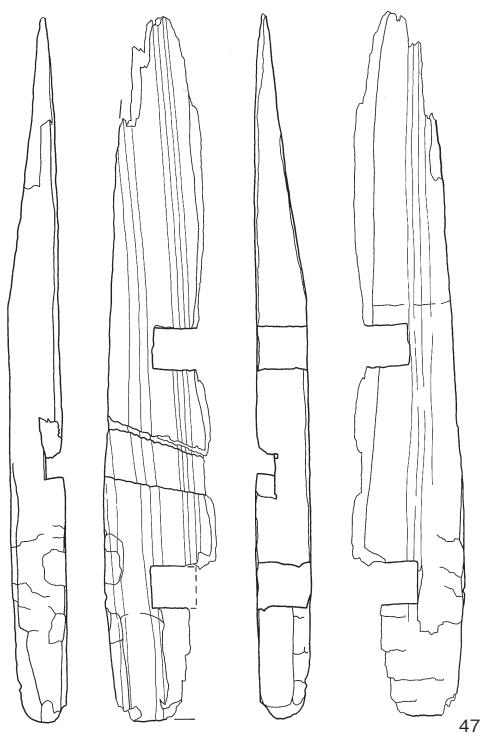
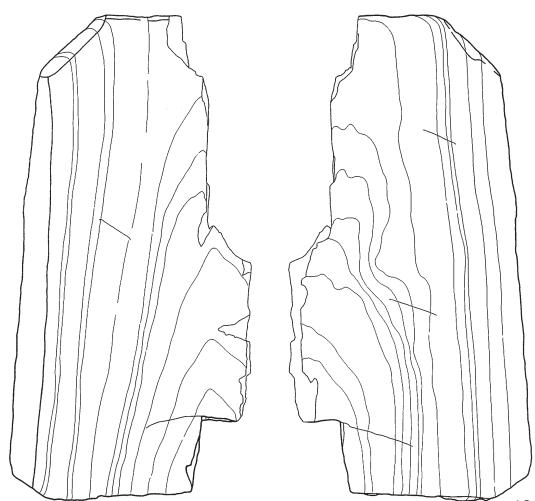
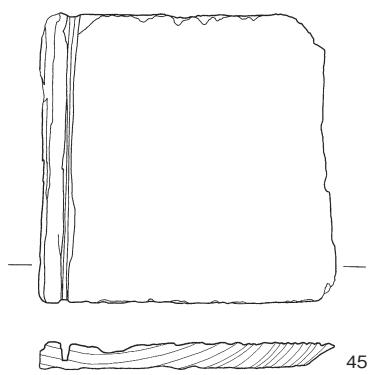




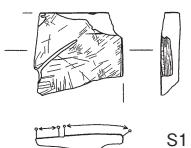
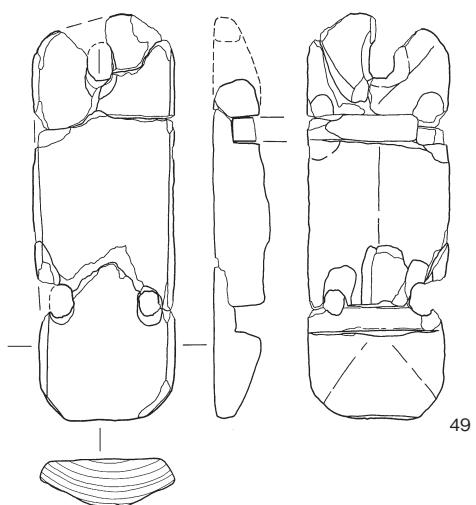
第30図 SD 3 平面図および断面図



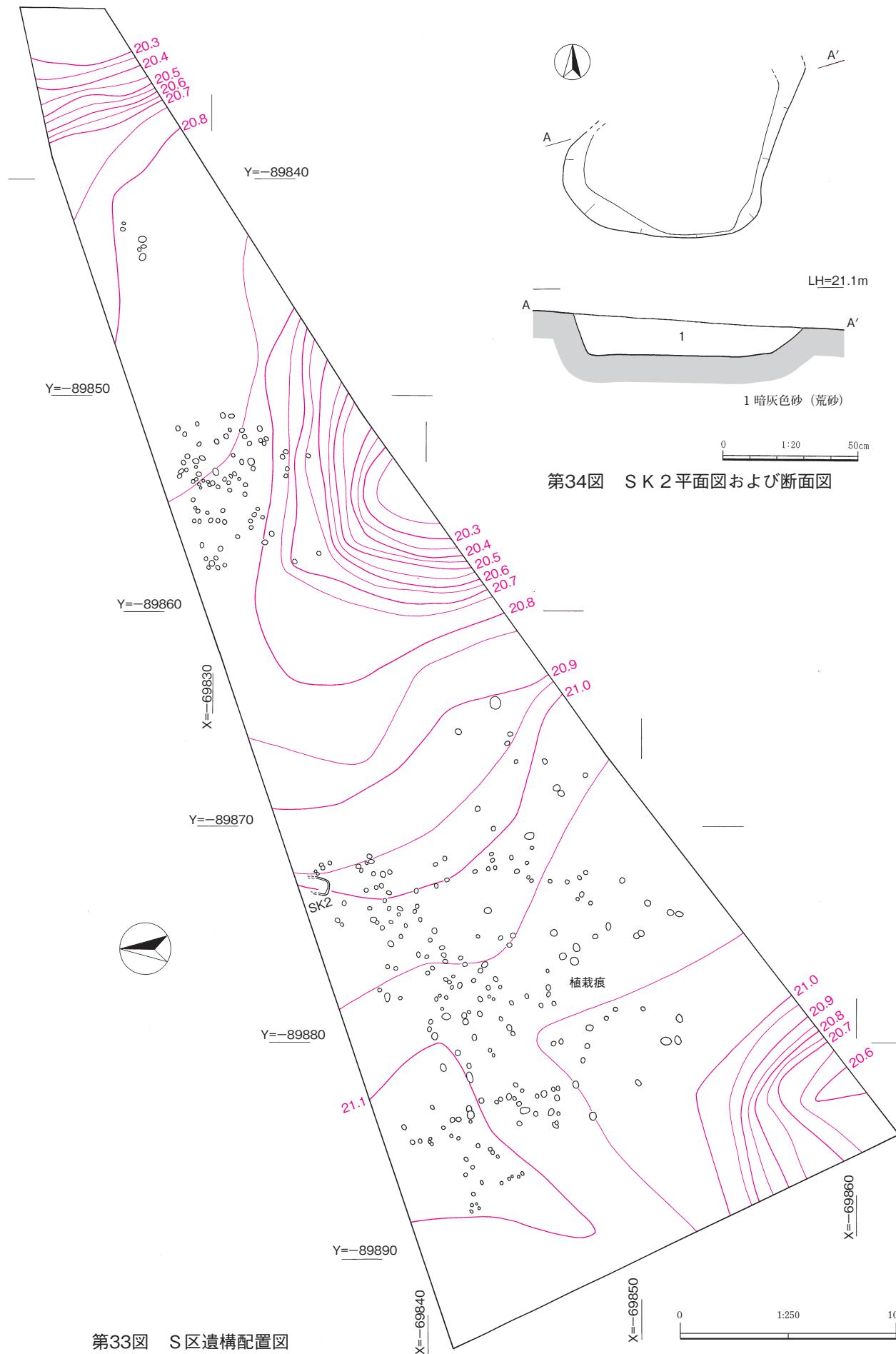
第31図 SD 3 出土遺物 (2)



0 1:4 10cm



第32図 SD3出土遺物（3）



— 31 —

39・41は木製品の蓋、40は用途不明であるが、蓋あるいは底かと思われる。42は自在鍵、43～47は用途不明の材、48・49は下駄、S 1は砥石である。時代は江戸時代末から明治時代のものと考えられる。

#### S D 4 (第27図)

N区の南東隅で北南から南東方向に検出した。幅40cm、深さ5cmを測り、断面は浅いU字状を呈するが、両端共に自然消滅し長さ8.9mが残る。

遺物は出土しなかったため時期は不明である。

#### S D 5 (第27図)

S D 4の南西に並行する形で検出した。幅30～50cm、深さ6cm程度を測り、断面は浅いU字状を呈するが、両端共に自然消滅し長さ9.35mが残る。

遺物は土師器の壺口縁部(50)が出土しているが、溝の上部がかなり削平されていることから、この溝に伴うものか断定しにくい。

#### S D 6 (第27図)

S D 5の南西に並行する形で検出した。幅10～25cm、深さ3cm程度を測り、断面は浅いU字状を呈するが、両端共に自然消滅し長さ1.75mが残る。

遺物は出土しなかったため、時期は不明である。

#### S D 7 (第27図)

S D 6の南東に並行する形で検出した。幅15cm、深さ5cm程度を測り、断面は浅いU字状を呈するが、両端共に自然消滅し長さ0.85mが残る。

遺物は出土しなかったため、時期は不明である。

## 2. 土 坑

#### S K 1 (第25図)

N区のほぼ中央で検出した。径約0.55m×0.65m、深さ12cmの土坑である。断面は擂鉢状を呈す。遺物の出土はなかった。

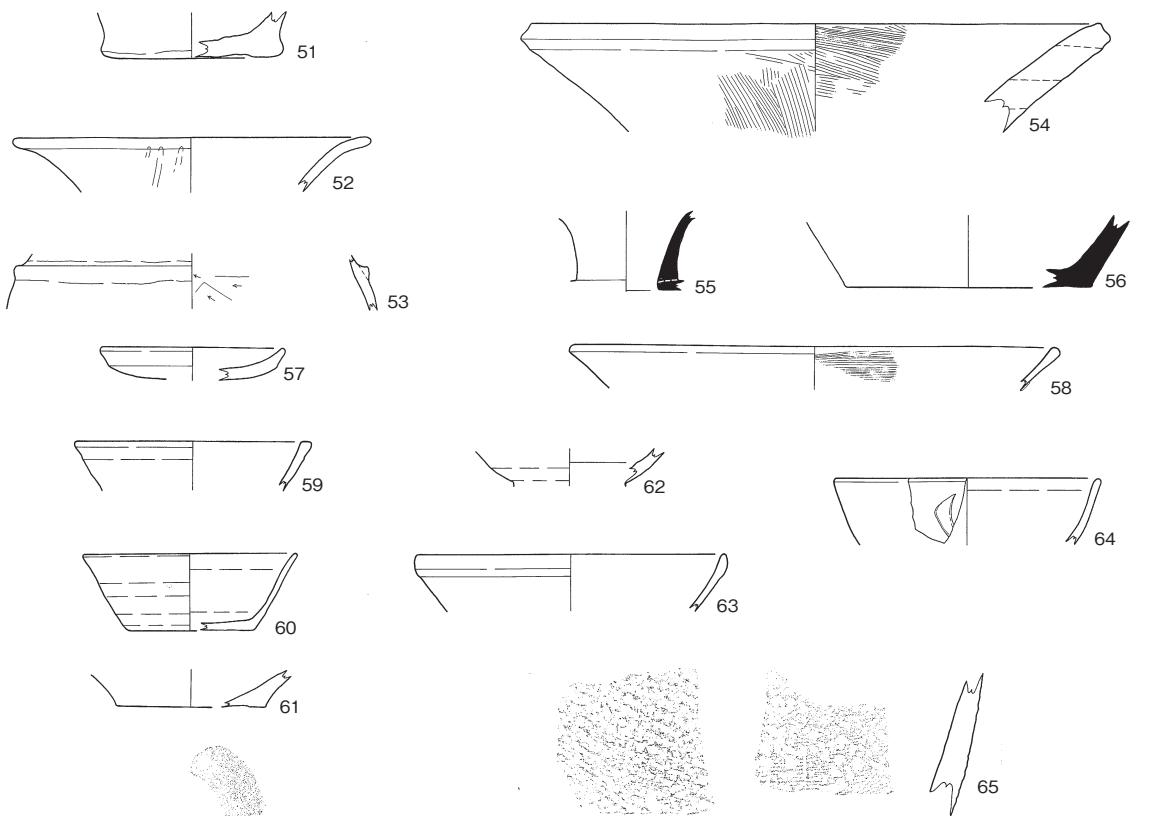
#### S K 2 (第34図)

S区調査区のほぼ中央で検出した。推定径約0.85m×0.65m、深さ14cmの土坑である。断面は擂鉢状を呈す。遺物の出土はなかった。

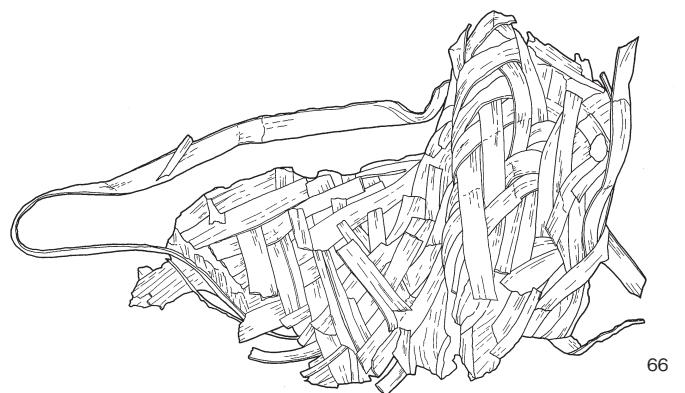
## 3. その他の遺構

N区では、白色粘土層上面で偶蹄目の足跡を検出した(第24図)。足跡は調査区の中央部に集中していたほか、北東部付近にも点在していた。

S区では基盤層である白色粘土層上面で植栽痕と思われる小穴を無数に検出した(第33図)。穴の径は10～30cm、深さは10cm程度であった。



0 1:4 10cm



0 2:3 3cm

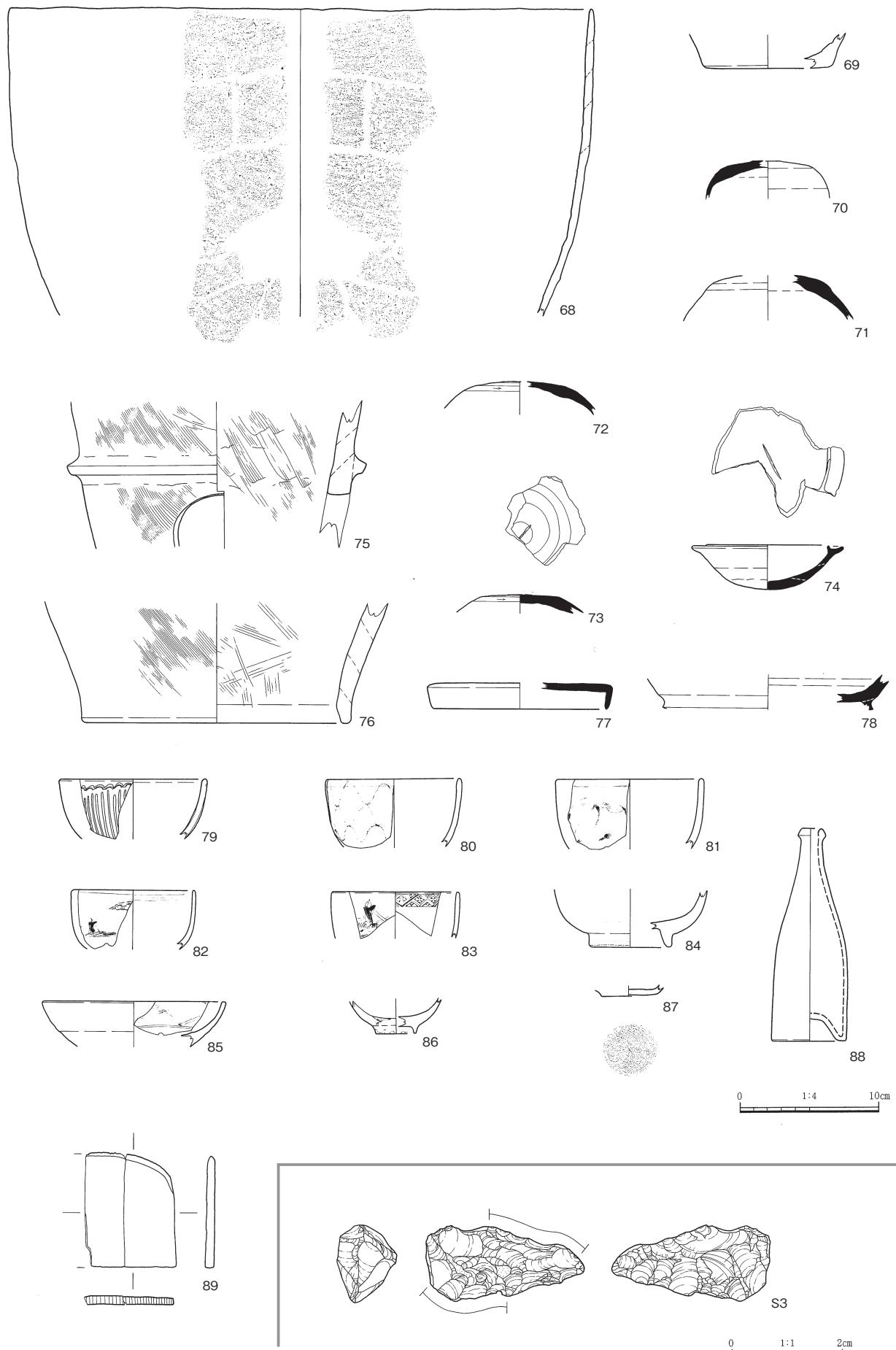


0 1:1 2cm



0 1:4 10cm

第35図 N区遺構外出土遺物



第36図 S区遺構外出土遺物

## 第4節 遺構外出土遺物

遺構外遺物は調査区の北側で集中して出土した。しかし埋土が浅いうえ、耕作地だったためか、ほとんどが小片あるいは著しく磨耗したもので、出土量に対して図示できたものは少なかった。

### N区の出土遺物（第35図）

51は甕の底部、52は器台である。53は壺の肩部、54は朝顔型埴輪、55・56は須恵器で、55は壺の頸部、56は壺の底部である。57～65は中世の遺物で、57は土師質の皿、59～61は土師質の塊、62・63は白磁の碗、64は青磁の碗、65は甕の胴部である。66は幅1.1cmの細長い樹皮で編込まれたものであるが、用途は不明である。67は銅銭「元豊通宝」で北宋（1078年）に鋳造されたものである。S 2は表採遺物で粘板岩の砥石である。

### S区の出土遺物（第36図）

68は縄文土器の鉢、69は弥生土器甕の底部、70～73は須恵器の坏蓋、74は須恵器坏身、75・76は埴輪、77は須恵器の蓋、78は須恵器の壺の底部である。79は青磁の碗、80～86は磁器で染付の碗および皿である。89は用途不明の板材で、S 3は黒曜石製の楔形石器である。87・88は表採遺物で、87は土師質の皿、88はガラス瓶である。

## 第5節 福成大坪上遺跡1区のまとめ

福成大坪上遺跡1区は、全体的に埋土が少なく、後世の開墾によって遺物・遺構とともに残りがあまり良くなかった。同じ調査区内であっても、現代の用水路を隔てただけで様相がことなるうえに、それぞれの区画の幅が狭く全体の状況をつかみ取ることができなかつた。しかしSD 3が現代の用水路とほぼ同じ経路をとり、さらにS区では基盤層とした層の下で氾濫層が確認されていることから、SD 3以前にも何らかの流路があった可能性も考えられる。N区とS区の様相の違い、自然科学分析の結果のN区とS区の環境の違いは（第6章 第1節参照）、これらの流路を境としての要因と考えられるのではないだろうか。福成大坪上遺跡では生活の痕跡がみられないことから、現在とあまり変わらない状況であったと考える。

第6表 遺物観察表 (SD3・5)

遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量 (cm)			焼成	色調	胎土	調整	備考
					口径	残存高	底径					
1	30	皿	土師質	SD 3	※8.3	2.0	3.8	良好	橙褐色	密 0.3~2mm砂粒含む	外面: ロクロ調整 底部: 糸切り 内面: 静止ナデ	
2	30	皿	土師質	SD 3	※13.2	2.6	-	良好	灰褐色	密	内外面共ロクロ調整	
3	30	碗	青磁	SD 3	-	2.0	-	良好	綠灰色	密 淡灰褐色	施釉	
4	30	壺	須恵器	SD 3	※11.9	8.5	-	良好	青灰色	密	内外面共ナデ	
5	30	蓋	陶器	SD 3	-	3.1	-	良好	淡灰白色	密 黄灰白色		
6	30	染付小碗	磁器	SD 3	-	3.5	2.6	良好	淡灰白色	密		
7	30	染付小碗	磁器	SD 3	-	5.0	4.8	良好	白色	密 淡灰白色		
8	30	染付小碗	磁器	SD 3	※7.9	4.7	-	良好	白色	密 白色		
9	30	染付小碗	磁器	SD 3	※7.8	4.1	2.7	良好	灰白色	密 淡灰白色		
10	30	碗	陶器	SD 3	※11.2	4.6	-	良好	綠灰色	密 淡灰褐色		
11	30	皿	磁器	SD 3	-	1.8	3.7	良好	灰白色	密 淡灰白色		
12	30	皿	陶器	SD 3	-	1.7	4.4	良好	綠灰色	密 淡黄灰白色		
13	30	染付皿	磁器	SD 3	-	2.0	6.4	良好	淡灰白色	密 淡灰白色		
14	30	紅皿	磁器	SD 3	※3.9	1.7	1.7	良好	白色	密		
15	30	染付皿	磁器	SD 3	-	1.9	4.9	良好	淡綠灰白色	密 淡灰白色		
16	30	染付皿	磁器	SD 3	※13.0	3.3	-	良好	淡灰白色	密 淡灰白色		
17	30	染付皿	磁器	SD 3	※12.6	3.0	-	良好	淡灰白色	密 淡灰白色		
18	30	瓶	陶器	SD 3	3.6	6.2	-	良好	茶色	密 淡灰褐色		
19	30	瓶	陶器	SD 3	3.0	3.9	-	良好	銹釉・鉄釉	密 灰色		
20	30	瓶	陶器	SD 3	-	6.8	4.1	良好	茶色	密 淡灰褐色		
21	30	小碗	磁器	SD 3	※6.6	3.1	-	良好	白色	密 灰白色		
22	30	皿	土師質	SD 3	-	1.1	4.3	良好	赤褐色～暗赤灰色	密	外面: ロクロ調整 底部: 糸切り 内面: 静止ナデ	
23	30	皿	土師質	SD 3	-	0.7	5.0	良好	黑茶色	密	外面: ロクロ調整 底部: 糸切り 内面: 静止ナデ	内面蠟付着
24	30	燈明皿	陶器	SD 3	※8.5	2.0	2.8	良好	茶色・銹釉	密 灰色	底部: 糸切り	
25	30	燈明皿	陶器	SD 3	5.8	2.8	3.5	良好	赤褐色～黒茶色	密	底部: 糸切り	
26	30	擂鉢	陶器	SD 3	※20.0	3.2	-	良好	綠灰色	密 灰色	施釉	
27	30	擂鉢	陶器	SD 3	※31.0	3.1	-	良好	黑茶色	密 赤褐色	施釉	
28	30	擂鉢	陶器	SD 3	※31.5	3.7	-	良好	赤褐色～黒茶色	密		
29	30	擂鉢	陶器	SD 3	※34.0	2.1	-	良好	茶色	密 黄灰白色	施釉	
30	30	擂鉢	陶器	SD 3	※29.3	4.6	-	良好	赤褐色	密 灰色～赤褐色		
31	30	焰烙	陶器	SD 3	※32.5	6.0	-	良好	黃灰白色	密	外面: ナデ、ケズリ 内面: ナデ	
32	30	焰烙	陶器	SD 3	※29.9	6.9	-	良好	灰褐色	密	外面: ロクロ調整、ケズリ 内面: ロクロ調整	
33	30	椀	漆器	SD 3	-	5.8	-				内外面共黒漆に朱漆	
34	30	椀	漆器	SD 3	-	6.6	-				内外面共黒漆	
35	30	椀	漆器	SD 3	-	3.2	-				内外面共黒漆に朱漆	
36	30	椀	漆器	SD 3	※8.8	3.6	-				内外面共黒漆に朱漆	
37	30	椀	漆器	SD 3	-	4.3	-				内外面共黒漆	
38	30	皿	漆器	SD 3	※10.5	2.4	-				内外面共朱漆	
50	28	器台	土師器	SD 5	※20.3	1.8	-	良好	灰茶色	密	外面: ナデ 内面: 調整不明	

第7表 遺物観察表 (N区遺構外)

遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量 (cm)			焼成	色調	胎土	調整	備考
					口径	残存高	底径					
51	35	甕	弥生土器	N区	-	2.4	9.3	良	灰茶色	密 0.5~3mm砂粒含む	調整不明	
52	35	器台	弥生土器	N区	※18.2	2.9	-	良好	灰褐色	密	外面: ナデ、ミガキ 内面: 調整不明	
53	35	壺	土師器	N区	-	2.9	-	良好	灰褐色	密 0.3~3mm砂粒含む	外面: ナデ 内面: ケズリ	
54	35	埴輪		N区	※30.2	5.7	-	良好	橙褐色	密	内外面共刷毛目 口縁端部: ナデ	
55	35	壺	須恵器	N区	-	4.3	-	良	淡灰色	密	内外面共ナデ	
56	35	壺	須恵器	N区	-	3.8	12.8	良好	灰色	密	外面: ケズリ、ナデ 内面: ナデ	
57	35	皿	土師器	N区	※9.6	1.8	-	良好	淡橙褐色	密	調整不明	
58	35	鉢	土師質	N区	※25.3	2.4	-	良好	暗灰色～黒茶色	密 0.3~1mm砂粒含む	外面: ナデ 内面: 刷毛目	
59	35	皿	土師質	N区	※11.9	2.6	-	良	黑茶色	密	内外面共ロクロ調整	
60	35	碗	土師質	N区	※11.3	4.1	6.7	やや良	淡灰褐色	密	内外面共ナデ	
61	35	碗	土師質	N区	-	2.0	7.9	良好	淡橙色	密	外面: ロクロ調整 底部: 糸切り 内面: 静止ナデ、ロクロ調整	
62	35	碗	白磁	N区	-	2.0	-	良好	白色	密	施釉	
63	35	碗	白磁	N区	※16.2	3.1	-	良好	白色	密 白色	施釉	
64	35	碗	青磁	N区	※13.9	3.5	-	良好	暗緑色	密	施釉	
65	35	甕	瓦質土器	N区	-	7.5	-	良	外) 灰褐色 内) 黒灰色	密		
66	35	編籠			-	-	-					元豊通宝
67	35	銅錢	銅		-	-	-					

第8表 遺物観察表 (S区遺構外)

遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量(cm)			焼成	色調	胎土	調整	備考
					口径	残存高	底径					
68	36	鉢	縄文土器	S区	※42	22.2	-	良	灰褐色	密 0.3~3.5mmの砂粒含む	外面: ヘラ削り 内面: ケズリ後ナデ	
69	36	甕	弥生土器	S区	-	2.5	8.8	やや良	褐色~黒茶色	密 0.5~2mmの砂粒含む	調整不明	
70	36	環	須恵器	S区	-	2.7	-	良好	青灰色	密 0.5~2mmの砂粒含む	内外面共ナデ	
71	36	環	須恵器	S区	-	3.3	-	良好	灰色~青灰色	密	内外面共ナデ	
72	36	環	須恵器	S区	-	2.4	-	良好	青灰色	密	外面: ヘラ削り、ナデ 内面: ナデ	
73	36	環	須恵器	S区	-	1.4	-	良好	灰色~青灰色	密	外面: ヘラ削り、ナデ 内面: ナデ	
74	36	環	須恵器	S区	※8.9	3.2	-	良好	青灰色	密	内外面共ナデ	ヘラ記号
75	36	埴輪		S区	-	10.6	-	良好	灰褐色	密 1mm前後の砂粒含む	内外面共刷毛目	
76	36	埴輪		S区	-	8.7	-	良好	灰褐色	密 0.3~1mmの砂粒含む	内外面共刷毛目 底部: ナデ	
77	36	蓋	須恵器	S区	※13	1.9	-	良好	灰色	密	内外面共ナデ	
78	36	壺	須恵器	S区	-	2.6	14.6	良好	青灰色	密	内外面共ナデ	
79	36	碗	青磁	S区	※10.4	4.4	-	良好	暗緑灰色	密 灰白色	施釉	
80	36	碗	磁器	S区	※9.6	5.0	-	良好	淡灰白色	密	施釉	
81	36	碗	磁器	S区	※10.3	5.1	-	良好	淡灰色	密 淡灰褐色	施釉	
82	36	碗	磁器	S区	※8.7	4.3	-	良好	淡灰白色	密	施釉	
83	36	碗	磁器	S区	※9.0	3.4	-	良好	白色	密	施釉	
84	36	碗	磁器	S区	-	4.1	5.8	良好	灰色	密	施釉	
85	36	皿	磁器	S区	※13.0	3.3	-	良好	淡灰白色	密	施釉	
86	36	小碗	磁器	S区	-	2.6	2.9	良好	淡灰白色	密	施釉	
87	36	皿	土師質	S区	-	0.8	4.0	良	灰褐色	密	外面: ロクロ調整 底部: 糸切り 内面: ナデ、ロクロ調整	
88	36	瓶	ガラス	S区	1.4	15.5	5.2		青緑色			

第9表 石器観察表

遺物番号	挿図番号	種別	地区	法量			石材
				長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	
S1	32	砥石	S D 3	4.4	4.7	1.1	緑色凝灰岩
S2	35	砥石	N区	10.3	4.2	3.2	粘板岩
S3	36	楔	S区	1.4	20.9	1.1	黒曜石

第10表 木製品観察表

遺物番号	挿図番号	種別	地区	法量		
				長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)
39	30	蓋	S D 3	5.8	8.9	3.1
40	30	不明	S D 3	11.1	11.0	1.6
41	30	蓋	S D 3	28.9	7.0	1.6
42	30	自在鍵	S D 3	13.6	29.4	4.3
43	30	板材	S D 3	20.8	3.7	0.8
44	30	板材	S D 3	9.3	4.5	0.7
45	32	板材	S D 3	15.3	15.7	1.5
46	32	板材	S D 3	25.6	12.8	1.8
47	32	板材	S D 3	37.3	6.0	2.9
48	32	下駄	S D 3	18.3	9.0	3.6
49	32	下駄	S D 3	21.5	7.6	3.0
89	36	板材	S区	8.4	6.7	0.7

# 第5章 福成大坪上遺跡2・3区の調査

## 第1節 調査の経過と方法

### 1. 調査の経過

福成大坪上遺跡2・3区の発掘調査は平成24年度に実施した。

調査にあたっては、排土置場の確保の必要性から調査区を2分し、まず、北東側の2区の調査から着手した。

2区の調査は5月16日に着手した。5月16日から重機による表土掘削を開始し、5月21日からは重機による表土掘削と並行して発掘作業員の稼働による包含層の掘削、遺構の検出作業を行った。

2区では遺構面が3面存在した（上層から第1～第3遺構面とする）。

第1遺構面では溝状遺構2条を検出し、5月31日に第1遺構面の調査が終了した。

6月4日からは第2遺構面の検出作業に着手した。第2遺構面では溝状遺構3条、畦畔2基を検出し、7月10日に第2遺構面の調査が終了した。

7月12日からは第3遺構面の検出作業に着手した。第3遺構面では溝状遺構3条、土坑2基を検出し、7月17日には第3遺構面の調査が終了した。その後、下層の遺構、遺物の存在を確認するために7月19日に調査区の南西側にトレンチ2か所（トレンチ3・4）を設定して調査を行ったが、遺構、遺物とも検出できなかったため、7月19日で2区の調査を終了した。

3区の調査は7月12日に着手した。2区の調査と並行して7月12日から重機による表土掘削を開始し、7月17日からは発掘作業員の稼働による包含層の掘削、遺構の検出作業を行った。

3区では遺構面が2面存在した。（2区の遺構面との対応関係から上層面を第2遺構面、下層面を第3遺構面とする。）

第2遺構面では溝状遺構11条、石列2基を検出し、8月17日に第2遺構面の調査が終了した。

7月12日からは第3遺構面の検出作業に着手した。第3遺構面では溝状遺構16条と土坑4基を検出し、9月24日に第3遺構面の調査が終了した。その後、下層の遺構、遺物の存在を確認するために9月25日に調査区の南西側にトレンチを8か所設定し、調査終了期間が迫っていることもあり、重機の掘削によって調査を行ったが、遺構、遺物とも検出できなかったため、9月25日に3区の調査を終了し、すべての調査が完了した。

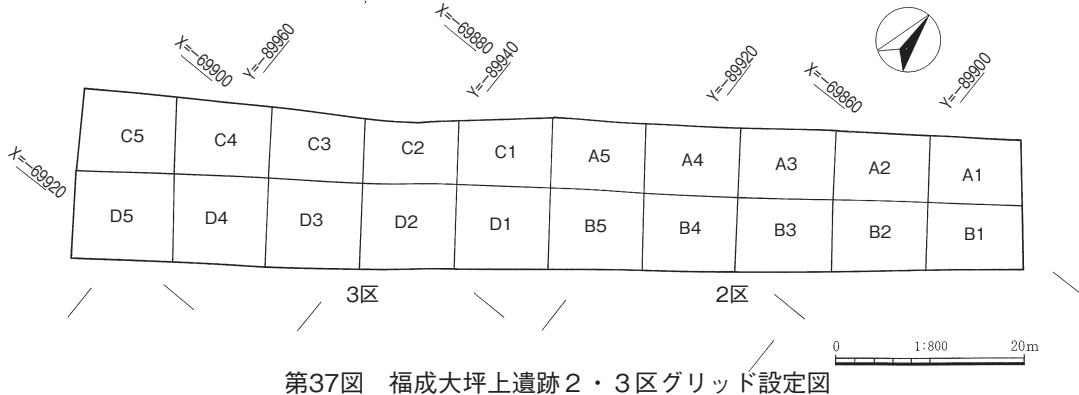
### 2. 調査の方法

福成大坪上遺跡2・3区は、同遺跡1区の南西に隣接する調査区で、現地表面の標高は22.0～22.8mである。

遺構の検出にあたっては、南部町教育委員会が実施した試掘調査の結果から、当初は遺構面が1面のみであると判断されたが、調査の途中段階で、2区では3面（上層から第1～第3遺構面とする。）、3区では2面（2区の遺構面との対応関係から上層面を第2遺構面、下層面を第3遺構面とする。）の遺構面を確認したことから、各遺構面まで人力にて順次包含層を掘削して遺構を検出した。

検出した遺構は、原則としてトータルステーションを用いて記録、図化し、必要に応じて実測した。

出土遺物は、包含層から出土したものは、調査区の主軸に沿うように10m画のグリッドを設定し（第



第37図 福成大坪上遺跡2・3区グリッド設定図

37図)、層位及びグリッド毎に一括して取り上げた。グリッドには2区では北西から南東にかけては順にA、Bのアルファベットを、北東から南西にかけては順に1～5のアラビア数字を付した。また、3区では北西から南東にかけては順にC、Dのアルファベットを、北東から南西にかけては順に1～5のアラビア数字を付した。

遺構内から出土した遺物は、一括して取り上げたものもあるが、時期判断が可能なものや特徴的な遺物については、出土位置を記録して取り上げた。

現地での写真撮影は35mm判カメラを用い、モノクロフィルムとカラーポジフィルムで撮影し、デジタルカメラで補足撮影した。

## 第2節 調査区内の層序

福成大坪上遺跡は、法勝寺川右岸にあり、要害山（標高329m）から北へ派生する支丘陵である善棚山（標高131m）の北西側の裾部の標高22～23mに位置する。調査地の現況は水田で、現地形は南西から北東へ緩やかに傾斜している。

土層堆積の確認は、2区・3区とも南西側と北西側の壁面を利用して行った。堆積環境は比較的安定していたと考えられ、現水田耕作土及び圃場整備時の造成土以下、地山までほぼ水平に堆積している。

地山の地形は3区から2区の中央付近にかけては南から北へ緩やかに傾斜しているが、2区の北東側では谷状地形となっており、トレンチ1の南西付近から急激に落ち込み、さらに北東へ下降傾斜している。

なお、3区では、圃場整備以前には南西から北東へ傾斜する3段の棚田状の水田となっていた（本節では、南西から北東へ向かって水田A・水田B・水田Cとする）。

以下、調査区毎に各層の概要を述べる。なお、土質、土色の層名をアラビア数字で表し、ローマ数字を付した層番号は、土層の性格等を加味した層名であり、2区、3区とも相互に対応する。

### 2 区（第38図）

I層：I層（2層）は灰褐色を呈する現水田耕作土で、大部分は工事によって削平されており、調査区の北東側約1／5の範囲にのみ残存している。層厚は13～35cmを測る。

II層：II層は2区では工事によって削平されており、残存していない。

III層：III層（3～6・11層）は圃場整備以前の旧水田耕作土及び水田基盤土である。

上層からIII-1層（3層）、III-2層（4～6層）、III-3層（11層）の3面の水田の存在が想定されるが、いずれも畦畔は確認できなかった。

III-1層は灰褐色を呈し、調査区全体に堆積する。層厚は6～20cmを測る。

III-2層は主に耕作土である灰色土（5層）とその基盤層である橙灰色土（6層）の2層からなり、調査区の北東端ではIII-1層に削平されているが、調査区のほぼ全域に堆積している。層厚は6～25cmを測る。なお、III-2層の6層上面を第1遺構面として遺構を検出した。

III-3層は灰褐色を呈し、調査区全体に堆積する。層厚は4～20cmを測る。当層においてプラント・オパール分析と花粉分析を実施したところ、水田が営まれていた可能性が指摘され、近接してソバ属とアブラナ科などの畑作が行われていたという結果を得た。

III層からは弥生時代から近世の遺物が出土した。

VI層：VI層（17・18層）は暗灰色及び淡黒灰色を呈する粘質土層で、調査区全体に堆積する。

層厚は4～17cmを測る。畦畔2の南西側では、III-3層との間に12～15層の間層が認められる。

17層においてプラント・オパール分析と花粉分析を実施したところ、水田が営まれていた可能性が指摘され、上層のIII-3層と同様に近接してソバ属とアブラナ科などの畑作が行われていたという結果を得た。

VI層からは弥生時代から中世の遺物が出土した。

VII層：VII層（31・32層）は暗灰色を呈する粘質土層で、調査区の中央部ではVI層に削平されて残存していない。層厚は4～20cmを測る。また、調査区の北東側ではVI層との間に淡黒灰色粘質土（30層）の間層が認められる。

31層においてプラント・オパール分析と花粉分析を実施したところ、雑草の多い水田あるいは湿潤な草地であったという結果を得た。

VII層からは弥生時代から古墳時代の遺物が出土した。

なお、当層上面を第2遺構面として遺構を検出した。

VIII層：VIII層（34層）は黒色を呈する粘土層で、北東へ向かって傾斜堆積している。完掘はしていないが、層厚は20cm以上を測る。

VIII層からは遺物は出土しなかった。

IX層：IX層（40層）は暗灰色を呈する粘土層で、北東側はVIII層が傾斜堆積して当層を削平しているために、調査区の南西側のみに認められる。層厚は10～15cmを測る。

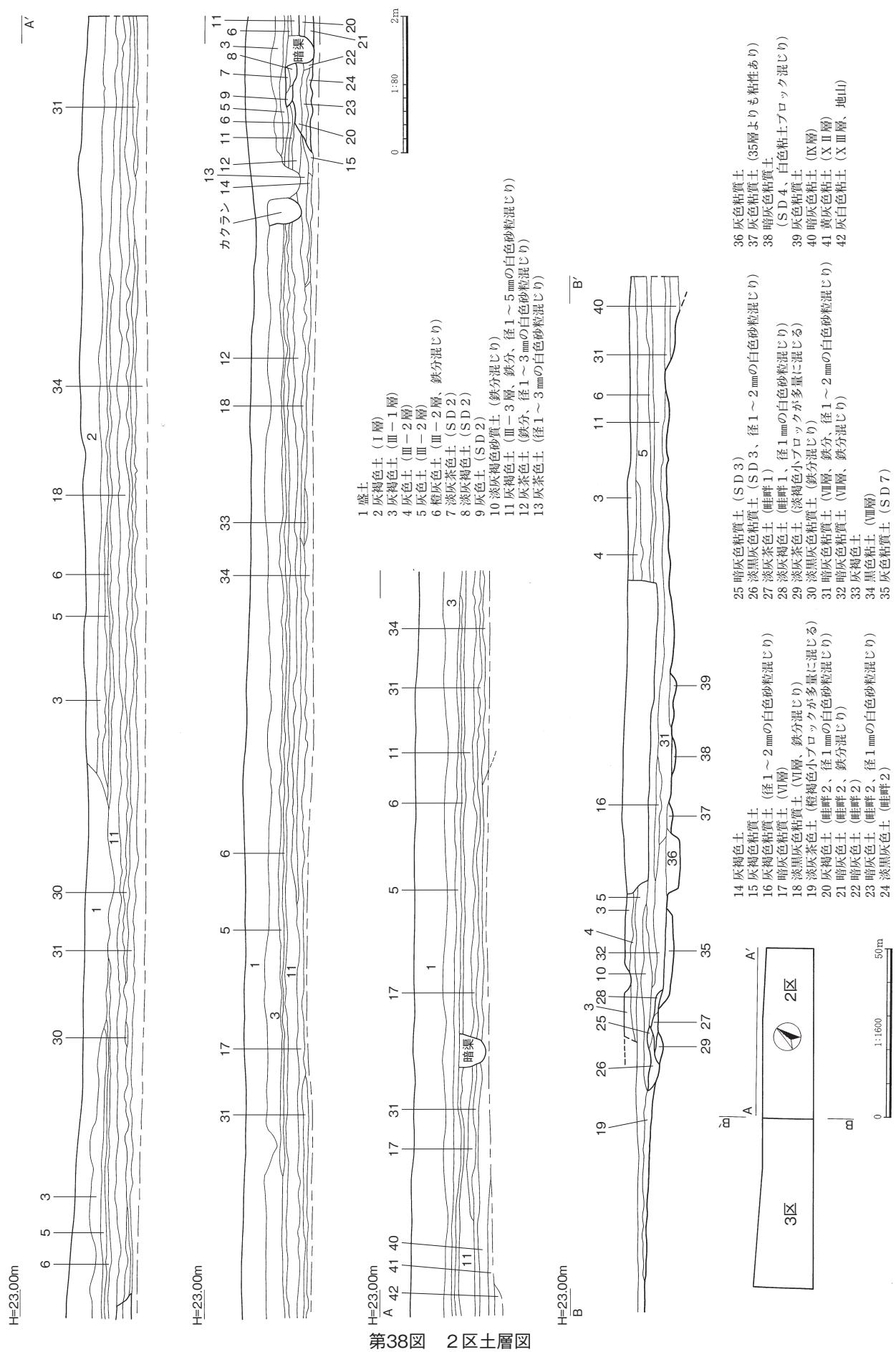
なお、当層においてプラント・オパール分析と花粉分析を実施したところ、上層のVII層と同様に雑草の多い水田あるいは湿潤な草地であったという結果を得た。

IX層からは遺物は出土しなかった。

X II層：X II層（41層）は黄灰色を呈する粘土層で、当層直下が地山（X III層）となっている。

層厚は8～9cmを測る。

X II層からは遺物は出土しなかった。



XⅢ層：XⅢ層（42層）は地山の灰白色粘土層である。調査区の北東側は谷状地形となっており、当層上面の標高は、調査区の西端で21.55m、トレンチ2で21.3m、トレンチ1で20.25mとなっており、トレンチ1の南西付近から急激に落ち込み、さらに北東へ下降傾斜している。

### 3 区（第39図）

I層：I層（1層）は淡茶灰褐色を呈する現水田耕作土で、北西側は工事によって削平されている。層厚は6～18cmを測る。

II層：II層（2～9層）は圃場整備に伴う造成土で、調査区の南西側約5m以外は調査区のほぼ全域に造成が行われている。

III層：III層（10～13層）は圃場整備以前の水田Cの耕作土及び水田基盤土である。水田Cは調査区の北東端から約10.5m付近で段切りしており、2区と合わせると長さは59.5m以上を測る。

上層からIII-1層（10層）、III-2層（11・12層）、III-3層（13層）の3面の水田の存在が想定されるが、いずれも畦畔は確認できなかった。

III-1層は灰褐色を呈し、層厚は12～28cmを測る。

III-2層は耕作土である灰色土（11層）とその基盤層である橙灰色土（12層）の2層からなり、層厚は10～16cmを測る。

III-3層は灰褐色を呈し、層厚は10～22cmを測る。

III層からは弥生時代から近世の遺物が出土した。

IV層：IV層（14～19層）は圃場整備以前の水田Bの耕作土である。水田Bは調査区の南西端から約4.5m付近で段切りしており、北東側は水田Cに段切りされている。水田Bの長さは35.6mを測る。

上層からIV-1層（14・15層）、IV-2層（16～19層）の2面の水田の存在が想定されるが、いずれも畦畔は確認できなかった。層厚はIV-1層が16～45cm、IV-2層が15～33cmを測る。

IV層からは弥生時代から近世の遺物が出土した。

V層：V層（20～25層）は圃場整備以前の水田Aの耕作土及び水田基盤土である。水田Aは調査区の南西端に位置し、北東側は水田Bに段切りされている。水田Aの長さは4.2m以上を測る。

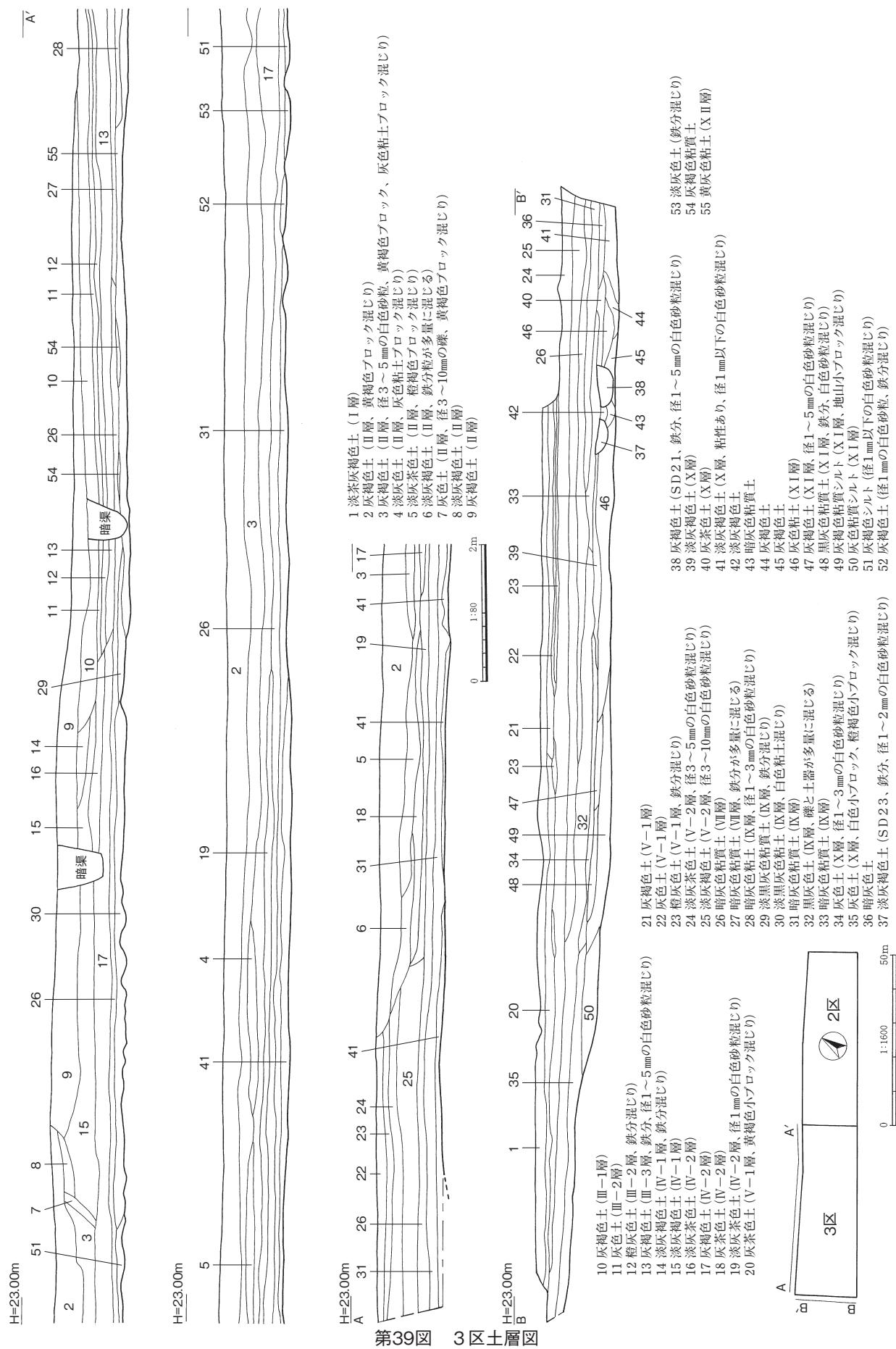
上層からV-1層（20～23層）、V-2層（24・25層）の2面の水田の存在が想定されるが、いずれも畦畔は確認できなかった。

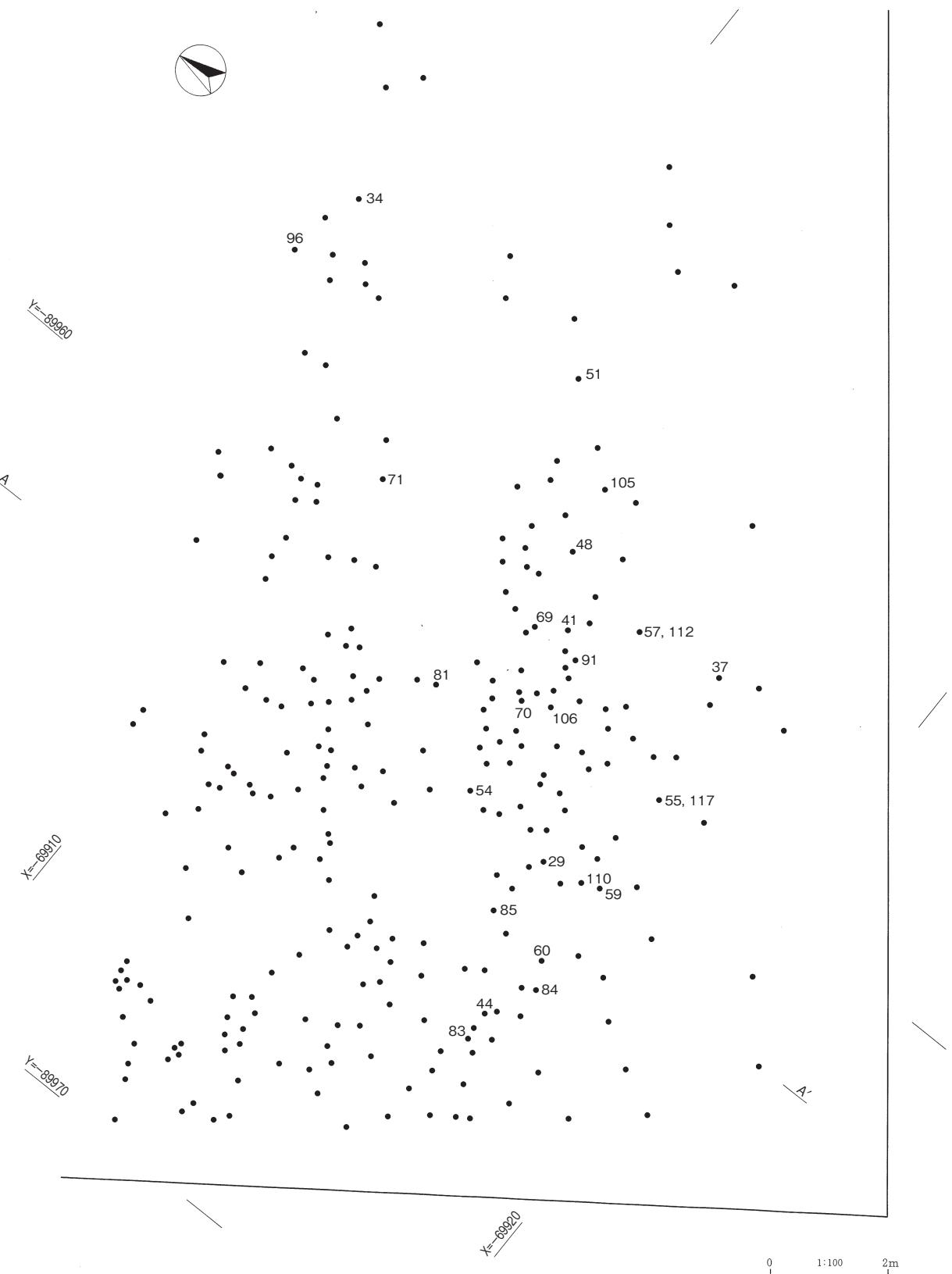
V-1層は主に耕作土である灰色土（22層）とその基盤層である橙灰色土（23層）の2層からなり、層厚は4～25cmを測る。

V-2層は淡灰茶色土（24層）と淡灰褐色土（25層）からなり、層厚は5～46cmを測る。

V層からは弥生時代から近世の遺物が出土した。

VII層：VII層（26・27層）は暗灰色を呈する粘質土層で、調査区全体に堆積する。層厚は5～14cmを測る。





第40図 3区南西側IX層出土遺物分布図

VII層からは弥生時代から古墳時代の遺物が出土した。

なお、当層上面を第2遺構面として遺構を検出した。

X層：X層（28～33層）は暗灰色及び淡黒灰色系の粘質土を主体として、調査区全体に断続的に堆積している。層厚は5～24cmを測る。

30層と下層のXⅢ層（地山）との境が波打っており、さらに、XⅢ層が火炎状に30層に入り込んでいる。これは地震による変形と考えられる。

X層からは縄文時代から古墳時代の遺物が出土した。特に調査区南西側の31～33層からは多量の遺物が流れ込んだ状態で出土した（第40図 図版37、38）。

X層：X層（34・35・39～41層）は灰色及び淡灰褐色系を呈し、調査区の南西側に堆積する。

層厚は4～18cmを測り、調査区の南西端以外では当層直下が地山（XⅢ層）となっている。

X層からは遺物は出土しなかった。

なお、調査区の南西側では、当層上面を第3遺構面として遺構を検出した。

XⅠ層：XⅠ層（46～50層）は灰色及び灰褐色を呈する粘質土層で、調査区の南西端に堆積する。

層厚は15～27cmを測り、当層直下は地山（XⅢ層）となっている。

XⅠ層からは遺物は出土しなかった。

XⅡ層：XⅡ層（55層）は黄灰色を呈する粘土層で、調査区の北東側に堆積する。層厚は8～15cmを測り、当層直下は地山（XⅢ層）となっている。

XⅡ層からは遺物は出土しなかった。

なお、調査区の北東側では当層上面を第3遺構面として遺構を検出した。

XⅢ層：XⅢ層は地山の灰白色粘土層で、調査区の南西端では浅い谷状地形となっている。また、調査区の中央付近ではVII層との間に51～53層の間層が認められる。

なお、調査区の中央付近では当層上面を第3遺構面として遺構を検出した。

### 第3節 検出した遺構と遺物

#### 1. 第3遺構面の調査

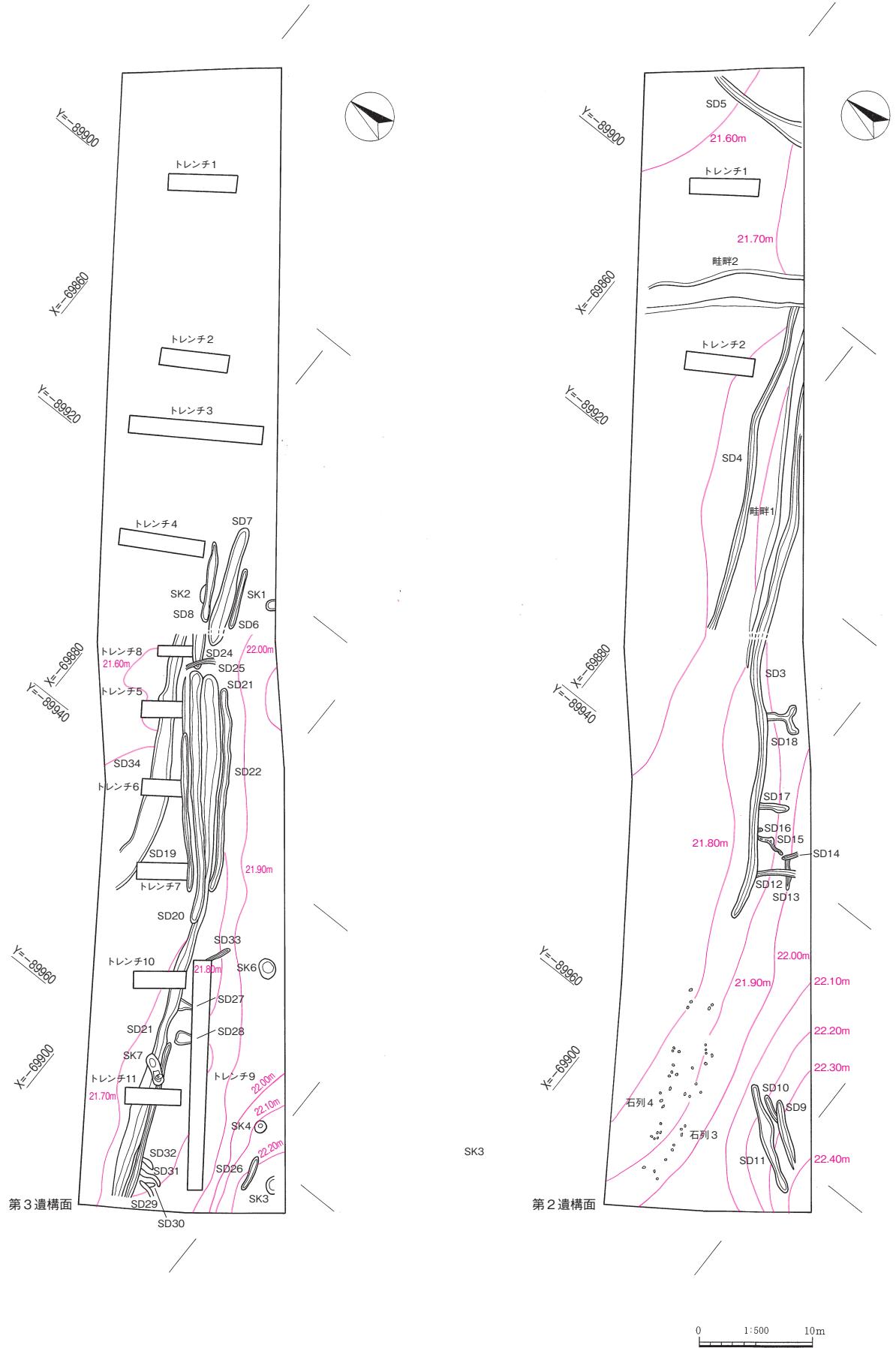
##### (1) 概要

第3遺構面は、2区の南西側から3区の北東側にかけてはXⅡ層及びXⅢ層、3区の中央付近ではXⅢ層、3区の南西側ではX層の各層上面を遺構面とする。

2区の中央やや南西寄りから北東側にかけてはXⅢ層が北東へ向かって下降傾斜している。トレチを4ヶ所（トレチ1～4）設定し、遺構、遺物の確認を行ったが、XⅢ層の上面では遺構は検出されず、その直上層からも遺物が出土していないことから、第3遺構面の検出は、3区全体と2区の南西側の遺構検出部分のみに留めた。

3区での第3遺構面の微地形は、3区の南西端では南東から北西へなだらかな尾根状地形が派生し、これ以外は南東から北西へ下降する緩斜面となっている。尾根状地形部の標高は最高所で22.24m、最低所で21.80m、3区で最も標高の低い北端の標高は21.55mである。

第3遺構面では溝状遺構19基、陷穴1基、土坑5基を検出した。SD6～8、SD19～24、SD34は尾根状地形の裾部に沿うように南西～北東方向にのび、同位置での複数回の掘り替えが認めら



第41図 第2・第3遺構面検出遺構配置図

れる。また、調査区の南東側の壁際には陥穴1基と土坑3基が直線状に並んでいる。

これらの遺構の時期は、SK3は縄文時代、SK7は縄文時代後期、SD26~33、SK1、4、6は弥生時代前期、SD6~8、19~25は弥生時代中期後葉頃に帰属すると考えられる。

## (2) 溝状遺構

### SD6 (第42図)

SD6は2区の南西端に位置する。南西—北東方向に直線状にのび、北西にはSD7とSD8が平行してのびている。また、走向方向と位置関係からSD22との関連が窺える。

検出した長さは5.4m、幅0.4~0.45m、検出面からの深さ5~8cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南西端が北東端よりも3cm高いだけで、ほぼ水平である。

埋土は灰褐色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土しなかったため、時期比定は困難であるが、SD22との関連性から弥生時代中期後葉頃と推定される。

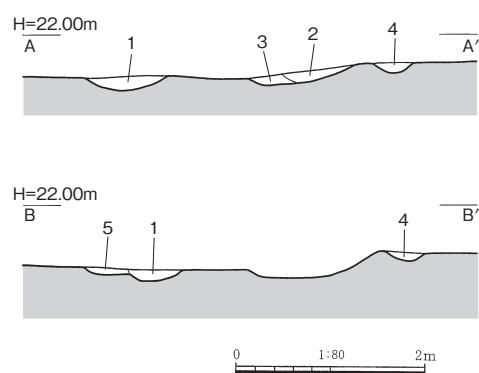
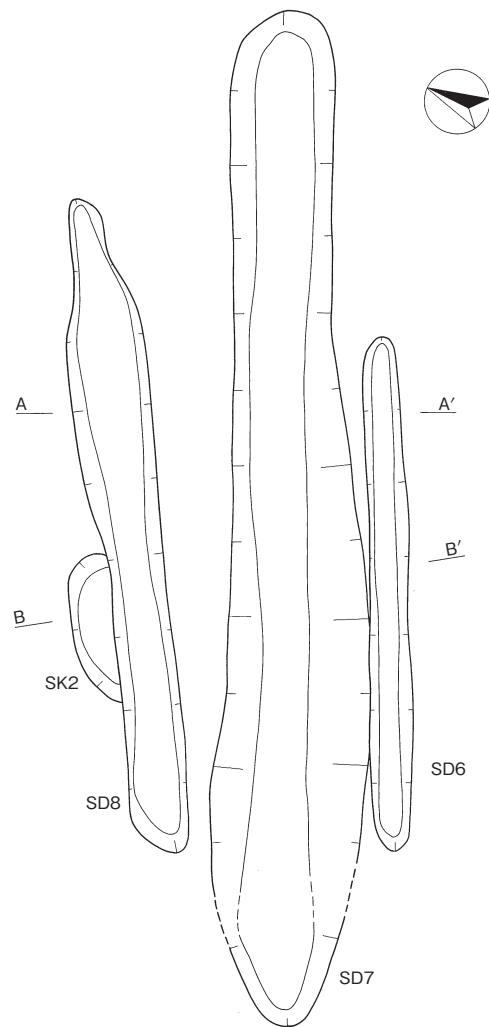
### SD7 (第42図)

SD7は2区の南西端に位置する。南西—北東方向に直線状にのび、北西にはSD8、南東にはSD6が平行してのびている。また、走向方向と位置関係からSD21との関連が窺える。

検出した長さは10.7m、幅1.0~1.6m、検出面からの深さ7~11cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南西端が北東端より1cm高いだけで、ほぼ水平である。

埋土は灰褐色土(2層)と灰色粘質シルト(3層)の2層に分層でき、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土しなかったため、時期比定は困難であるが、SD21との関連性から弥生時代中期後葉頃と推定される。



- 1 暗灰色土(SD8)
- 2 灰褐色土(SD7)
- 3 灰色粘質シルト(SD7)
- 4 灰褐色土(SD6)
- 5 淡灰褐色土(SK2)

第42図 SD6・7・8

### S D 8 (第42図)

S D 8は2区の南西端に位置する。南西—北東方向に直線状にのび、南東にはS D 6とS D 7が平行してのびている。また、S K 2を切っており、走向方向と位置関係からS D 20、24との関連が窺える。

検出した長さは7.0m、幅0.35～0.85m、検出面からの深さ7～10cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南西端が北東端より1cm高いだけで、ほぼ水平である。

埋土は暗灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土しなかったため、時期比定は困難であるが、S D 20との関連性から弥生時代中期後葉頃と推定される。

### S D 19 (第43、44図)

S D 19は3区の中央から北東側にかけて位置する。南西—北東方向に直線状にのび、南東にはS D 20、21、22が平行してのびている。

検出した長さは14.0m、幅0.3～0.5m、検出面からの深さ8～10cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南西端が北東端より4cm高く、南西から北東へ緩やかに傾斜する。

埋土は灰褐色粘質土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

遺物は弥生土器と石器が出土したが、ほとんどが細片で、このうち2点を図示した。

1は弥生土器の底部で、外面にはミガキ調整が施されている。

S 1は黒曜石製の石鏸で、基部が欠損する。

本遺構の時期は、出土遺物とS D 20、21との位置関係から弥生時代中期後葉と考えられる。

### S D 20 (第43、44図)

S D 20は3区の中央から北東側にかけて位置する。南西—北東方向に直線状にのび、北西にはS D 19、南東にはS D 21とS D 22が平行してのびており、S D 21を切っている。また、走向方向と位置関係からS D 8との関連が窺える。

検出した長さは22.2m、幅0.5～0.9m、検出面からの深さ20～35cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南西端が北東端より1cm高いだけで、ほぼ水平である。

埋土は黒灰色系粘質土と灰褐色系土が互層状に堆積し、埋土の堆積状況からは流水の痕跡は窺えない。

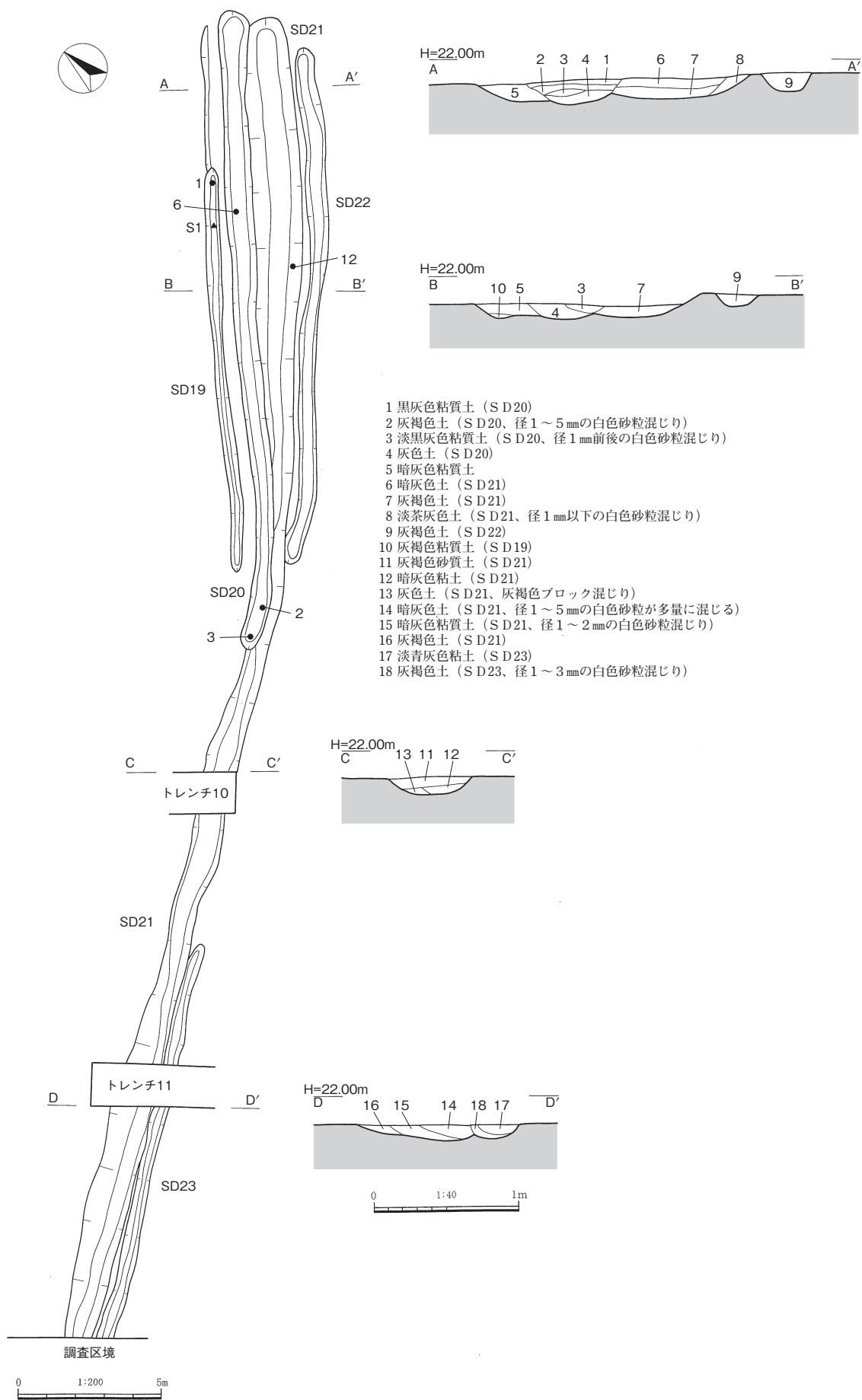
遺物は弥生土器と黒曜石剥片が出土したが、ほとんどが細片で、このうち5点を図示した。

2～6は弥生土器である。2は壺の頸部で、外面にはハケ調整とハケ状工具による刺突が施されている。3は甕で、口縁端部を上下に僅かにつまみ出している。4～6は底部で、6の外面にはミガキ調整が施されている。

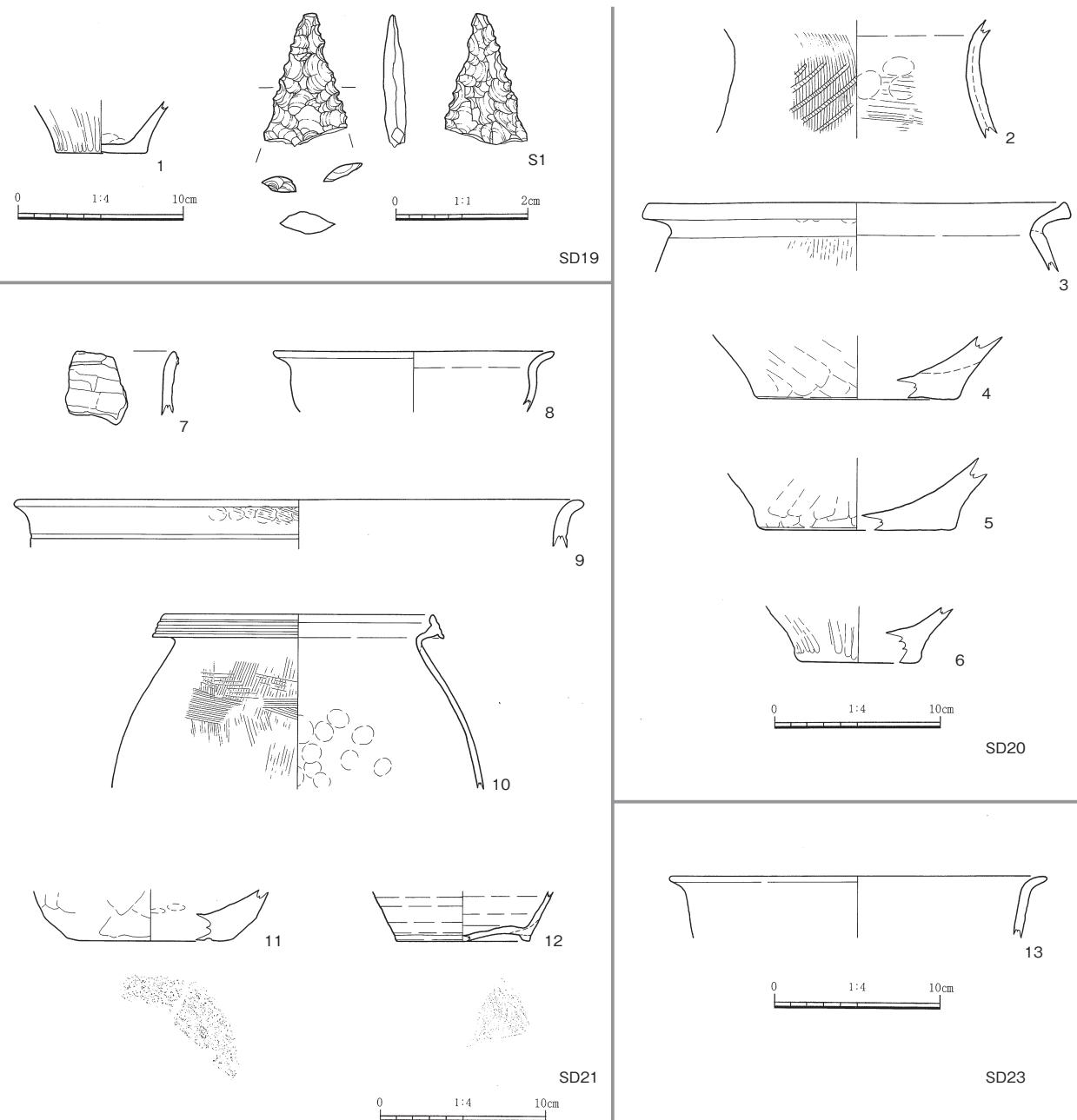
本遺構の時期は、S D 21との切合関係から弥生時代中期後葉頃と考えられる。

### S D 21 (第43、44図)

S D 21は3区を縦断するように位置する。南西—北東方向にやや湾曲してのび、南西側はさらに調査区外へのびている。北西にはS D 19とS D 20、南東にはS D 22が平行してのびており、S D 20に切られている。また、走向方向と位置関係からS D 7との関連が窺える。



第43図 S D19~23



第44図 SD19・20・21・23出土遺物

検出した長さは46.8m、幅0.8~1.7m、検出面からの深さ20~30cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南西端が北東端より17cm高く、南西から北東へ傾斜する。

埋土は北東側と南西側とでは異なり、北東側のA-A' とB-B' ラインでは、暗灰色土（6層）、灰褐色土（7層）、淡茶灰色土（8層）の3層に分層でき、南西側のC-C' とD-D' ラインでは、3層に分層でき、上層は砂質土あるいは白色砂粒が多量に混じり、下層には粘土あるいは粘質土が堆積している。埋土の堆積状況からは流水の痕跡は窺えない。

遺物は弥生土器が出土したが、ほとんどが細片で、このうち6点を図示した。

7は突帶文土器である。口縁端部からやや下がった位置に突帶がつくもので、突帶には刻目は認められない。

8~11は弥生土器で、8~10は甕である。8、9は口縁端部が外反し、9の外面には1条のヘラ

描沈線が巡っている。10は口縁端部を上下につまみ出したもので、口縁端部には3条の凹線が巡っている。11は底部で、底部外面には糀状の圧痕が認められる。

12は土師質土器の坏身で、上層から混入したと考えられる。底部外面には回転糸切りが施されている。

本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期後葉と考えられる。

#### S D22（第43図）

S D22は3区の中央から北東側にかけて位置する。南西—北東方向に直線状にのび、北西にはS D19、20、21が平行してのびている。また、走向方向と位置関係からS D6との関連が窺える。

検出した長さは18.0m、幅0.45m、検出面からの深さ7~14cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南西端が北東端より5cm高く、南西から北東へ傾斜する。

埋土は灰褐色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土しなかったため、時期比定は困難であるが、S D19~21との位置関係から弥生時代中期後葉頃と考えられる。

#### S D23（第43、44図）

S D23は3区の南西側に位置する。南西—北東方向に直線状にのび、S D21を切っている。

検出した長さは14.3m、幅0.4~0.75m、検出面からの深さ8~14cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南西端が北東端より1cm高いだけで、ほぼ水平である。

埋土は2層に分層でき、上層は淡青灰色粘土（17層）、下層は灰褐色土（18層）となっており、流水の痕跡は窺えない。

遺物は弥生土器と黒曜石剥片が出土したが、ほとんどが細片で、このうち1点を図示した。

13は弥生土器の甕で、口縁端部が外反する。

本遺構の時期は、S D21との切合関係から弥生時代中期後葉頃と考えられる。

#### S D24（第45図）

S D24は3区の北東端に位置する。南西—北東方向に直線状にのび、さらに北東側は2区にのびると考えられるが、2区では検出できなかった。また、南西側はS D25に切られており、走行方向と位置関係から、S D8、20との関連が窺える。

検出した長さは3.0m、幅0.7~1.1m、検出面からの深さ5~8cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南西端が北東端より6cm高く、南西から北東へ傾斜する。

埋土は淡青色粘土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土しなかったため、時期比定は困難であるが、S D20との関連性から弥生時代中期後葉頃と推定される。

#### S D25（第45図）

S D25は3区の北東端に位置し、南東—北西方向にやや湾曲してのび、S D24を切っている。

検出した長さは2.7m、幅0.3~0.4m、検出面からの深さ6cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面

の標高は南東端が北西端より 6 cm 高く、南東から北西へ傾斜する。

埋土は灰褐色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土しなかったため、時期比定は困難であるが、SD24との切合関係から弥生時代中期後葉頃と推定される。

#### SD26 (第46図)

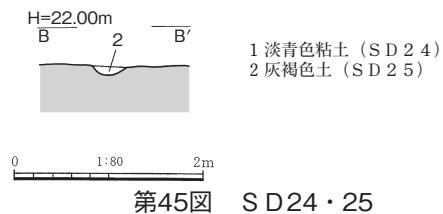
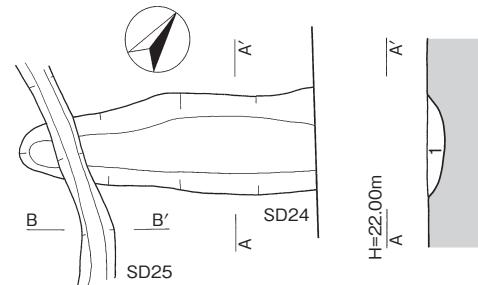
SD26は3区の南西端に位置し、東西方向に直線状にのびる。

検出した長さは3.0 m、幅0.35~0.55 m、検出面からの深さ12~14 cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は西端が東端より7 cm高い、西から東へ傾斜する。

埋土は灰褐色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

遺物は弥生土器が出土したが、いずれも細片であるため図示できなかった。

本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期と考えられる。



第45図 SD24・25

#### SD27 (第47、48図)

SD27は3区の中央やや南西寄りに位置する。南東から北西に向かってハ字状に広がり、北西側はSD21に切られ、南東側はトレンチ9によって搅乱を受けている。

検出した長さは1.15 m、幅0.4~1.0 m、検出面からの深さ5~8 cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南東端が北西端より2 cm高いだけで、ほぼ水平である。

埋土は暗灰色粘土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

遺物は弥生土器が出土したが、ほとんどが細片で、このうち1点を図示した。

14は弥生土器の甕で、口縁部が外反する。

本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期と考えられる。

#### SD28 (第49、50図)

SD28は3区の南西側に位置する。南東側はトレンチ9によって搅乱を受けているが、平面形態は逆台形状を呈し、形態的に土坑となる可能性もあるが、ここでは溝状遺構として報告する。

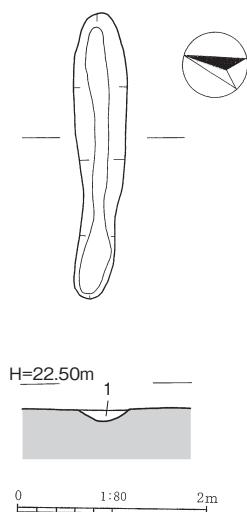
南東-北西方向に直線状にのび、検出した長さは0.9 m、幅0.7~1.2 m、検出面からの深さ3~6 cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南東端が北西端より1 cm高いだけで、ほぼ水平である。

埋土は暗灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

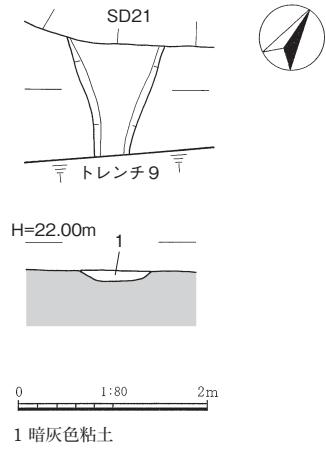
遺物は弥生土器が出土したが、ほとんどが細片で、このうち1点を図示した。

15は弥生土器の甕で、口縁部が外反する。

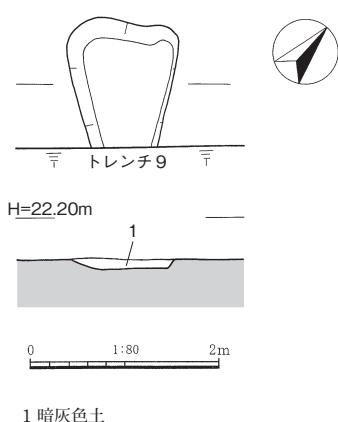
本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期と考えられる。



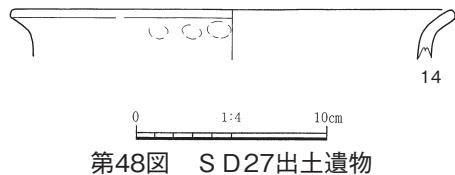
第46図 SD 26



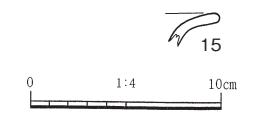
第47図 SD 27



第49図 SD 28



第48図 SD 27出土遺物



第50図 SD 28出土遺物

### S D 29 (第51図)

S D 29は3区の南西端に位置する。S D 30を切っており、南北方向にやや湾曲してのび、南側はさらに調査区外へのびている。

検出した長さは0.9m、幅0.3~0.35m、検出面からの深さ5cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南端が北端より15cm高く、南から北へ傾斜する。

埋土は灰褐色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

遺物は弥生土器が出土したが、いずれも細片であるため図示できなかった。

本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期と考えられる。

### S D 30 (第51図)

S D 30は3区の南西端に位置する。南東ー北西方向に直線状にのび、S D 29に切られている。

検出した長さは1.7m、幅0.2~0.4m、検出面からの深さ4cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は両端とも同じで、ほぼ水平である。

埋土は灰褐色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

遺物は弥生土器が出土したが、いずれも細片であるため図示できなかった。

本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期と考えられる。

### S D 31 (第51図)

S D 31は3区の南西端に位置する。南北方向にS字状に蛇行し、北側はS D 23に切られている。

検出した長さは2.4m、幅0.15~0.45m、検出面からの深さ5~10cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南端が北端より3cm高く、南から北へ緩やかに傾斜する。

埋土は暗灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

遺物は弥生土器が出土したが、いずれも細片であるため図示できなかった。

本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期と考えられる。

#### S D32 (第51図)

S D32は3区の南西端に位置する。南北方向に直線状にのび、北側はS D23に切られている。

検出した長さは1.2m、幅0.3~0.5m、検出面からの深さ4cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南端が北端より2cm高いだけで、ほぼ水平である。

埋土は灰褐色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土しなかったため、時期比定は困難であるが、S D29~31との位置関係から弥生時代前期と推定される。

#### S D33 (第52図)

S D33は3区のほぼ中央に位置する。南東ー北西方向に直線状にのび、北西側はトレンチ9によって搅乱を受けている。

検出した長さは2.2m、幅0.15~0.3m、検出面からの深さ7cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南東端が北西端より14cm高く、南東から北西へ傾斜する。

埋土は淡灰褐色砂質土の単層で、流水があった可能性がある。

遺物は黒曜石剥片が出土したが、いずれも細片であるため図示できなかった。

本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期と考えられる。

#### S D34 (第53図)

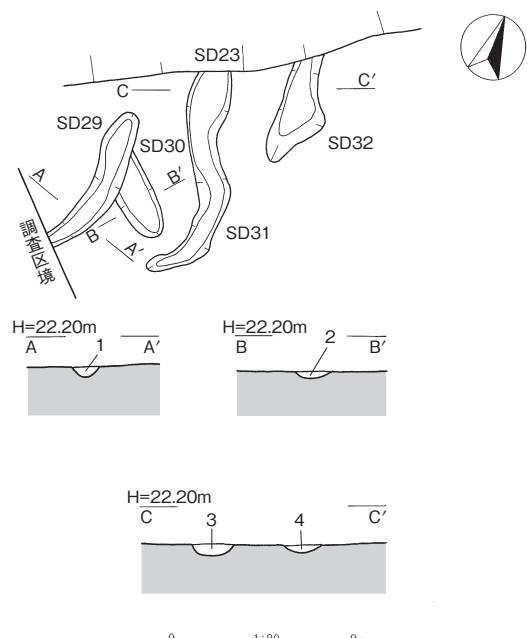
S D34は3区の中央から北東側にかけて位置する。

南西ー北東方向に直線状にのびるが、南西側は湾曲し、さらに調査区外へのびている。北東側はさらに2区にのびると考えられるが、2区では検出できなかった。

検出した長さは23.3m、幅0.35~0.9m、検出面からの深さ15~25cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南西端が北東端より2cm高いだけで、ほぼ水平である。

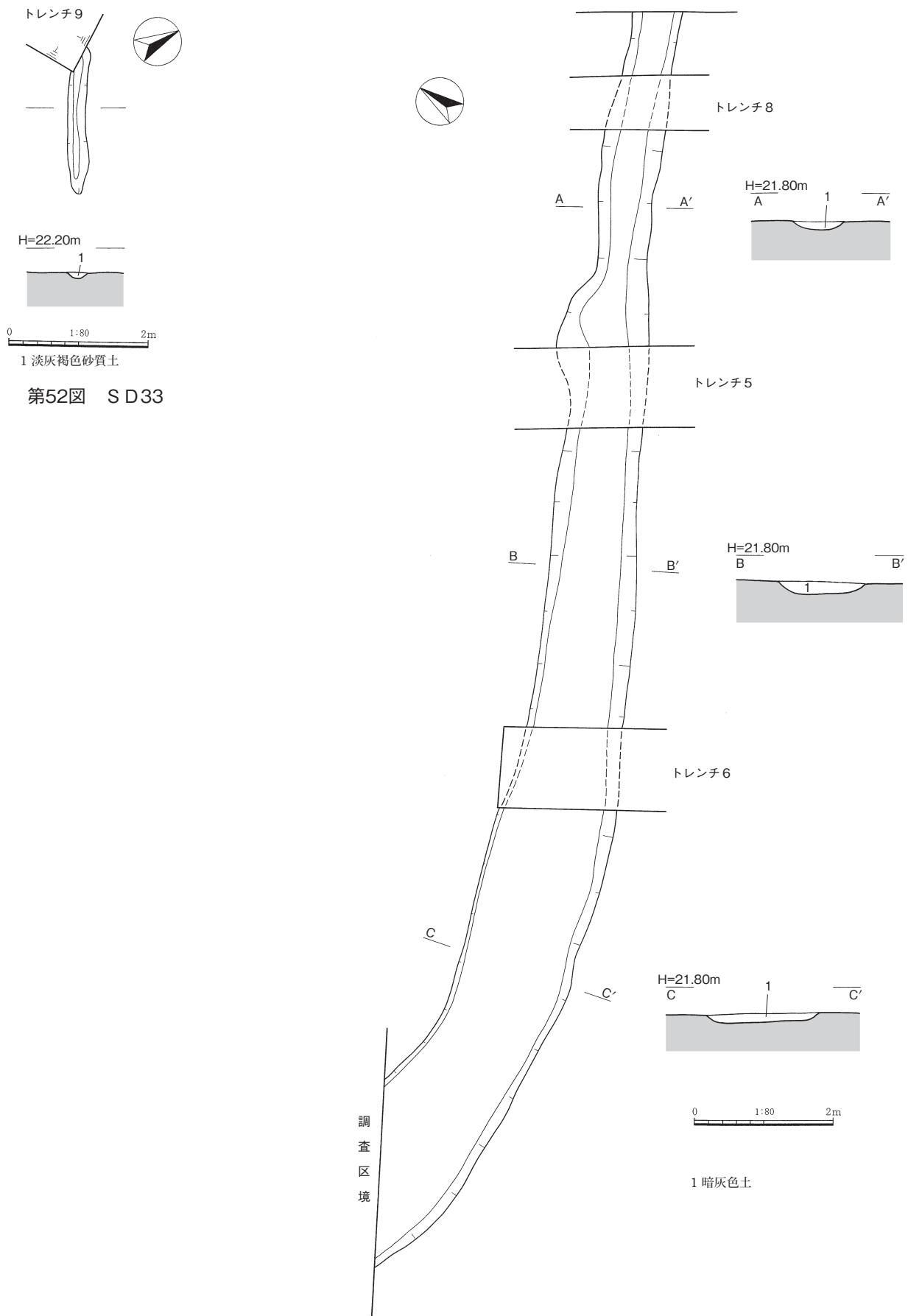
埋土は暗灰色土の単層であるが、地山の灰白色粘土が火焰状に入り込んでいる。これは地震による変形と考えられる

本遺構からは遺物が出土しなかったため、帰属時期は不明である。



- 1 灰褐色土 (SD29)
- 2 灰褐色土 (SD30)
- 3 暗灰色土 (SD31)
- 4 灰褐色土 (SD32)

第51図 S D29~32



### (3) 土 坑

#### S K 1 (第54図)

S K 1 は 2 区の南西端に位置する。南東側は調査区外にかかっているが、平面形態は円形を呈する。規模は長軸 1.0 m、短軸 0.8 m 以上、検出面からの深さ 0.5 m を測り、断面形態は逆台形を呈する。

埋土は 3 層に分層でき、上層から灰褐色土（1 層）、暗灰色土（2 層）、黒色粘質土（3 層）となっており、いずれも礫が混じり、特に 1・2 層には多量に礫が混じっている。

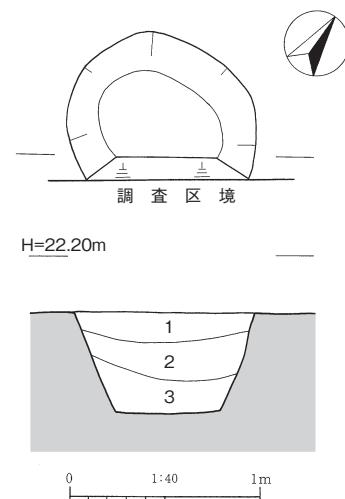
本遺構の時期は、遺物が出土しなかったため、時期比定は困難であるが、S K 4、6 との関連性から弥生時代前期頃と推定される。

#### S K 2 (第55図)

S K 2 は 2 区の南西端に位置する。南東側は S D 8 に切られているが、平面形態は楕円形を呈すると考えられる。規模は長軸 1.1 m、短軸 0.45 m 以上、検出面からの深さ 4 cm を測り、断面形態は皿状を呈する。

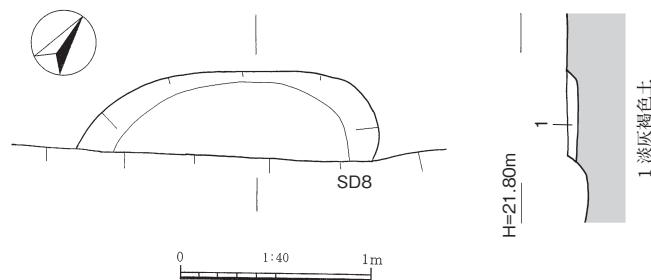
埋土は淡灰褐色土の単層である。

本遺構の時期は、遺物が出土しなかったため、時期比定は困難であるが、S D 8 との切合関係から、弥生時代中期後葉以前と考えられる。



1 灰褐色土 (礫が多量に混じる)  
2 暗灰色土 (礫が多量に混じる)  
3 黒色粘質土 (礫混じり)

第54図 S K 1



第55図 S K 2

#### S K 3 (第56図)

S K 3 は 3 区の南西端に位置する。

南東側は調査区外にかかっているが、平面形態は円形を呈する。規模は長軸 1.4 m、短軸 0.7 m 以上、検出面からの深さ 0.55 m を測り、断面形態は逆台形を呈する。底面の東寄りには直径 19 cm、深さ 14 cm の小ピットがある。

埋土は 6 層に分層でき、上層は黒灰色土（1・2 層）、中層は黒色土と暗灰色土（3～5 層）、下層は暗褐色土（6 層）となっており、上層と中層には地山の小ブロックが混じる。

本遺構の時期は、遺物が出土しなかったため、時期比定は困難であるが、形態的特徴から縄文時代の陥穴と考えられる。

#### S K 4 (第57図)

S K 4 は 3 区の南西側に位置する。平面形態は円形を呈し、規模は長軸 1.1 m、短軸 1.05 m、検出面からの深さ 0.2 m を測り、断面形態は皿状を呈する。

埋土は黒色粘土の単層である。

遺物は弥生土器と黒曜石剥片が出士したが、いずれも細片であるため図示できなかつた。

本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期と考えられる。

#### S K 6

(第58、59図)

S K 6 は 3 区の中央やや南西寄りに位置する。平面

形態は円形を呈し、規模は長軸 1.7 m、短軸 1.4 m、検出面からの深さ 1.1 m を測り、断面形態は逆台形を呈する。また、土層断面の観察から、一度埋没した後、再掘削されたと考えられる。

埋土は 13 層に分層でき、再掘削以前の南西側の中層から下層（12・13 層）にかけては細粒砂及び砂質土が、再掘削後の最下層（5 層）には細粒砂が認められるが、それ以外は、黑色系及び暗灰色系の粘土及び粘質土が堆積している。

遺物は弥生土器が出土したが、ほとんどが細片で、このうち 3 点を図示した。

16 は 突帶文土器で、口縁端部からやや下がった位置に刻目突帶がつくものである。

17、18 は 弥生土器の甕である。17 は 口縁部が外反する。18 は 口縁端部を上方へ大きくつまみ出したもので、口縁端部には 3 条の凹線が巡っている。

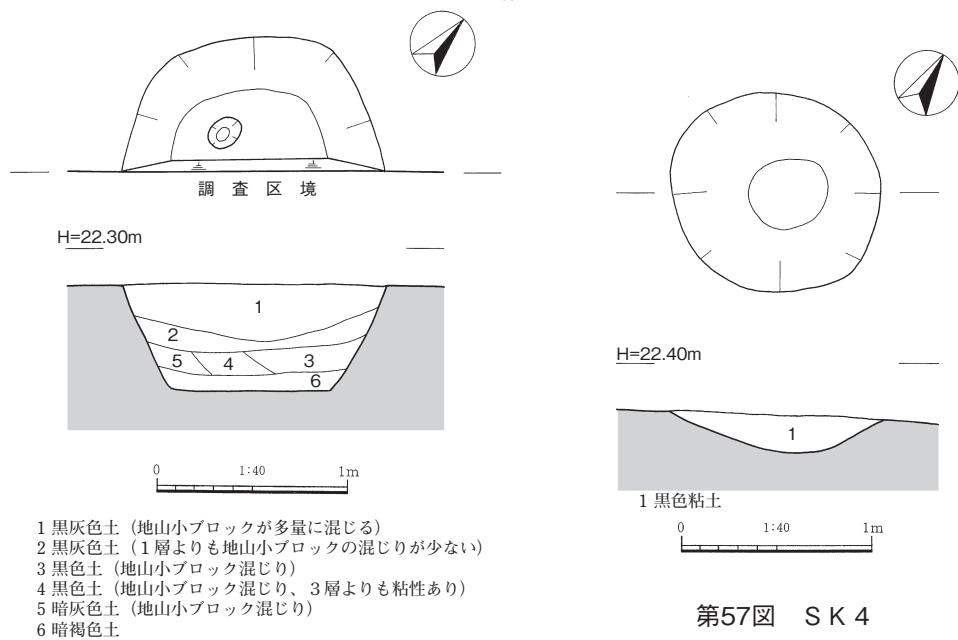
本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期と考えられる。

#### S K 7 (第60図)

S K 7 は 3 区の南西側に位置する。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸 2.7 m、短軸 0.85～0.95 m、検出面からの深さ 0.5 m を測る。断面形態は逆台形を呈し、底面は北東側が一段低くなっており、その比高差は 8～10 cm を測る。また、南西側には長径 66 cm、短径 47 cm、深さ 5 cm の浅いピットがある。主軸は N-38°-E である。

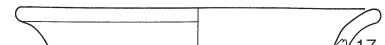
埋土は 3 層に分層でき、上層から淡黒灰色粘土（1 層）、暗灰色粘土（2 層）、灰褐色粘土（3 层）となっている。

S K 7 の南西側では、長さ 118 cm、最大幅 53 cm、厚さ 10～32 cm の木が横転した状態で、中央では長

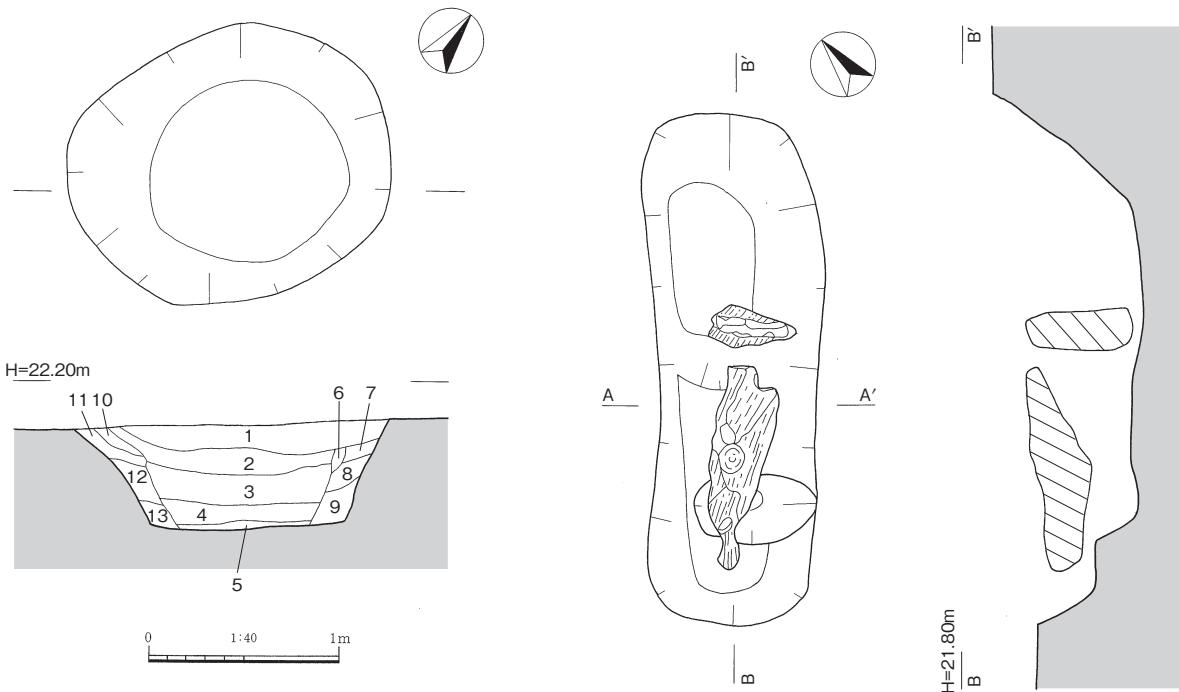


第57図 S K 4

第56図 S K 3

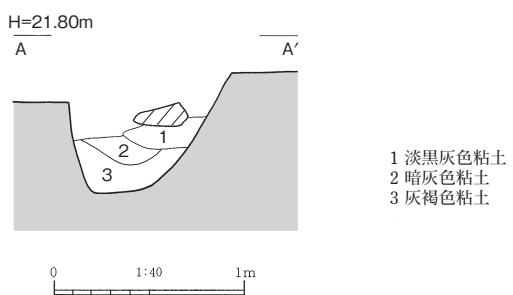


第58図 S K 6 出土遺物



- 1 淡黒灰色粘質土（径1~15mmの白色砂粒、礫混じり）
- 2 黒色粘土（径1~3mmの白色砂粒が僅かに混じる）
- 3 黒灰色粘土
- 4 喰灰褐色粘土（地山小ブロック混じり）
- 5 灰褐色細粒砂
- 6 灰褐色粘質土（粘性あり）
- 7 灰色粘質土
- 8 喰灰茶色粘質土（地山小ブロック、細粒砂混じり）
- 9 暗灰色粘質土（地山小ブロック混じり）
- 10 灰褐色土（地山ブロック混じり）
- 11 暗灰色粘質土（径1mmの白色砂粒混じり）
- 12 灰褐色細粒砂
- 13 灰白色砂質土

第59図 SK 6



第60図 SK 7

さ55cm、幅45cm、厚さ22cmの木が直立した状態で出土した。いずれも加工痕等が認められないことから自然木と考えられる。

本遺構からは遺物は出土しなかったが、放射性炭素年代測定の結果（第6章 第3節参照）から縄文時代後期と考えられる。

## 2. 第2遺構面の調査

### (1) 概要

第2遺構面はVII層上面を遺構面とする。遺構面の微地形は、3区の南西端では南東から北西へならかな尾根状地形が派生し、これ以外は南東から北西へ下降する緩斜面となっている。尾根状地形部の標高は最高所で22.44m、最低所で21.94m、2区で最も標高の低い北端の標高は21.53mである。

第2遺構面では溝状遺構13条、石列2基、畦畔2基を検出した。2区ではSD3とSD4が平行して南西-北東方向にのび、SD3の北西側には15cm前後の段状の落差がある。2区の中央やや北東寄りには北西-南東方向にのびる畦畔2があり、さらに、プラント・オパール分析の結果、水田の

存在が推察されることから、SD3とその北西側の段状の落差との間に畦畔（畦畔1）が存在したと考えられる。また、SD12・15・16～18は南東から北西へ傾斜し、SD3に流入する小規模な自然流路である。

これらの遺構の時期は、SD4・5は古墳時代後期、SD3・12～18、畦畔1は平安時代頃、SD9～11は中世に帰属し、石列3・4は古墳時代後期～中世、畦畔2は平安時代～中世の範疇におさまると考えられる。

## (2) 溝状遺構

### SD3（第61、62図）

SD3は2区の中央から3区の中央にかけて位置する。南西～北東方向にやや蛇行しながら直線状にのび、北東側はさらに調査区外へのびる。

検出した長さは47.5m、幅0.4～0.9m、検出面からの深さ18～22cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南西端が北東端より7cm高く、南西から北西へ流下すると考えられる。

埋土は中央やや南西寄りのD-D' と E-E' では、上層に暗灰色粘質土（2層）、下層に灰褐色粘質土（7層）が堆積し、南西側のF-F' では暗灰色粘質土（2層）の単層となっている。一方、北東側のB-B' と C-C' では、上層に粘質系土（1～3層）、下層に灰褐色砂質土（4層）が堆積しており、当初は流水があったが、その後、滯水状態となったと考えられる。

遺物は土師器が出土したが、ほとんどが細片で、このうち1点を図示した。

19は土師器の坏身で、底部外面はヘラ切り後、指押さえとナデ調整が施されている。

本遺構の時期は、出土遺物から平安時代頃と考えられる。

### SD4（第63～65図）

SD4は2区の南西側から中央にかけて位置する。南西～北東方向にのび、南西側から中央にかけては直線状にのびているが、北東側はやや蛇行気味にのびている。なお、南西側は3区にのびると考えられるが、3区では検出できなかった。

検出した長さは29.4m、幅0.4～0.7m、検出面からの深さ7～12cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南西端が北東端より3cm高いだけで、ほぼ水平である。

SD4の南東側の肩には、長さ12m、幅0.4～1.0mの範囲に8～40cm大の礫が散在し、一部はSD4内に転落している。礫は大部分が検出面直上に位置しており、SD3と同様、SD4の南東側には畦畔状の構造物があった可能性がある。

埋土は概ね上層に暗灰色粘質土（1層）、下層に暗橙灰色砂（2層）が堆積しており、当初は流水があつたが、その後、滯水状態となったと考えられる。

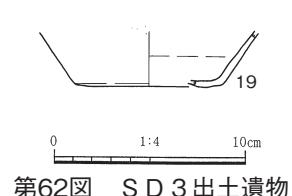
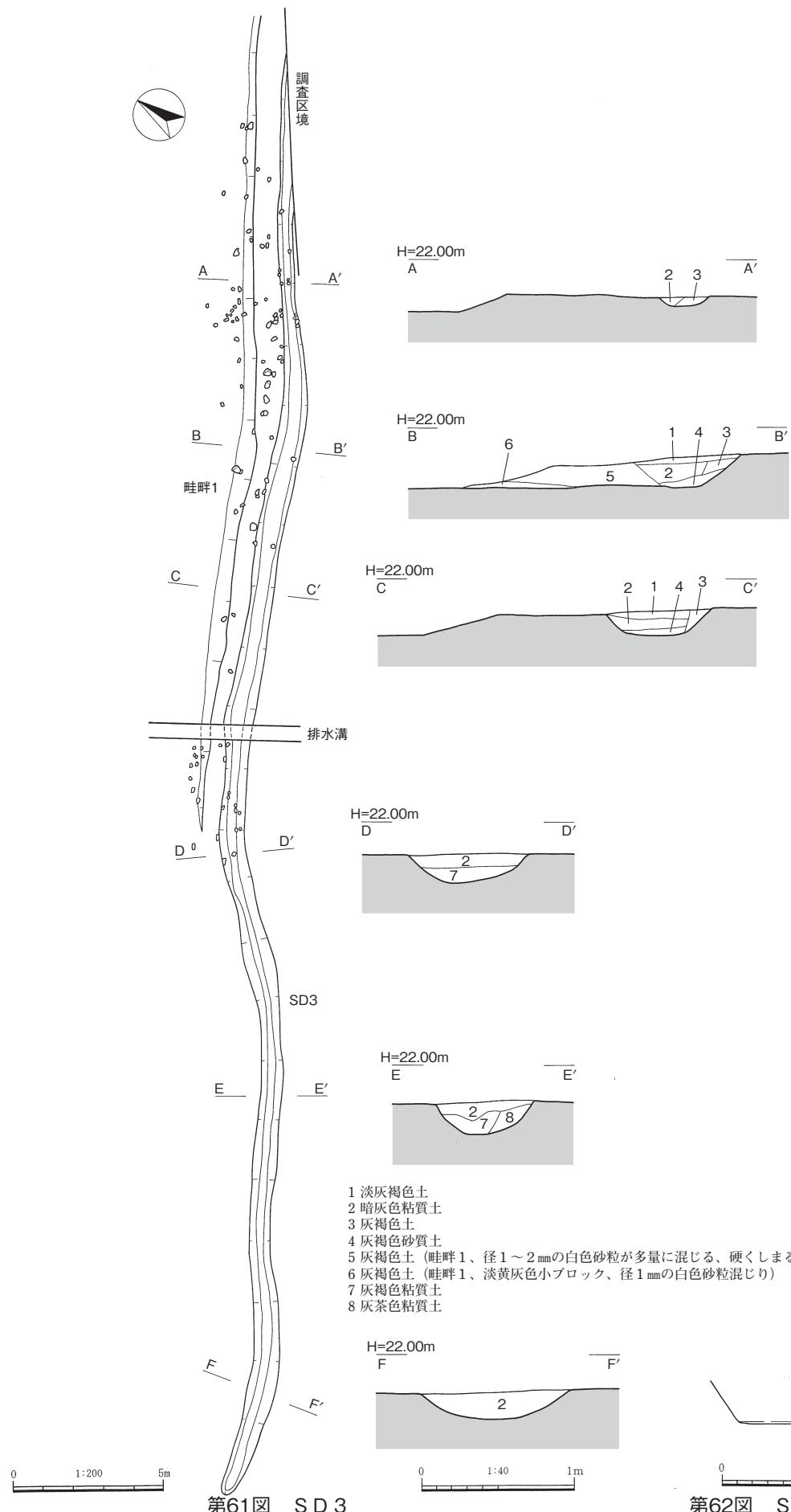
遺物は弥生土器、土師器、石器が出土したが、ほとんどが細片で、このうち3点を図示した。

20は弥生土器の甕である。口縁端部を上方へ大きくつまみ出したもので、口縁端部には3条の凹線が巡っている。

21は須恵器の坏蓋で、天井部と口縁部との境界には稜や沈線は認められない。

S2は安山岩製の石鍬で、撥形を呈する。

本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期と考えられる。



### S D 5 (第66図)

S D 5 は 2 区の北東端に位置する。南北方向にやや湾曲してのび、南側はハ字状に広がり、両端はさらに調査区外へのびている。

検出した長さは 9.9m、幅 0.55~1.8m、検出面からの深さ 12cm を測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は両端とも同じで、ほぼ水平である。

埋土は 4 層に分層でき、粘質土と細粒砂が互層状に堆積していることから、流水と滯水を繰り返したと考えられる。

遺物は土師器、須恵器、石器が出土したが、ほとんどが細片で、このうち 3 点を図示した。

22 は 弥生土器の甕で、口縁端部には 4 条の凹線が巡っている。

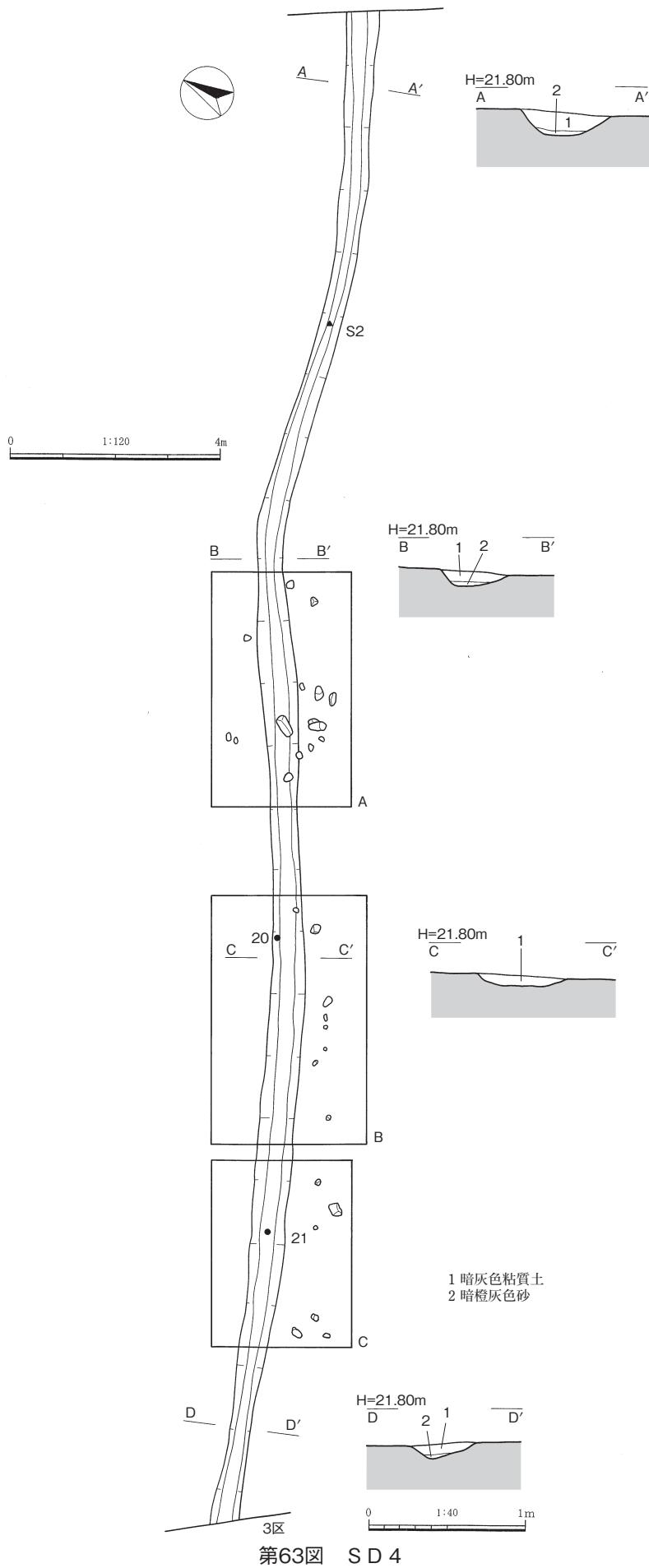
23 は 土師器の甕で、口縁部が外反する。

S 3 は サヌカイト製の石鎌で、平基式である。

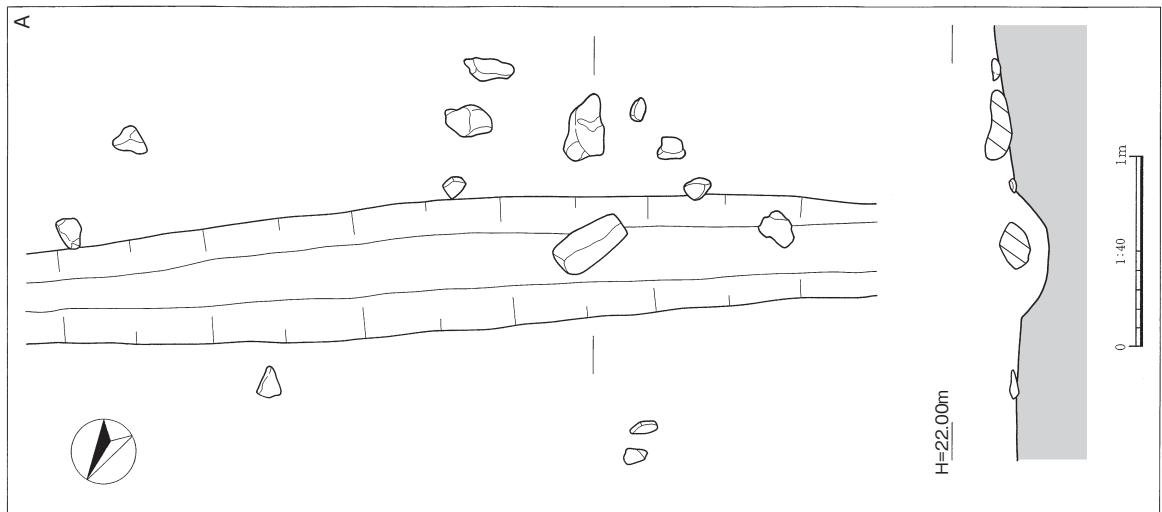
本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

### S D 9 (第67図)

S D 9 は 3 区の南西端に位置する。南西—北東方向に直線状にのび、S D 10 を切っている。北西には S D 10 と S D 11 が平行してのびてい



第63図 S D 4



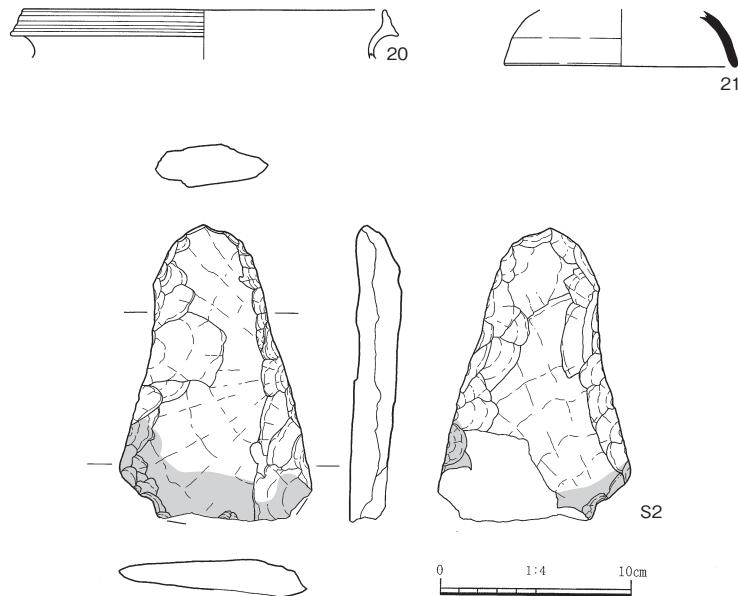
第64図 SD 4 拡大図

る。

検出した長さは6.6m、幅0.35～0.7m、検出面からの深さ5～9cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南西端が北東端より11cm高く、南西から北東へ傾斜する。

埋土は灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土しなかったため、時期比定は困難であるが、SD11との位置関係から中世頃と推定される。



第65図 SD 4 出土遺物

#### SD 10 (第67図)

SD 10は3区の南西端に位置する。南北方向に直線状にのび、北西にはSD 11、南東にはSD 9が平行してのびており、南側はSD 9に切られている。

検出した長さは2.8m、幅0.3～0.4m、検出面からの深さ7～8cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南端が北端より8cm高く、南から北へ傾斜する。

埋土は灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土しなかったため、時期比定は困難であるが、SD 11との位置関係から中世頃と推定される。

#### SD 11 (第67、68図)

SD 11は3区の南西端に位置する。南西～北東方向に直線状にのび、南東にはSD 9とSD 10が平行してのびている。

検出した長さは9.9m、幅0.45～1.3m、検出面からの深さ5cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南西端が北東端より19cm高く、南西から北東へ傾斜する。

埋土は灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

遺物は土師器と黒曜石剥片が出土したが、ほとんどが細片で、このうち1点を図示した。

24は土師質土器の皿で、底部外面には板状の圧痕が認められる。

本遺構の時期は、出土遺物から中世と考えられる。

#### SD 12 (第69図)

SD 12は3区の中央やや北東寄りに位置する。南東～北西方向にやや湾曲してのび、南東側はさらに調査区外へのびている。また、南東側ではSD 13を切り、北西側はSD 3に合流している。

検出した長さは3.8m、幅0.3～0.5m、検出面からの深さ10～12cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南東端が北西端より16cm高く、南東から北西へ傾斜する。

埋土は淡灰褐色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土しなかったため、時期比定は困難であるが、S D 3との位置関係から平安時代頃と考えられる。

### S D 13 (第69図)

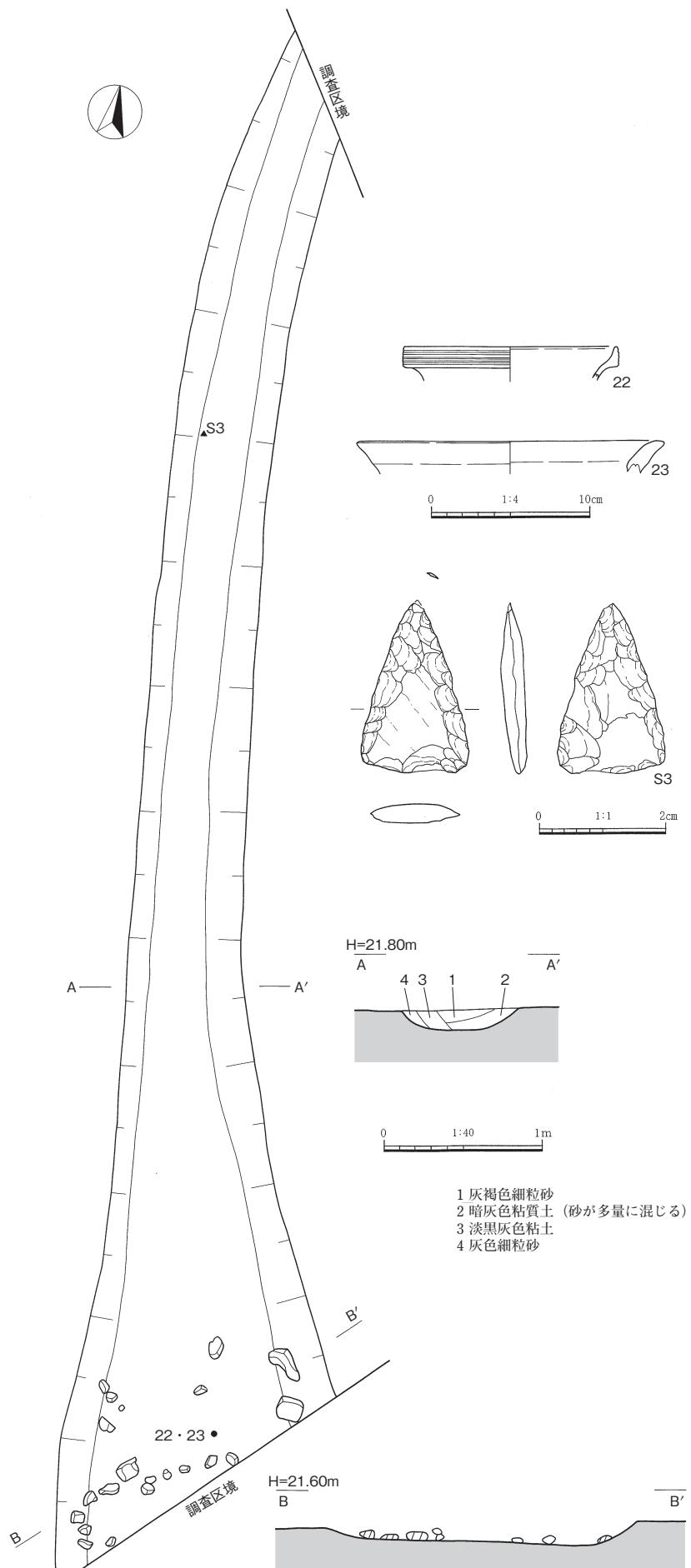
S D 13は3区の中央やや北東寄りに位置する。南西—北東方向に直線状にのび、中央部はS D 12に、北東端はS D 14に切られている。

検出した長さは2.7m、幅0.3~0.45m、検出面からの深さ8~11cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南西端が北東端より7cm高く、南西から北東へ傾斜する。

埋土は灰褐色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

遺物は土師器が出土したが、いずれも細片であるため図示できなかった。

本遺構の時期は、出土遺物による比定は困難であるが、S D 12・14との切合関係から平安時代頃と考えられる。



第66図 S D 5 及び出土遺物

### SD14 (第69図)

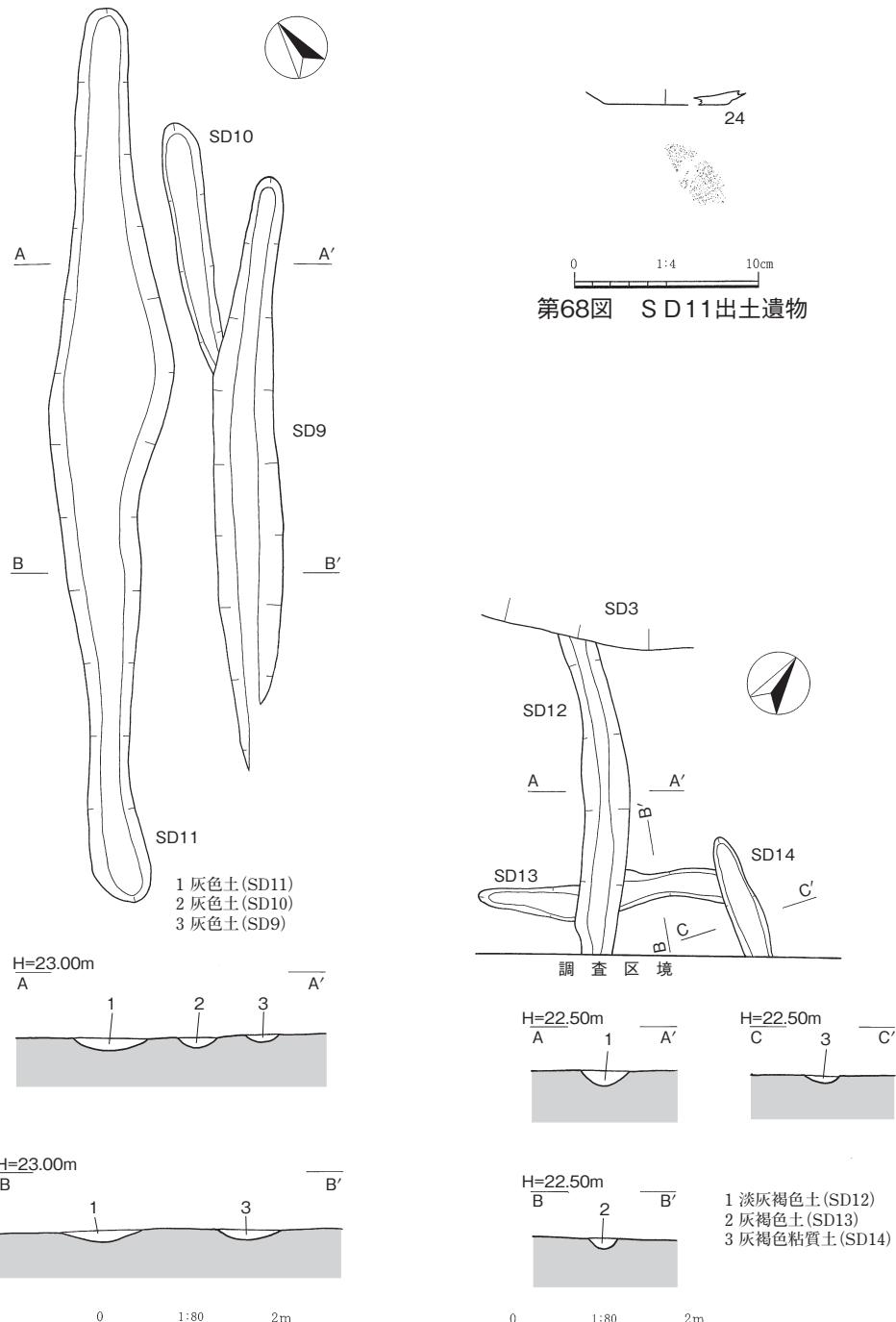
SD14は3区の中央やや北東寄りに位置する。SD13を切り、南東—北西方向に直線状にのび、南東側はさらに調査区外へのびている。

検出した長さは1.5m、幅0.3~0.4m、検出面からの深さ5~7cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南東端が北西端より3cm高く、南東から北西へ緩やかに傾斜する。

埋土は灰褐色粘質土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

遺物は土師器が出土したが、いずれも細片であるため図示できなかった。

本遺構の時期は、出土遺物による比定は困難であるが、SD12・13との位置関係から平安時代頃と考えられる。



第67図 SD9・10・11

第69図 SD12・13・14

### SD15 (第70図)

SD15は3区の中央やや北東寄りに位置する。南北方向に「く」字状に屈曲してのび、北側はSD3に合流している。また、屈曲部と北側ではピット状に深くなっている。

検出した長さは2.8m、幅0.2~0.3m、検出面からの深さ4~7cmを測る。断面形態は皿状を呈し、

底面の標高は南端が北端より10cm高く、南から北へ傾斜する。

埋土は暗灰色粘質土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土しなかったため、時期比定は困難であるが、SD 3との位置関係から平安時代頃と考えられる。

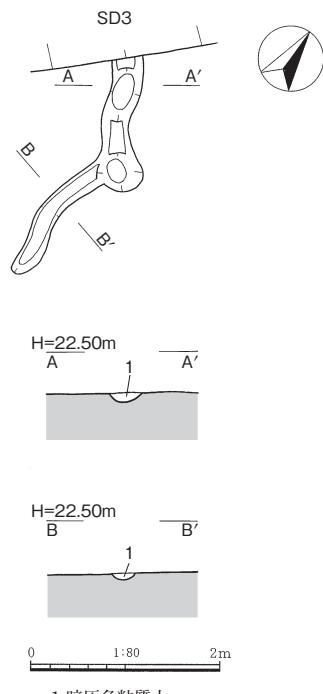
#### SD 16 (第71図)

SD 16は3区の中央やや北東寄りに位置する。南東ー北西方向に直線状にのび、北西側はSD 3に合流している。

検出した長さは0.4m、幅0.25m、検出面からの深さ3cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南東端が北西端より2cm高いだけで、ほぼ水平である。

埋土は淡灰茶色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土しなかったため、時期比定は困難であるが、SD 3との位置関係から平安時代頃と考えられる。



第70図 SD 15

#### SD 17 (第72図)

SD 17は3区の中央やや北東寄りに位置する。南東ー北西方向に直線状にのび、北西側はSD 3に合流している。

検出した長さは2.7m、幅0.4~0.65m、検出面からの深さ6~7cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南東端が北西端より19cm高く、南東から北西へ傾斜する。

埋土は暗灰色粘質土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土しなかったため、時期比定は困難であるが、SD 3との位置関係から平安時代頃と考えられる。

#### SD 18 (第73図)

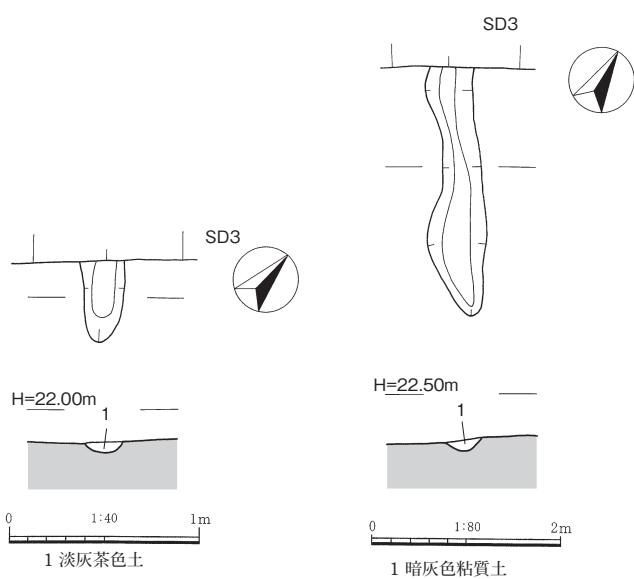
SD 18は3区の北東側に位置する。南東ー北西方向にY字状にのび、北西側はSD 3に合流している。

検出した長さは3.5m、幅0.3~0.65m、検出面からの深さ7~14cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南東端が北西端より11cm高く、南東から北西へ傾斜する。

埋土は暗灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

遺物は弥生土器が出土したが、いずれも細片であるため図示できなかった。

本遺構の時期は、出土遺物による時期



第71図 SD 16

第72図 SD 17

比定は困難であるが、SD3との位置関係から平安時代頃と考えられる。

### (3) 畦 畑

#### 畦畔1 (第74~76図)

畦畔1は2区の中央から3区の北東端に位置する。南西-北東方向にのび、北東側はさらに調査区外へのびている。また、南東側には隣接してSD3が平行してのびている。上部は削平されているため、畦畔の高まりは認められなかったが、北西側には15cm前後の段差があることと、プラント・オパール分析の結果（第6章 第2節参照）から、畦畔であると判断した。検出した長さは30.3m、幅0.45~1.0mを測る。

畦畔上には長さ24.5mにわたって5~27cm大の礫が散在しており、その一部は南東側のSD3内や、北西側の段下にも転落している。

本遺構の時期は、遺物が出土しなかったため、時期比定は困難であるが、SD3との位置関係から平安時代頃と考えられる。

#### 畦畔2 (第77図)

畦畔2は2区の中央やや北東寄りに位置する。南東-北西方向にのび、両端はさらに調査区外へのびている。

検出した長さは13.9m、上端部幅1.5~2.3m、基底部幅2.2~3.2m、高さ10~15cmを測る。北西端のA-A'ラインの断面から、北西側は当初、上端部幅0.76m、基底部幅1.25mであったものを拡幅した可能性がある。

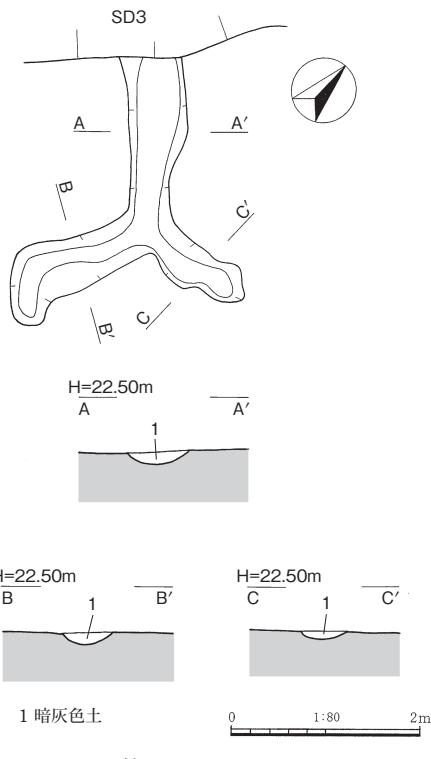
本遺構の時期は、遺物が出土しなかったため、時期比定は困難であるが、検出面と層位から、平安時代から中世に帰属すると考えられる。

### (4) 石 列

#### 石列3 (第78図)

石列3は3区の南西側に位置する。南西-北東方向にやや湾曲してのびており、北西側には石列4が平行してのびている。長さ16.0m、幅1.0~1.4mにわたって10~39cm大の礫が散在しているが、規則的な配列は認められない。

本遺構の時期は、遺物が出土しなかったため、時期比定は困難であるが、検出面から古墳時代後期~中世と考えられる。

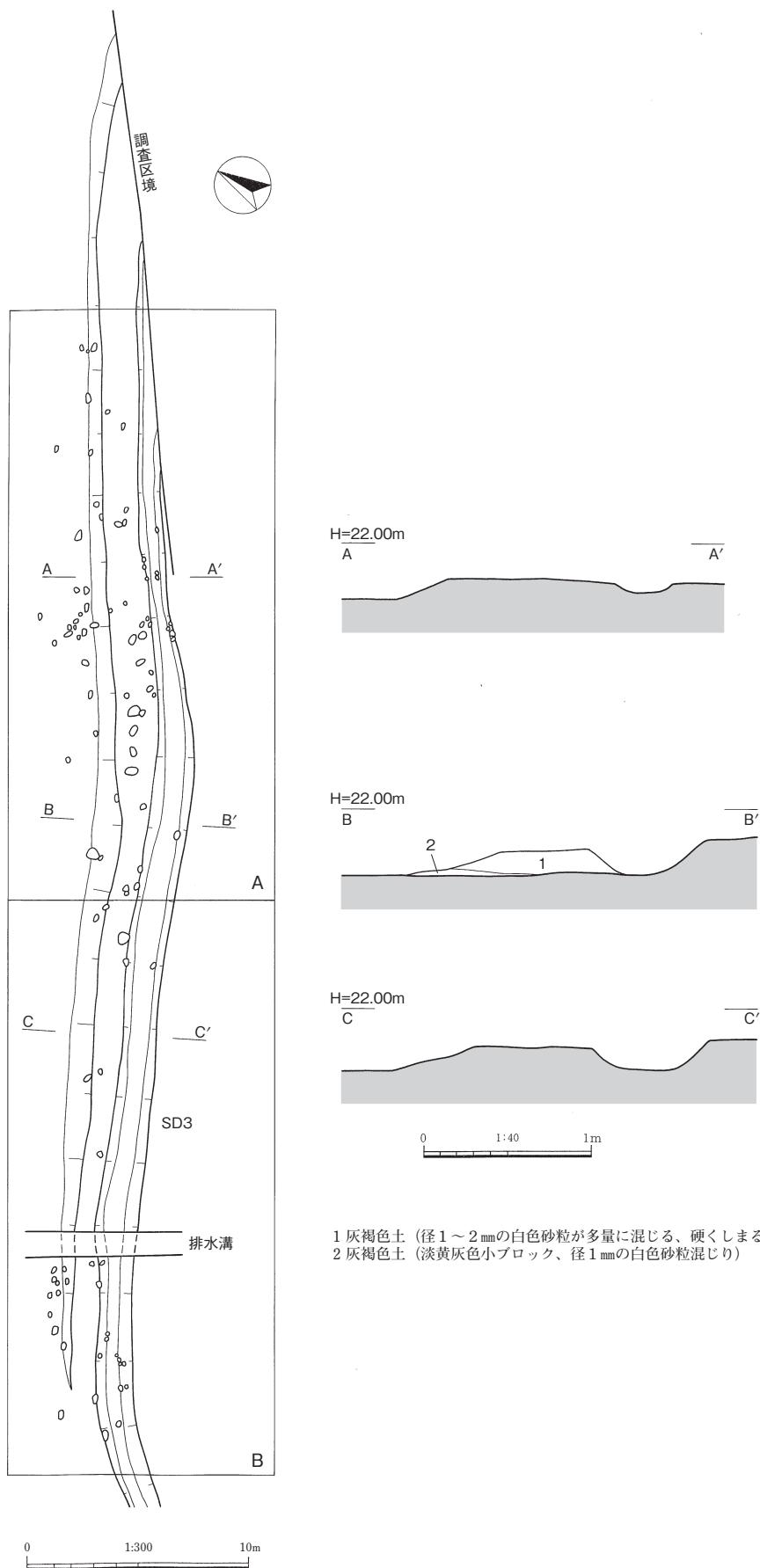


第73図 SD18

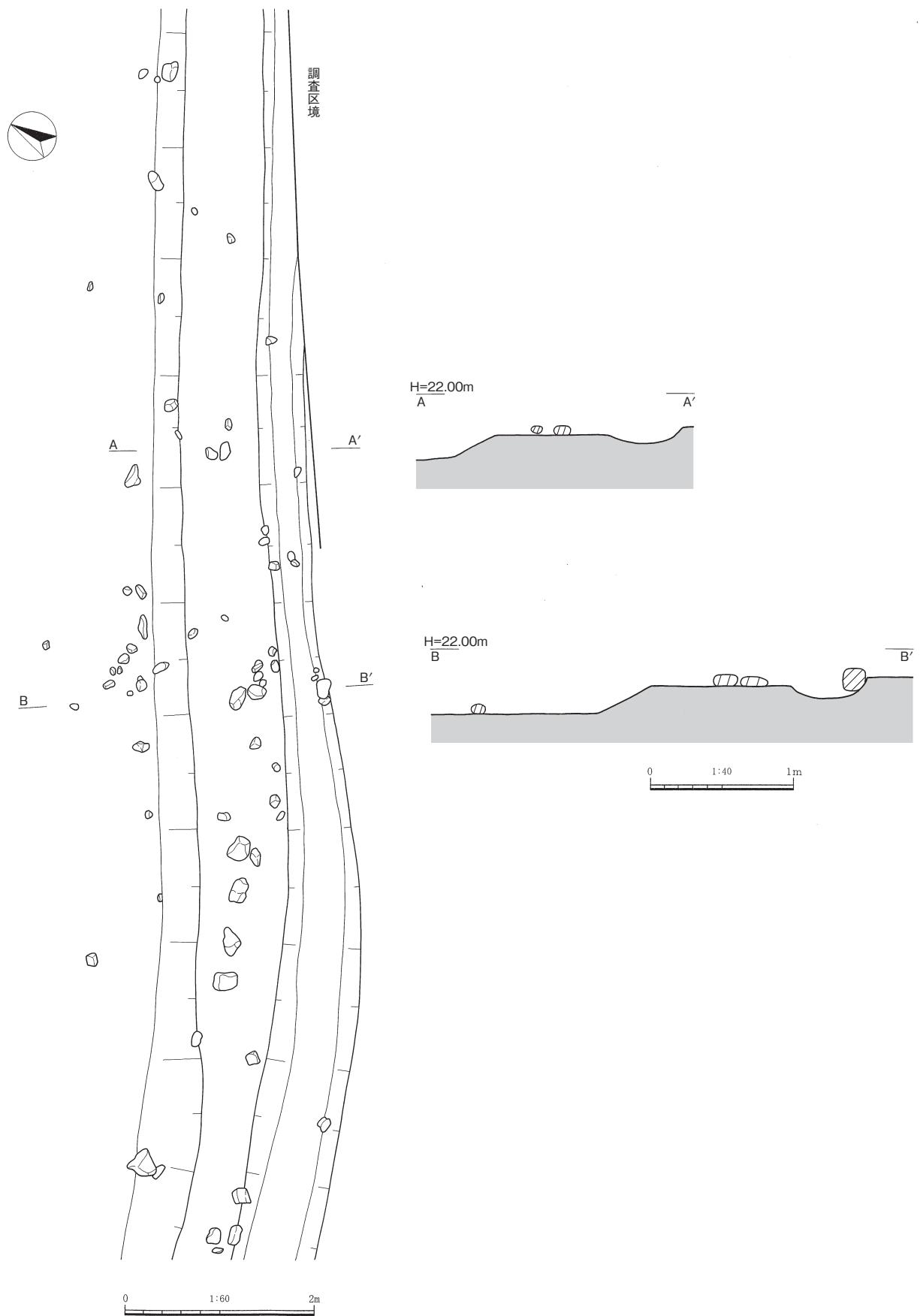
#### 石列4（第78図）

石列4は3区の南西側に位置する。南西－北東方向に直線状にのびており、南東側には石列3が平行してのびている。主軸はN－64°－Eである。長さ16.2m、幅0.7～0.8mにわたって10～40cm大の礫が散在しているが、規則的な配列は認められない。

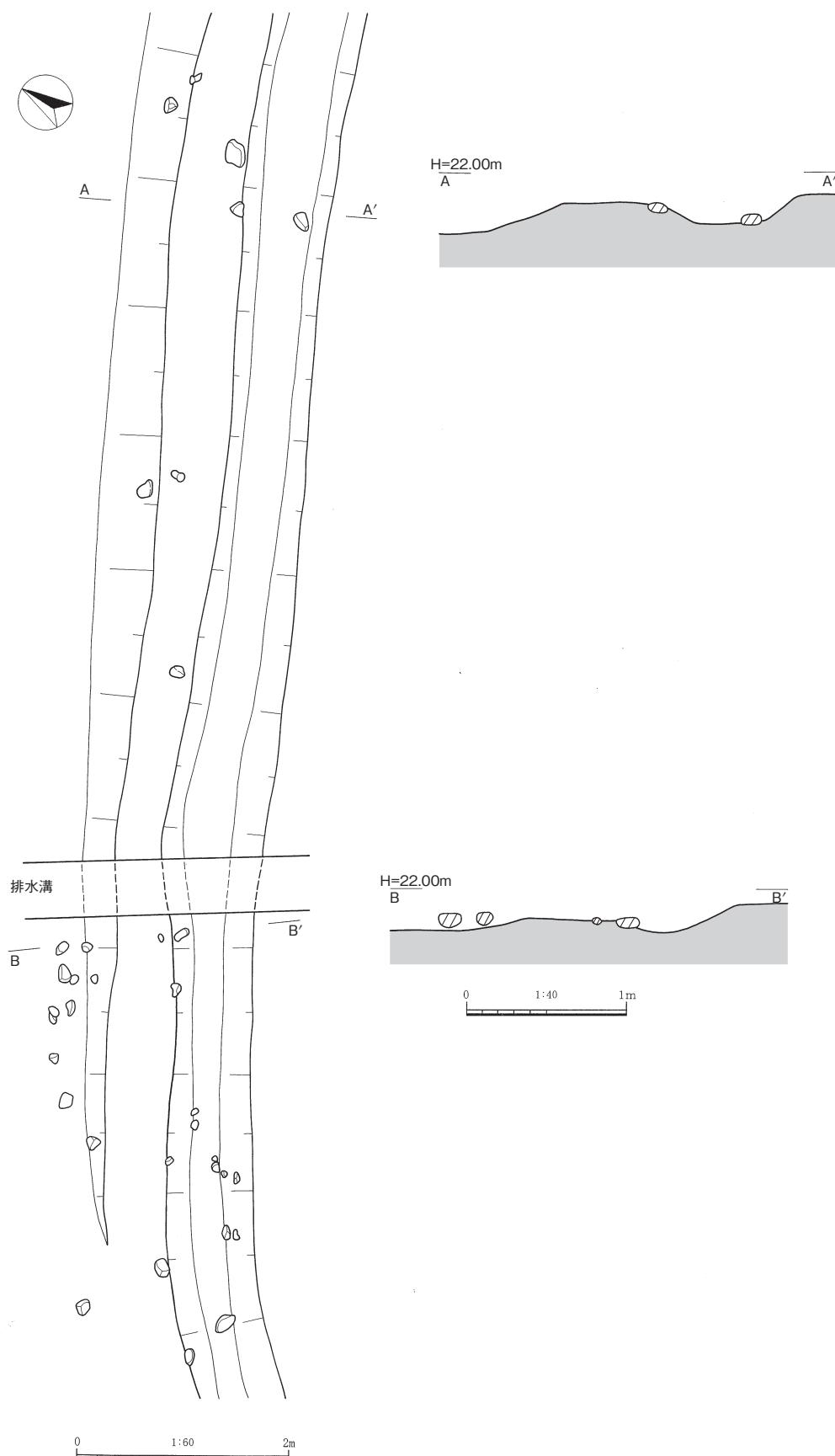
本遺構の時期は、遺物が出土しなかつたため、時期比定は困難であるが、検出面から古墳時代後期～中世と考えられる。



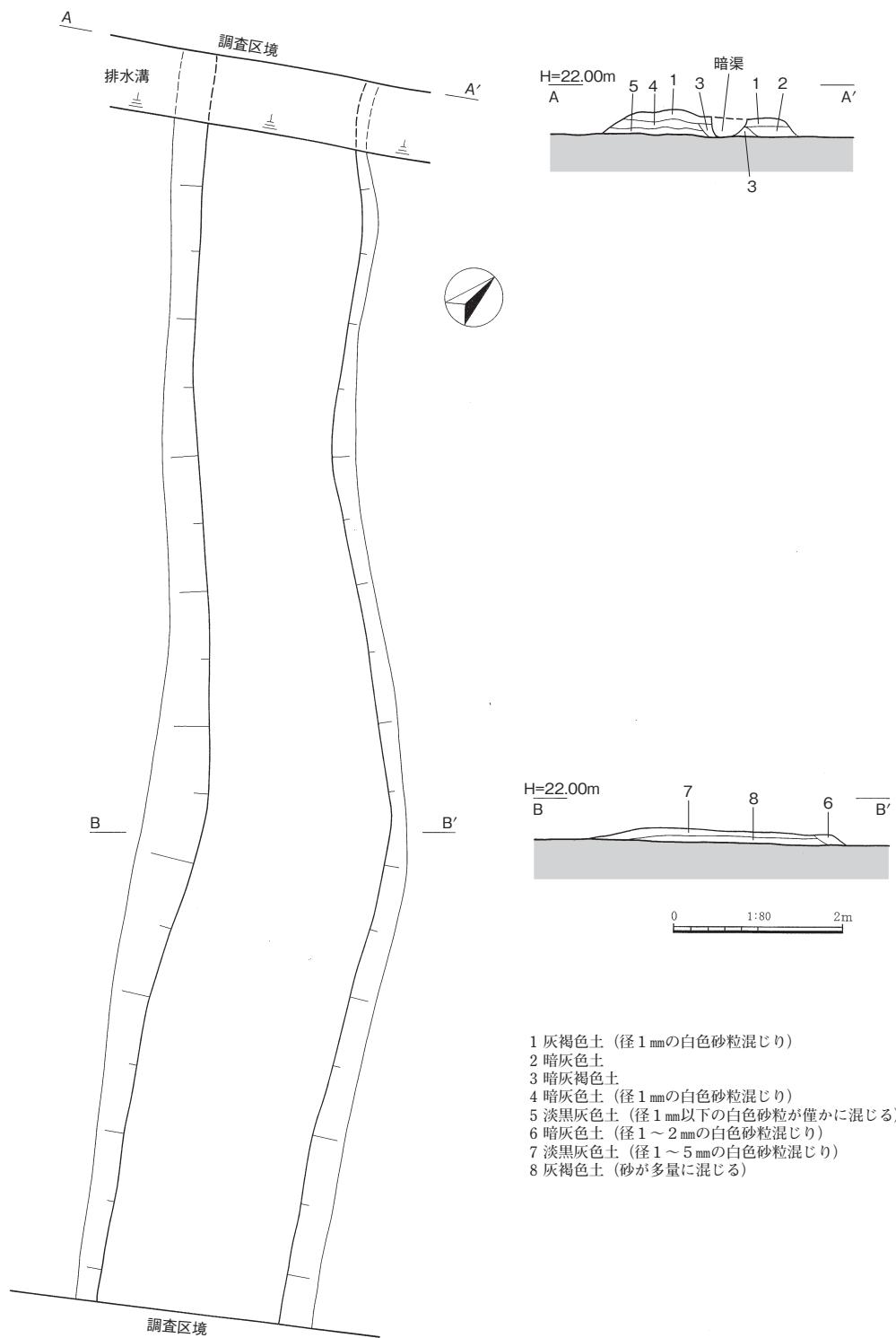
第74図 畦畔1



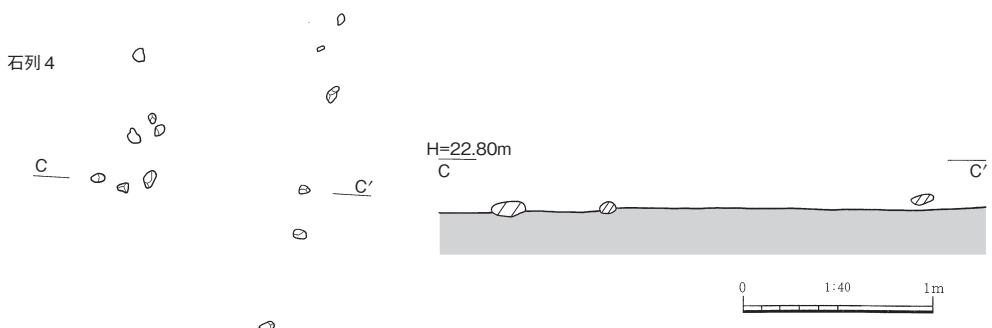
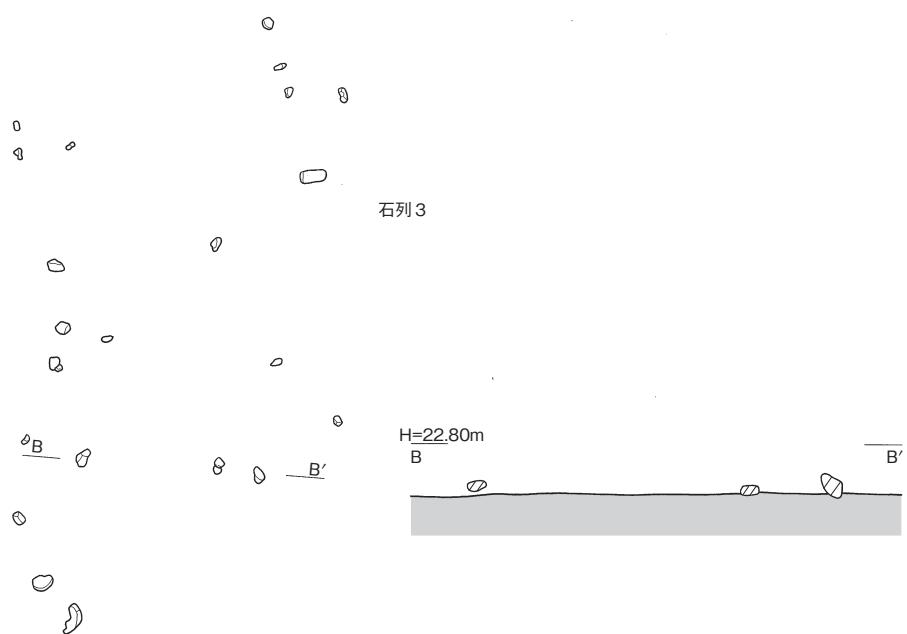
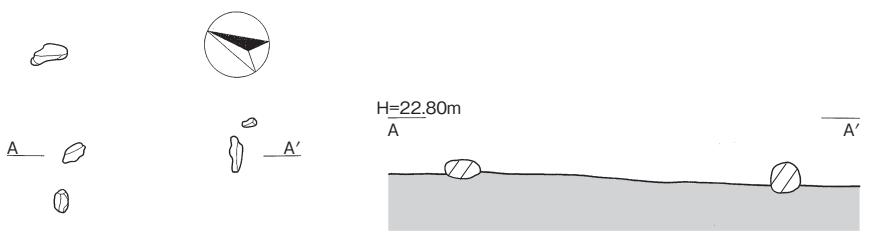
第75図 畦畔1 拡大図 (A部分)



第76図 畦畔1拡大図（B部分）



第77図 畦畔2



0 1:80 2m

第78図 石列3・4

### 3. 第1遺構面の調査

#### (1) 概 要

第1遺構面はⅢ-2層の6層上面を遺構面とする。第1遺構面は3区では確認できず、2区でのみ調査を行った。

2区での第1遺構面の微地形は、2区の南西端では南東から北西へなだらかな尾根状地形が派生し、これ以外は南から北へ下降する緩斜面となっている。尾根状地形部の最高所の標高は21.93m、最低所の標高は21.83m、2区で最も標高の低い北端の標高は21.64mである。

第1遺構面では2区の中央やや北東寄りで溝状遺構2条を検出した。いずれも肩に杭が打ち込まれており、水路として使用されたと考えられる。

これらの遺構は、出土遺物から近世後半以降に帰属すると考えられる。

#### (2) 溝状遺構

##### SD1 (第80、81図)

SD1は2区の中央やや北東寄りに位置する。南東-北西方向に直線状にのび、南東側はさらに調査区外へのびる。

検出した長さは6.6m、幅0.5~1.4m、検出面からの深さ10cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は南東端が北西端より3cm高いだけで、ほぼ水平である。北東側の肩には径3~6cmの木杭が打ち込まれており、南東側は幅が広くなっている。集石が認められる。集石は底面直上に位置し、底面には長径1.05m、短径0.55m、深さ8cmの楕円形を呈するピットがある。

埋土は淡灰茶色土(1層)と淡灰褐色土(2層)の2層からなり、流水の痕跡は窺えない。

遺物は土師器、瓦、陶磁器、黒曜石、鉄製品が出土したが、ほとんどが細片で、このうち4点を図示した。

25、26は磁器で、25は碗、26は皿である。27は陶器の皿である。高台付部には砂が付着し、見込み部には、重ね焼きによる釉薬と砂が輪状に残っている。

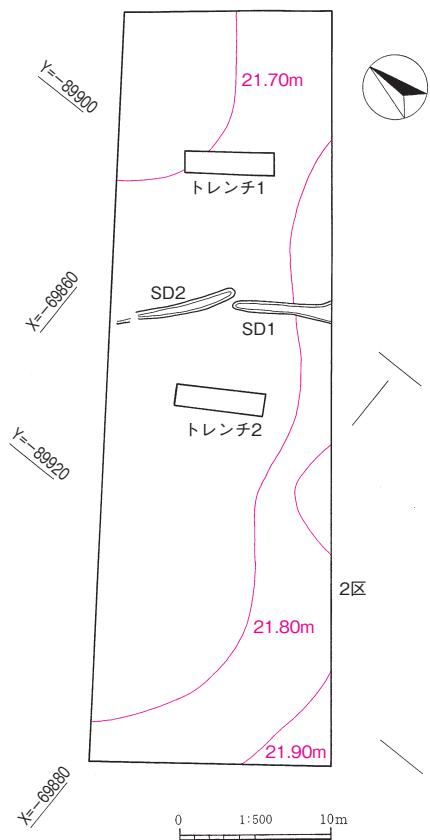
28は棒状の鉄製品で、先端部が尖り、茎部らしき部位をもつ。

本遺構の時期は、出土遺物から近世後半以降と考えられる。

##### SD2 (第82図)

SD2は2区の中央やや北東寄りに位置する。南東-北西方向に直線状にのび、北西側はさらに調査区外へのびている。

検出した長さは8.0m、幅0.4~0.75m、検出面からの深さ11cmを測る。断面形態は皿状を呈し、底面の標高は北西端が南東端より1cm高いだけで、ほぼ水平である。また、南西側の肩には径2~6cm



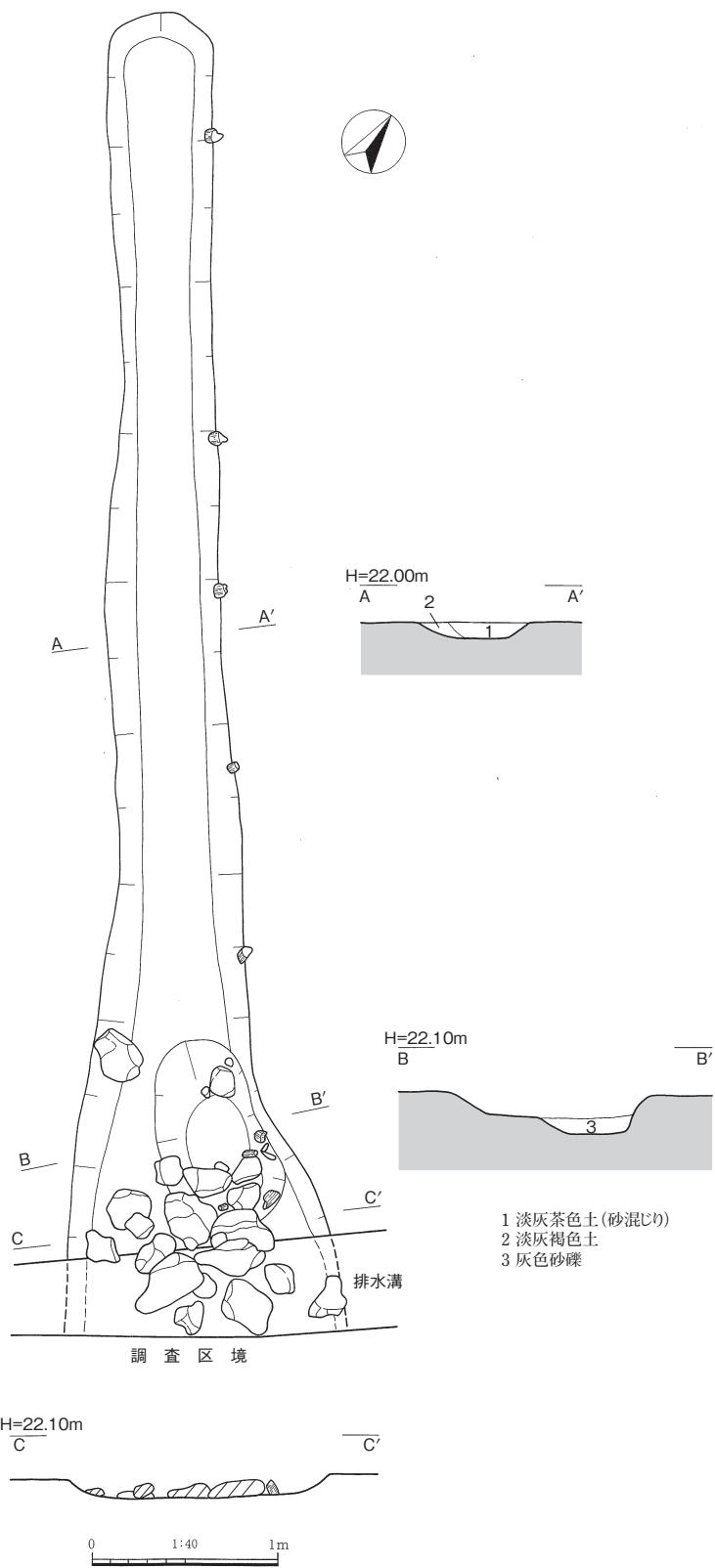
第79図 第1遺構面検出遺構配置図

の木杭が打ち込まれている。

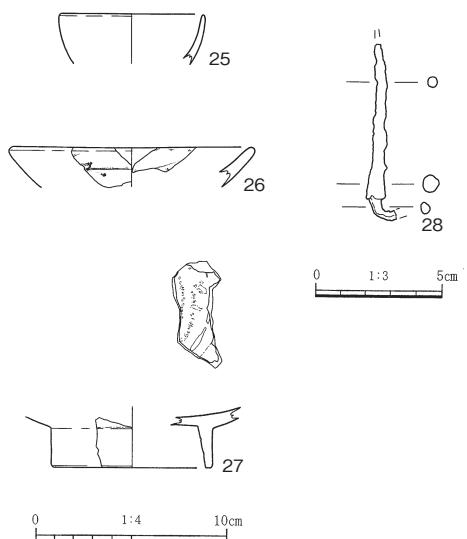
埋土は淡灰茶色土（1層）、淡灰褐色土（2層）、灰色土（3層）の3層からなり、流水の痕跡は窺えない。

遺物は陶器が出土したが、  
いずれも細片であるため図示  
できなかった。

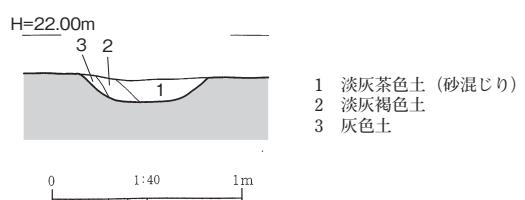
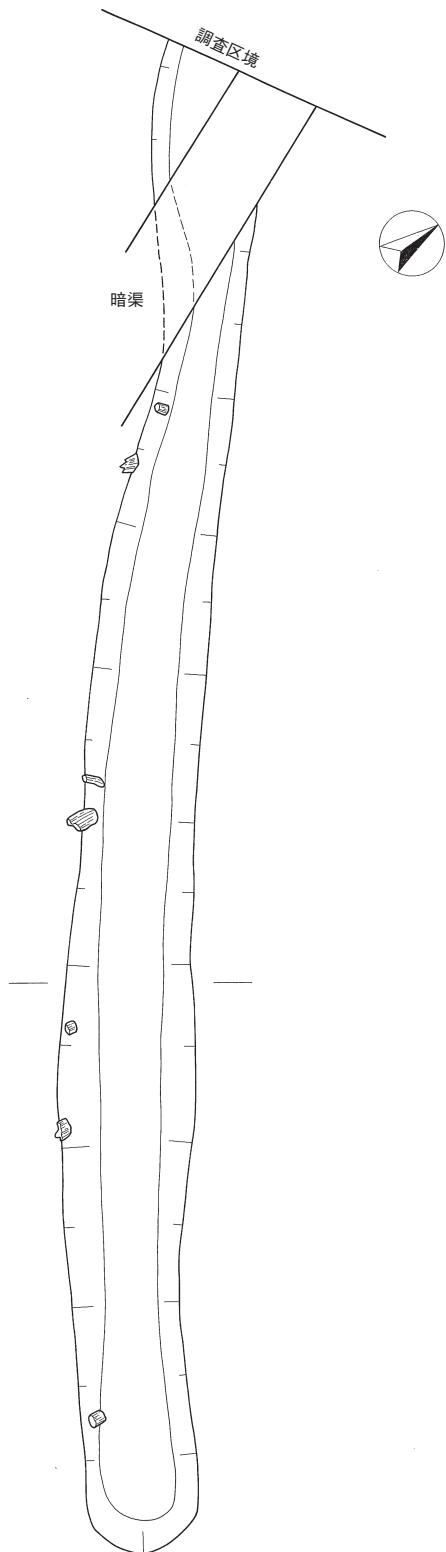
本遺構の時期は、出土遺物  
から近世後半以降と考えられ  
る。



第80図 S D 1



第81図 SD 1 出土遺物



第82図 SD 2

## 第4節 遺構外出土遺物（第83図～第89図）

29は縄文土器である。29は粗製の鉢で、やや内湾気味の形態を呈する。

30～54は突帯文土器である。30～34は突帯に刻目を施したもので、口縁端部に刻目を施す古相の突帯文土器は出土していない。

30～32は口縁端部から下がった位置に突帯がつくものである。口縁端部は直立し、突帯の断面形態は三角形を呈し、V字状の刻目が施されている。なお、31、32は刻目が斜め方向となっている。

33は口縁端部からやや下がった位置に突帯がつくものである。突帯の断面形態は丸形を呈し、斜め方向にV字状の刻目が施されている。

34は口縁端部から下がった位置に突帯がつくもので、口縁端部は外反する。突帯の断面形態は三角形を呈し、V字状の刻目が施されている。

35～54は突帯に刻目を施さないもので、35～45は口縁端部に接するか、あるいは口縁端部からやや下がった位置に突帯がつくものである。突帯の断面形態は三角形が主体（35～42、45）で、43、44のような丸形を呈するものもある。

46～54は口縁端部から下がった位置に突帯がつくものである。46～51は口縁端部が直立し、突帯の断面形態は三角形を呈するもの（46、47）、下さがりの三角形を呈するもの（48）、丸形を呈するもの（50、51）がある。

52～54は口縁端部が外反し、突帯の断面形態は三角形を呈するもの（52、53）と丸形を呈するもの（54）がある。

55～112は弥生土器で、このうち55～99は前期に帰属するものである。

55～58は壺で、57、58の頸部には3条のヘラ描沈線が巡っている。

59～77は甕で、59～65は頸部にヘラ描沈線が認められないものである。66は1条、67、68は少なくとも2条、69、70は少なくとも1条のヘラ描沈線が巡っている。また、68は沈線間に円形のスタンプ文が施されている。71～77は口縁部が残っているのみで、ヘラ描沈線の有無が不明なものである。

78～80は鉢で、口縁部が外反する。

81～83は壺の底部、84～98は甕の底部で、96、97の底部外面には糀状の圧痕が認められる。また、98の外面には3条のヘラ描沈線が巡っている。

99は棒状の土製品で、上部に1孔が穿たれている。

100～112は中期～後期に帰属するものである。

100～102は壺で、100は口縁端部に面をもち、刻目が施されている。101は口縁端部を上下につまみ出したもので、口縁端部には4条の凹線が巡っている。102は口縁端部を下方へ屈曲させたもので、口縁端部には3条の凹線が巡っている。

103～105は甕で、いずれも口縁端部を上方へつまみ出している。また、口縁端部には103は2条、104、105は3条の凹線が巡っている。

106は蓋で、つまみの下部に1条の貼付突帯が巡っている。107は壺の底部、108～112は甕の底部である。

113～116は土師器である。113は甕で、段部が退化した複合口縁を有する。114、115は高坏、116は低脚坏の脚部である。117は把手で、断面は橢円形を呈し、先端部は平坦となっている。



第83図 遺構外出土遺物（1）

118～123は須恵器である。118～121は壺蓋で、119の天井部と口縁部との境界には稜が認められる。

122は高台を有する壺の底部、123は壺を転用した転用硯である。

124～134は中世に帰属するものである。

124、125は白磁碗で、124は玉縁状の口縁をもち、125の内面には1条の沈線が巡っている。

126は青磁碗、127は瀬戸・美濃の天目茶碗である。128は李朝の皿で、見込みには砂目が認められる。

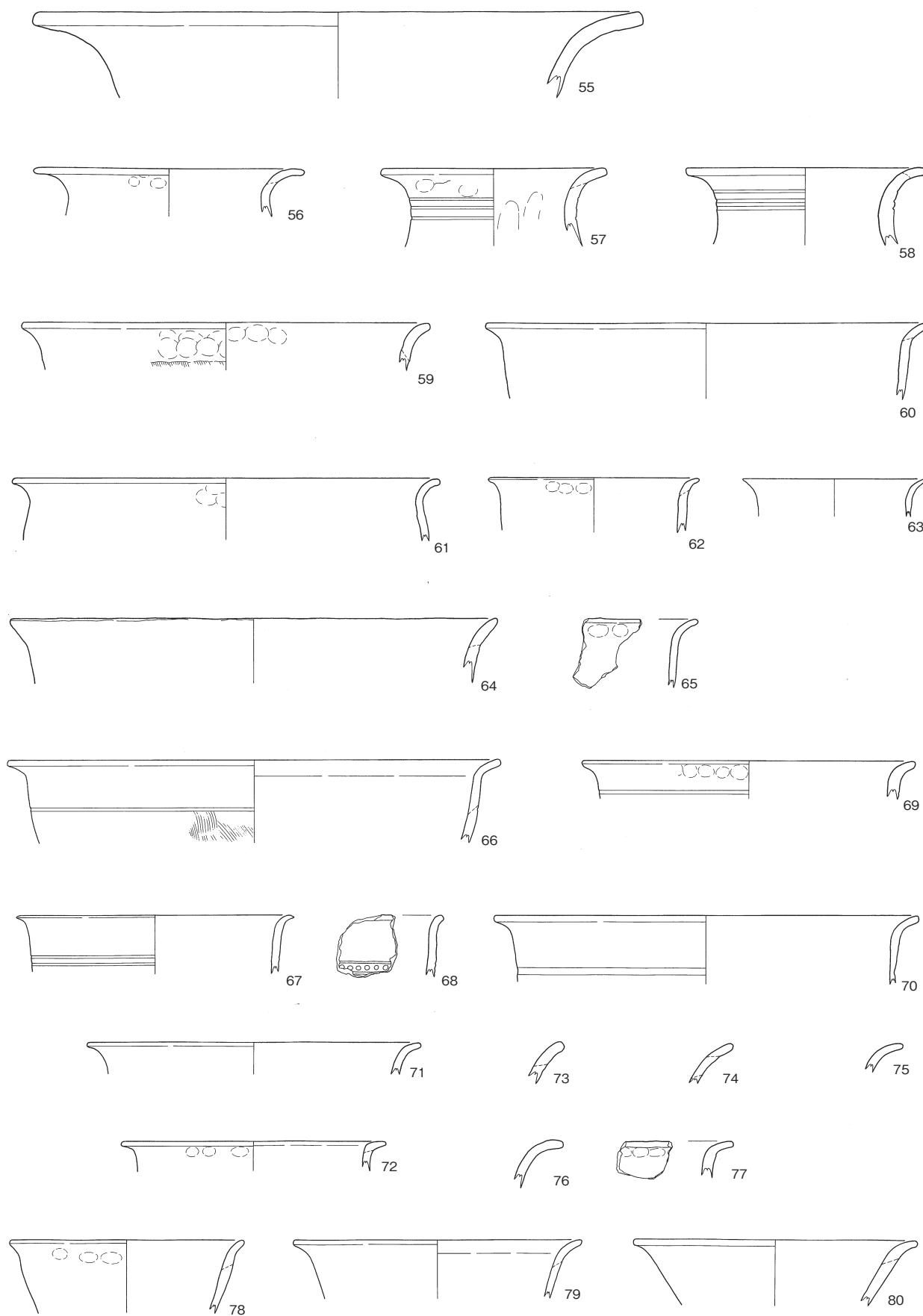
129は備前焼の甕、130は須恵器の甕で、外面には格子目叩き、内面にはカキ目が施されている。

131～133は土師質土器で、131、132は皿、133は塊である。また、いずれも底部外面には回転糸切りが施されている。134は瓦質土器の鉢である。

135～143は近世に帰属するものである。

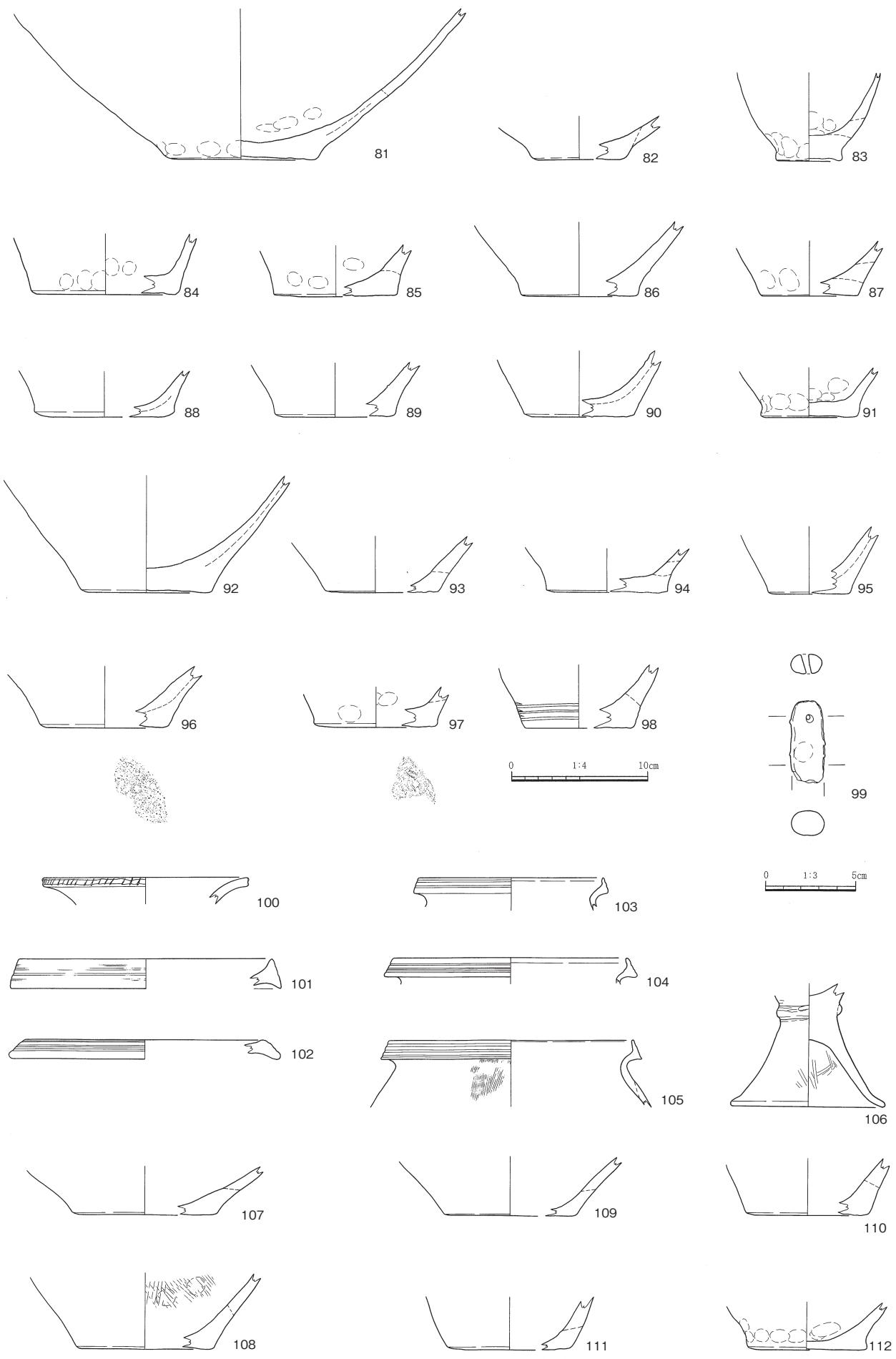
135、136は磁器で、いずれも肥前産である。135は陶胎染付の碗、136は小壺の底部である。

137～140は陶器である。137は壺の蓋、138は塊で、いずれも産地は不明である。139は肥前産の陶器皿で、見込みには砂目が認められる。140は在地産の擂鉢である。

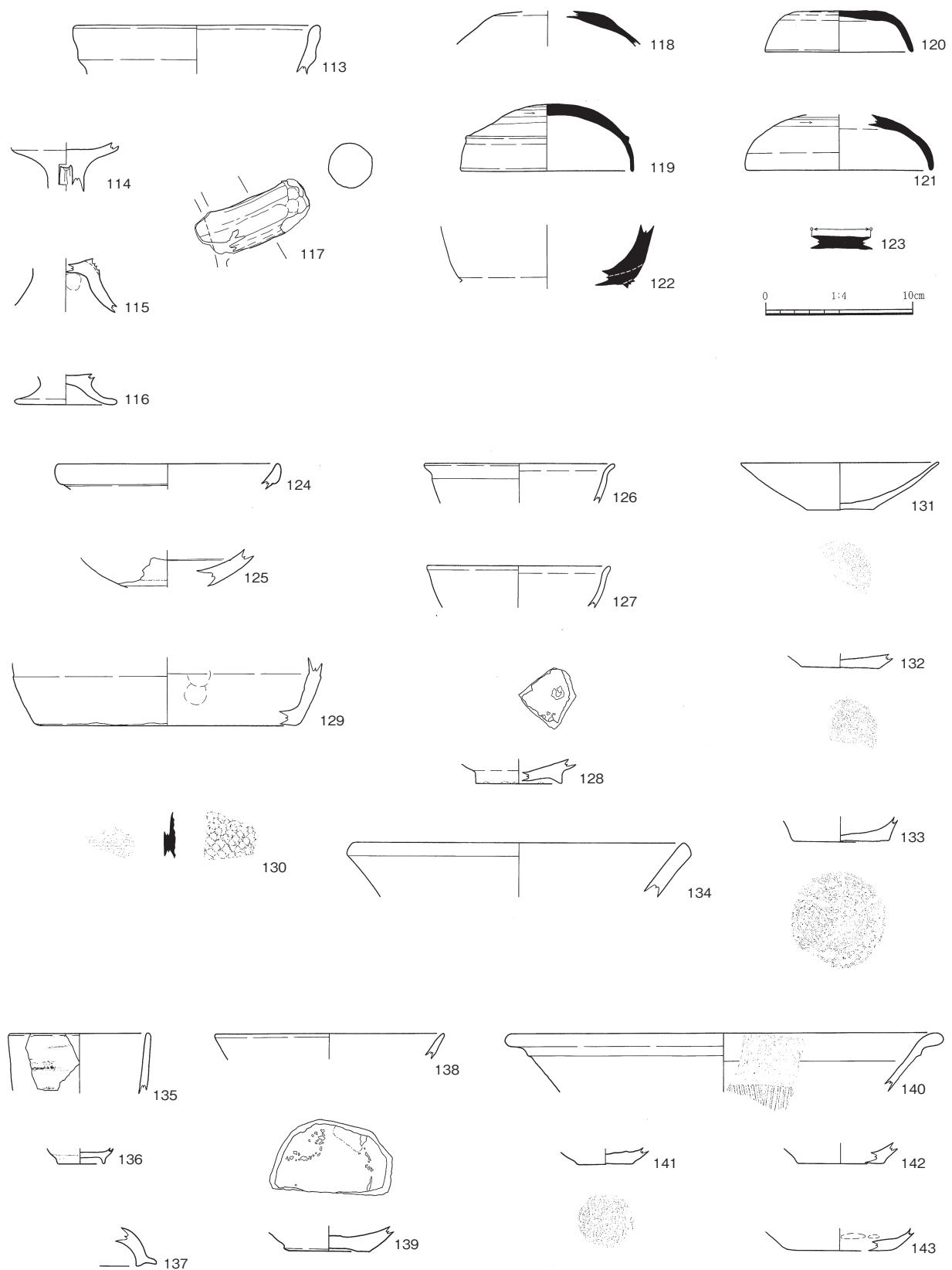


第84図 遺構外出土遺物（2）

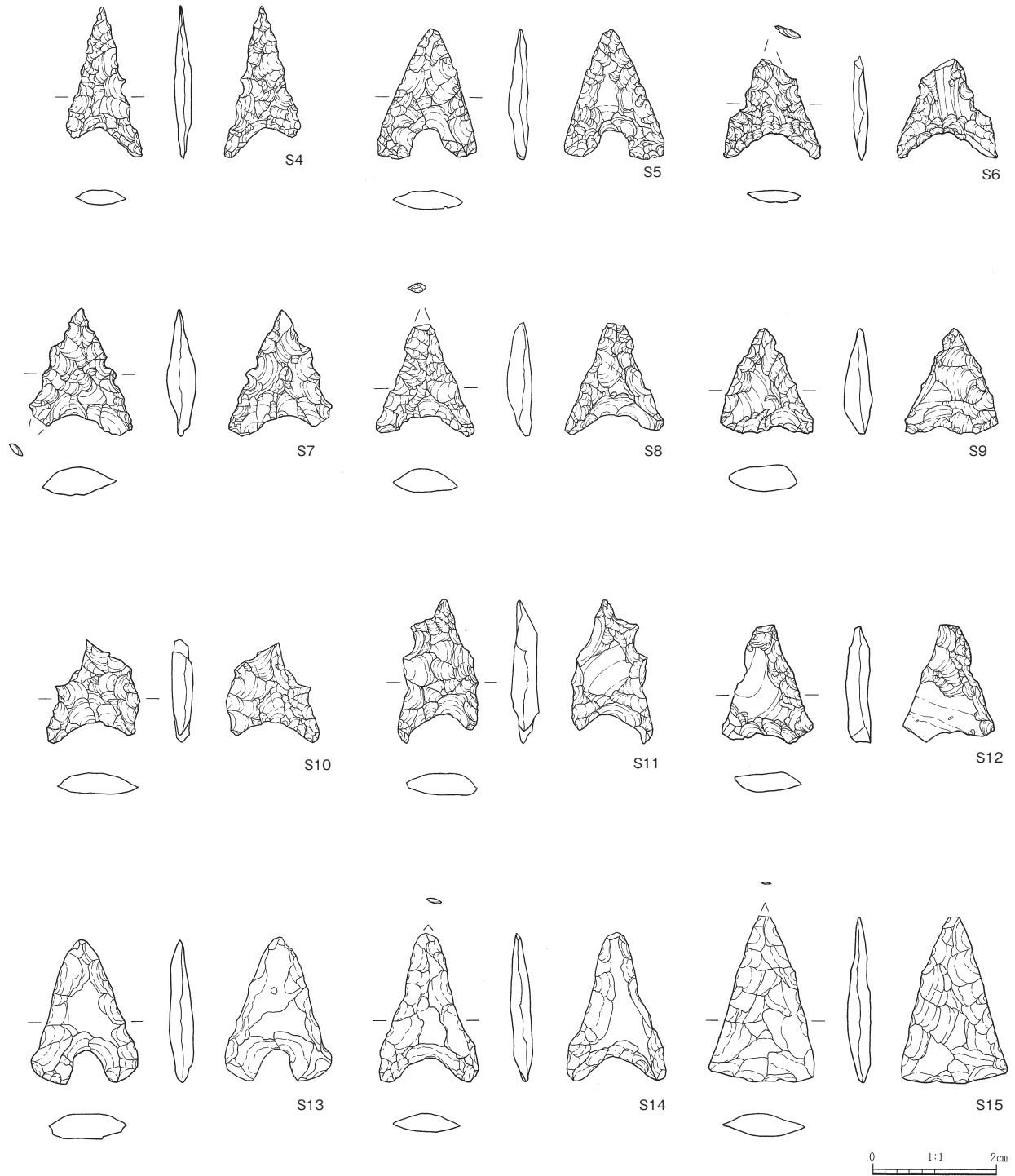
0 1:4 10cm



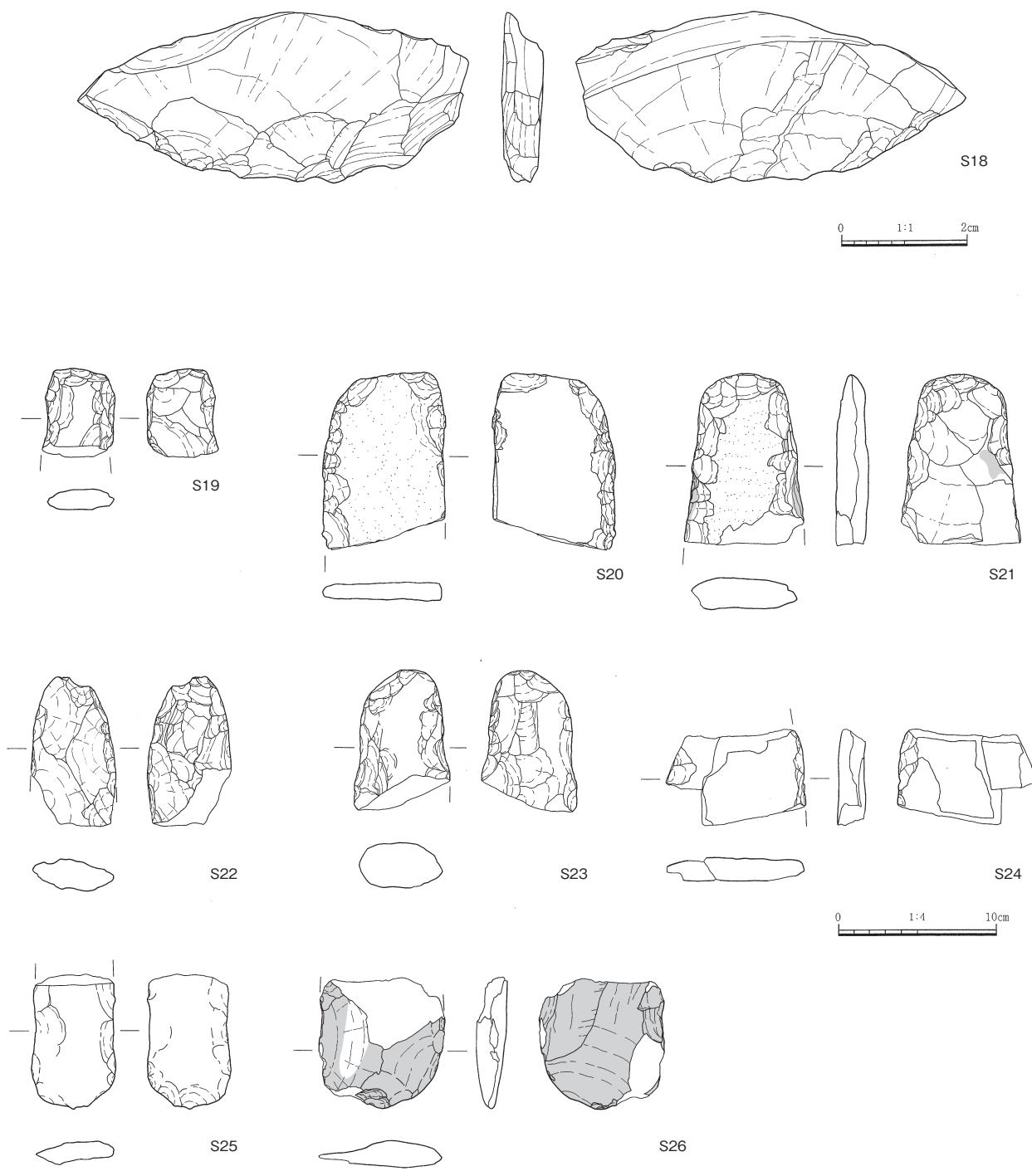
第85図 遺構外出土遺物 (3)



第86図 遺構外出土遺物（4）



第87図 遺構外出土遺物（5）



第88図 遺構外出土遺物（6）

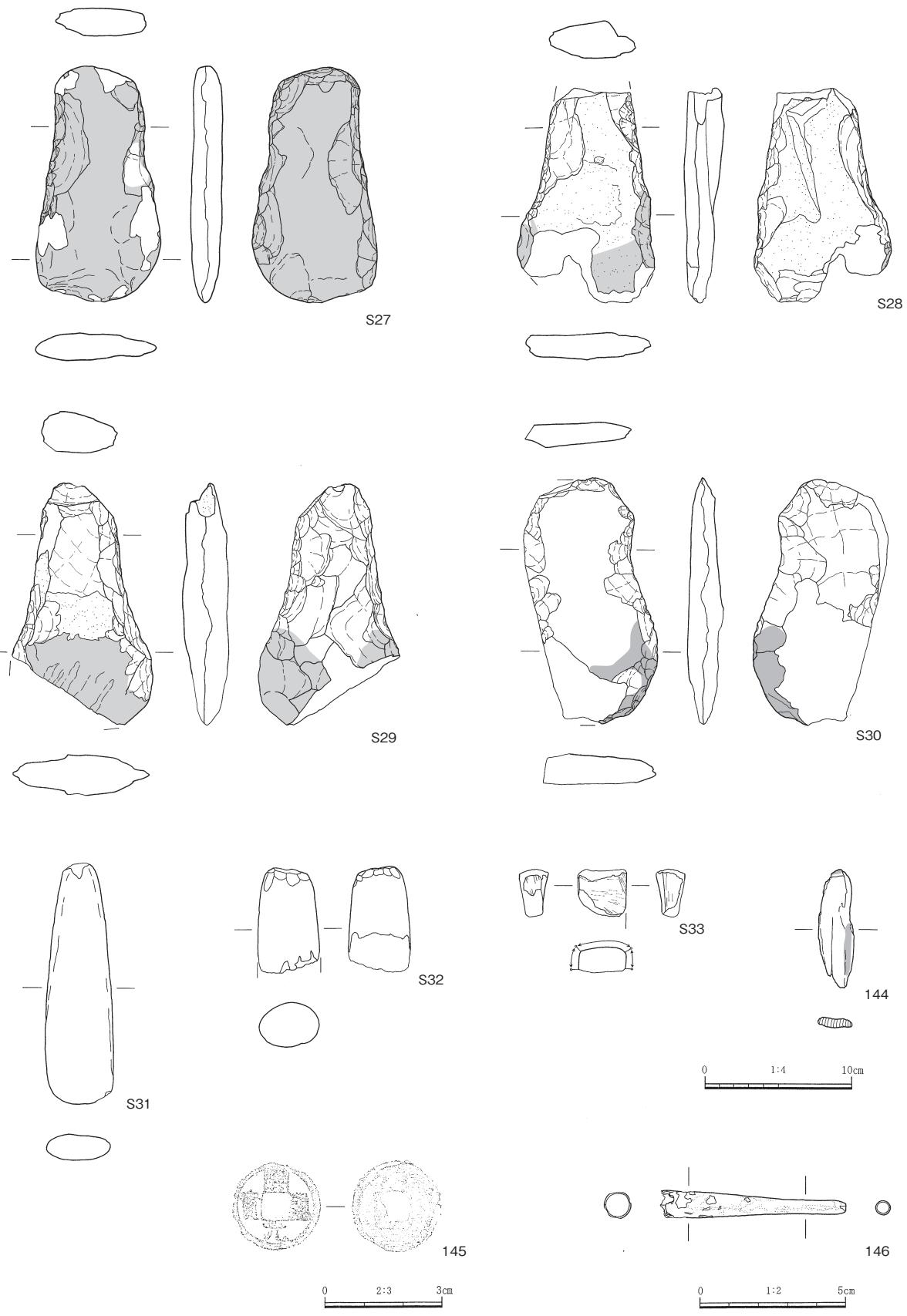
141～143は土師質土器の皿で、いずれも底部外面には回転糸切りが施されている。

S 4～S 33は石器である。

S 4～S 9は黒曜石製の石鏃である。S 4、S 5は深い抉りをもつ凹基式で、S 4は基部左側が欠損する。S 6～S 8は浅い抉りをもつ凹基式で、S 6、S 8は先端部が、S 7は基部左側が欠損する。S 9は僅かに抉りが認められる凹基式である。

S 10～S 12は黒曜石製の石鏃の未製品である。

S 13～S 17はサヌカイト製の石鏃である。S 13、S 14は深い抉りをもつ凹基式で、S 14は先端部



第89図 遺構外出土遺物 (7)

が僅かに欠損する。S15～S17は平基式で、S15は先端部が僅かに欠損する。

S18はサヌカイト製の剥片である。

S19～S30は石鍬である。S19～S23は先端部が欠損しており、上半部のみが残存する。S20は基部と両側縁を剥離調整しているが、表面には素材面が残る。石材はS19～S21が安山岩、S22が凝灰岩、S23がデイサイトである。S24は基部と先端部及び左側縁が欠損する。石材は緑色片岩である。S25、S26は先端部で、S25は短冊形を呈する。石材はS25が泥岩、S26が安山岩である。S27～S29は撥形を呈し、S28は基部と先端部が、S29は先端部が欠損する。石材はいずれも安山岩である。S30は左側縁が欠損するが、右側縁を抉り状に加工しており、しゃもじ形を呈する。石材は安山岩である。

S31、S32は磨製石斧である。石材はS31が片麻岩、S32が閃綠岩である。

S33は花崗岩製の砥石で、上下端と裏面及び左側面の大部分が欠損するが、長方形を呈すると考えられ、表面と両側面の3面を使用している。

144は粗雑な加工が施された棒状の木製品で、先端部と右側縁に焼痕が認められる。火付け木としての使用が窺える。

145は開元通寶、146は煙管の吸い口である。

## 第5節 福成大坪上遺跡2・3区のまとめ

### 1. はじめに

福成大坪上遺跡2・3区の調査では縄文時代後期から近世の陥穴1基、溝状遺構34条、土坑5基、畦畔2基、石列2基を検出した。

本節では、今回検出した遺構について時期毎に概観し、2区と3区のまとめとしたい。

### 2. 縄文時代～弥生時代

縄文時代～弥生時代の遺構は、陥穴1基、溝状遺構19条、土坑5基を検出した。

陥穴1基（SK3）と弥生時代前期の土坑3基（SK1・4・6）は調査区の南東際に直線状に並んでいる。本調査地の南西約500mに位置する清水川六反田遺跡でも、縄文時代の陥穴と弥生時代前期の土坑が同一線状に分布しており、同様な様相を呈している。

弥生時代前期には、SD26～33の8条の小規模な溝状遺構があり、これらは形態的に自然流路と考えられる。

本遺跡では、縄文時代～弥生時代前期の居住遺構は検出されなかったが、3区の南西側では調査区の南側から流れ込んだ状態で縄文時代晩期～弥生時代前期を主体とする多量の遺物が出土した。

本調査地の北東約200mにある枇杷谷遺跡は、丘陵を開析する小谷部に位置しており、縄文時代晩期～弥生時代前期の貯蔵穴2基が確認されている。本調査地の南東側にも小谷が丘陵を開析しており、さらに、遺物の流れ込んだ状況から、調査地南東側の丘陵裾部及び小谷部に当該期の遺構の存在が示唆される。

弥生時代中期後葉になると、SD6～8、19～25の10条の溝状遺構があり、このうち、SD25を除く9条の溝状遺構が尾根状地形の裾部に沿うように南西から北東方向へのび、ほぼ同位置で複数回

掘り替えられている。清水川六反田遺跡では、時期が異なるが弥生時代前期後葉の溝状遺構が尾根状地形の裾部に沿うようにのび、しかも同じような位置で複数回形成されており、本遺跡と同様な状況が認められる。

### 3. 古墳時代後期

古墳時代後期の遺構は、溝状遺構2条を検出した。

S D 4 は南西—北東方向にのび、その南東側の肩に沿って礫が散在している。礫が散在する部分には畦畔状の高まりは認められなかったが、S D 3 の北西側に隣接する畦畔1も同様な状況であることから、この部分に畦畔状の構造物があった可能性がある。

プラント・オパール分析と花粉分析の結果、雑草の多い水田であったか、あるいは水田に近接する湿潤な草地であったと推定されている。

また、3区では地山の灰白色粘土がその上層（第39図 30層）に火焰状に入り込んで変形する状況が認められたことから、地震があったと考えられる。地震があった時期については、30層から出土した遺物は、縄文時代晩期から古墳時代後期と時期幅が広いため特定できないが、伯耆町の坂長第7遺跡でも同様な状況が確認され、古墳時代中期後葉～古代と中世頃に地震があったと推定されていることから、古墳時代後期頃に本遺跡でも地震があった可能性がある。

### 4. 平安時代

平安時代の遺構は、溝状遺構8条、畦畔2基を検出した。

S D 3 は南西—北東方向にのび、その北西側には隣接して畦畔1があることから、水路として機能した可能性がある。また、S D 12～18の7基の自然流路がある。

畦畔1は南東側に隣接してS D 3 が平行し、北西側には15cm前後の段状の落差がある。上部は削平されているため、畦畔状の高まりは認められなかったが、構築材と考えられる5～27cm大の礫が認められることから、畦畔状の構造物と判断した。

畦畔2は土層断面から、当初は上端部幅0.76m、基底部幅1.25mであったが、その後、上端部幅1.5～2.3m、基底部幅2.2～3.2mの規模に拡幅されたと考えられる。層位から平安時代から中世に帰属すると考えられ、長期間にわたって存続した可能性がある。

プラント・オパール分析及び花粉分析を実施していないが、畦畔1・2と水路と考えられるS D 3 の存在から、水田が存在した可能性がある。

### 5. 中世

中世の遺構は、3区南端の標高の高い部分で溝状遺構3条を検出し、前代の畦畔2がこの時期にも存続している可能性がある。

畦畔2以外に畦畔は検出できなかったが、プラント・オパール分析と花粉分析の結果から水田の存在が推定され、さらに、近接してソバ属、アブラナ科などの畑作が営まれていたことが示唆される。

なお、周辺では、清水川六反田遺跡で12世紀、伯耆町の坂長第7遺跡で11～15世紀、坂長ブジラ遺跡で中世の水田跡が確認されている。また、清水川六反田遺跡では水田稲作と併せてソバ属の畑作が営まれていたと推定されており、この時期の農耕を考えるうえでは非常に意義がある。

## 6. 近世

近世の遺構は、溝状遺構2条を検出した。いずれも平安時代～中世と考えられる畦畔2と位置的に重複し、現在の土地境界とも位置的にほぼ重複することから、累々と土地境界として利用されていた可能性がある。いずれも肩に木杭が打ち込まれていることから、水路として利用されたと考えられる。また、SD1は南東側が深くなり、その部分に石が配置されており、水量調節等を行っていたと考えられる。

### 参考文献

- 岡田龍平ほか 1987 『枇杷谷遺跡発掘調査報告書』 会見町教育委員会  
玉木秀幸 2013 『坂長第7遺跡2 坂長第8遺跡3』 財団法人鳥取県教育文化財団  
野口良也ほか 2012 『坂長ブジラ遺跡 坂長尻田平遺跡』 財団法人鳥取県教育文化財団

# 第6章 理化学的分析

## 第1節 福成大坪上遺跡1区における自然科学分析

株式会社古環境研究所

### 1. はじめに

福成大坪上遺跡の発掘調査では、弥生時代前期と古墳時代後期の溝が検出された。先行して実施した花粉分析とプラント・オパール分析において、古墳時代後期の堆積層については水田耕作土である可能性が高いとされた。また、その下層は水田であったか水田の近接する湿潤な草地であり、上層では畑作も営まれていたと推定された。ここでは、1区における稲作の可能性ならびに周辺植生と環境を推定する目的で、花粉分析とプラント・オパール分析を行った。

### 2. 試 料

分析試料は、福成大坪上遺跡1区より採取された、N区北壁断面の試料A（黒色粘土）、N区東壁断面の試料B（黒色粘土）、試料C（淡灰色シルト）、S区西壁断面の試料1（黒色粘土）、試料2（黒色粘土）、試料3（暗灰黒黄色粘土：砂粒多く含む）、試料4（粗砂）、試料5（粗砂）の計8点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

### 3. 花粉分析

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。しかし花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

#### （1）方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm<sup>3</sup>を採量
- 2) 0.5% リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、冰酢酸によって脱水し、アセトトリス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 6) 再び冰酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と

対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

## (2) 結果

### 1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉16、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉12、シダ植物胞子2形態の計31である。これらの学名と和名および粒数を第11表に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第90図に示す。なお、200個未満であっても100個以上計数できた試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

#### [樹木花粉]

マツ属複維管束亞属、マツ属単維管束亞属、スギ、コウヤマキ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、ノグロミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属—アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亞属、コナラ属アカガシ亞属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属—ムクノキ

#### [樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科—イラクサ科、

#### [草本花粉]

オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、アカザ科—ヒユ科、カラマツソウ属、アブラナ科、チドメグサ亞科、セリ亞科、タンポポ亞科、キク亞科、ヨモギ属

#### [シダ植物胞子]

单条溝胞子、三条溝胞子

### 2) 花粉群集の特徴

#### ① N区北壁断面（試料A）

草本花粉の占める割合が高く、イネ科（イネ属型を含む）が多く、カヤツリグサ科、ヨモギ属と続き、セリ亞科、オモダカ属が出現する。樹木花粉ではスギ、コナラ属アカガシ亞属、コナラ属コナラ亞属の出現率がやや高い。

#### ② N区東壁断面（試料B・C）

試料Bでは、草本花粉の占める割合が高く、イネ科（イネ属型を含む）、カヤツリグサ科の出現率が高く、ヨモギ属、キク亞科、オモダカ属が出現する。樹木花粉ではコナラ属コナラ亞属、コナラ属アカガシ亞属、スギなどが出現する。試料Cは花粉がほとんど検出されない。

#### ③ S区西壁断面（試料1～試料5）

試料5から試料2では、花粉が検出されなかった。試料1では、樹木花粉のスギ、コナラ属アカガシ亞属、カヤツリグサ科、草本花粉のキク亞科、ヨモギ属、シダ植物单条溝胞子がわずかに検出される。

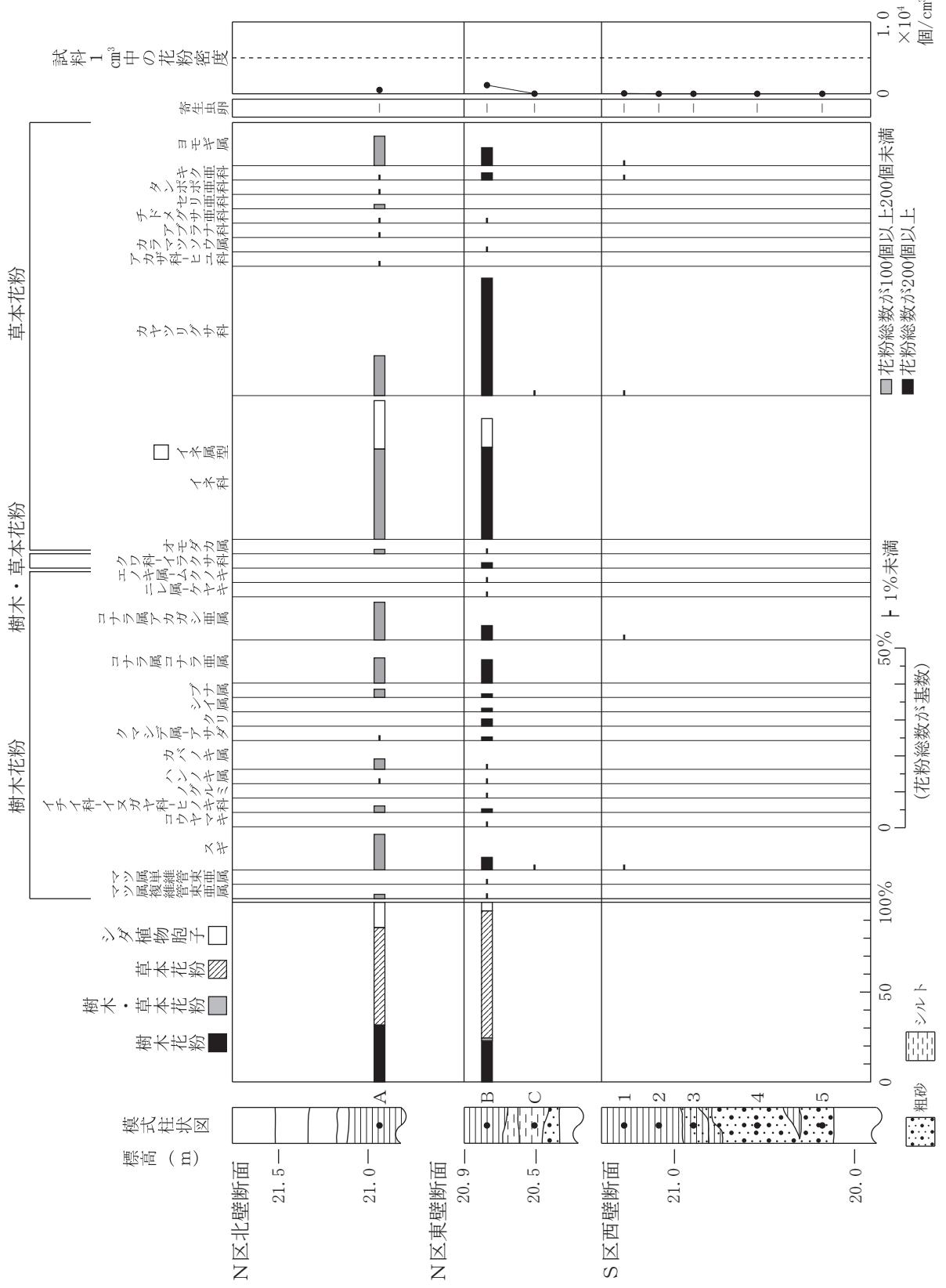
## (3) 花粉分析から推定される植生と環境

### 1) N区北壁断面（試料A）

試料Aの層準の時期は、イネ科（イネ属型を含む）を中心にカヤツリグサ科、ヨモギ属などの草本が分布していた。セリ亞科、オモダカ属の水田雑草の性格をもつ水生植物が生育し、堆積地ないし周

第11表 福成大坪上遺跡1区における花粉分析結果

学名	分類群	和名	N区北壁			N区東壁			S区西壁				
			A	B	C	1	2	3	4	5			
Arboreal pollen		樹木花粉											
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>		マツ属複維管束亜属	2	1									
<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyylon</i>		マツ属單維管束亜属		1									
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	17	7	1	1							
<i>Sciadopitys verticillata</i>		コウヤマキ		1									
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	3	2									
<i>Platycarya strobilacea</i>		ノグルミ		1									
<i>Alnus</i>		ハシノキ属	1	1									
<i>Betula</i>		カバノキ属	5	1									
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ	1	2									
<i>Castanea crenata</i>		クリ		4									
<i>Castanopsis</i>		シイ属		2									
<i>Fagus</i>		ブナ属	4	2									
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	12	13									
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	18	8		2							
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ		1									
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ		1									
Arboreal + Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉											
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科		3									
Nonarboreal pollen		草本花粉											
<i>Sagittaria</i>		オモダカ属	2	1									
Gramineae		イネ科	43	51									
<i>Oryza type</i>		イネ属型	23	16									
Cyperaceae		カヤツリグサ科	19	65	1	1							
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科	1										
<i>Thalictrum</i>		カラマツソウ属		1									
Cruciferae		アブラナ科	1										
Hydrocotyloideae		チドメグサ亜科	1	1									
Apioidae		セリ亜科	2										
Lactucoideae		タンポポ亜科	1										
Asteroideae		キク亜科	1	4		2							
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	14	10		3							
Fern spore		シダ植物胞子											
Monolate type spore		單条溝胞子	22	9		20	1						
Trilate type spore		三条溝胞子	6	1									
Arboreal pollen		樹木花粉	63	48	1	3							
Arboreal + Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉		3									
Nonarboreal pollen		草本花粉	108	149	1	6							
Total pollen		花粉総数	171	200	2	9							
Pollen frequencies of 1cm <sup>3</sup>		試料1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	5.3 ×10 <sup>2</sup>	1.2 ×10 <sup>3</sup>	1.4 ×10	5.4 ×10	0.0 ×10						
Unknown pollen		未同定花粉	4	4									
Fern spore		シダ植物胞子	28	10		20	1						
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Stone cell		石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments		微細炭化物	(+)	(+)	(+)	(+)	<(+)	<(+)	<(+)	<(+)	<(+)	<(+)	<(+)



第90図 福成大坪上遺跡 1 区における花粉ダイアグラム

圍に水田が分布していたとみなされる。周辺地域には、スギ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属の針葉樹ないし広葉樹の森林が分布していたと推定される。

### 2) N区東壁断面（試料B・C）

試料Bの層準の時期は、イネ科（イネ属型を含む）とカヤツリグサ科にヨモギ属、キク亜科、オモダカ属が伴って分布していた。カヤツリグサ科が多く、水田ないし湿地の環境が示唆される。周辺地域には、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、スギの森林が分布する。試料Cではほとんど花粉が検出されず、分解または淘汰を受けた堆積物とみなされる。

### 3) S区西壁断面（試料1～試料5）

下部より試料5から試料2は花粉が検出されず、試料1でわずかに花粉が出現するのみであった。下部の試料4、5は粗粒堆積物であり、淘汰により花粉などの微小遺物が堆積しなかったと推定される。上部の試料1、2、3は花粉など有機質遺体が分解した可能性が示唆され、分解を受ける乾湿を繰り返す堆積環境が推定される。なお、試料1で検出されるスギ、コナラ属アカガシ亜属の樹木、カヤツリグサ科、キク亜科、ヨモギ属、シダ植物は周辺の植生の要素とみなされる。

## 4. プラント・オパール分析

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（ $\text{SiO}_2$ ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

### (1) 方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに直径約40μmのガラスピーブを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が500以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスピーブ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーブの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、この値に試料の仮比重（ここでは1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-5}\text{ g}$ ）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。各分類

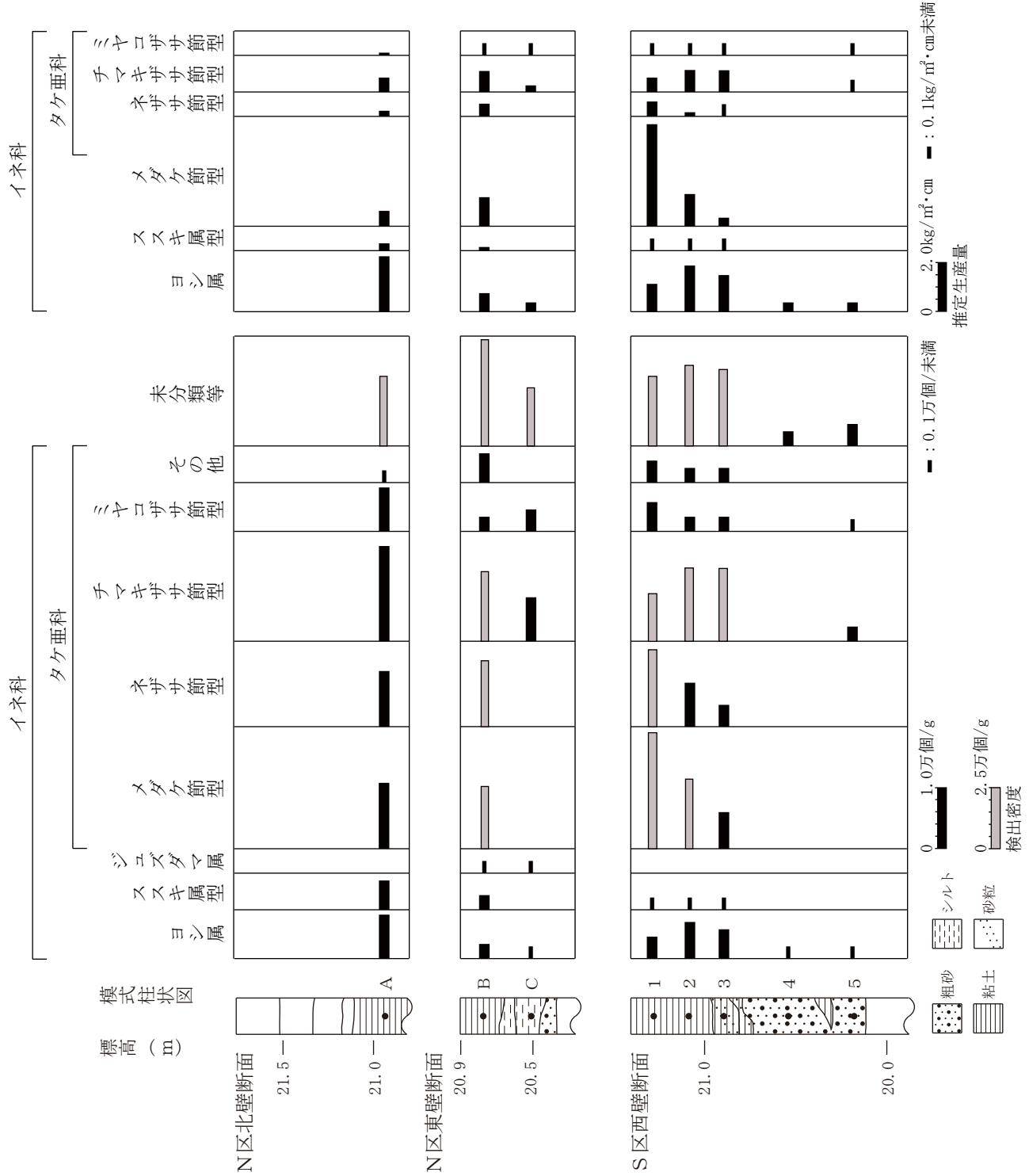
第12表 福成大坪上遺跡1区のプラント・オパール分析結果

検出密度 (単位 : ×100個/g)

分類群 (和名・学名) \ 層位	N区北壁			N区東壁			S区西壁		
	A		B	C	1		2	3	4
	N区北壁	N区東壁							
イネ科									
ヨシ属	Gramineae (Grasses)	36	12	6	18	30	24	6	6
ススキ属型	<i>Phragmites</i>	24	12	6	6	6	6	6	6
ジユズダマ属	<i>Miscanthus</i> type								
タケ亜科	<i>Coix</i>								
メダケ節型	Bambusoideae (Bamboo)								
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	54	102			361	114	30	
チマキザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	48	108			126	36	18	
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	78	114	36	78	120	119	12	
その他	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassimodi</i>	36	12	18	24	12	12	6	
未分類等	Others	6	24		18	12	12		
プラント・オパール総数	Unknown	114	174	95	114	132	125	12	18
Total		396	558	155	745	462	346	24	48

おもな分類群の推定生産量 (単位 : kg/m<sup>2</sup>・cm)

ヨシ属	<i>Phragmites</i>	2.27	0.76	0.38	1.14	1.89	1.50	0.38	0.38
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.30	0.15		0.07	0.07	0.07	0.07	
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.63	1.19		4.18	1.32	0.35		
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.23	0.52		0.61	0.17	0.09		
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.59	0.86	0.27	0.59	0.90	0.89	0.09	
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassimodi</i>	0.11	0.04	0.05	0.07	0.04	0.04	0.02	



第91図 福成大坪上遺跡1区のプラント・オパール分析結果

群の換算係数は、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山、2000）。

## （2）結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、ヨシ属、ススキ属型、ジュズダマ属、タケ亜科（メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を第12表、第91図に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。なお、植物種によって機動細胞珪酸体の生産量は相違するため、検出密度の評価は植物種ごとに異なる。

## （3）プラント・オパール分析から推定される植生と環境

イネはいずれの試料からも検出されなかった。したがって、調査地において稻作が行われていた可能性は考えにくい。なお、花粉分析においてN区北壁断面試料A、N区東壁断面試料Bの層準では、ともに水田雑草をともなってイネ属型の花粉が検出されていることから、調査地の近傍に水田が分布していた可能性が考えられる。

### 1) N区北壁断面（試料A）

試料Aでは、ヨシ属が比較的高い密度である。推定生産量（第91図の右側）ではヨシ属が卓越することから、試料Aの層準の時期の調査地は湿った環境であったと推定される。

### 2) N区東壁断面（試料B・C）

試料Bでは、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型が高い密度であり、推定生産量ではヨシ属もこれらと同等である。このことから、試料Bの層準では調査地周辺の乾いたところにはメダケ属（メダケ節、ネザサ節）やクマザサ属（チマキザサ節）などの竹笹類が生育していたと考えられる。また、ヨシ属の生育する湿った部分もあったと思われる。試料Cでは、プラント・オパール密度が低く、ヨシ属、チマキザサ節型およびミヤコザサ節型が少量検出されたのみである。このことから、試料Cの層準はイネ科草本植物の生育には適さない堆積環境であったと推定される。

### 3) S区西壁（試料1～5）

試料1ではメダケ節型が非常に高い密度であり、ネザサ節型とチマキザサ節型も高い密度である。推定生産量はメダケ節型が極めて卓越している。試料2ではヨシ属が優勢であり、メダケ節型、チマキザサ節型がこれに続く。こうしたことから、試料1と試料2の層準では、下部は比較的湿った環境であり、乾いたところにはメダケ属（おもにメダケ節）やクマザサ属（おもにチマキザサ節）が生育していたと考えられる。上部ではメダケ属（おもにメダケ節）が繁茂する乾いた環境となり、部分的あるいは時期によってはヨシ属の生育する湿ったところもみられたと推定される。試料3ではヨシ属が優勢であり、チマキザサ節型がこれに続く。したがって、試料3の層準の時期の調査地は比較的湿った環境であり、周辺の乾いたところにはクマザサ属（おもにチマキザサ節）が生育していたと考えられる。試料4、試料5の層準ではプラント・オパール密度が極めて低く、ほとんど検出されないことから、土層の堆積速度が非常に速かったと推定される。

## 5.まとめ

福成大坪上遺跡1区において花粉分析とプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性ならびに周辺植生と環境を推定した。その結果、N区北壁断面試料A、N区東壁断面試料Bから比較的多くの花粉が検出され、イネ科（ヨシ属を含む）を主にカヤツリグサ科、ヨモギ属、オモダカ属の草本が優勢に分布していたと推定された。イネ属型およびカヤツリグサ科やオモダカ属などの水田雑草の性格をもつ水生植物の分布が認められることから、試料採取地の周囲には水田の分布が示唆された。また、周辺地域にはスギ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属の針葉樹ないし広葉樹の森林の分布が示唆された。N区東壁断面試料C、S区西壁断面試料1から試料5の各層準は花粉密度が極めて低いか検出されず、淘汰を受ける堆積環境や乾湿を繰り返す環境で生成された堆積物であることが考えられた。なお、S区西壁断面試料4と試料5の層準については、プラント・オパールも非常に低い密度であることから、堆積速度の速い堆積物であると推定された。

## 参考文献

- 中村純（1967）花粉分析. 古今書院, p.82-102.
- 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
- 中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.
- 中村純（1977）稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.
- 中村純（1980）日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.
- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 31, p.70-83.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）. 考古学と植物学. 同成社, p.189-213.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—. 考古学と自然科学, 20, p.81-92.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志（1998）稲作の起源を探る. 岩波新書.

## 第2節 福成大坪上遺跡2区における自然科学分析

株式会社古環境研究所

### 1. はじめに

福成大坪上遺跡は、鳥取県西伯郡南部町福成に所在する。発掘調査において、弥生時代前期～中期と古墳時代後期と考えられる溝状遺構が検出された。なお、古墳時代後期及び中世の堆積層については水田耕作の可能性が想定された。

ここでは、当該層における稻作の可能性を検討するとともに、周辺植生と環境を推定する目的で花粉分析とプラント・オパール分析を行った。

### 2. 試 料

分析試料は、古墳時代後期と中世の水田耕作層と想定された土層とその上下より採取された試料No.1（11層：灰褐色土 旧耕作土層）、試料No.2（17層：暗灰色粘質土 中世の水田耕作土？）、試料No.3（31層：暗灰色粘質土 古墳時代後期の水田耕作土？）、試料No.4（40層：暗灰色粘土）の4点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

### 3. 花粉分析

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。しかし花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

#### （1）方 法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から 1 cm<sup>3</sup>を採量
- 2) 0.5% リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

## (2) 結 果

### 1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉24、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉18、シダ植物胞子2形態の計46である。これらの学名と和名および粒数を第13表に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第92図に示す。なお、200個未満であっても100個以上計数できた試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真（図版47）に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかつた。以下に出現した分類群を記載する。

#### [樹木花粉]

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、クルミ属、サワグルミ、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属—アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属—ムクノキ、サンショウ属、カエデ属、トチノキ、ノブドウ、ツツジ科

#### [樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科—イラクサ科、マメ科

#### [草本花粉]

オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科—ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、キカシグサ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

#### [シダ植物胞子]

単条溝胞子、三条溝胞子

### 2) 花粉群集の特徴

試料No.1（11層：灰褐色土 旧耕作土層）、試料No.2（17層：暗灰色粘質土 中世の水田耕作土？）、試料No.3（31層：暗灰色粘質土 古墳時代後期の水田耕作土？）、試料No.4（40層：暗灰色粘土）において下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。

40層では、草本花粉が65.5%、樹木花粉が27.0%を占め、密度は低い。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）が高率に出現し、カヤツリグサ科、ヨモギ属が伴われ、ソバ属が出現する。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属、スギが出現する。

31層では、古草本花粉が48.5%、樹木花粉が47.5%を占める。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）が高率に出現し、カヤツリグサ科、ヨモギ属が伴われ、ミズアオイ属、オモダカ属が出現する。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科が出現し、下部の40層と花粉組成、構成とも概ね同じである。

17層では、草本花粉が64.0%を占めるようになり、イネ科（イネ属型を含む）が増加し、カヤツリグサ科が減少する。樹木花粉のコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属が減少する。

11層では、草本花粉が77.0%を占めるようになり、ますますイネ科（イネ属型を含む）が増加し、アブラナ科、ナデシコ科も増加する。樹木花粉では、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科が減少する。

### (3) 花粉分析から推定される植生と環境

下部より、40層はイネ科が高率であるが、カヤツリグサ科、ヨモギ属が比較的多く伴われ、イネ属型、ソバ属が出現する。周辺で水田が営まれ、ソバなどの畑作も行われている。31層はイネ科（イネ属型を含む）の出現率が低下し、周辺の水田が縮小したとみなされる。40層と31層においては、水田雑草で花粉生産量が少なく飛散性の低い虫媒花のミズアオイ属やオモダカ属が検出されるが、カヤツリグサ科が多いことから本地点が雑草の多い水田であったか湿潤な草地であったことが推定される。

17層になると、カヤツリグサ科が減少する一方、イネ科とイネ属型が増加し高率になる。また、オモダカ属、ミズアオイ属、アブラナ科が伴われる。11層旧耕作土層ではその傾向はより大きくなる。こうしたことから、17層と11層の堆積物は水田土壤層であったとみなされる。またソバ属とアブラナ科などとともに畑作雑草のナデシコ科が検出され、近接して畑も営まれていたとみなされる。

樹木は、下部でコナラ属アカガシ亜属の照葉樹とコナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹がやや多く、中部でスギがやや増加するが、上部ではいずれの樹木も減少し、森林が縮小し水田や畑が拡大したと推定される。

## 4. プラント・オパール分析

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

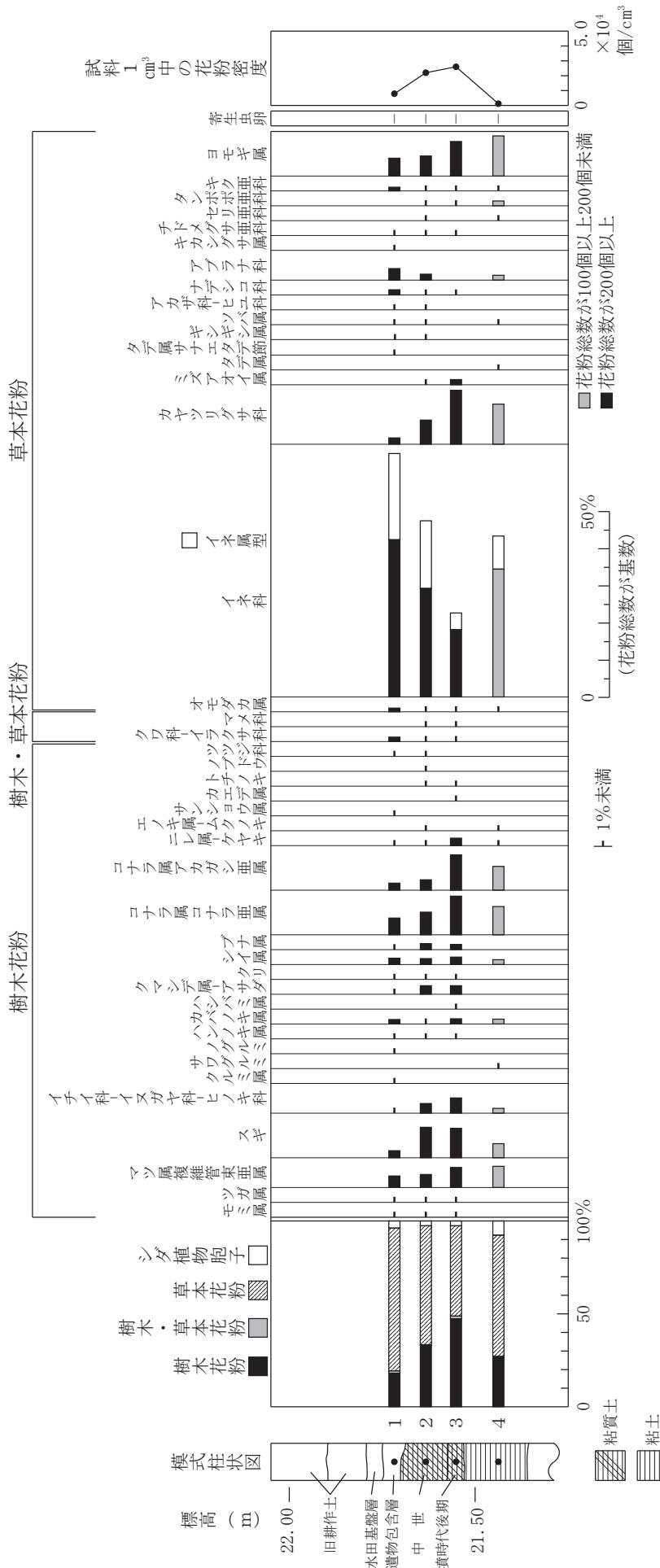
### (1) 方 法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに直径約40 μmのガラスピーブを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が500以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスピーブ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーブの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、この値に試料の仮比重（ここでは1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-5}\text{ g}$ ）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。各分類



第92図 福成大坪上遺跡2区における花粉ダイアグラム

第13表 福成大坪上遺跡2区における花粉分析結果

分類群			1	2	3	4
学名	和名					
Arboreal pollen	樹木花粉					
<i>Abies</i>	モミ属	1	1	1		
<i>Tsuga</i>	ツガ属	1	4	1		
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属複維管束亜属	13	15	24	9	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	8	35	35	6	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1	11	18	2	
<i>Juglans</i>	クルミ属	2				
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ				1	
<i>Platycarya strobilacea</i>	ノグルミ	1				
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	2	3	2		
<i>Betula</i>	カバノキ属	5	1	6	2	
<i>Corylus</i>	ハシバミ属			1		
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	3	10	10		
<i>Castanea crenata</i>	クリ	1	4	3		
<i>Castanopsis</i>	シイ属	7	7	9	2	
<i>Fagus</i>	ブナ属	2	7	6		
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	19	26	46	12	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	8	12	42	10	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	3	4	9	1	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ		2		1	
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウウ属	1				
<i>Acer</i>	カエデ属			1		
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ		1	1		
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>	ノブドウ		1			
Ericaceae	ツツジ科	1	1			
Arboreal + Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉					
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	5	1	2		
Leguminosae	マメ科		1	4		
Nonarboreal pollen	草本花粉					
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	4	4	1	1	
Gramineae	イネ科	177	125	80	54	
<i>Oryza type</i>	イネ属型	97	78	20	14	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	7	28	64	17	
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属		2	6		
<i>Polygonum</i>	タデ属				1	
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	1				
<i>Rumex</i>	ギンギシ属	1	1			
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	2	1		1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒュ科	1	2			
Caryophyllaceae	ナデシコ科	6	1	1		
Cruciferae	アブラナ科	13	7		2	
<i>Rotala</i>	キカシグサ属	2				
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	1	3	3		
Aipoideae	セリ亜科		2		1	
Lactucoideae	タンポポ亜科		1	2	2	
Astroideae	キク亜科	4	3	3	1	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	20	23	41	17	
Fern spore	シダ植物胞子					
Monolate type spore	単条溝胞子	8	6	11	12	
Trilate type spore	三条溝胞子	9	5	1	1	
Arboreal pollen	樹木花粉	79	145	215	46	
Arboreal + Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	5	2	6		
Nonarboreal pollen	草本花粉	336	281	221	111	
Total pollen	花粉総数	420	428	442	157	
Pollen frequencies of 1cm <sup>3</sup>	試料1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	7.9	2.2	2.7	1.2	
		×10 <sup>3</sup>	×10 <sup>4</sup>	×10 <sup>4</sup>	×10 <sup>3</sup>	
Unknown pollen	未同定花粉	7	4	2	9	
Fern spore	シダ植物胞子	17	11	12	13	
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(+)	(+)	(+)	

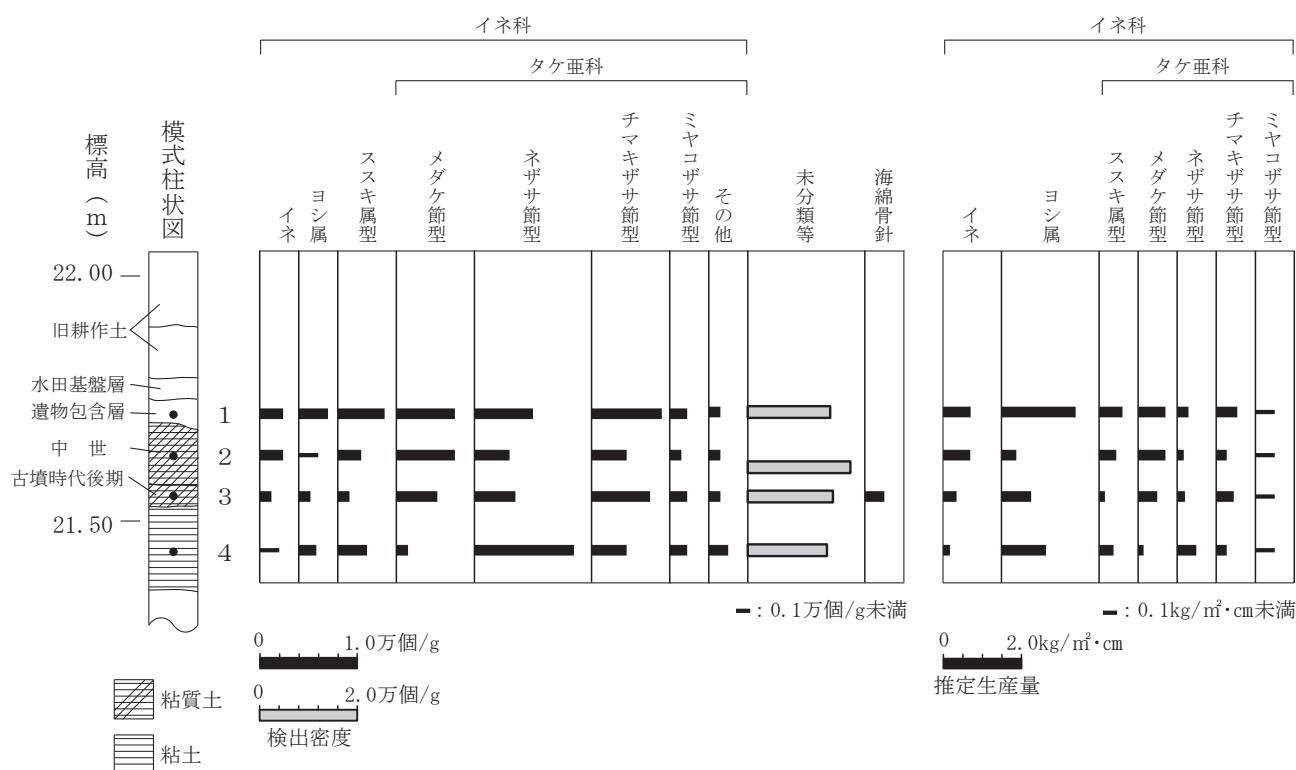
第14表 福成大坪上遺跡2区のプラント・オパール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群(和名・学名)＼層位		1	2	3	4
イネ科	Gramineae (Grasses)				
イネ	<i>Oryza sativa</i>	24	24	12	6
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	30	6	12	18
ススキ属型	<i>Misanthus type</i>	48	24	12	30
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)				
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	60	60	42	12
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	60	36	42	102
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa etc.</i>	72	36	60	36
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	18	12	18	18
その他	Others	12	12	12	6
未分類等	Unknown	169	210	174	162
(海綿骨針)	Sponge				12
プラント・オパール総数	Total	493	420	384	390

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>·cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.71	0.70	0.35	0.18
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	1.90	0.38	0.76	1.14
ススキ属型	<i>Misanthus type</i>	0.60	0.30	0.15	0.37
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.70	0.70	0.49	0.14
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.29	0.17	0.20	0.49
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa etc.</i>	0.54	0.27	0.45	0.27
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.05	0.04	0.05	0.05



第93図 福成大坪上遺跡2区のプラント・オパール分析結果

群の換算係数は、イネ（赤米）は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山, 2000）。

## （2）結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。また、プラント・オパール以外に海綿骨針が検出された。これらの分類群について定量を行い、その結果を第14表、第93図に示した。主要な分類群については顕微鏡写真（図版48）を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。なお、植物種によって機動細胞珪酸体の生産量は相違するため、検出密度の評価は植物種ごとに異なる。

## （3）福成大坪上遺跡2区における稲作と環境

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、通常、イネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山, 2000）。ただし、近年の調査例では、密度が3,000個/g程度あるいはそれ以下でも水田遺構が検出された例が多く報告されていることから、ここでは3,000個/gを目安として検討する。

イネはすべての層で検出されている。このうち、上位の11層と17層ではいずれもプラント・オパール密度が2,400個/gと比較的高い値である。花粉分析からは両層は水田耕作層と考えられたことから、11層と17層では調査地において稲作が行われていた可能性が高いと判断される。31層と40層では、プラント・オパール密度はそれぞれ1,200個/g、600個/gとやや低い値であり、ヨシ属が優勢となっている。このことから、両層では調査地において稲作が行われていた可能性を積極的に支持することはできない。花粉分析によると40層では周辺で水田が営まれており、31層では水田が縮小したと推定されている。また、本地点が雑草の多い水田であったか、湿潤な草地であったことが推定されており、プラント・オパール分析の結果はこのことと矛盾しない。

イネ以外の分類群では、11層でヨシ属が比較的高い密度である。おもな分類群の推定生産量（第93図の右側）をみると、11層以外にも31層や40層でもヨシ属が優勢となっている。このことから、11層、31層および40層の時期の調査地は比較的湿った環境であったと推定される。また、各層とも調査地周辺の乾いたところにはススキ属やササ属（チマキザサ節やミヤコザサ節）、メダケ属（メダケ節、ネザサ節）などの竹箪類が生育していたと考えられる。

## 5.まとめ

福成大坪上遺跡2区において花粉分析とプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性ならびに周辺植生と環境を推定した。その結果、中世の水田耕作層の可能性が想定されていた17層については、花粉分析とプラント・オパール分析のいずれにおいても水田耕作土の可能性が高いと判断された。また、イネ属型、イネ科、カヤツリグサ科、オモダカ属、ミズアオイ属などの出現傾向から、下部の40層と31層は水田であったか水田の近接する湿潤な草地であったことが示唆された。なお上部の17層と11層では、他にソバ属とアブラナ科などの畠作物と、ナデシコ科などの畠作雑草の性格ももつ

草本が検出されており、畑作も営まれていたとみなされた。

### 参考文献

- 中村 純 (1967) 花粉分析. 古今書院, p.82-102.
- 島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
- 中村 純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.
- 中村 純 (1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.
- 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 31, p.70-83.
- 杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール). 考古学と植物学. 同成社, p.189-213.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志 (1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—. 考古学と自然科学, 20, p.81-92.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志 (1998) 稲作の起源を探る. 岩波新書.

### 第3節 福成大坪上遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社古環境研究所

#### 1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約6万年前までの年代測定が可能である。

ここでは、福成大坪上遺跡3区で検出された土坑（SK7）の年代を明らかにする目的で、当該土坑より出土した木材を対象に、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

#### 2. 試料と方法

測定試料は、木材1点である（第15表）。放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理を行った。

- 1) 蒸留水中で細かく粉碎後、超音波および煮沸により洗浄
- 2) 塩酸（HCl）により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム（NaOH）により二次的に混入した有機酸を除去
- 3) 再び塩酸（HCl）で洗浄後、アルカリによって中和
- 4) 定温乾燥機内で80°Cで乾燥

前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、n-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデトロン加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。測定試料と方法を第15表にまとめた。

第15表 測定試料及び処理

試料名	対象物	前処理・調整	測定法
No. 1	木材	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS

※AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

#### 3. 結 果

年代測定の結果を第16表に示す。

##### 1) 未補正 $^{14}\text{C}$ 年代値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$ の半減期は国際的慣例によりLibbyの5568年を使用した（実際の半減期は5730年）。

第16表 測定結果

試料名	測定No.	未補正 <sup>14</sup> C年代 <sup>1)</sup> (Beta-)	$\delta^{13}\text{C}$ <sup>2)</sup> (‰)	補正 <sup>14</sup> C年代 <sup>3)</sup> (年BP)	暦年代(西暦) <sup>4)</sup>
No. 1	361505	3340±30	-28.1	3390±30	交点: cal BC 1690 1 σ : cal BC 1740～1710, : cal BC 1700～1660, : cal BC 1650～1640 2 σ : cal BC 1750～1620

BP : Before Physics (Present) , BC : 紀元前

## 2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比を補正するための炭素安定同位体比 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

## 3) 補正<sup>14</sup>C年代値

試料の炭素安定同位体比 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C) を測定して試料の炭素の同位体分別を知り、<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料の  $\delta^{13}\text{C}$  値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代である。

なお、 $\delta^{13}\text{C}$  値は加速器質量分析計システムによって自動的に測定され、それにともない補正<sup>14</sup>C 年代値も自動計算される。

## 4) 暦年代 Calendar Age

<sup>14</sup>C 年代値を実際の年代値 (暦年代) に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中<sup>14</sup>C濃度の変動および<sup>14</sup>Cの半減期の違いを較正する必要がある。具体的には、年代既知の樹木年輪の<sup>14</sup>Cの詳細な測定値、サンゴのU/Th (ウラン/トリウム) 年代と<sup>14</sup>C年代の比較、湖の縞状堆積物の年代測定により補正曲線を作成し、暦年代を算出する。<sup>14</sup>C年代の暦年較正には、Beta Analytic社オリジナルプログラムであるBETACAL09 (較正曲線データ: IntCal09) を使用した。暦年代の交点とは、補正<sup>14</sup>C年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (68%確率) と 2 σ (95%確率) は、補正<sup>14</sup>C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の 1 σ・2 σ 値が表記される場合もある。

## 4. 所 見

福成大坪上遺跡3区で検出された土坑 (SK7) の年代を検討する目的で、加速器質量分析法 (AMS法) による放射性炭素年代測定を行った。その結果、出土した木材 (試料1) は3390±30年BP (2 σの暦年代でBC1750～1620年) の年代値であった。

## 文 献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), 425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.
- Heaton TJ, Blackwell PG, Buck CE. (2009) A Bayesian approach to the estimation of radiocarbon

calibration curves: the IntCal09 methodology. Radiocarbon, 51(4), 1151-1164.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の<sup>14</sup>C年代編集委員会編「日本先史時代の<sup>14</sup>C年代：3-20, 日本第四紀学会.

Reimer PJ, Baillie MGL, Bard E, Bayliss A, Beck JW, Blackwell PG, Bronk Ramsey C, Buck CE, Burr GS, Edwards RL, Friedrich M, Grootes PM, Guilderson TP, Hajdas I, Heaton TJ, Hogg AG, Hughen KA, Kaiser KF, Kromer B, McCormac FG, Manning SW, Reimer RW, Richards DA, Southon JR, Talamo S, Turney CSM, van der Plicht J, Weyhenmeyer CE. (2009) IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon 51(4):1111–50.

第17表 福成大坪上遺跡2・3区出土土器・土製品・陶磁器観察表

遺物番号	捕団番号	遺構層位	種別器種	法量(cm)			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
				口径	底径	器高					
1 44	S D 19	弥生土器 底部	—	※5.2	△3.2	外面：胴部ミガキ、底部ナデ 内面：ケズリ後ナデ		密	良好	黒茶色	外面黒斑
2 44	S D 20	弥生土器 壺	—	—	△7.2	外面：ハケ、ナデ、ハケ状工具による刺突 内面：ナデ、指押さえ、ハケ		密	良好	灰褐色	
3 44	S D 20	弥生土器 甕	※25.2	—	△4.2	外面：指押さえ、ナデ、ハケ 内面：ナデ		密	良好	灰褐色	
4 44	S D 20	弥生土器 底部	—	※12.0	△3.9	外面：胴部ヘラ状工具によるナデ、底部ナデ 内面：ナデ		密	良好	黒茶色	
5 44	S D 20	弥生土器 底部	—	※11.2	△4.4	外面：胴部ヘラ状工具によるナデ、底部ナデ 内面：ケズリ後ナデ		密	良	灰褐色	
6 44	S D 20	弥生土器 底部	—	※7.0	△3.4	外面：ミガキ 内面：ナデ		密	良	灰褐色	外面黒斑
7 44	S D 21	突帯文土器 甕	—	—	△3.9	外面：口縁部1条の凹線 内面：ナデ		密	良	灰褐色	
8 44	S D 21	弥生土器 甕	※16.8	—	△3.7	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ミガキか？		密	良	灰褐色	外面煤付着
9 44	S D 21	弥生土器 甕	※34.1	—	△2.9	外面：ハケ、指押さえ、1条のヘラ描沈線 内面：ナデ		密	良	灰褐色	
10 44	S D 21	弥生土器 甕	※16.3	—	△10.6	外面：口縁部3条の凹線、胴部ハケ 内面：口縁部ナデ、胴部指押さえ、ケズリ後ナデ		密	良好	灰褐色	
11 44	S D 21	弥生土器 底部	—	※10.2	△3.1	外面：胴部ヘラ状工具によるナデ、底部ナデ 内面：指押さえ、ケズリ後ナデ		密	良好	灰褐色	底部外面粗状圧痕
12 44	S D 21	土師質土器 坏身	—	※8.1	△3.0	外面：胴部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：胴部回転ナデ、底部ナデ		密	良	淡灰褐色	
13 44	S D 23	弥生土器 甕	※22.7	—	△3.8	外面：ナデ 内面：ケズリ後ナデ		密	良好	灰褐色	
14 48	S D 27	弥生土器 甕	※23.0	—	△2.6	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ		密	良	黄灰白色	
15 50	S D 28	弥生土器 甕	—	—	△1.7	外面：ナデ 内面：ナデ		密	やや良	橙褐色	
16 58	S K 6	突帯文土器 甕	—	—	△2.2	外面：ナデ 内面：ナデ		やや密	やや良	灰褐色	
17 58	S K 6	弥生土器 甕	※18.6	—	△2.1	外面：ナデ 内面：ナデ		密	良好	灰褐色	
18 58	S K 6	弥生土器 甕	※12.5	—	△1.6	外面：口縁部3条の凹線、頸部ナデ 内面：ナデ		密	良好	灰褐色	
19 62	S D 3	土師器 坏身	—	※7.6	△2.9	外面：胴部ナデ、底部ヘラ切り後指押さえ、ナデ 内面：ナデ		密	良	淡橙褐色	
20 65	S D 4	弥生土器 甕	※19.0	—	△2.6	外面：口縁部3条の凹線、頸部ナデ 内面：ナデ		密	良	灰褐色	
21 65	S D 4	須恵器 坏蓋	※12.0	—	△3.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ		密	良好	青灰色	
22 66	S D 5	弥生土器 甕	※13.4	—	△2.2	外面：口縁部4条の凹線、頸部ナデ 内面：ナデ		密	良好	黒茶色	
23 66	S D 5	土師器 甕	※18.4	—	△2.1	外面：ナデ 内面：ナデ		密	良好	黒茶色	
24 68	S D 11	土師質土器 皿	—	※6.8	△0.8	外面：胴部ナデ、底部板状圧痕 内面：ナデ		密	良	橙褐色	
25 81	S D 1	磁器 碗	※7.6	—	△2.7			密	良好	淡灰白色	
26 81	S D 1	磁器 皿	※12.5	—	△2.1			密	良好	淡灰白色	
27 81	S D 1	陶器 皿	—	※8.4	△3.2			密	良	褐色	

遺物番号	捕获番号	遺構層位	種別器種	法量(cm)			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
				口径	底径	器高					
29	83	D-5 VII層	縄文土器 鉢	-	-	△7.0	外面：表面剥離 内面：貝殻条痕	密	良	灰褐色	
30	83	D-4 VII層	突帯文土器 甕	-	-	△1.8	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
31	83	トレンチ11	突帯文土器 甕	-	-	△3.1	外面：ヘラ状工具によるナデ 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
32	83	D-4 VII層	突帯文土器 甕	-	-	△3.1	外面：ヘラ状工具によるナデ 内面：ケズリ後ナデ	密	良	灰褐色	
33	83	C-4 VII層	突帯文土器 甕	※27.4	-	△28.1	外面：ヘラ状工具によるナデ 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
34	83	C-4 VII層	突帯文土器 甕	-	-	△2.9	外面：ヘラ状工具によるナデ 内面：ナデ	密	良	灰褐色	内面黒斑
35	83	D-5 VII層	突帯文土器 甕	-	-	△2.4	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
36	83	D-5 VII層	突帯文土器 甕	-	-	△3.6	外面：ヘラ状工具によるナデ 内面：ケズリ後ナデ	密	良	灰褐色	
37	83	D-5 VII層	突帯文土器 甕	-	-	△2.5	外面：ナデ 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
38	83	C-4 VII層	突帯文土器 甕	-	-	△4.9	外面：ヘラ状工具によるナデ 内面：ヘラ状工具によるナデ	密	良	黒茶色	
39	83	D-5 VII層	突帯文土器 甕	-	-	△4.3	外面：ヘラ状工具によるナデ 内面：ケズリ後ナデ	密	良	灰褐色	
40	83	D-4 VII層	突帯文土器 甕	-	-	△3.0	外面：ヘラ状工具によるナデ 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
41	83	D-4 VII層	突帯文土器 甕	-	-	△3.1	外面：ナデ 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
42	83	C-5 VII層	突帯文土器 甕	-	-	△6.3	外面：ヘラ状工具によるナデ 内面：ナデ	密	良	褐色	
43	83	C-5 VII層	突帯文土器 甕	-	-	△3.1	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
44	83	D-5 VII層	突帯文土器 甕	-	-	△2.9	外面：ナデ 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
45	83	C-5 VII層	突帯文土器 甕	※32.5	-	△7.5	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
46	83	C-5 VII層	突帯文土器 甕	-	-	△3.9	外面：ヘラ状工具によるナデ 内面：ナデ	密	やや良	褐色	内外面炭化物付着
47	83	D-3 VII層	突帯文土器 甕	-	-	△2.8	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	黄灰白色	
48	83	D-4 VII層	突帯文土器 甕	-	-	△2.3	外面：ナデ 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
49	83	C-4 VII層	突帯文土器 甕	-	-	△3.1	外面：ハケ状工具によるナデ 内面：ナデ	密	良	黒茶色	
50	83	C-4 VII層	突帯文土器 甕	-	-	△3.4	外面：ハケ状工具によるナデ 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	外面煤、炭化物付着
51	83	D-4 VII層	突帯文土器 甕	-	-	△3.3	外面：ヘラ状工具によるナデ 内面：ケズリ後ナデ	密	良好	灰褐色	外面煤付着
52	83	D-4 VII層	突帯文土器 甕	-	-	△2.5	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
53	83	C-5 VII層	突帯文土器 甕	-	-	△3.3	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
54	83	D-5 VII層	突帯文土器 甕	-	-	△2.2	外面：ナデ 内面：ケズリ後ナデ	密	良	灰褐色	
55	84	D-5 VII層	弥生土器 壺	※42.3	-	△6.1	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	灰褐色	

遺物番号	捕図番号	遺構層位	種別	法量(cm)			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
				口径	底径	器高					
56	84	D-5 VII層	弥生土器壺	※20.2	-	△3.4	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ	密	良好	灰褐色	
57	84	D-4 VII層	弥生土器壺	※15.3	-	△5.5	外面：ナデ、指押さえ、頸部3条のヘラ描沈線 内面：ナデ	密	良好	灰褐色	
58	84	D-5 VII層	弥生土器壺	※16.6	-	△5.5	外面：ナデ、頸部3条のヘラ描沈線 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
59	84	D-5 VII層	弥生土器甕	※28.4	-	△3.4	外面：口縁部ナデ、指押さえ、頸部ハケ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	外面黒斑
60	84	D-5 VII層	弥生土器甕	※31.0	-	△5.4	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
61	84	D-5 VII層	弥生土器甕	※29.8	-	△4.4	外面：指押さえ 内面：摩耗のため調整不明	やや密	やや良	灰褐色	
62	84	C-5 VII層	弥生土器甕	※14.6	-	△3.9	外面：指押さえ 内面：摩耗のため調整不明	密	良	黄灰白色	
63	84	C-5 VII層	弥生土器甕	※12.8	-	△2.7	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	良	淡灰白色	
64	84	C-5 VII層	弥生土器甕	※34.2	-	△4.6	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰茶色	
65	84	C-5 VII層	弥生土器甕	-	-	△4.9	外面：指押さえ 内面：摩耗のため調整不明	密	やや良	灰褐色	
66	84	D-5 VII層	弥生土器甕	※34.8	-	△5.9	外面：口縁部ナデ、胴部ハケ、1条のヘラ描沈線 内面：ケズリ後ナデ	密	良	灰褐色	外面黒斑
67	84	C-5 VII層	弥生土器甕	※19.0	-	△4.2	外面：胴部2条のヘラ描沈線 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
68	84	D-5 VII層	弥生土器甕	-	-	△4.4	外面：口縁部ナデ、胴部2条のヘラ描沈線、 沈線間に円形スタンプ文 内面：ケズリ後ナデ	密	良好	灰褐色	
69	84	D-4 VII層	弥生土器甕	※23.6	-	△2.7	外面：口縁部ナデ、指押さえ、胴部1条のヘラ描沈線 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
70	84	D-5 VII層	弥生土器甕	※29.9	-	△4.9	外面：胴部1条のヘラ描沈線 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
71	84	D-4 VII層	弥生土器甕	※23.2	-	△2.2	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
72	84	トレンチ9	弥生土器甕	※18.2	-	△2.1	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
73	84	C-5 VII層	弥生土器甕	-	-	△3.0	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
74	84	D-5 VII層	弥生土器甕	-	-	△2.9	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
75	84	D-5 VII層	弥生土器甕	-	-	△2.1	外面：指押さえ 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
76	84	C-5 VII層	弥生土器甕	-	-	△3.4	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰茶色	
77	84	D-5 VII層	弥生土器甕	-	-	△2.6	外面：指押さえ 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
78	84	D-4 VII層	弥生土器鉢	※16.3	-	△3.2	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ	密	良	灰褐色	外面煤、炭化物付着
79	84	D-5 VII層	弥生土器鉢	※20.0	-	△4.1	外面：ナデ 内面：ナデ	密	やや良	灰褐色	内面黒斑
80	84	D-5 VII層	弥生土器鉢	※19.8	-	△4.7	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
81	85	D-5 VII層	弥生土器底部	-	※10.5	△11.1	外面：指押さえ 内面：指押さえ	密	良	褐色	
82	85	D-4 VII層	弥生土器底部	-	※6.9	△3.3	外面：ナデ 内面：摩耗のため調整不明	密	良	褐色	

遺物番号	捕获番号	遺構層位	種別器種	法量(cm)			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
				口径	底径	器高					
83	85	D-5 VII層	弥生土器 底部	-	※4.9	△6.5	外面：指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	やや良	灰褐色	外面黒斑
84	85	D-5 VII層	弥生土器 底部	-	※10.5	△4.5	外面：指押さえ 内面：指押さえ	密	良	灰褐色	
85	85	D-5 VII層	弥生土器 底部	-	※9.2	△3.8	外面：指押さえ 内面：指押さえ	密	良	灰褐色	
86	85	B-4 III層	弥生土器 底部	-	※8.6	△5.5	外面：摩耗のため調整不明 内面：ケズリ後ナデ	密	良好	黄灰白色	
87	85	D-5 VII層	弥生土器 底部	-	※7.3	△4.1	外面：指押さえ 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
88	85	トレンチ9	弥生土器 底部	-	※10.3	△4.3	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	やや良	灰褐色	
89	85	D-4 VII層	弥生土器 底部	-	※8.8	△4.1	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
90	85	D-5 V層	弥生土器 底部	-	※8.1	△5.0	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
91	85	D-5 VII層	弥生土器 底部	-	※7.2	△3.7	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	やや良	灰褐色	外面黒斑
92	85	C-4 VII層	弥生土器 底部	-	※9.7	△8.7	外面：摩耗のため調整不明 内面：ナデ	密	良	灰褐色	外面黒斑
93	85	D-5 VII層	弥生土器 底部	-	※9.4	△4.2	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
94	85	トレンチ9	弥生土器 底部	-	※7.0	△3.3	外面：摩耗のため調整不明 内面：ナデ	密	良	褐色	
95	85	トレンチ9	弥生土器 底部	-	※5.9	△5.0	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	やや良	灰褐色	
96	85	C-4 VII層	弥生土器 底部	-	※9.6	△4.6	外面：摩耗のため調整不明 内面：ナデ	密	良	灰褐色	底部外面糊状压痕
97	85	C-5 VII層	弥生土器 底部	-	※8.9	△3.0	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	底部外面糊状压痕
98	85	D-4 VII層	弥生土器 底部	-	※7.8	△4.7	外面：3条のヘラ描沈線 内面：摩耗のため調整不明	密	やや良	灰褐色	
99	85	トレンチ9	棒状土製品	長さ 4.6	幅 2.0	厚さ 1.4	外面：指押さえ	密	良好	青灰色	重量：13.3 g
100	85	D-5 VII層	弥生土器 壺	※14.9	-	△2.0	外面：ナデ、口縁端部刻目 内面：ナデ	密	良好	灰褐色	
101	85	D-2 VI層	弥生土器 壺	※18.7	-	△2.2	外面：ナデ、口縁端部4条の凹線 内面：ナデ	密	良	黄灰白色	
102	85	C-4 VII層	弥生土器 壺	※17.7	-	△1.5	外面：口縁端部3条の凹線 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
103	85	D-4 VII層	弥生土器 甕	※13.7	-	△2.4	外面：ナデ、口縁端部2条の凹線 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
104	85	D-4 VII層	弥生土器 甕	※17.1	-	△2.0	外面：ナデ、口縁端部3条の凹線 内面：ナデ	密	良	灰褐色	外面煤、炭化物付着
105	85	D-4 VII層	弥生土器 甕	※18.1	-	△4.9	外面：口縁端部3条の凹線、肩部ハケ 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
106	85	D-5 VII層	弥生土器 蓋	10.3	-	△9.1	外面：ミガキ 内面：ミガキ	密	良好	灰褐色	
107	85	C-5 VII層	弥生土器 底部	-	※10.7	△3.6	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	やや良	灰褐色	
108	85	トレンチ9	弥生土器 底部	-	※10.3	△5.6	外面：摩耗のため調整不明 内面：ハケ、ナデ、指押さえ	密	やや良	灰褐色	
109	85	D-3 VII層	弥生土器 底部	-	※9.8	△4.4	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	

遺物番号	検図番号	遺構層位	種別器種	法量(cm)			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
				口径	底径	器高					
110	85	D-5 VII層	弥生土器 底部	-	※9.1	△4.3	外面：摩耗のため調整不明 内面：ナデ	密	良	橙褐色	
111	85	C-5 VII層	弥生土器 底部	-	※9.2	△3.9	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	やや良	橙褐色	
112	85	D-4 VII層	弥生土器 底部	-	※8.8	△3.5	外面：指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	やや良	灰褐色	
113	86	D-4 VII層	土師器 甕	※16.4	-	△3.3	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
114	86	D-5 VII層	土師器 高坏	-	-	△3.4	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	良好	灰褐色	
115	86	D-5 VII層	土師器 高坏	-	-	△3.6	外面：摩耗のため調整不明 内面：指押さえ	密	良	灰茶色	
116	86	C-5 VII層	土師器 低脚坏	-	※6.0	△2.1	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	良	黄灰白色	
117	86	D-5 VII層	土師器 把手	-	-	△8.1	外面：ケズリ後ナデ	密	良	灰褐色	
118	86	A-4 VI層	須恵器 坏蓋	-	-	△2.4	外面：天井部ナデ、口縁部回転ナデ 内面：天井部ナデ、口縁部回転ナデ	密	良好	青灰色	
119	86	D-5 VII層	須恵器 坏蓋	※11.7	-	4.6	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：天井部ナデ、口縁部回転ナデ	密	良好	青灰色	
120	86	D-3 VI層	須恵器 坏蓋	※10.1	-	2.9	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：天井部ナデ、口縁部回転ナデ	密	良好	青灰色	
121	86	D-5 VII層	須恵器 坏蓋	※12.4	-	△2.8	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：天井部ナデ、口縁部回転ナデ	密	良好	青灰色	
122	86	C-2 VII層	須恵器 壺	-	-	△4.3	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	青灰色	
123	86	A-5 III層	須恵器 転用硯	-	-	△0.9	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	青灰色	
124	86	C-4 IV層	白磁 碗	※15.0	-	△1.5		密	良好	灰白色	
125	86	B-1 III層	白磁 碗	-	-	△2.5	内面：1条の沈線	密	良好	淡灰白色	
126	86	A-1 III層	青磁 碗	※12.9	-	△2.7		密	良好	綠灰白色	
127	86	A-5 III層	陶器 塊	※12.4	-	△2.9		密	良好	黑茶色	瀬戸・美濃天目茶塊
128	86	B-4 III層	陶器 皿	-	※5.9	△1.7	内面：見込み砂目積	密	良好	灰褐色	李朝
129	86	B-4 III層	陶器 甕	-	※17.6	△4.7	内面：指押さえ	密	良好	赤灰色	備前焼
130	86	B-4 III層	須恵器 甕	-	-	△3.2	外面：格子目叩き 内面：カキ目	やや密	やや良	灰色	
131	86	A-1 III層	土師質土器 皿	※13.4	※4.6	3.3	外面：口縁部～胴部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁部～胴部回転ナデ、底部ナデ	密	良	黄灰白色	
132	86	A-2 III層	土師質土器 皿	-	※5.4	△1.0	外面：胴部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：ナデ	密	良	黄灰白色	
133	86	A-4 III層	土師質土器 塊	-	※6.6	△1.7	外面：胴部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：胴部回転ナデ、底部ナデ	密	良	褐色	
134	86	A-1 III層	瓦質土器 鉢	※22.4	-	△3.7	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
135	86	B-2 III層	磁器 碗	※9.4	-	△4.1		密	良好	淡灰褐色	肥前産 陶胎染付
136	86	A-4 III層	磁器 小坏	-	※3.1	△1.1	外面：二重圈線	密	良好	白色	肥前産

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	法量(cm)			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
				口径	底径	器高					
137	86	C-3 Ⅲ層	陶器蓋	-	-	△2.7		密	良好	淡灰褐色	
138	86	C-1 Ⅲ層	陶器塊	※15.6	-	△1.8		密	良好	淡黄灰白色	二次焼成により被熱
139	86	B-3 Ⅲ層	陶器皿	-	※5.5	△1.8	内面：見込み砂目積	密	良好	淡灰褐色	肥前産
140	86	B-3 Ⅲ層	陶器擂鉢	※29.0	-	△4.0	内面：擂目	密	良好	茶色	在地産
141	86	A-4 Ⅲ層	土師質土器皿	-	※3.8	△1.1	外面：胴部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：ナデ	密	やや良	黄灰白色	
142	86	A-4 Ⅲ層	土師質土器皿	-	※6.0	△1.5	外面：胴部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	黄灰白色	
143	86	B-4 Ⅲ層	土師質土器皿	-	※7.2	△1.6	外面：胴部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：胴部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	灰褐色	

第18表 福成大坪上遺跡2・3区出土石器観察表

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別	法量(cm)			重量(g)	石材	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
S 1	44	S D 19	石鎌	2.0	1.3	0.4	0.7	黒曜石	
S 2	65	S D 4	石鎌	15.6	10.2	2.7	399.5	安山岩	
S 3	66	S D 5	石鎌	2.7	1.7	0.4	1.5	サヌカイト	
S 4	87	C-4 VII層	石鎌	2.5	1.3	0.3	0.4	黒曜石	
S 5	87	C-5 VI層	石鎌	2.1	1.6	0.3	0.8	黒曜石	
S 6	87	D-5 VII層	石鎌	1.6	1.6	0.2	0.4	黒曜石	
S 7	87	C-4 VI層	石鎌	2.1	1.7	0.5	0.9	黒曜石	
S 8	87	D-5 V層	石鎌	1.8	1.6	0.4	0.8	黒曜石	
S 9	87	C-5 VII層	石鎌	1.7	1.5	0.5	0.9	黒曜石	
S 10	87	D-5 VII層	石鎌未製品	1.7	1.5	0.4	0.7	黒曜石	
S 11	87	D-5 トレンチ9	石鎌未製品	2.3	1.3	0.5	1.0	黒曜石	
S 12	87	C-3 VI層	石鎌未製品	1.9	1.5	0.4	1.0	黒曜石	
S 13	87	D-5 VII層	石鎌	2.3	1.8	0.4	1.2	サヌカイト	
S 14	87	C-3 III層	石鎌	2.4	1.6	0.4	0.9	サヌカイト	
S 15	87	C-5 VII層	石鎌	2.7	1.7	0.4	1.3	サヌカイト	
S 16	87	A-3 VII層	石鎌	2.8	1.9	0.4	1.8	サヌカイト	
S 17	87	C-4 VI層	石鎌	2.5	1.7	0.3	1.1	サヌカイト	
S 18	88	D-4 VI層	剥片	2.7	6.2	0.7	12.8	サヌカイト	
S 19	88	D-4 VII層	石鎌	5.7	4.6	1.4	54.5	安山岩	
S 20	88	C-5 VII層	石鎌	12.8	7.4	1.2	191.5	安山岩	
S 21	88	D-5 II層	石鎌	10.9	7.6	2.1	240.2	安山岩	
S 22	88	D-5 VII層	石鎌	9.6	5.4	2.1	142.3	凝灰岩	
S 23	88	D-4 VII層	石鎌	9.0	6.1	2.9	210.0	デイサイト	
S 24	88	D-5 VII層	石鎌	6.1	9.0	1.8	144.5	緑色片岩	
S 25	88	D-4 VII層	石鎌	8.6	5.4	1.5	97.2	泥岩	
S 26	88	D-5 VII層	石鎌	8.4	8.0	2.0	138.6	安山岩	
S 27	89	D-4 VII層	石鎌	16.2	8.6	2.2	391.4	安山岩	
S 28	89	B-2 VII層	石鎌	14.7	9.5	2.8	350.8	安山岩	
S 29	89	B-2 VII層	石鎌	16.6	9.7	3.2	486.1	安山岩	
S 30	89	D-5 VII層	石鎌	16.9	9.3	2.5	402.8	安山岩	
S 31	89	D-3 VI層	磨製石斧	16.6	4.7	1.9	235.3	片麻岩	
S 32	89	B-5 VI層	磨製石斧	7.2	4.3	3.2	138.4	閃綠岩	
S 33	89	D-5 VII層	砥石	3.3	3.4	1.8	27.1	花崗岩	

第19表 福成大坪上遺跡2・3区出土木製品観察表

遺物番号	捕団番号	遺構層位	器種	法量(cm)			備考
				長さ	幅	厚さ	
144	89	B-4 VI層	棒状木製品	8.1	2.5	0.8	先端部、右側縁炭化

第20表 福成大坪上遺跡2・3区出土金属製品観察表

遺物番号	捕団番号	遺構層位	器種	法量(cm)			重量(g)	備考
				長さ	幅	厚さ		
28	81	S D 1	棒状鉄製品	7.0	0.8	0.7	6.2	
145	89	A-2 III層	銅錢	径2.3	—	0.1	1.9	開元通寶
146	89	A-1 III層	煙管吸口	6.4	径0.9	—	4.7	

# 写 真 図 版



調査前全景（北西側から）



調査前全景（北東側から）



調査前全景（西側から）



調査前全景（南側から）



SD 1・2 遺物出土状況



SD 1 完掘状況

## 図版2 清水川御崎前遺跡



SD 1・2完掘状況



1区調査後全景



作業風景



SD 3～6完掘状況



貯水場検出状況



貯水場完掘状況



石組検出状況



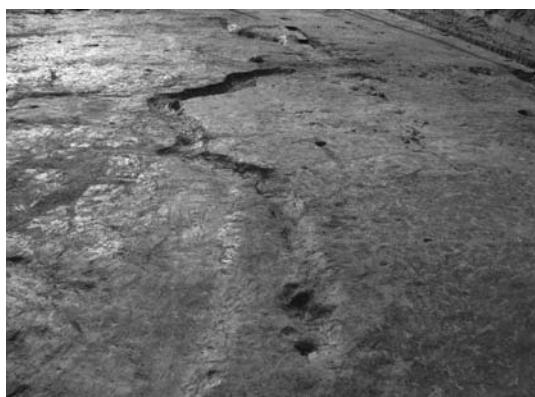
SD 7完掘状況



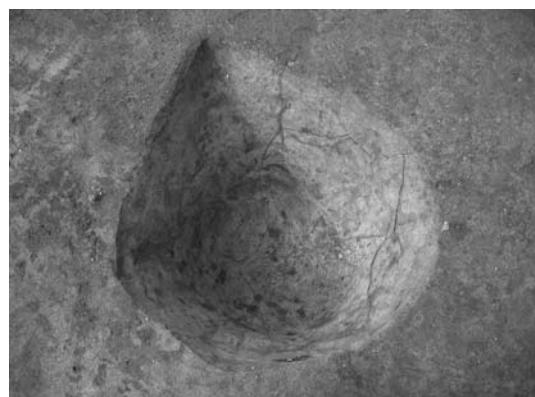
2区調査後全景（北西側から）



2区調査後全景（南東側から）



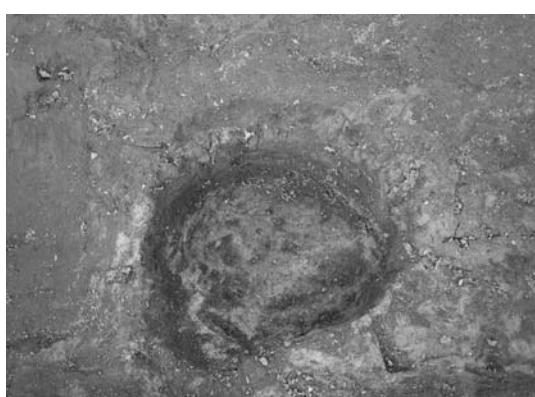
S D 8 完掘状況



S K 4



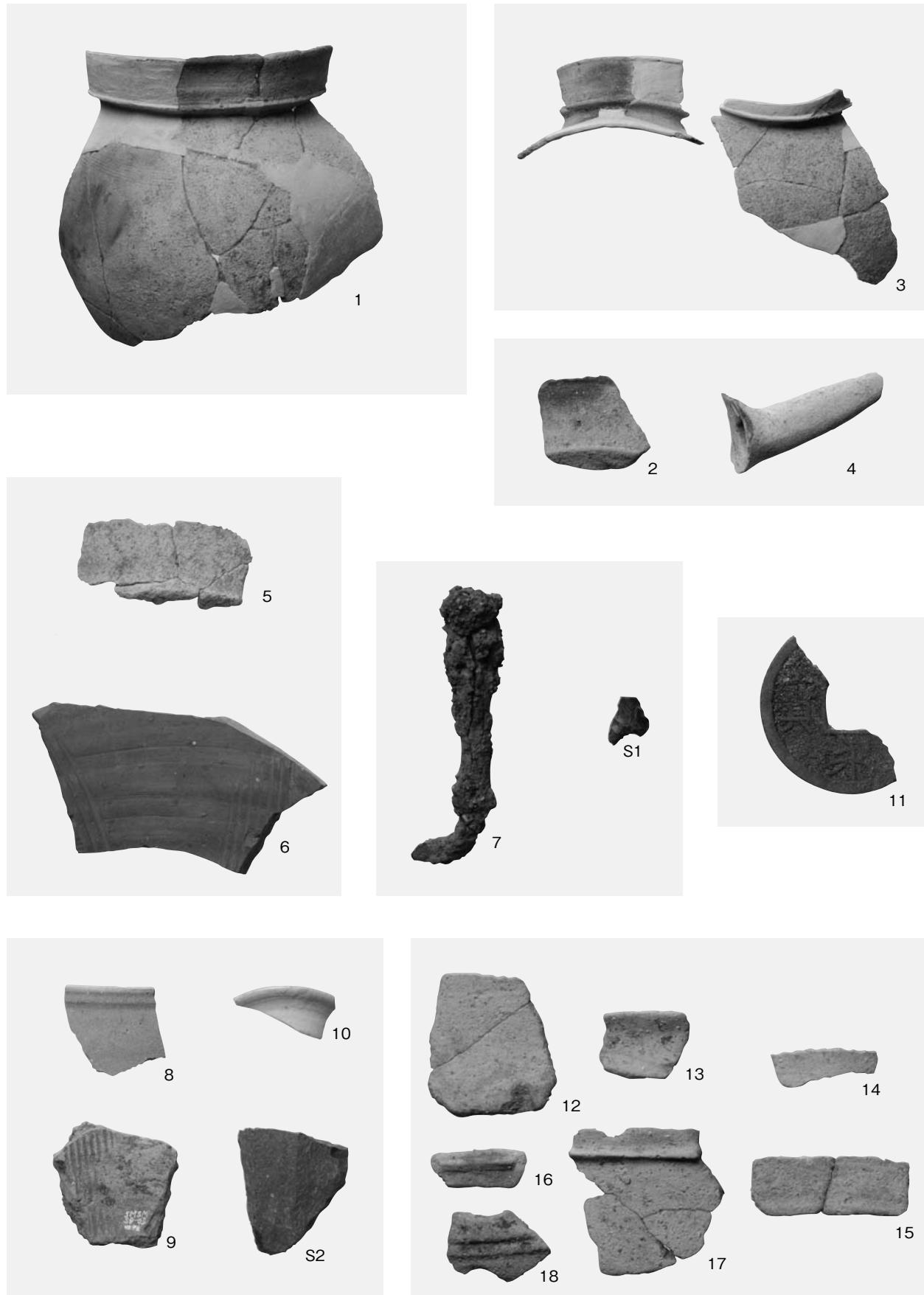
S K 5



S K 6

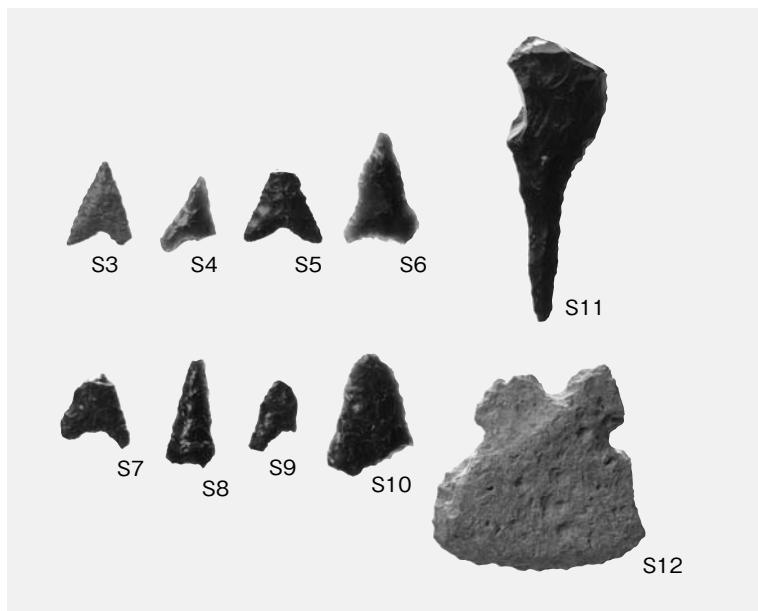
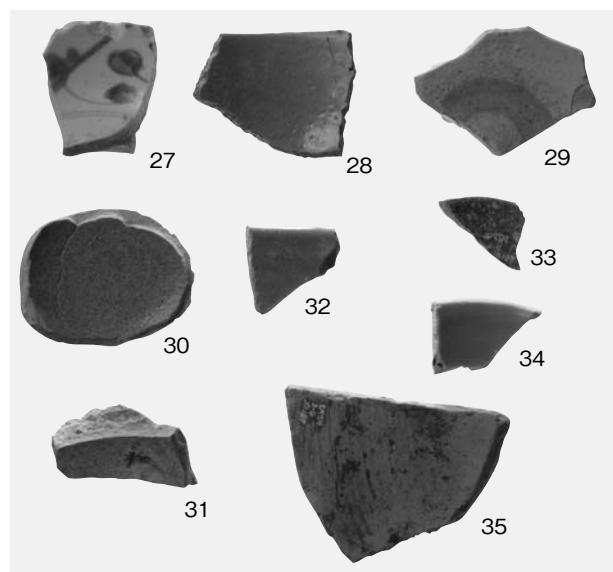
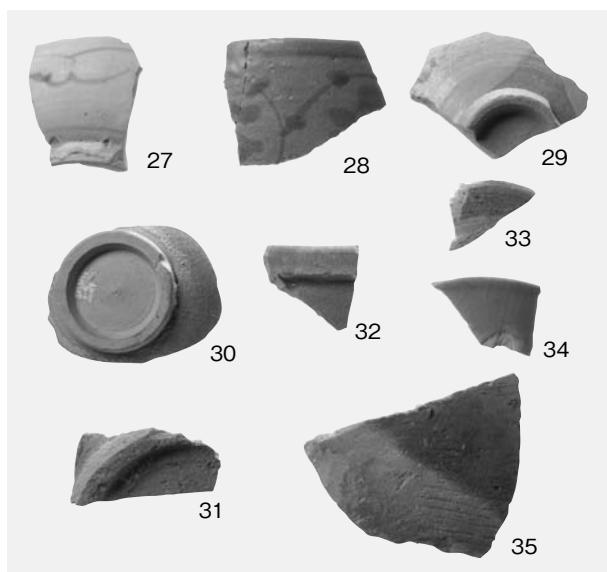
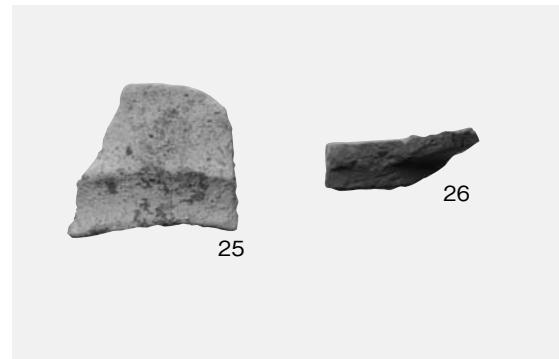
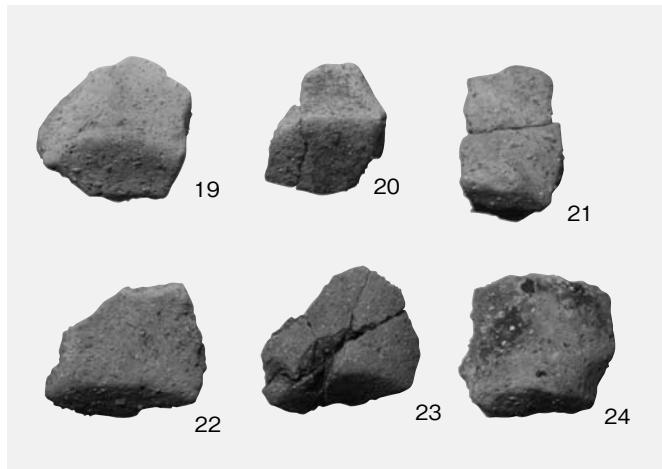
J区完掘状況

図版4 清水川御崎前遺跡



清水川御崎前遺跡出土遺物（1）

清水川御崎前遺跡 図版5



清水川御崎前遺跡出土遺物（2）

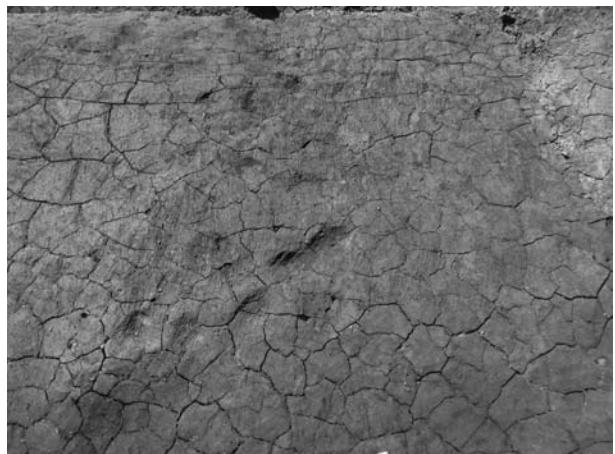
## 図版6 福成大坪上遺跡



1区調査前全景 (南側から)



1区遺物出土状況



1区偶蹄目足跡



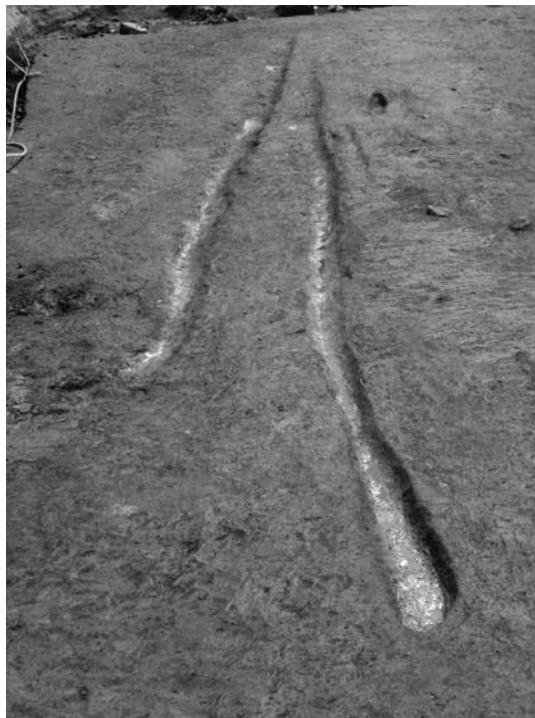
1区偶蹄目足跡



1区 S D 2 完掘状況



1区作業風景



1区SD 4～7完掘状況



1区旧SD 3完掘状況（東側から）



1区旧SD 3完掘状況（東側から）



1区旧SD 3完掘状況（西側から）



1区拡張区SD 3完掘状況（東側から）



1区拡張区SD 3完掘状況（西側から）

図版8 福成大坪上遺跡



1区拡張区 S D 3 完掘状況（東側から）



1区拡張区 S D 3 石除去後（東側から）



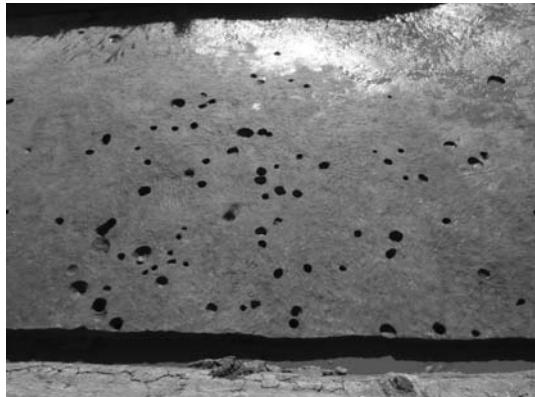
1区拡張区 S D 3 石除去後（西側から）



1区N区調査後全景（南側から）



1区S K 1



1区植栽痕



1区植栽痕



1区遺物出土状況



1区SK2

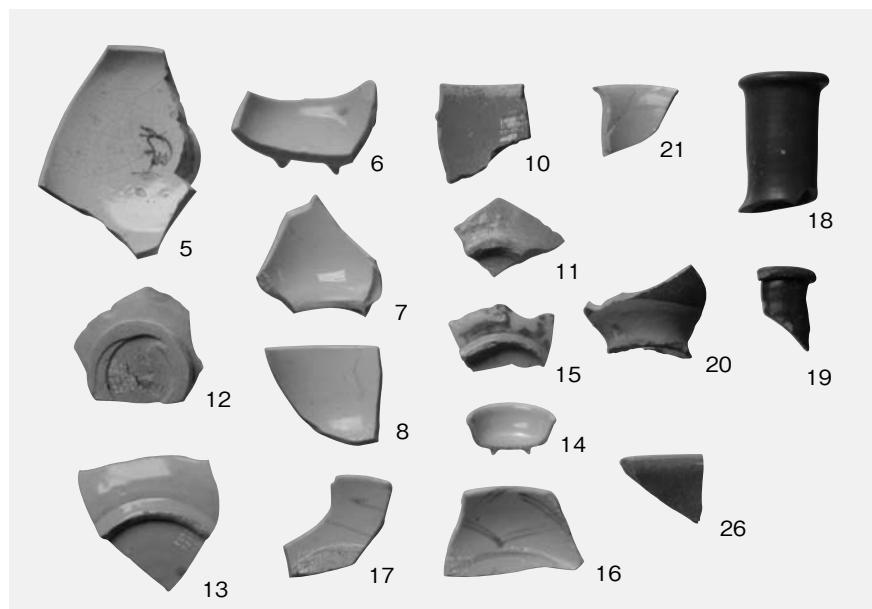
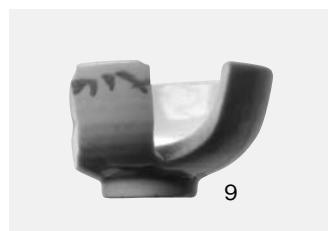
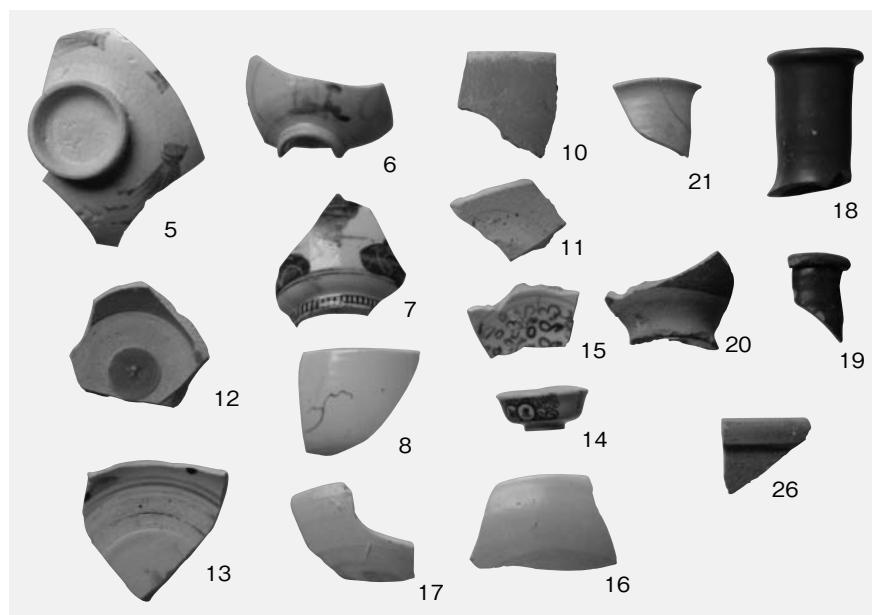
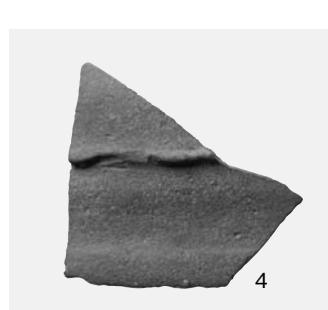
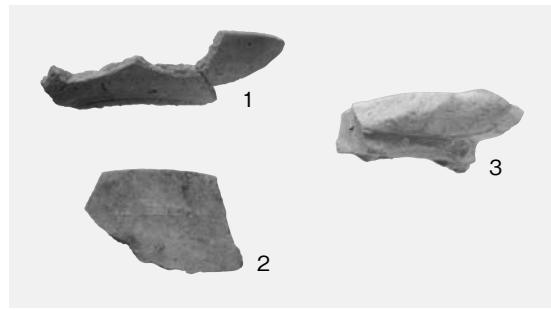
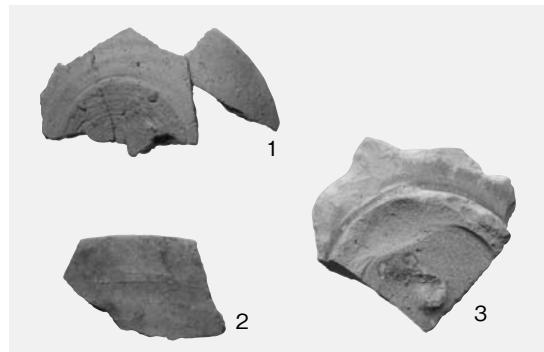


1区S区調査後全景（北側から）

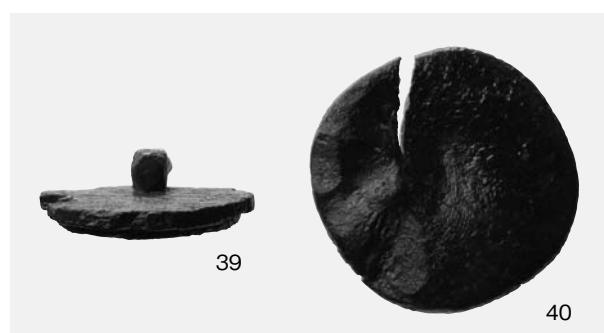
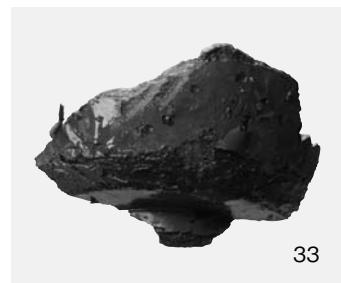
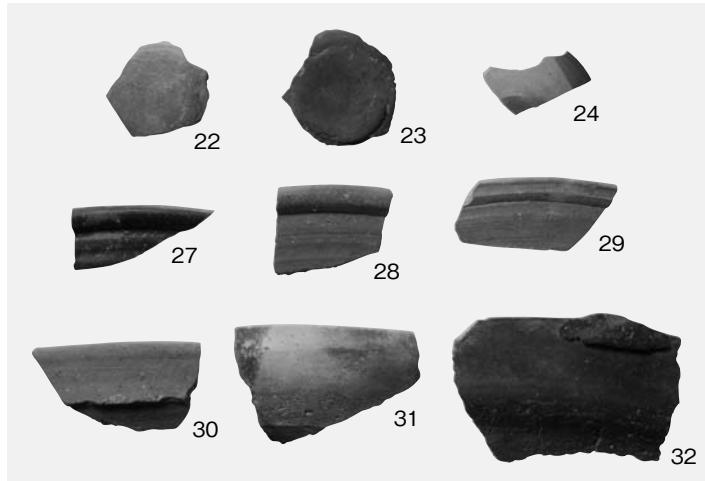


1区S区調査後全景（南側から）

図版10 福成大坪上遺跡

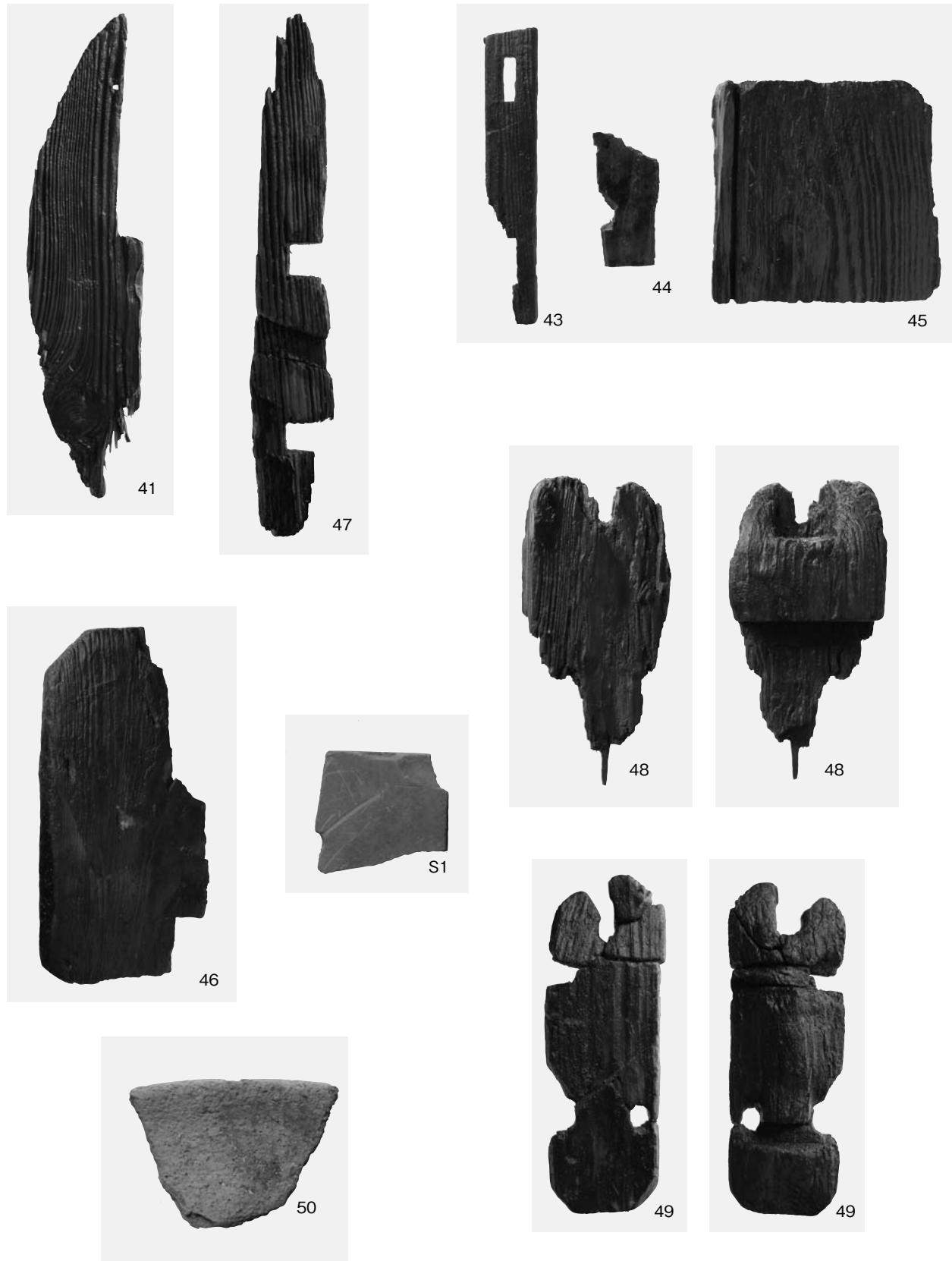


福成大坪上遺跡1区出土遺物(1)



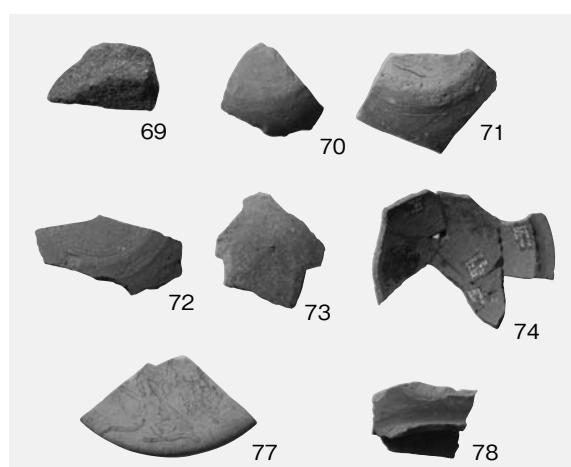
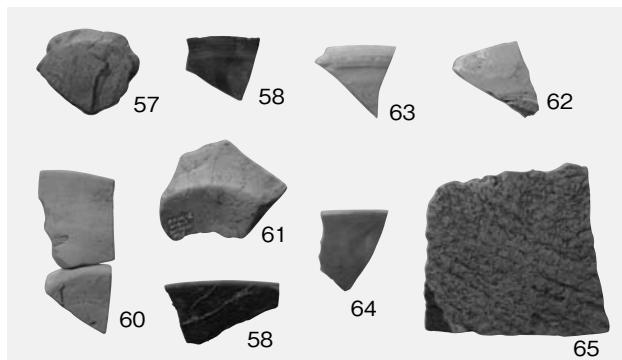
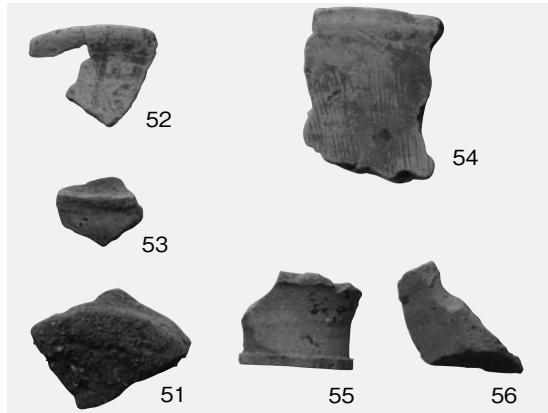
福成大坪上遺跡 1 区出土遺物（2）

図版12 福成大坪上遺跡



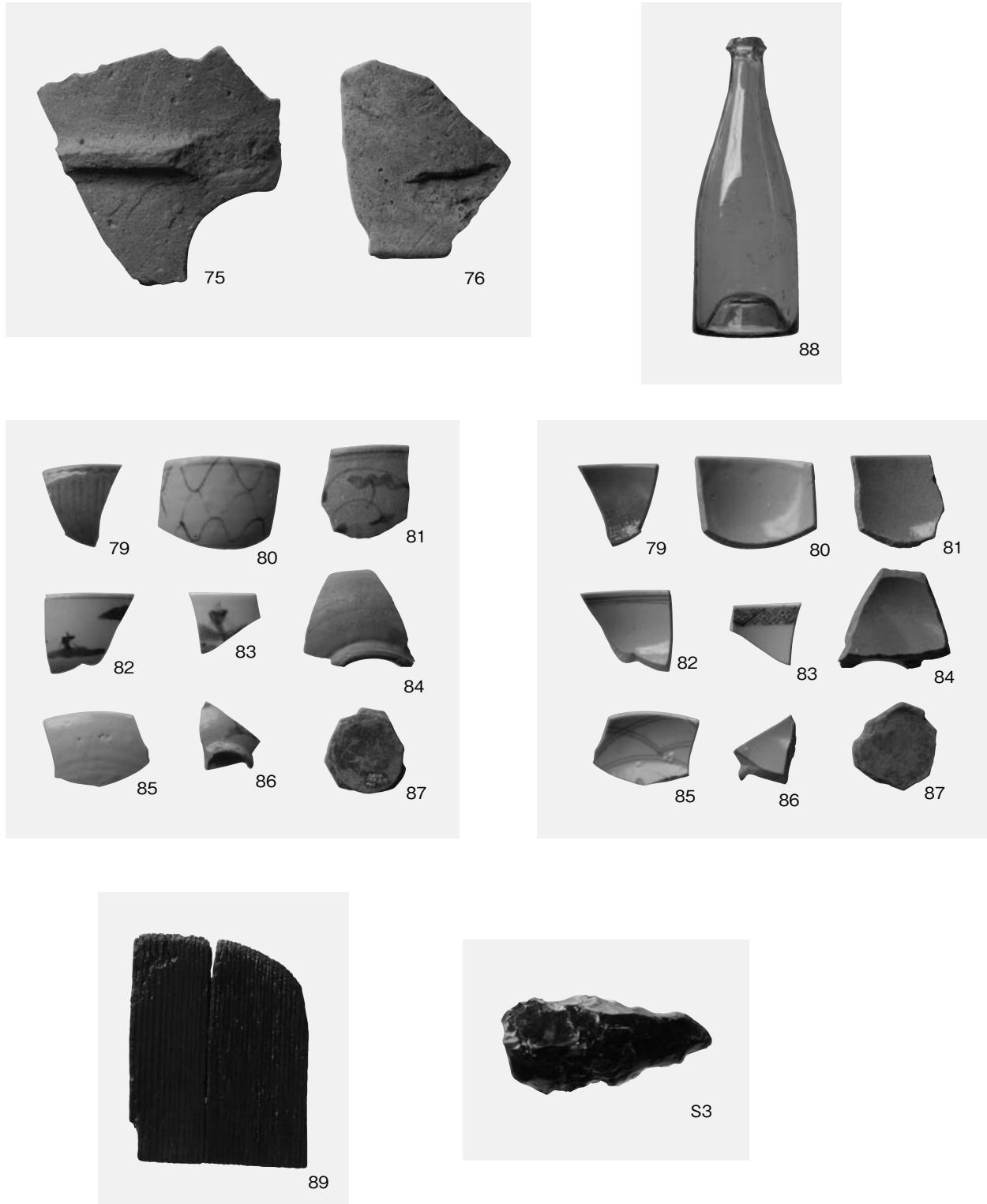
福成大坪上遺跡1区出土遺物（3）

福成大坪上遺跡 図版13



福成大坪上遺跡 1区出土遺物 (4)

図版14 福成大坪上遺跡



福成大坪上遺跡1区出土遺物（5）



3区第3遺構面全景（北東から）



3区第3遺構面全景（南西から）

図版16 福成大坪上遺跡



2区 S D 6・7・8 (北東から)



2区 S D 6・7・8 (南西から)



2区 S D 7 (北東から)



3区 S D19~23 (南西から)



3区 S D19~22 (南西から)

図版18 福成大坪上遺跡



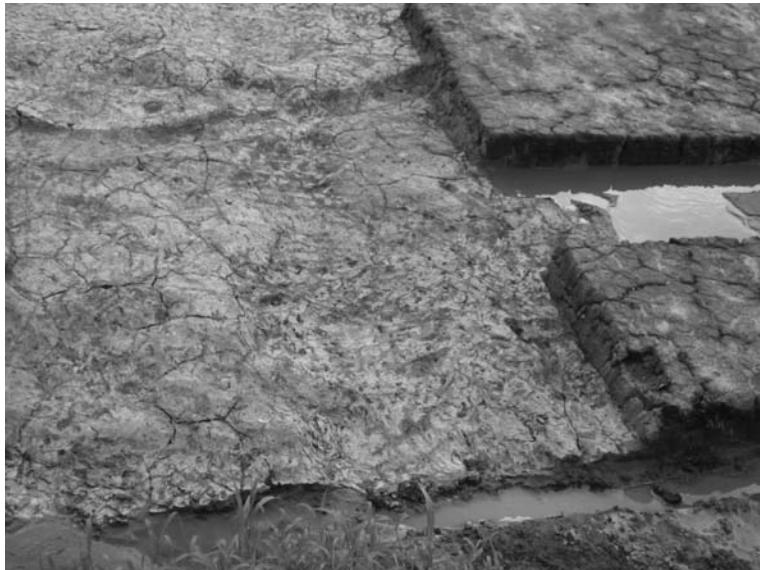
3区 S D19~22・24・25 (北東から)



3区 S D22 (北東から)



3区 S D22 (南西から)



3区 S D24 (北東から)



3区 S D25 (南東から)



3区 S D26 (南西から)

図版20 福成大坪上遺跡



3区S D27（北西から）



3区S D28（南東から）



3区S D29~32遺物出土状況  
(南西から)



3区S D29~32 (南から)



3区S D34 (北東から)

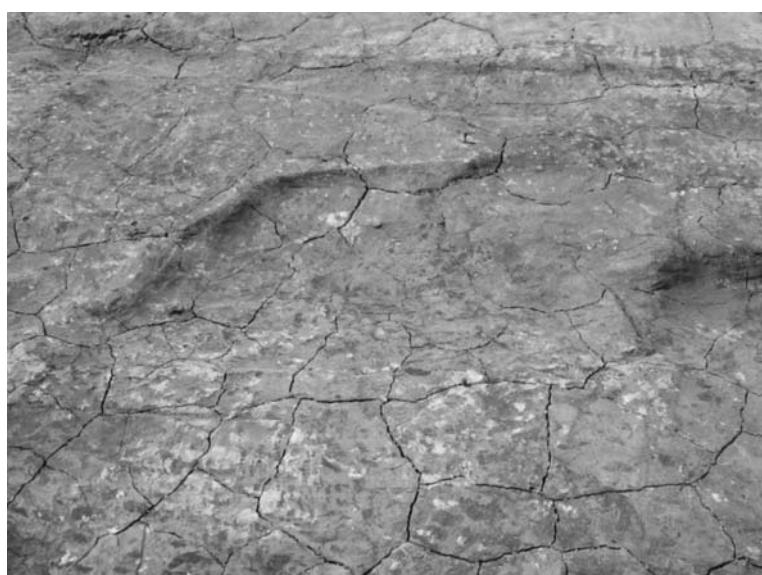


3区S D34 (西から)

図版22 福成大坪上遺跡



2区SK1（北西から）



2区SK2（南東から）



3区SK3（北西から）



3区SK4（北西から）



3区SK6（北西から）



3区SK7木検出状況（南東から）



3区SK7完掘（南東から）

図版24 福成大坪上遺跡



2区第2遺構面全景（北東から）



2区第2遺構面全景（南西から）



3区第2遺構面全景（北東から）



3区第2遺構面全景（南西から）

図版26 福成大坪上遺跡



2区SD3・4、畦畔1（南西から）



2区SD3・4、畦畔1（北東から）



2区SD3（北東から）



3区SD3（南西から）



3区畦畔1（北東から）

図版28 福成大坪上遺跡



2区SD4（南西から）



2区SD4（北東から）



2区SD4石鋤（S2）出土状況



2区SD5（北から）



2区SD5（南から）



2区SD5遺物出土状況（南から）



2区SD5石検出状況（南から）

図版30 福成大坪上遺跡



3区 S D 9・10・11 (南西から)



3区 S D 9・10・11 (北東から)



3区 S D 12・13 (南東から)



3区 S D13・14 (北東から)



3区 S D14 (南東から)

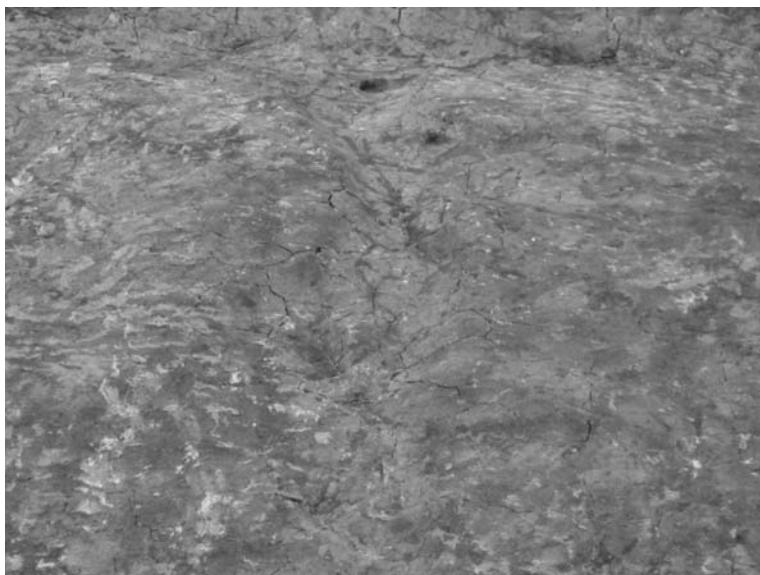


3区 S D15 (南東から)

図版32 福成大坪上遺跡



3区S D16 (南東から)



3区S D17 (南東から)



3区S D18 (南東から)



2区畦畔2（南東から）



2区畦畔2（北西から）



3区石列3・4（北東から）

図版34 福成大坪上遺跡



3区石列3・4（南西から）



3区石列3（北東から）



3区石列4（北東から）



2区SD1・2（南東から）



2区SD1・2（北西から）



2区SD1（南東から）



2区SD1（北西から）

図版36 福成大坪上遺跡



2区 S D 1 石検出状況（北西から）



2区 S D 1 遺物出土状況（南西から）



2区 S D 2 （北西から）



2区 S D 2 （南東から）



3区南西側IX層遺物出土状況（東から）



3区南西側IX層遺物出土状況（西から）

図版38 福成大坪上遺跡



3区南西側IX層遺物出土状況  
(北から)



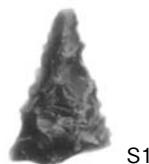
3区南西側IX層遺物出土状況  
(北西から)



3区南西側IX層遺物出土状況  
(北西から)



1



S1

3区S D19出土土器



2



3



7



8



9



4



6



5



10

3区S D20出土遺物



11



13

3区S D21出土遺物（1）

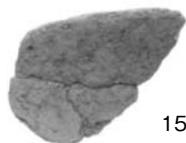
3区S D21出土遺物（2）

3区S D23出土遺物

図版40 福成大坪上遺跡



14



15

3区 S D27出土遺物



16



17



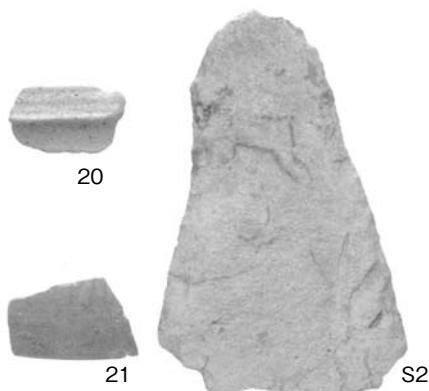
18

3区 S D28出土遺物

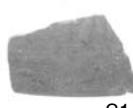


19

3区 S K 6出土遺物



20



21



S2

2区 S D 3出土遺物



22



23

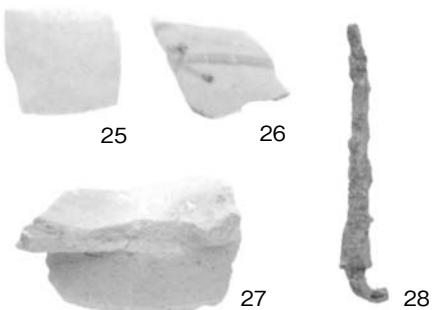


S2

2区 S D 4出土遺物



24



25

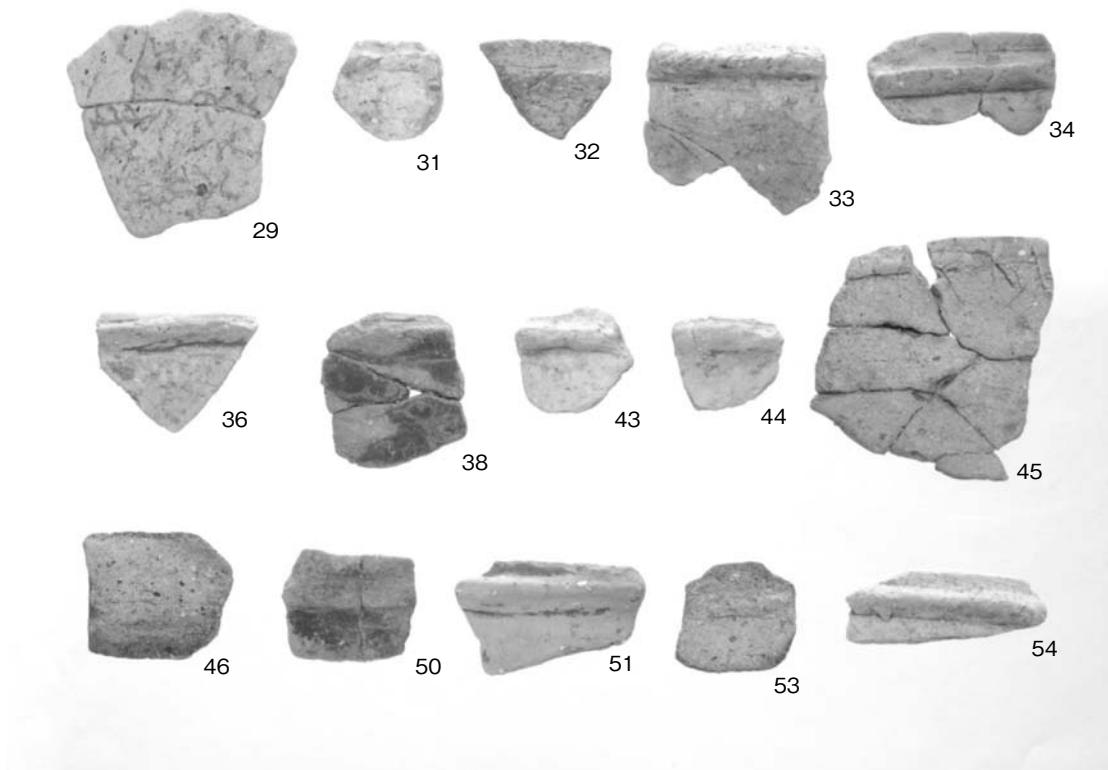
26

27

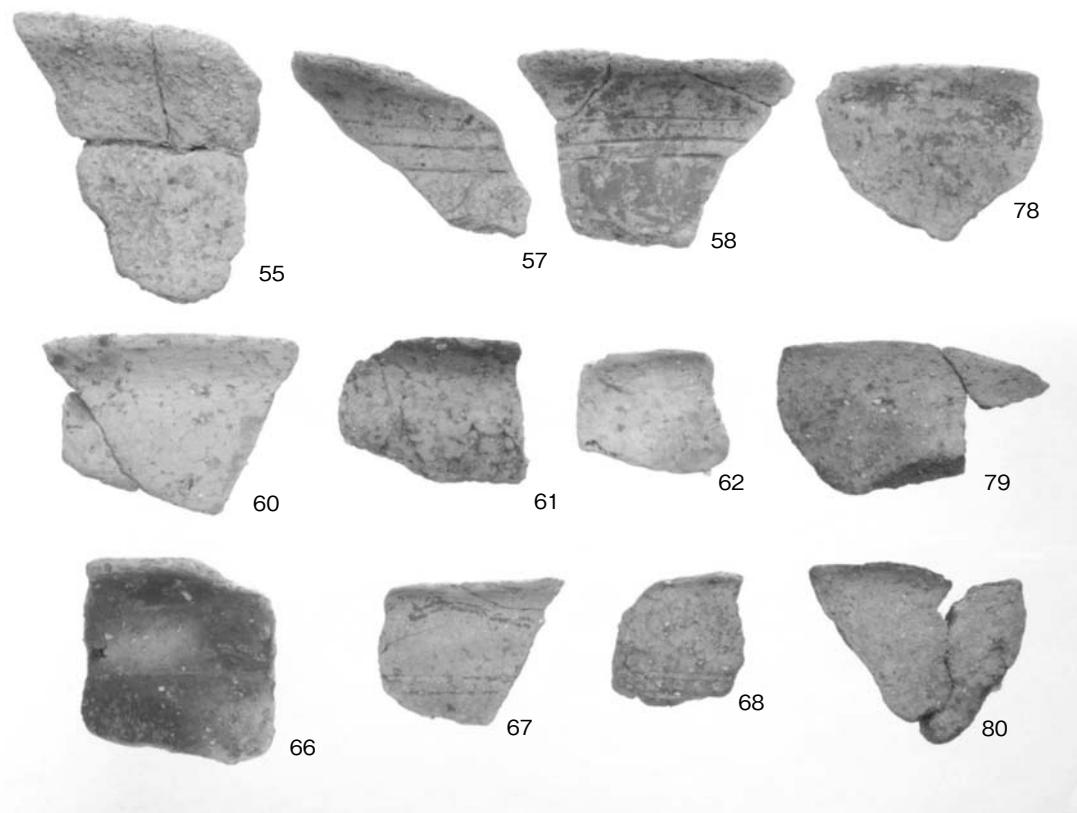
28

3区 S D 11出土遺物

2区 S D 1出土遺物

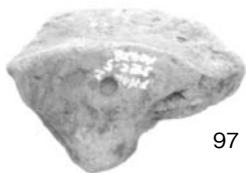


3区遺構外出土縄文土器・突帯文土器



3区遺構外出土弥生土器（前期）

図版42 福成大坪上遺跡



97



98

3区遺構外出土弥生土器底部（1）



99

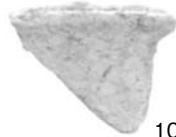
3区遺構外出土弥生土器底部（2）



106

3区遺構外出土棒状土製品

3区遺構外出土弥生土器蓋



100



103



116



101

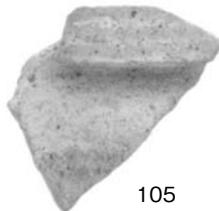


104

3区遺構外出土土師器低脚坏



102



105



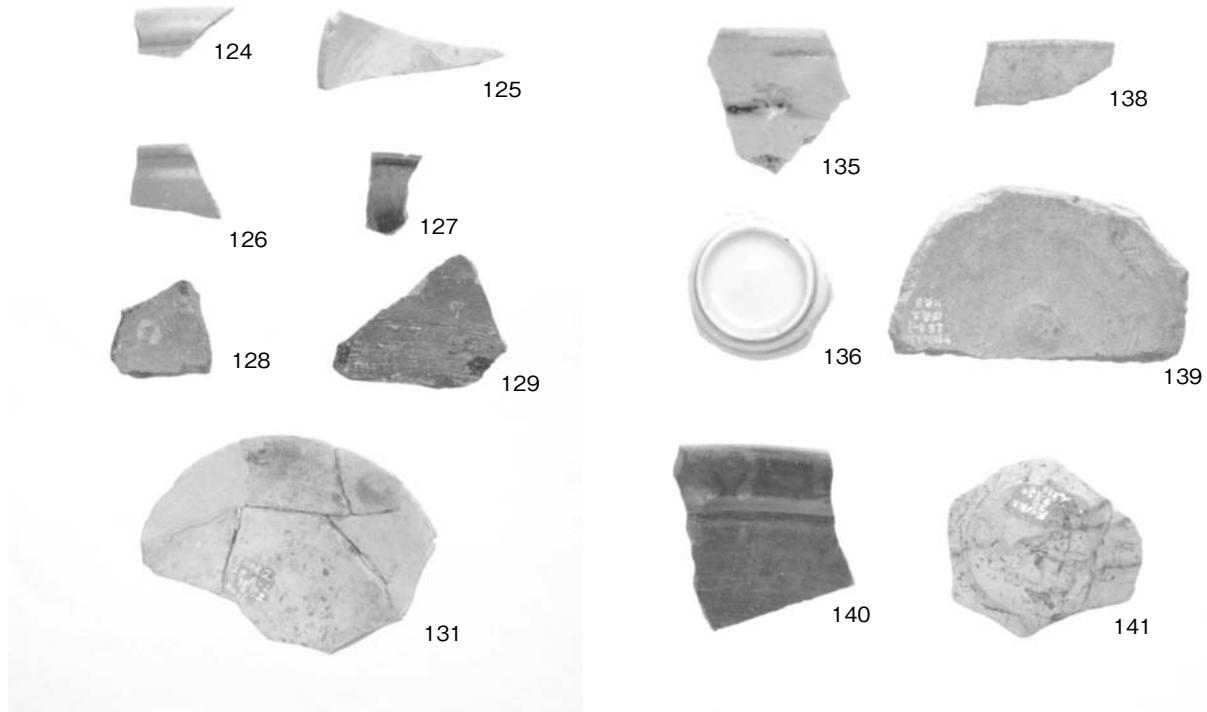
119



120

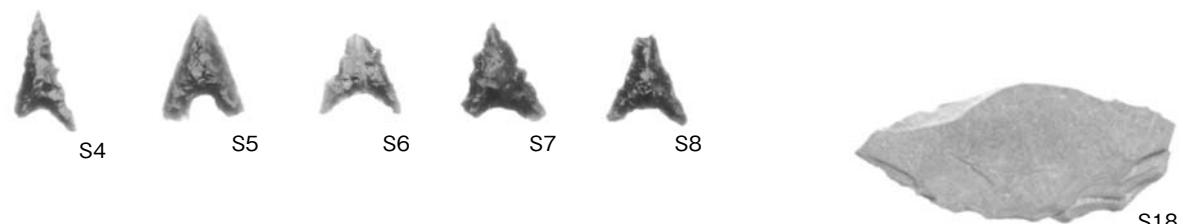
3区遺構外出土弥生土器（中期～後期）

3区遺構外出土須恵器坏蓋



2・3区遺構外出土遺物（中世）

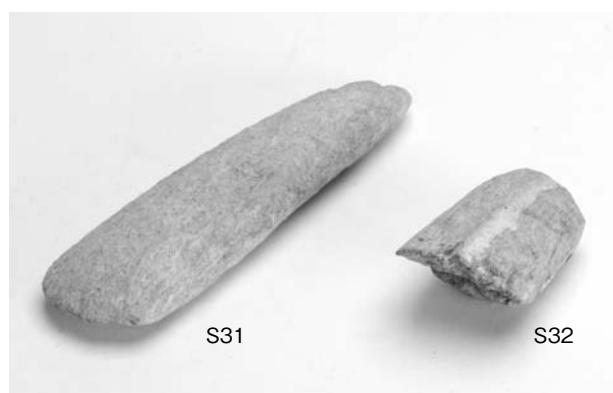
2・3区遺構外出土遺物（近世）



図版44 福成大坪上遺跡



2・3区遺構外出土石錘



2・3区遺構外出土磨製石斧



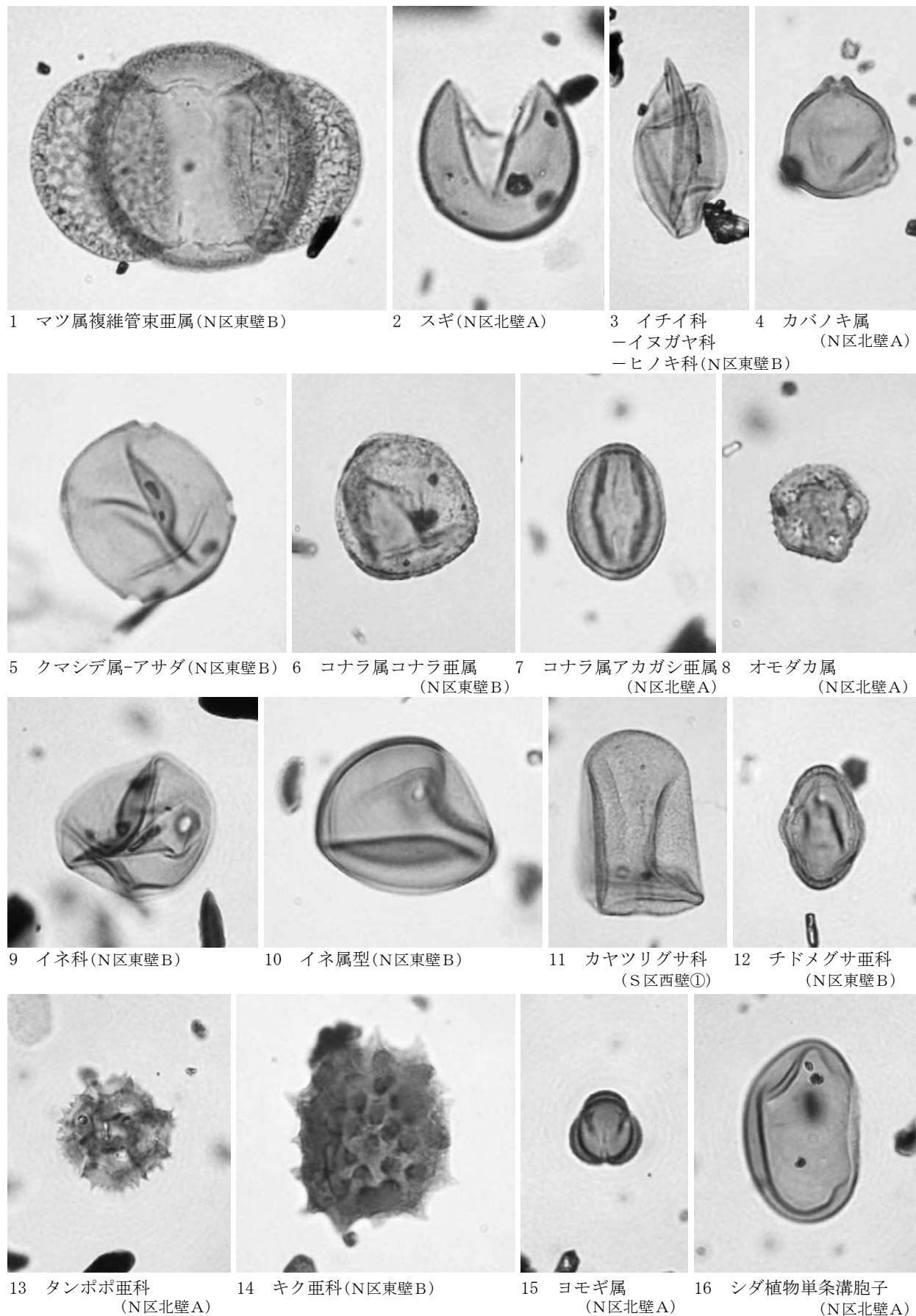
3区遺構外出土砥石



2区遺構外出土銅錢



2区遺構外出土煙管



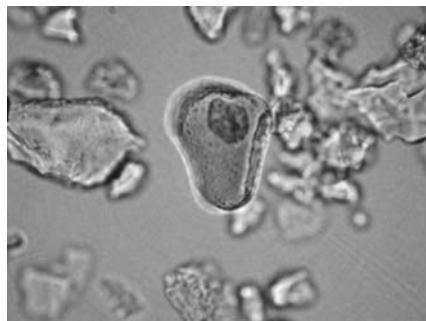
福成大坪上遺跡 1区の花粉顕微鏡写真

— 10 μm

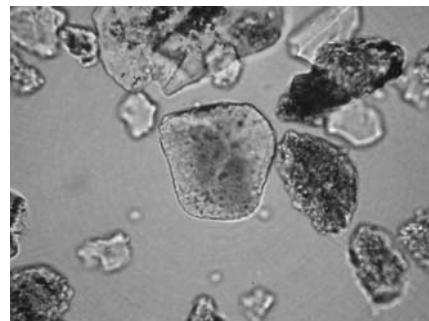
図版46 福成大坪上遺跡



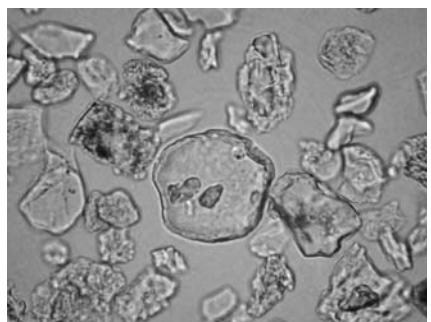
ヨシ属 (S区西壁 ②)



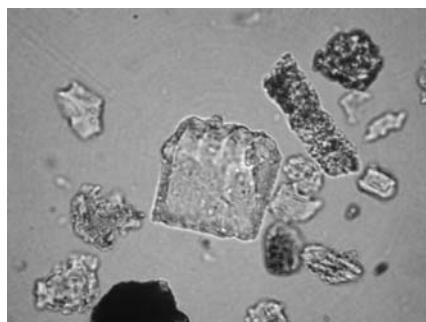
ススキ属型 (N区北壁 A)



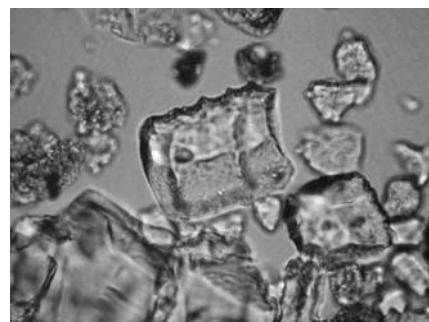
ススキ属型 (N区東壁 B)



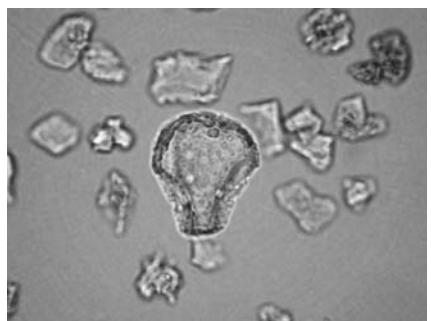
ジユズダマ属 (N区東壁 B)



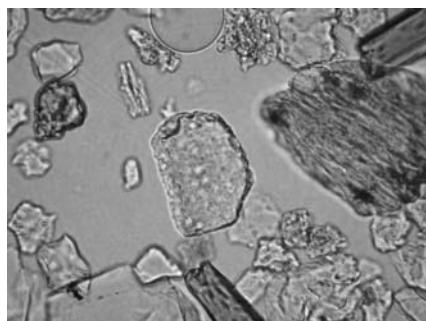
ネザサ節型 (S区西壁 ①)



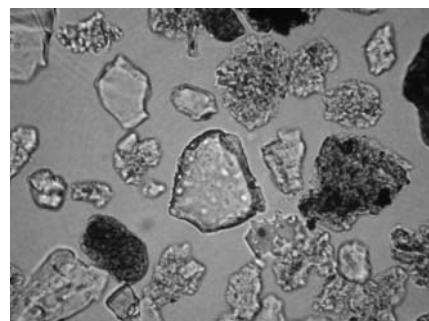
ネザサ節型 (N区東壁 B)



メダケ節型 (S区西壁 ①)



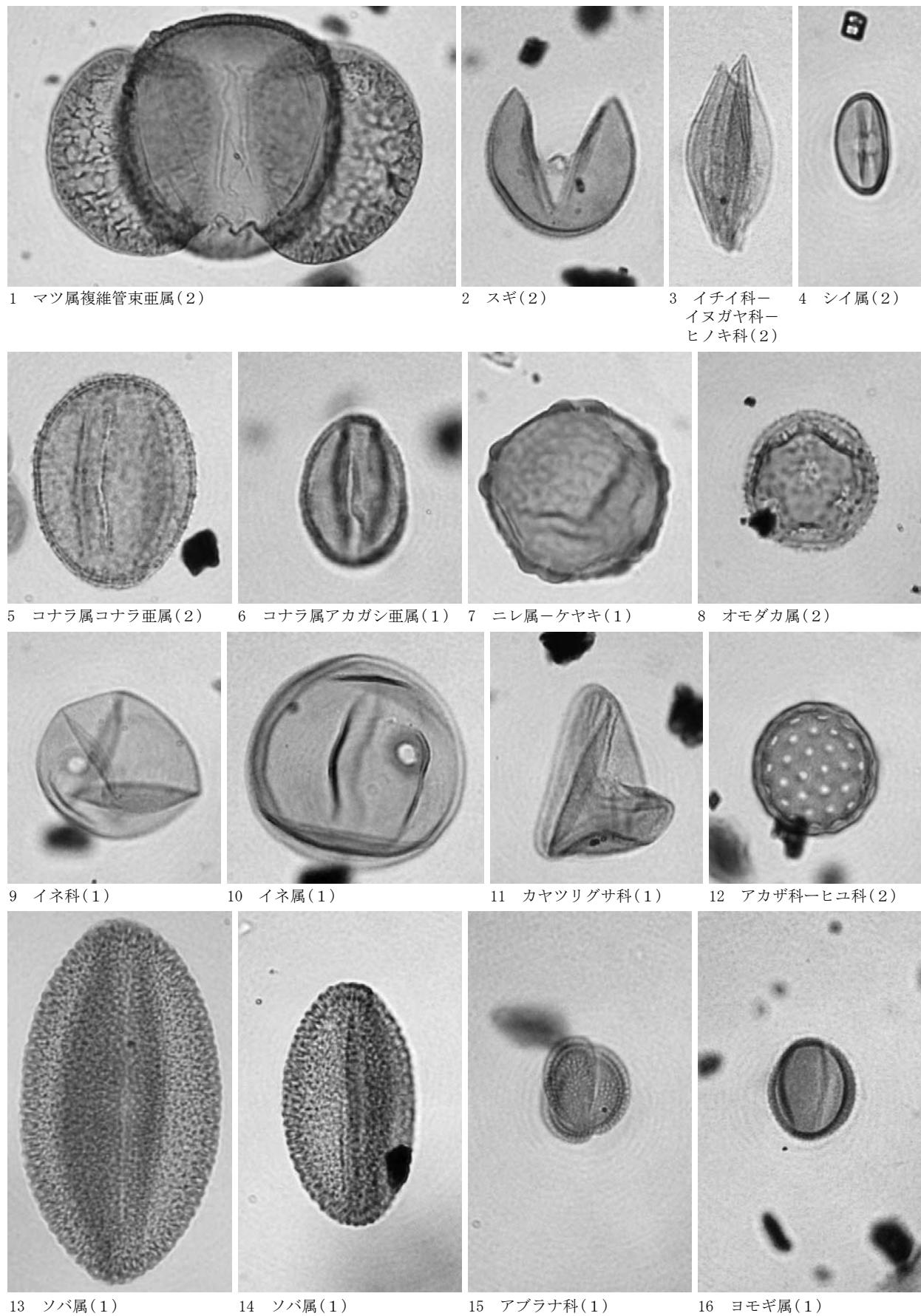
チマキザサ節型 (S区西壁 ②)



ミヤコザサ節型 (N区北壁 A)

— 50  $\mu$  m

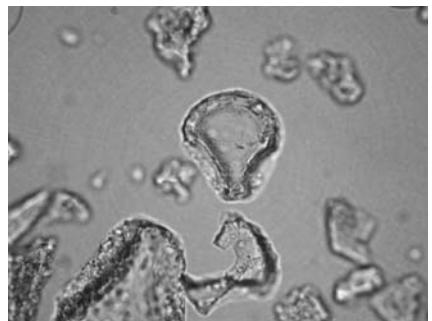
福成大坪上遺跡 1 区のプラント・オパール顕微鏡写真



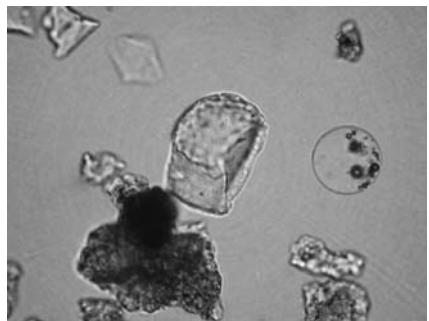
福成大坪上遺跡 2区の花粉頭微鏡写真

— 10  $\mu$ m

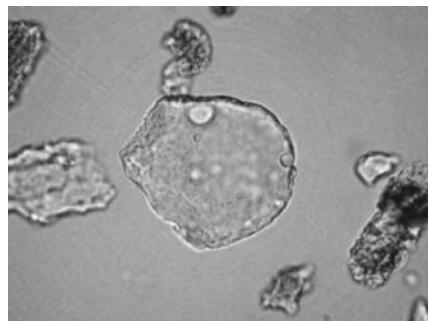
図版48 福成大坪上遺跡



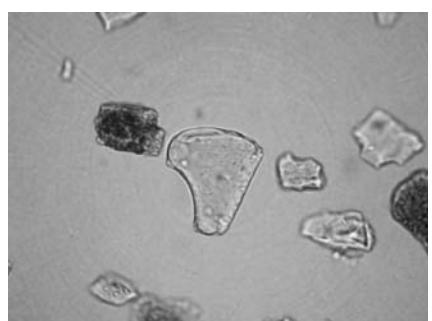
イネ (1)



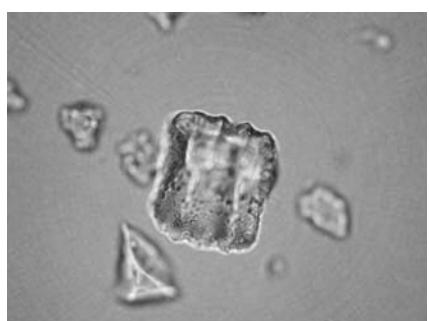
イネ (2)



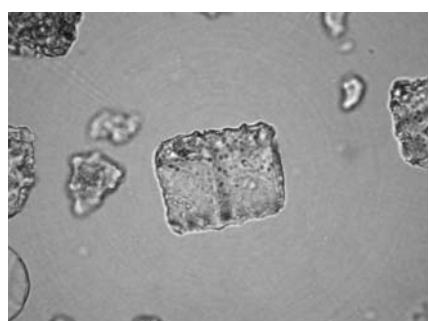
ヨシ属 (1)



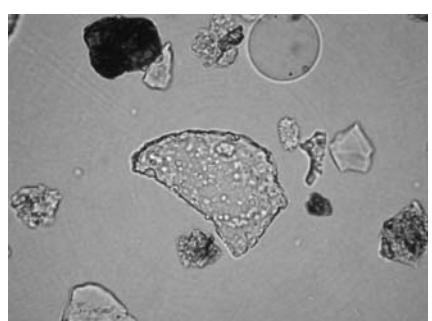
ススキ属型 (4)



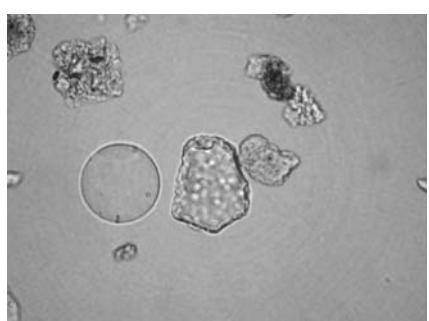
メダケ節型 (2)



ネザサ節型 (4)



チマキザサ節型 (1)



ミヤコザサ節型 (3)



海綿骨針 (3)

— 50  $\mu$  m

福成大坪上遺跡2区のプラント・オパール顕微鏡写真

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	しみずがわみさきまえいせき ふくなりおおつぼかみいせき							
書名	清水川御崎前遺跡 福成大坪上遺跡							
副書名	一般国道(南部バイパス)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	III							
シリーズ名	一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	4							
編著者名	平木裕子 高橋浩樹							
編集機関	一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財調査室							
所在地	〒683-0011 鳥取県米子市福市281番地 TEL・FAX 0859-26-0455 eメールアドレス yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp							
発行年月日	西暦2014年3月31日 平成26年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
清水川御崎前遺跡	鳥取県西伯郡南部町清水川	31389	南部町652	35度21分56秒	133度20分35秒	2010年9月14日 ～ 2010年11月12日	1,500m <sup>2</sup>	道路建設工事
福成大坪上遺跡 1区	鳥取県西伯郡南部町福成	31389	南部町652	35度22分00秒	133度20分40秒	2011年8月1日 ～ 2011年11月29日	2,000m <sup>2</sup>	道路建設工事
福成大坪上遺跡 2・3区	鳥取県西伯郡南部町福成	31389	南部町652	35度21分58秒	133度20分37秒	2012年5月16日 ～ 2012年9月25日	2,200m <sup>2</sup>	道路建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
清水川御崎前遺跡	散布地	古墳時代	溝状遺構			弥生土器、土師器、須恵器、石器、陶磁器		
		近世～近代	溝状遺構					
福成大坪上遺跡 1区	散布地	近世～近代	溝状遺構			縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、陶磁器、石器、木製品、銅錢		
福成大坪上遺跡 2・3区	散布地	縄文時代	陷穴土坑			縄文土器		
		弥生時代前期～中期	溝状遺構土坑			弥生土器、石器		
		古墳時代後期	溝状遺構			土師器、須恵器		
		平安時代	溝状遺構畦畔			土師器		
		中世	溝状遺構			土師器、陶磁器		
		近世	溝状遺構			陶磁器、鉄製品、煙管		

## 要 約

清水川御崎前遺跡と福成大坪上遺跡は、丘陵裾部の標高23～25mに位置する。調査の結果、縄文時代から近代にかけての遺構、遺物を検出した。縄文時代は陥穴と土坑を各1基検出した。弥生時代中期後葉には、尾根状地形に沿うように溝状遺構が巡り、さらに、同じ位置に複数回掘り替えられていた。古墳時代後期と中世には水田の存在が推定され、花粉分析の結果から、稲作とともにソバ属とアブラナ科などの畑作が行われていたと考えられる。平安時代には畦畔と水路と考えられる溝状遺構を検出したことから、水田の存在が示唆される。近世から近代にかけては水路を検出しており、水田として利用されたと考えられる。また、時期は特定できなかったが、地震の痕跡を確認した。

## 一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書4

一般国道180号（南部バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

鳥取県西伯郡南部町

### 清水川御崎前遺跡

### 福成大坪上遺跡

2014年3月

編集・発行 一般財団法人 米子市文化財団

〒683-0011 鳥取県米子市福市281番地

TEL 0859-26-0455

印 刷 有限会社米子プリント社